

東方幻操卿

さんにい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは、幻想郷の現在^{いま}を駆け抜ける、少女の物語。
彼女を冠する言葉なら、いくらでも上げられるだろう。

『外来人』『往來者』『オッドアイ』『翡翠の左目』『物腰柔らか』『でもちよつと変』『はつきり言えば中二病』……………

だがしかし。やはり、彼女という存在を表現するのに最も相応しい表現としては、ただ一つであつて。

——『幻想に愛された幻操卿』、と。

東方幻操卿　　く Green Heart Phantasm.

目次

— 序曲 —	1
東方紅魔郷	
Opening	5
Stage 1 始まりの蟲	8
Stage 2 境界の番人	18
Stage 3 心を忘れた放浪者	32
Stage 4 不撓不屈の門番	45
Stage 5 尊大なる吸血鬼のささやかな望み	61
Stage 6 純粹無垢の狂気①	80
Stage 6 純粹無垢の狂気②	97
東方紅魔郷 True End	118
魔法の森の茶会	123
突撃！湖畔の紅魔館	133
深まる秋、香霖堂にて	146
閑話：一人の姉	163
驚き桃の木疎密の氣	167
Extra Story — 永遠に幼い二つの月 — ①	177
Extra Story — 永遠に幼い二つの月 — ②	190
今野未来の日常	215
東方紅魔郷 Bad End	225
omake text	237
東方妖々夢	
Opening	269

S t a g e 1	再来のじ……もとい蟲	273
S t a g e 2	森を染める星と虹	285

— 序曲 —

それは、むかしむかしの、そのまたずっと昔のおはなし。
あるところに、三人の「はみ出し者」がいました。

存在のせいで疎まれた妖怪と、
力のせいで距離を置かれた天狗と、
能力のせいで忌まれた人間と。

そんな三人は、偶然か、はたまた必然か、多くの時間をいつしよに
過ごすようになっていました。

そんな三人の中心では、いつも一体の妖精が笑っていました——

これは、ほんの少しだけ前の話。

その少女は、特別に強い腕力や、霊力を持っていたわけではない。
むしろ、他の大勢の、普通の人々と何ら違いはなかった。

ただ、

努力の結果の、身軽な身体と。

生まれ持った、ほんのちよつとした「偶然」と。

それに伴った、多大な「必然」と。

ただ、それだけであった。

それは彼女でなくとも、手に入れ得るものであろう。

……思えばこの時点で、あの帰結はさらなる「必然」であったのか
も、しれない。

すまない、話が逸れた。

つまり、その少女が何か特別であったわけではなかった、ということだ。

これは、そんな普通の少女の話。

しかし彼女は、“普通”であると同時に“異端”でもあった。まあそうでなければ、幻想郷の、過去と未来を繋ぐなど、出来やしないだろう。

少女は、幻想の現在いまを駆け抜ける。

「ロードローラーだあっつっ!!!」

時に猛り。

「頑張つて下さい！ 知ってますか、諦めたらそこでっ！」

「……ああ、試合終了、だなあっ!!!」

時に励まし。

「『どうして……？ その理由は、たったひとつき。そう、たったひとつの単純シンプルな答え——』

《テーマは私を怒らせた》っ！』」

時に、怒り。

少女は、駆け抜ける。

幻想郷の現在いまを、拡散しながら——

——ん？ 台詞が、それ大丈夫なのか、だって？

………まあ、本人がいいと言っているんだから、大丈夫じゃないか？

ともかく。

走り、飛ぶ少女の姿は、閉ざされた世界の人間にとって新たなる光で。

対等に弾幕あそぶ少女の姿は、我ら忘れられた妖怪にとって新たなる風で。

これは、そんな異端な外界の民の話。

そしてまた彼女は、
人間と妖怪とを調停する、博麗の巫女や、
集団社会をまとめあげる、天狗の長や、
幻想郷を管理する、境界の賢者のように、
その存在が幻想郷にとって絶対に不可欠であるか、と問われれば、
それは無いと答えられる。少なくとも私は。

しかし、

「家族を救いたい、なんて言葉、私が拒否できるはずがないじゃないですか」

「悩みがあっても、『生きていけばラッキー』、です!」

「生の瞬間でも、死という閉幕でも『暗』から逃れられないのなら、命を燃やしている今、ここに、光明を見出だすしかないんじゃないですか?」

「ここは、常識が非常識に、非常識が常識に成り代わる所。この幻想郷で外の常識に囚われていたら、いつまでも前に進めないですよ」

「待ってください。出会いをかけたがえのないものだと思っっているのは、あなただけではないんですよ?」

「伝えたいことがあるのなら、思った瞬間に言うのが吉です。」

「……どっかの誰かみたいに、突然目の前で大切な人の灯火が消えていくことだって、あるんですから」

彼女が居たからこそ、この幻想郷が形作られたのもまた事実である。
う。

これは、そんな新たな世界を築いた一人の人間の話。

その、少女の名は――

東方幻操卿
Green
Heart
Phantasm.

プレイヤーを選択してください

『翡翠の中の幻想』
↓古卿ふるきみ 詩音しおん

東方紅魔郷

Opening

幻想郷は、予想以上に騒がしい日々をおくっていた。

謎の来訪者に、夏の亡霊も戸惑ってるかの様に見えた。

そんな全てが普通な夏。

辺境は紅色の幻想に包まれた。

勘の鋭い少女は、直感を頼りに湖の方向へ出発した。

普通の少女は、何かめぼしい物が無いか探しに行くかのように出発した。

むしろ探しに行ったのだった。

湖は、一面妖霧に包まれていた。

普通の人間は30分はもつ程度の妖気だったが、普通じゃない人もやはり30分程度はもつようだった。

妖霧の中心地は、昼は常にぼんやり明るく、夜は月明かりでぼんやり明るかった。

霧の中から見える満月はぼやけて数倍にも膨れて見えるのだった。

もしこの霧が人間の仕業だとすると、ベラドンナの花でもかじった人間であることは容易に想像できる。

中心地には島があり、そこには人気を嫌った、とてもじゃないけど人間の住めないようなところに、窓の少ない洋館が存在した。

昼も夜も無い館に、『彼女』は、いた。

「ん——……ん？」

少女は、目覚めを自覚する。

そしてすぐに異変に気がついた。

「ここは……………どこでしょうか」

人間は、目が覚めたときに知らない場所にいると、ひどく戸惑うとか。

さすがの彼女も、そこは変わらないらしい。黒い瞳に、動揺の色が広がる。

同時に、翡翠の瞳には好奇心の心が発現していた。

そして、黒と翡翠の少女は、更なる異変に気づく。

「……………これは、霧？」

彼女の周囲には、どこまでも続いていそうな、深い、ふか淵い森。

その、八百万の木々の合間を縫うように広がるのは、あか緋い、あか紅い妖霧。

目を覚ました少女の翡翠は、その中で30分以上いたとしても平気なことを告げていた。

しかし彼女は、蔓延する紅色の幻想にも怯まない。

外来人の少女は、着物の袖を緩やかに振りながら、惹かれるがままに歩みを進め始めた。

妖怪のような、傍若無人さを纏って。

妖精のように、興味津々とした様子で。

そこが、彼女が彼女たる所以なのだろうか。

そして少女は、風に乗ってやって来た幕開けを認知する。

「あら？　夜しか活動しない人も見たことある気がするわ」

「それは取って食べたりしてもいいのよ」

「そーなのかー」

次には、紅い森の中に、光と御札の花火が打ち上がっていた。

幻想の空に輝く、小さな幻想。

行く宛を意識していなかった少女は、その華やかさに釣られ、音と光の幻想へと引き付けられていった。

普通の少女にとって、全てが普通でない夏が、こうして始まったの

だった。

東方紅魔郷
r l e t D e v i l .
↳ t h e E m b o d i m e n t o f S c a

プレイヤーを選択してください

『永遠の巫女』

博麗 はくれい 霊夢 れいむ

『東洋の西洋魔術師』

霧雨 きりさめ 魔理沙 まりさ

『招かれざる来賓』

↓古卿 ふるきみ 詩音 しおん

Stagel 始まりの蟲

「ぴぎやーっ!!」

ここは、とある境界に建つ神社の近くの、禍々しい森の中。幻想郷において「禍々しい」と「森林」が同時に言及される際は、大抵魔法の森のことが指される。しかし、この日だけは違った。

その森の中は、いや幻想郷すべてが、紅い霧に包まれていた。その紅色の幻想は陽の光を遮断していて、数多の木が茂るそこはまさに逢魔が時の表象を見せている。

その、紅く染まった木々の間を、幼い悲鳴が駆け巡る。

悲痛であり、どこか間の抜けたその声は、夏で活動期真っ盛りのお女——緑の短髪に生えた触角が特徴的な、紺の袴を穿く蟲の妖怪——リグル・ナイトバグのすぐ側も走り抜けていったようだ。

偶然にも、彼女にはこの声の主に心当たりがあった。

「この声は……ルーミア?」

ルーミアとは、彼女がよく遊ぶ友人の片割れ——金髪の、常闇の妖怪のことである。

そんな友人の緊急事態らしき叫びに、リグルは小走りで声の発生源へと向かった。

その動きに同調して、紅い幻想は揺らぎ、刻一刻と姿を変える。時に、雨のように。時に、渦のように。時に、虫のように。

しかし、彼女はその叫びが特に緊急ではないということも予想がついていた。

なぜなら、悲鳴のした方向は、先ほどまで彩り豊かな光が舞っていたからだ。

つまり、

「弾幕ごっこ、だよね……。ルーミアったら、そんなに強くないんだからやらなきやいいのに……」

弾幕ごっこ。

それは、少し前にこの忘れられた地、幻想郷で発案された決闘方法である。

最大の特徴は、相手を倒すことが勝利と同値ではないことだ。重要なのは、どちらが、より美しい弾幕で魅せるか、というこの一点。

このことから、後に普通の魔法使いはこう述べている。

『ルールの無い世界では弾幕はナンセンスである』

——故に、魅せ方は人妖それぞれ。ただひたすら氷柱を打ち出す者もいれば、難題と呼ばれた秘宝を用いる者も、正体不明の弾を操る者もいる。

この少女、リグルも、弾幕ごっここの基本法則であるスペルカードルールが公布された時に、仲の良い友人三、四人と弾幕ごっこを行ったそうだ。どうやらその時、ルーミアの実力も知ったようである。

……と、話が逸れた。

つまり、スペルカードルールに則った弾幕ごっこにおいては、それほど危険は内在しない、ということだ。

無論、不慮の事故は起こり得るだろうが……ルーミアは、力は弱いがつきとした妖怪。その程度で命が脅かされるということはないだろう。

彼女が行き着いた結論も、どうやら同じだったようだ。急いではないものの、その足取りに緊張感は見られない。

「つたく、どうせボロボロの姿で『負けたのかー』とか言ってるんだろうな……」

まだ会ってもいないが、リグルは既に友人への愚痴を呟いている。それほど彼女たちは仲が良いということなのかもしれない。

少し歩いた所で、リグルは飛翔を開始した。どうやら、彼女が思っていたよりも目的地が遠かったようだ。

そのまま、速度を速めて——

「!!」

リグルは急停止をした。

釣られ、蔓延る妖霧も揺らぎを強める。

「これは……人間？」

どうやらこの辺りの揺らぎを生み出していたのは、リグルだけではなかったようだ。

不意に感じられた妖怪ならざる者の気配に、リグルは警戒心を高めた。

何せそこは、異変時には見敵必殺で名高い博麗の巫女の本拠地、博麗神社のすぐ近くである。

妖怪が人間に怯えるのも可笑しな話だが、彼女のような弱小なら、まあ仕方がないことであろう。

しかし、妖霧を切り開いて現れたその姿は、見事にリグルの予想を裏切ることとなる。

「——つて、おお。また空を飛んでいますね……。」

もしかしてここは、ワンダー・飛行少女・ランドなのでしょうか」

「……………」

深い森の中から覗かれたその姿。

それは、至って普通の少女だった。

「あらら、こんな所に人間だなんて。あなたは、食べてもいい人類なのかな？」

リグルは緊張を解き、逆に相手に恐怖を与えにかかる。

何せ、相手はただの人間。

普通の、肩にかかるくらいの黒髪をしていて。

普通の、リグルよりも少し大きいくらいの体格をしていて。

普通の、人里の者と同じような着物を着ていて。

普通でないところと挙げるとするならば、リグルから見ると右側、つまりその人間の左目だけが、翡翠のような緑に染まっていることくらいだろう。

確かにリグルは、片目が黒、片目が緑という人間は見たことはなかった。しかし、それがどうして警戒にあたることだろうか。

実際、その少女の存在は、周囲の霧に飲み込まれそうなほど儚かった。

「うーん、どちらかと言うと、食べられたくない人類ですかね。

……にしても、ここはどこなんでしょう。やっぱり、ワンダー・カ

ニバル・ランド、なのでしょわか」

「さつきから何を言ってるの？　ここは幻想郷だよ。そんな変なことじゃない」

それでも尚、どこか足りていないやり取りを続ける人間。

ここで、リグルはある一つの可能性に気づいた。

「もしかしてあなた……外来人!？」

通常の場合、幻想郷において人を食らうことは禁じられている。その理由について語ると、人間と妖怪の相互に対する定義付けから始めなければならぬためここでは割愛する。

まあ、〃どつちも幻想郷には必要だよ!〃　とでも思って貰えば構わない。

しかしそれは、〃幻想郷に〃住む人間の場合。当然、それなりの頻度で迷い込んでくる外来人たちには、それは適応されない。

従って、外来人が無事に元の住処へと帰るためには、妖怪と遭遇することなく博麗の巫女の所へと向かうことが必要最低限の条件だ。

何故なら妖怪が、そんな滅多にありつけないご馳走を無傷で放つておく筈がないから。

それがこの非常識の世界、幻想郷での常識である。

故にここからリグルがとった行動は、ごく自然なものだった。彼女はそれに何ら恥じることはない、と思う。

「なあんだ、やっぱり食べてもいい人類じゃない！　それなら、遠慮なく行かせて貰うよ！」

リグルはこの時、今までのどの一瞬よりも満面の笑みをしていた。古今東西、妖怪にとつて人間がご馳走であることは、やはり避けられないのかもしれない。

そのままリグルは、自身の周囲に弾幕を展開する。

紅い空の中できらびやかに踊る光の弾は、どこか喜ばしげで。しかし、それに纏わりつく妖力紅の権化霧は、その血液のような色も合わさり彼女のこれからの運命を妖しく暗示していた。

経ずして、その幻想は人間の少女へと達する。

「いーぞーっ！　そのまま私の弾幕においしく焼かれなさいっ」

そうして、広い範囲に、隙間を埋め尽くすようにして展開された弾幕は――

人間の少女の元へと、その全てが一直線に吸い込まれていった。

しかしここで、リグルにとって一つ目の誤算が発生する。

人間の少女は、押し寄せる弾幕を寸前まで引き付けると、跳躍。辺りに豊富にある木の枝を掴み、それを回避したのだ。

「……!!　　なら、これはどうかしら?」

リグルは少し驚いたが、追加でより多くの弾幕を発生させた。霧で遮られた天の太陽に代わり、生み出された小さな太陽たちが木々を照らす。

それを、妖怪の勘に任せて四方八方に射出したのだが――

それら光の波は、再び全て引き寄せられ、

「おりゃっ!　それっ!　ほいさっ!」

たかが人間の少女に、全て避けられていった。

掴んでいた枝を離し、着地をしたかと思うと、それでも押し寄せる弾幕を宙返りをして避ける。空を切る足に合わせて霧が揺らぎ、少女のしなやかさを際立たせてていた。

そして、そのままの流れで少女は再び跳躍し、今度はあちらの木、そちらの木へと飛び移る。少女が移った数瞬後には、足場であった木々は粉微塵になっていた。

木屑が散り、葉が踊り、少女はそれでも忍者のように動く動く。そこには、一種の完成された競技のような美しさが垣間見える。

飛び交う電飾を尻目に、せきすいがん 隻翠眼の少女は怯むことなく跳び、走り、回り、そして舞う。地上から木へ、木から木へ、そして地上へと舞台を変えながら。紅い空間で次々と繰り出される演舞は、まさしく曲芸を見ているようだったと言えよう。

「……あなたっ、人間のくせに、めちやくちやスゴいじゃない!　人間にも、そんなことが出来るのがあるんだね!」

その華麗な動きにしばし見とれていたリグルだったが、ふと我に返り、その少女を称賛した。彼女が今まで遭遇した人間といえ、一目

散に逃げ出すか、自分を妖怪と知らず安易に近づいてくる者しかいなかったため、とてつもなく驚いていたのだ。

……当然、とんでもない馬火力を放ってくる魔法使いや、舞うどころか瞬間移動すらしてくるメイドなんてものは、この時のリグルは露知らず。

……まあ、御愁傷様、とだけ言っておこう。

「いやー、まあちよつと競技の体操やってるんで……」。

それよりもその光の弾、さっきの人たちも使っていましたね。流行ってるんですか？」

「これは弾幕ごつこだよ——って、ルーミアのこと忘れてた！ 人間、ルーミアがどうなったか知ってるの？」

リグルは忘れかけていたが、彼女の本来の目的は先ほどまで舞っていた、これよりも大規模な弾幕の場所。そちらへと向かっていた際にこの少女が現れたということは、彼女はルーミアの行方を知っている可能性が高いだろう。

「ルーミア……？」 それはもしかして、金髪に赤い髪飾りをした女の子のことですか？」

「そうそうー」

その人間が挙げる人物像に、リグルは肯定の言葉を発する。

……今は関係ないことだが、リグルは自分の友人の、ある噂について思い出していた。なんでも、赤い髪飾りには怨念がこもっており、何かが封じられているとか——

「それなら、腋を出した紅白の女の子にやられたあと、『負けたのかー』って言いながらどこかへ飛んでいきましたよ」

実に予想通りであった。

思わず、リグルは苦笑する。

「まあそれなら元気っぽいし、大丈夫かなー」。

それよりも人間、あなたに興味が出たよ。名前は？」

名前を尋ねたということは、その少女が飢えを満たす食糧から、対等に話す相手へと評価が変わった、ということだ。もしかするとこの時、リグルはこの人間を友人としてやってもいい、とでも考えていた

かもしれない。

「名前、ですか？ うーん……。」

……まあ、普通でいいですかね。私は、古卿詩音と申します」
「へー、詩音って言うのか。」

私は、リグル・ナイトバグ！ 泣く子も、一部人外並みを除けば
黙る、蟲の妖怪さ！」

リグルはそう、少ない胸を張って名乗りを上げた。

「なるほど、蟲妖怪ですか……。ってことは、やっぱりもしかして……
！」

あの一、一つよろしいですか？」

「ん？ なに？」

リグルの名前を聞いてから、しばらく何かをぶつぶつと呟いていた
詩音だったが、ふと顔を上げるとリグルに質問を投げかけた。

それを受け、リグルはどんとこい、と再び胸を張る。どんな質問で
もいい、幻想郷のことか、弾幕ごっこのことか、それとも私がどれほ
ど素晴らしいのか……

「最初に見たときから思ってたんですが――

もしかしてリグルさんって、Gの妖怪さんですか!？」

『季節外れのバタフライストーム』

リグルは、弱小妖怪としては破格の威力を誇るスペルカードを持つ
ている。それがこの、『季節外れのバタフライストーム』。それを、あ

ろうことか普通の人間に対し、彼女は全身全霊を懸けて発動させた。これが答えとでも言わんばかりに。

「私に、一番言っちゃいけないことを言ったね……………！！」

もういいっ、詩音！ そのまま森と私の栄養分になりなさいっ！！」

リグルは、半泣き状態で怒号を捲し立てる。

それに呼応するようにして、黄、緑、青、白、そして赤い弾幕が、紅い幻想の空に舞い踊る。

蔓延する妖霧が、今までになく激しく揺らいだ。

生み出された色とりどりの弾幕は、時に直線的に、時に壁のように、刻一刻とその形態を変化させながら詩音へと、今度は吸い込まれることなく迫っていく。

詩音の視界は、白から赤、青、そしてまた赤へと塗り替えられる。

それらと同時に繰り出される黄色や緑の弾幕は相手の動きを封じ、回避可能な空間は須臾もなかった。

その不規則のようで、規則的かもしれない動きは、まさに蝶の舞と言えよう。

これほどの圧倒的物量を前にしては、ただの人間ならば骨も残らない。

そう、ただの人間ならば。

その時、リグルが対峙していたのは、普通の、外界人の少女であった。

……時に、幻想郷は常識と非常識を分ける結界で、外界と隔てられている。

そのため、外界での常識は、幻想郷では通用しない。

同様に、幻想郷での常識は、その普通の^古少女^{詩音}には通じなかったのである。

ここに、リグルの二つ目の誤算が生じた。

「おおっ！ それは、さっきの二人も使ってたカッコいいカード！」

その少女、詩音は、リグルが取り出したスペルカードを見て、まず何よりも先に歓喜の声を上げた。
……この時点で、ただの人間には有り得ない肝の据わりようである。

そして、

「うーんと、これを……こうですか？」

迫り来る弾幕を前にしても、呑気なまま手に力を集めると、

「——おおっ、こうですね」

「……えっ?!」

何も無い所からスペルカードを産み出して。

「これが、私の……スペルカード、っていうんですか？」

名前は……これで！」

幻操『リフレクトバレット』 『反射弾幕』

詩音の宣言と同時に、リグルの放った弾幕が詩音を襲う。

しかしそれは、そこで潰つぶえることはなく——

「何だ、あれ………!!」

リグルはもはや先ほどまでの怒りを忘れ、目の前で巻き起こる、不可逆である筈の現象に見とれていた。

リグルの放った、『季節外れのバタフライストーム』は、ある一点まで集中すると、その色を反転させていた。

黄色の弾幕は紫へ。緑の弾幕は橙色へ。青の弾幕は緋色へ。白の弾幕は黒色へ。そして赤い弾幕は、空色へ。

更にそれらの弾幕は、色彩だけでなく進行方向すらも反転させられていたのだ。

紫、橙、緋、黒、そして空色の弾幕は、元の飼い主の手を既に離れ、自由奔放に飛び回っていた。

先ほどまでの様相が幽霊の演舞だとすると、今はまるで八百万の妖精が駆け回っているような、そんな印象を受ける。

……通常、放たれた弾幕の軌道を外部の力でねじ曲げることは、不可能とされる。何故なら、スペルカードというのは、ある程度綿密に組まれた術式だからだ。

もちろん、一部の格が違う妖怪は出来るかもしれないが……リグルのような弱小や、ましてや人間などには、到底不可能であろう。

故の、不可逆現象。

しかしそれは、現実にリグルの目前で繰り広げられていた。

「なに………これ………!!」

圧巻の光景に、言葉がでない。

そのような隙を、元リグルの弾幕が逃すはずもなかった。

あつという間に、いやあつと声を上げる刹那さえ与えず、リグルは弾幕の嵐に飲まれていく。

そして、リグルが墜ちる瞬間に見たもの――

それは、先ほどまでとはうって代わり、紅い空を飛翔をしていて。その目が、妖精のように悪戯たのしげに笑っていて。

……左の瞳が翡翠に光っていた、少女の姿だった。

Stage 1

始まりのG!〜リグル・ナイトバグ〜

Stage Clear!

Stage 2 境界の番人

少女は尚も、惹かれる方向へと歩みを進めていた。

霧は、一向に晴れる気配を見せない。いつまでも詩音に纏い続ける
紅い幻想は、彼女から視界だけでなく時間感覚をも奪っていた。

「んー、なんだかさつきまでより霧が濃くなっている気がしますね。

——ん？……………!!」

人間とは実に不思議な生物で、ある者の五感が正常に作用していない場合、他の感覚器官がそれを補おうとすることがあるらしい。盲目の天才○○、などといった類いの人物は、外の世界で多数報告されている。

この時の詩音も、そのような状態であったのかもしれない。

突然何かを感じ取り、詩音はその場で上体を仰け反らせた。

と同時に、かなりの速度の気弾が、詩音の顔があった場所を過ぎ去っていく。

先ほどまでよりも濃密な妖霧が、じつとりと揺らぐ。

「ふむ、やはり人間にしては出来るようだな」

すると、どこからか声が聞こえる。

詩音は声の主を探そうと、身体を起こし——

「つてこれ、あの映画の超有名なシーンの再現みたいですねー。でもあれはCGだし、これならキア○も真っ青ですね」

「……………やはり外界人か。全く、どうしてこんな忙しい時に…………」

今度は、先ほどまでよりも近くで聞こえた。釣られ、詩音が顔を向ける。

どこまで行っても消えない、紅い霧の漂う森。その暗い木々の間に立っていたのは、道師服を着た女性だった。

「あれ？　　もしやあの映画をご存知で？　　ここは、私たちのとは

別の世界だと思ってたんですが…………」

「その認識で間違いない。ここは、忘れられし者どもが集う地、幻想郷だ。

映画は…………私の主が、『我が式たるもの一般教養くらい覚えておか

なきや』と」

……こういった場合、発案者が見たいから、というのが理由の大半を占めるのだが。

ともかくその金毛の、九尾の狐は、こめかみを押さえた手を下ろすと再び詩音へと向き合った。

「それは置いといて、だ」

「はいはい置いとくんですね。さよならキ○ヌー」

「……………続けていいか？」

「あ、どうぞご自由に」

……何度も言うようだが、詩音は外界の、普通の少女だ。今までは何の変哲もない人生を送ってきた、うら若き少女である。

そうであるにも関わらず、詩音の目の前に鎮座するのは妖獣であるというのに、彼女は全く緊張感を感じさせない。

詩音のその有り様は、どこかこちら側に近いものを感じさせた。

「……………私は、八雲藍という者だ。この幻想郷と外界とを隔てる結界の、管理を行っている」

「へえ、私は古卿詩音と申します。

にしても、ここはやはり異世界なのですね……………！　ここから、

きつとアツい展開が……………！」

「……………いい加減、話が進まないのだが」

……………どうやら彼女自身もなかなか特殊な性格をしているようだが。その藍と名乗った少女は、うんざりしたような様子で詩音を叱責する。

「あ、すみません。ちょっとまだ見ぬ異世界にテンションが上がってまして」

「そこは普通恐れると思うのだが……………」

……………まあいい。私は、今言ったように結界の管理、主に監視をしているんだが」

「ふむふむ。管理職って大変ですよね」

「で、だ。古卿詩音——」

——お前はどうかやって結界を抜けた？」

いつまでも終わりが見えないため、今度は語気を強めて、詩音に迫る。

返答次第では、と思い、体に妖力を滾らせて。

しかし、当の詩音は藍の目をじっと見つめ、黙して語らない。

二人、いや一人と一匹の間に、少しの時と妖艶な霧のみが流れた。

時は、永遠に続くように見えて、しかしどのような存在にも終焉を告げる儚さを帯びて。

霧は、振り払えば消えてしまいそうで、しかし底の知れないほど甚大な妖力を帯びて。

……いや、どのような存在、というのには少々語弊があった。時の流れから解脱した存在には、そのようなことは起こらないだろう。蓬萊人とか。

ともかく。

いい加減業を煮やし、こうなったら力づくでも、と藍が考えた時。

左の瞳が、ゆらりと揺れた。

「っ!？」

「あの——」

「そちらから、ご招待して下さったのではないんですか？」

「そして二重に面食らうこととなる。」

「しよ、招待？」

「は、はい……。なんだか惹き付けられるって言うんでしょうか、ふと何かを感じて、そしたらそのまま意識を持ってかれて。気づいたら、ここに」

「と、いうことは、無意識に、結界を越えたのか？」

彼女は、再びこめかみを押さえて唸り始めた。しかしその顔は、先ほどとは違い真剣に悩んでいる。

一方の詩音も、言われるまで意識しなかったのか、改めて自分が異界の地に何故か来ていることについて、不審に思い始める。

思案を続ける二者。紅い幻想はそんな彼女らを翻弄するかのごとく漂い、樹木は僅かな風によって大袈裟にざわめいていた。

「……そうだな、この異変時に、不確定因子は……」

「ん？　何か分かりましたか？」

少しして、藍が何かを呟き始めた。

既に迷宮入りで自己完結してしまっていた詩音は、新たな情報を求め彼女に声をかける。

「いや。ただこちらにも事情があつてな。スペルカードルールが施行されて初めての異変で、出来るだけこの異変が円滑に解決されるのが望ましいんだ」

「……ちよつと、私の理解力が足りなさそうなんです……」

「ああ、すまない。まあ要するにだな——」

この時、藍は明らかに詩音を見くびっていた。

所詮、稀に訪れる外界の迷い人だと。

運命の悪戯により来訪した、ただの招かれざる客だと。

先ほど述べた様に、詩音は左の瞳の色以外は何の変哲もない少女である。

それ故、たとえ賢者の式であつたとしても、ただの人間と扱うのは仕方のないことなのかもしれない。

思えば、ここが間違いだった。

「——古卿詩音、貴様を侵入者と見なし、幻想郷から排除する」

相も変わらず暗澹とした森に、無数の光弾が浮かび上がる。

「え……………」

「勿論、自分から出ていってくればこんなことする必要はないんだがな。これまでのお前の言動からするに、好奇心に負けて残留するだろうよ」

詩音の黒い瞳に、困惑の色が浮かぶ。

やはりそこは人の子。平和な時代に生まれ育った者にとっては、突如として敵意を剥き出しにされることは慣れないことであり、困惑もするだろう。

「そんな、そんなことって……」

「……別に、命まで奪つたりするつもりはないぞ？　　というより、そんなに絶望するのならば今すぐにでも出て行ってもらいたいのだが」

……どこか様子がおかしい。

紅い霧の中に浮かび上がる、一人の人間の顔。そこに見られたのは、これから排撃されることへの恐怖——

——などではなく、ただただ驚愕しているような表情で。

「だって、だって！」

——異世界転生ものは、そっちの住人に受け入れられてナンボでしよー！」

藍は盛大にずっこけた。儂い人間を幻想した彼女が馬鹿だったのか。

……そういえばこの人間、先ほど蟲妖怪に突然弾幕を放たれても特に動揺せず躲していた。確かに、今更敵意だけで恐怖、困惑するのもおかしな話である。

「ええい、調子が狂う！　このまま、さっさと退場してもらおうぞ！」

そう、九尾の獣が雄叫びをあげる。

同時に、数多の弾幕が詩音へと襲いかかった。

彼女の放った弾幕は広がり、集まり、また広がって、少しの間間をも奪取せんかのごとく詩音に迫る。凡人には肉を切らせるどころか、自らの肉を削がせる程の覚悟がなければこの弾幕の回避は不可能だろう。

その弾幕は規則的な、美しい陣形を保ったまま、か弱き人間へと近づいていく。

そして、ある一点にまで来たとき。

突如としてその陣形が乱れ始めた。

「!?　ど、どうなっているんだ！」

先ほどまでの優雅な足並みは何処へやら、幻想の空に舞う弾幕は、藍の想定とは違う経路を辿り始めたのだ。

一部は、明後日の方向へ飛んでいく。一部は、他の弾幕とぶつかり、消滅していく。

ただやはりその多くは、

翡翠の少女へと一直線で向かっていた。

それらを詩音は、持ち前の身のこなしで華麗に避けていく。暴走した弾幕が、地面にぶつかり土が飛ぶ。枝にぶつかり木の葉が舞う。

その、飛び交う土の間を詩音は駆ける。舞い踊る木の葉の中を飛び、そして宙返りまで披露する。

まさに自然という競技場で、自分の演目をこなす手練れのような、そんな光景だった。

「おっ、おい！　古卿詩音!!　どういことだっ!!」

「えっ、何が——へぶっ!!」

藍は思わず声を荒らげる。

「いって……」

ちよ、ちよつと藍さん、回避中に話し掛けられると、呼吸が乱れてしまふんですが」

「そんなことよりもだ!!」

尚も藍は詩音に迫る。

先ほどとは打って変わって、驚愕の色に染められていたのは藍の方だった。

「——どうして!」

どうして、私の弾幕が、お前に引き付けられていつてるんだ!」

藍は今まで、弾幕を避けられたり、相殺されたことはあつても、軌道をねじ曲げられたことはなかった。

……というより、空中に飛び交う力のカタマリを操ることなど、出来るものがあるのだろうか。

しかしそれを行ってみせている、当の詩音と云えば——

「……え?　これって、そういう仕様じゃないんですか?」

……また無意識。無意識とは、私たちの想像以上に便利なものらしい。

まあ意識的に操作出来るのならば、進んで自分の方へと近づけはしないか。そう考えると、妥当と言えば妥当だが。

「くっ……!」　ならば、これでどうだ!」

次に藍が取った作戦は、奇襲だった。

彼女が懐から取り出したスペルを宣言する。すると、彼女の体を中心にして、青い弾幕が放たれた。

空に漂う紅い幻想とは対極の色彩を放つそれら青い幻想は、今度は引き付けられることなく詩音へと迫っていく。

しかし、先ほどまでと比べると、いささか物量が足りない。

「おっと！ 今度はスペルカードですか。なんか今日は調子が良いですし、このまま——」

第一波を難なく躲す詩音。そのまま啖呵を切ろうと、前を向いた。

しかし。彼女は確かに、弾幕の発生源に居たのに。動く素振りなど見られなかったのに。

詩音の視界が捉えたのは、頭上を通過する青い弾幕のみだった。

「うおっ？」

「やれやれ、スペルカードはその不思議な能力の影響を受けないようだな」

刹那、後ろで聞こえた声に詩音は振り向く。

そこにいたのは果たして、金髪の、九尾の狐だった。

「うおおっ!？」

「ただ弾幕を放つことのみが、スペルカードの役目ではない。これくらいの手当、出来て当たり前さ。

では、ここからが本番だ。私のスペル、お前には攻略できるかな？」

そう言って、笑みを浮かべる。ようやく自分がちっぽけな人間を翻弄できたことが、余程嬉しかったらしい。

その顔は楽園の管理者ではなく、一匹の妖怪として、弾幕ごっこを楽しんでるようであった。

そして、再度その体から四方八方に広がる弾幕が放たれる。詩音はそれを何とか避けるが、気づくとその背後には再び藍の姿が。

「……もしかして、瞬間移動ですか？」

「まあ、似たようなものだ。これを使うと、移動中は攻撃を食らわないからな。」

それよりも、体力は大丈夫か？ 私のスペルの効果が切れるのもまだまだ先だからな、せいぜい頑張ってくれよ」

そう囁くとまた弾幕を放ち、消える。

「……！ や、やってやりますよー！」

負けじと笑う詩音。しかし、その顔には疲労の色が滲み出ていた。

放つ。消える。

広がる。躲す。

「そういえば、九尾の狐、つて！ はあ、傾国の美女、で、有名、ですよね！」

「……まあ、そんな呼ばれ方をされた時もあったな。」

ほら、もう一度」

放つ。消える。

広がる。跳ぶ。

放つ。消える。

広がる。大きく避ける。

「はあつ、はあつ、やっぱりつ、美人さん、ですねつ、」

「世辞はいらん。ほら、お代わりだ」

放つ。消える。

広がる。転がって避ける。

放つ。消える。

広がる。なんとか合間を抜ける。

「いや、でも、背も、高いし。胸も――」

——胸も……………」

「……………」 どうした？」

「わっ、私はまだまだ大絶賛成長中なんですよ!!」

「うわっ！　　木片を投げるな！」

放つ。消える。

広がる。木に当たる。木が碎ける。

放つ。消える。

広がる。土に当たる。土が抉れる。

放たれる。消える。

広がる。

「はあっ、はあっ、はあっ——」

人間の限界というのは、妖怪の何倍も早い。

それは翡翠の少女も例外ではなく、詩音は既に息を切らし、肩で呼吸をしていた。

というか、よくもまあ人間の分際でここまでやれたものである。

放たれた弾幕は木を抉り、土を砕いていて、周囲の状況はなかなかのものだった。

いよいよ体力の限界に近い詩音。あと二、三度弾幕が放たれれば、彼女は避け損ね攻撃を食らってしまうだろう。

確かに弾幕ごっこでは、殺傷性は低められている。が、それでも人間に、当たってその後の快活な活動を許すほど妖怪の弾幕は甘くはない。現に今、放たれた弾幕はここら一帯の景色を凄惨なものに変えていた。

「くっ、こうなったら、目には目を！　　歯には歯を！」

——スペルカードには、スペルカードを！」

「それ、恐らく用法間違っているが」

追い込まれた詩音はそう叫ぶと、手に力をこめ始める。

諫言を呈するが、それにも耳を貸さない。

「というか、何をやっているんだ？　手に力なんか入れて……」
……藍がこう聞くのも、普通なら当たり前のことである。

何故なら、スペルを発動するのには懐からスペルカードを取り出さなければならぬのだから。

「イメージ……こういうのはきつと、イメージが大事……多分」
それでも詩音は手に力を込め続ける。

そして次の瞬間。

「っしー！　また出来た！」

詩音の手に光が収束し、そこには今まで存在していなかったスペルカードが出現していた。

幻想『季節外れのバタフライストーム』

そして、スペルが宣言される。

「っ?!?!」

九尾の驚愕度は余裕でこの日一番を記録したが、そう悠長なことも言つてられない。

迫り来る目映い弾幕に、彼女はもう一度自身のスペルによって移動を行う。ついでとばかりに弾幕を放ったが、それは詩音から溢れだす光の濁流に全て飲み込まれてしまった。

詩音の弾幕の勢いに、藍は防戦一方だ。先ほどとは、攻守が逆転していた。

暫くして、両者のスペルの効果が切れる。

「おいつ、古卿詩音!!　さっきのスペルはどういうことだ！」

どうやったら、何も無い所からスペルカードが出現するんだ!!

しかもあの技は、蟲妖怪の物だろう!!　どうしてそれを、お前が使用出来るんだっつ!!!!

詩音に口を開けさせる須臾すら与えず、藍は烈火のごとく捲し立てる。逆に言えば、それ程彼女が驚愕していた、ということだ。

対する詩音はというと……

「んー。すごい綺麗でしたんで、真似出来るかなー、ってやってみたら。」

——出来ちゃいました!」

この有り様である。

全く、自分の行ったことがどれほど異常であるか、この娘は理解していないのだろうか……。

「……もういい。お前には尋ねたいことが山程できた。手早く尋問を開始するためにも、とつとと墜ちてもらおうぞ」

この不可思議人間を相手にしていたら、いつまでもきりが無い。

そう判断した藍は間もなくの決着を予告すると、先ほどとは異なるスペルカードを取り出した。

が、ここでまた詩音が水を差す。

「あ、そうそう尋問といえば。私、さつきからずっと藍さんに尋ねたいことがあるんですが」

「ああ!?! 今度は何だ!?!」

度重なる驚愕、そして詩音の掴み所のない態度に、藍は憤りが蓄積していた。荒い声を上げた彼女を見れば、物凄く毛が逆立っている。

それでも詩音は、そんな様子の妖怪を気にも留めず、懐を探る。人間にしてこうも一貫していると、もういつそ清々しい。

そして彼女は、懐から三枚の紙を取り出した。

「うーんと……あ、そうそうこれです」

「……何だそれは」

「あれっ? 心当たりないですか?」

詩音はその中から一枚を選び出し、掲げる。それは、どうやらスペルカードのようだった。

……先ほど、その場でスペルカードを作り出すという摩訶不思議なことをやってのけたのに、今更何をしているのか。

そう考え、さっさと蹴りを着けようとし、スペルカードを構える。

しかし。

「——っっ?!!」

「うーん……。なんだかこれから、藍さんとすごく似たようなチカラを感じるんですが……」

突如翡翠に光りだした詩音の瞳に、

「そつ、それは……!?!」

そして何よりもその手に持つスペルカードから放たれる妖気に、化石のごとく固まってしまっていた。

幻想深淵『四重弾幕結界 — 麟子鳳雛 —』

何の前触れもなく宣言されるスペル。

同時に、莫大な量の弾幕が何処からか集い始める。

「な……何故……!?!」

集結したそれらは、空中を漂う詩音の周りを、周回する。

紅い空に浮かぶ赤や青の弾幕は、四重ではとても数え足りない程の、弾幕による結界を森の広大な領域に形成していた。

その結界どうしの間には、藍も封じられる。

前からは、迫り来る赤い弾幕。

後ろには、廻り巡る青い弾幕。

このままでは、墜とされてしまう。

しかし、藍は動かない。

いや、動けなかった。

何故なら、

「どうしてお前が、紫様のスペルを……!」

どう足掻いても覆せないものが、そこにはあるから。

そして弾幕は、全てを光に染めていった——

Stage2 境界の番人 〈八雲藍〉
Stage Clear!

紅い森。煙をあげて倒れる、九尾の狐。

そして、そこに現れる一つの裂け目^{スキマ}。

「あらあら、やられちゃうなんて。我が式ながら情けないわねえ」
スキマから出てきた金髪の女性は、その狐の頭を膝に乗せると毛繕い^{スキマ}を始めた。

その顔は一見優しそうだが、どこか胡散臭さを醸し出している。

「——でもまあ、」

そのまま彼女は、斜め上を見つめ、虚空に向かい口を開く。

その目線の先には、羽ばたく一匹の蝙蝠が。

「あのお嬢さんお好みの、運命とやらは無事動き出したみたいね」

そして、妖怪の賢者は、静かに微笑んだ。

「にしてもあの人間、どうやって私の技を……。

……翡翠の目——

「………っ!?」

「……いやまさか。そんなこと、ある筈がないわね……」

—霧は、まだ深い。

Stage 3 心を忘れた放浪者

霧はいまだに晴れる気配を見せず、むしろ先ほどよりもより面妖な雰囲気を感じさせる。

当然視界は狭く、更にはどこまで歩いても、木々の広がる光景しか目に入らない。この状況下で迷えば、たちまち幻界の深淵に引きずり込まれることを錯覚する。辺りはまさしく、五里霧中だった。

こんな状況で迷わずにいられるのは、余程この地理に精通している者か、あるいは並外れて勘の鋭い者くらいであろう。

そのどちらでもない人間の少女、詩音は、目を覚ましてからずっと、自分が惹かれるがままに歩みを進めていた。当てずっぽうとも言う。

しかし、そんな彼女の周囲の状況は、ここに来て少しだけ変化の様相を見せていた。

「……なんか、さつきから少しひんやりしてますね。あれ？　こっちでは、季節も違うのでしょうか？」

無論、そんなことはない。

実は幻想郷には、季節の趣を感じるのにえらく不向きな場所がいくつかある。その一つが、偶然にも詩音の進行方向上に存在し、とある馬鹿のせいで万年低温を誇る、霧の湖である。

——そして、この蔓延する妖霧は、その湖にある島にそびえ立つ、紅い洋館から発されていた。

……しかしまあ、詩音がそのようなことを把握している筈もない。自分がどこへ向かっているかもわからないまま、やはり詩音は、惹かれる方向へと一直線で歩みを進めていた。

「どうしましょう……上着なんて持ってないんですが……」

——その時。

霧が、微かに揺らいだ。

それは本当に僅かで、それこそ意識では感じ取れない、それ程の揺らぎ。

そして、詩音は。

揺らぎに気づいたのか、それとも無意識になのか、その方向へと顔を向けた。

本能『イドの解放』

唐突にスペルが宣言される。

すると、詩音が顔を向けた方向から片喰カタバミの葉のような形の弾幕が大量に押し寄せた。

深い幻想の空に漂うそれら薄桃色の弾幕は雄大に、しかし確実に、空間を埋め尽くしながらちっぽけな少女へと迫る。

「おおっ、なんか、かわいい……」

そんな呑気な感想を上げながらも、詩音は着実に弾幕を避ける。刻一刻と移動する安全地帯を見極めて、そこへと走り、跳び、回り込む。それでも、完全に回避が出来るわけではない。詩音のすぐ耳元を弾幕が駆け抜け、黒い髪が少し散った。

空が歪み、心弾が踊り、近くの妖精が逃げ出す。

そんな光景が少し続くと、突如視界が暗れる。スペルが突破されたのだ。

そしてそこには、二つの影があった。

一つは、地に足を着けた、黒と翡翠の少女。間一髪の回避が重なったのか、腕や顔に少々傷が見える。しかし、その瞳にはまだ熱が残っていた。

もう一つは、空を浮遊する、帽子の少女。髪は緑がかった色をしていて、身体中に紫の管が通っている。そして、その顔には薔薇のような笑顔が咲いていた。

しかし詩音は、その少女のある一点にのみ釘付けになっていた。

「それは……目、ですか？」

それは、身体中にまわりつく紫の管の、終点にあるもの。

彼女が人ならざる者だと証明する、三つ目の、閉じた瞳だった。

「〜♪」

そんな空とぶ少女は、鼻歌交じりに詩音を見つめている。だが、とても詩音に興味を持っているのは確かなのに、何故か話しかけてこない。それどころか、詩音と視線すら合わせない。まるで、道端に咲いていた花を無意識に観察しているような、そんな様子。

人間にとって異変であるこの霧は、妖怪にとってもまた異変である。想像すればわかると思うが、自分の周りに他人の妖力が垂れ流されて、気分の良い輩はいない。

そんな状況下にて、隠し事がある訳でもなしに何も語らないというのは、彼女が妖怪であるならばとても不審である。というのも、人の形を成す妖怪というのは基本、陽気で会話を好む者が多いからだ。それこそ、他人の心を覚るような種族でなければ。

……尤も、帽子の少女はれっきとしたその種族の一員なのだが。そんなことを知る筈もない詩音は、自ら少女へと語りかけた。

「あのー……そのの、妖怪さん？」

「……？　もしかしてあなた、私のことが見えてる？」

詩音は首肯する。

「ほんとについ！　わー、あなたすごいすごい！！」

……すると、その少女は突然降りてきたかと思うと、詩音の手を取りくるくると回り出した。

妖怪が突然近づいてきて、しかも自分の手を握ってくる。この時点で、人里の人間ならば阿鼻叫喚どころではない。

ところが、と言うべきか、はたまたやはりと言うべきか。外界の少女、詩音には、そのような幻想郷の常識は通じない。

それどころか、

「ふふふー、そうですかー？　ありがとうございますー」

一緒になって回っていた。

……これだからこの少女は……。

「帽子少女さんも、さっきのハート型弾幕すごくステキでしたー」

「そおー？　ありがとうー！」

「あれはねー、『イドの解放』っていうのー」

「イド……井戸？」

「そういえば井戸って、落ちたらそれで終わりって聞いたことあるんですけど、どうなんですかね？　水があるから、なんとか助かりそうなもんですが」

「井戸は深いよー」。

「でも旧地獄跡はもつと深いよー！」

「地獄ですか？　針千本の山？」

「そー！　私の家があるのー」。

「この空みたいキレイな、血の池もあるよー！」

「鮮血……スカーレット、ですかねえ」

「へえー、スカーレットかあー」。

「………せーのっ！」

「「スカーレット!!!」」

そうして、さんざん楽しそうに回った後。

今度は、帽子の少女が今更な質問を詩音にぶつける。

「そういうええ、あなただあれ？　人間？」

「——よくぞ聞いてくれましたっ！」

突如、詩音は手を離し、仰々しい口振りで大袈裟な姿勢を何故かとった。

何故か。

その反応速度と態度の落差には、尋ねた少女自身も驚いていた。

「よろしい、ならば御答えしよう！」

吾こそは異界より召喚されし隻翠眼、古卿詩音！　我が瞳に宿りし精霊が現界する時、世に混沌とケイオスがもたらされ、全てが翡翠の光に染められるだろう……!!」

帽子の少女はその様子に、呆気にとられていた。

……うん。いや、まあ。彼女については、元々謎が多かったのだ。異界へと迷い込んだにも関わらず動揺しなすぎとか、妖怪の存在もすんなりと受け入れすぎとか。

でも、これで合点がいった。この時期特有の病気ならば、仕方があるまい。

「一年間温めてきた自己紹介が、ようやく言えました……！　　藍さんのときは、気づいたら終わってましたからね……！」

「——なんか、スゴい……！」

「そう言えば、あなたの名前は何とおっしゃるんですか？」

「私？　　私はね、」

そして、妖怪の少女は再び浮かび上がる。

伴い、どこまでも濃い妖霧がひっそりと揺らされる。

その、瞼は閉じられていない、二つの瞳が光ったように見えたのは、先ほどの自己紹介に触発され新たな何かに目覚めたのか。

「——古明地、こいしー！」

楽しい楽しい人間さん、もっと私と楽しく楽しく弾幕あそぼうね！」

……それとも、妖怪としての何かに目覚めたのか。

帽子の少女、こいしは、そう愉しげに告げた。

抑制『スーパーエゴ』

そして遊戯の継続が宣言される。

すると、幻想の空に今までにない揺らぎが起こったのを詩音は感じ取った。

その出所を探ろうと、詩音は顔を半回転させる——

その目前には、迫り来る淡青の弾幕があった。

「うおっ!!」

詩音は身体を捻らせどうにか回避したが、その次にはまた弾幕、それを避けてもまた弾幕、その向こうにもまた弾幕が。

そう、全ての弾幕が詩音の後ろから押し寄せていたのだ。

先ほどのスペルによってこいしを起点に拡張した幻想は、今度はこいしへと向かい収縮する。

膨張した薄桃の「イド」は、やがて淡青の「超自我」へと収束していく。

詩音はそれでも躲し、躲し、躲す。

深淵の幻想の空に、漂流する数多くの自我。彼女の動きはそれらを翻弄する。それは、ただの人々を惑わす、幻想の少女のようで。

しかし、後ろから攻撃が訪れる状況が得意である、という者はまずいない。

それは詩音も同様だ。そもそもとして、地に這う彼女の駆動範囲は少ない。疲れが重なり、かすり傷も重なり、自然と詩音は追い詰められていく。

ここまで逼迫すれば、何か打開策をどうにかして見つけ出すのが狡智なる人間である。

——詩音は、その打開策を何気なく、自らの掌に生み出すのだった。……反則もいいところな気がするが。

幻操『リフレクトバレット』 『反射弾幕』

そうして、宣言されるスペル。

しかし、それによつて新たな弾幕が生じる訳ではなかった。空には変わらず、こいしの弾幕が漂う。

……だが、新たな幻想は生まれていた。

不意に、詩音の周りの弾幕が鮮血色に染められた。その色は、深い幻想の空よりも強い自我を主張する。

数多の揺れ動く淡青の中に、ぽつりと咲く紅い華。^{スカーレット}しかし、紅一点

と思われたそれらは、淡青が詩音へと近づく度に勢力を拡大し、抗うように逆流していく。

「——ちよっ、こいし様〜！　いきなり飛び出して、どうした
……………」

……って、なんじゃこりや!?!」

たった今通りかかった者も目を疑うその光景。

その場にあるのは、淡青の弾幕が収束する円と、近寄る弾幕を全て反射する紅い円。

二つの対照的な幻想が、二者によって形成されていた。

「うわあ、すっごーい！　やっぱり詩音はすごいよ!!　どうやって、自分のとこに来る弾幕を跳ね返してるの?」

「あれですね、『避けられないのなら跳ね返せばいいじゃない』ってやつですね」

「それ聞いたことあるー。ハッソーノテンカン、でしょ?」

そうして、暫く赤青の弾幕が入り乱れる状態が続いた。

こいしが弾幕を発生させる。詩音がそれを弾く。そしてこいしは、その弾かれたものを避けていく。

しかし、ある時。

「こいし様、うしろっ!」

「——っ!!」

交錯し、軌道が乱れた紅華の一つがこいしを襲う。

それは、目前に迫る弾幕を回避していたこいしには対応できないものであった。

少しして、こいしのスペルが解除された。詩音もそれと同時にスペルの効果を消す。

するとそこには、後頭部から煙をあげるこいしの姿が。

「いったあ……。ねえねえ、もろ頭に来たよ、ガンッて!」

「うわあ、それは痛そうですね……」

こいしが必死になって解説する。若干涙目になっていることから察するに、相当痛かったのだろう。

しかし、心無い声を上げる者が一人。

「——ツハハハハ！ 傑作だ、今のは傑作だよこいし様！」
「んもー、ちよつと笑い過ぎ!!」

こいしは頬を膨らませて、その声の主の方を向く。
ここで初めて詩音は、笑い続ける彼女を認識した。

彼女は腹を抱えながら、木の枝に腰掛け二人の弾幕ごっこを観戦していた。

投げ出された脚は裸足に草履。いくら夏とは言え、霧の湖に近いこの場所では、人間ならば寒さを感じそうな格好である。

「いやでも、ガンって……！ そんな時のこいし様の顔がまた、へぶっ！って言ってて……!!」

「だってー、しょうがないでしょー！」

前のぼつか見てたんだからー、後ろからいきなり来たら驚くよ!!」
笑い過ぎで苦しそうな彼女は、真つ赤なオーバーオールを身に纏っている。腿の中頃から寂しげな下半身と対照的に、気休めのような上着も軽く羽織っていた。

「ってか、今のはあなたも悪いよ！」

いきなり『うしろ!』とか叫ぶからー!!

——泉熙!!」

その、泉熙と呼ばれた少女はかぶった烏打帽の上から頭を搔くと、
「いやあ、だって危なかったからさ。悪い悪い」

あっけらかんと謝った。

——その両手首には、鎖のついた、鉄の腕輪が付けられていた。

「と・も・か・く！ もう、邪魔しないでよね！」

「わかったわかった」

剥きになるこいしに、それをひらりと躲す泉熙。二人は相変わらず、微笑ましいやり取りを続ける。

しかし、

「ほんとにー？ もし嘘ついたら……」

「いやあ、嘘はつかないさ」

その一瞬だけ、泉熙の目の色が変わった、気がした。

「——おまたせー」

「いや、大丈夫ですよ。それよりもあの方は、お友達ですか？」

自分の方へと戻ってきたこいしに、詩音は尋ねる。

その質問は、先ほどの会話を見れば誰にでも予測できる結論だろう。

何よりの決め手だったのは、

「んー、そんな感じかなー。最近、よく遊んでくれるの！」

「すつごく、楽しそうですね。見てるこつちまでウキウキするくらい戻ってきたこいしの顔に、薔薇が咲いていたこと。

それは、人間の子供がこんな顔をして来たなら誰しもが心を許してしまいそうな、とてもいいことがあったような、そんな微笑ましいもの。

「そうかなく。」

でもねー、私にはもつと楽しみなことがあるよー！」

「へえ、それは何ですか？」

——しかし、このような言葉があることを知っているだろうか。

「それはね……………」

詩音の死体を、地霊殿のエントランスに飾ること！

大丈夫！ 動けなくなっても、うちのお隣が運んでくれるから

!!

綺麗な薔薇には棘がある。

『サブタレイニアンローズ』

スペルが宣言されると同時に、こいしから幾重もの同心円が生み出された。

このままでは被弾すると判断した詩音は慌てて跳ね、こいしから離れる。

そして、着地後に今一度顔を上げると。

「詩音、あなた強いもん！　初めから全力でいくよ！」

空に散りばめられていたのは、赤と青の輝く種子。そしてそこに咲いていたのは、金と、そして藍の薔薇だった。

こいしを中心にして、赤と青の弾幕が交互に、環状に広がる。それらは揺らぐ幻想の中に密集し、ゆつくりと詩音へと迫る。赤と青の間隔は詩音の体一つ分もなく、赤どうし、青どうしでは肩幅でも足りないくらいだ。そんな、まさしく弾幕の壁が、詩音を追い詰めていた。

そして、そんな弾幕の輪の上を駆け抜けるように、金と藍の、薔薇の弾幕が咲き誇る。赤の種子からは金の薔薇、青の種子からは藍の薔薇。それらは円上をぐるぐると回転し、僅かに残った隙間すらも埋め尽くそうとする。金の薔薇が遠ざかったかと思えば、藍の薔薇が近づいてくる。藍の薔薇をやり過ぎたと思うと、金の薔薇が押し寄せ

る。辺りは、まさしく弾幕の海。これでは詩音自慢の機動力も生かせない。

それでも詩音は、薔薇の押し寄せていない弾幕の合間を縫って、なんとか存命を果たしていた。

だが、それにも限界がある。何しろ肩幅もない程の空間に、無理矢理身を寄せているのだ。しかもその空間はゆつくりとだが動いていて、更には数秒に一度、薔薇の弾幕が鼻を掠める。

当然、掠りの回数は指数関数的に増えていく。あつという間に、おびただしい数の傷が詩音に刻まれていた。

圧倒的劣勢。だが詩音は、攻撃に転じられないでいた。

「くっ………。ここで弾幕を放つても、私をもっと苦しくなるだけですわね……」

こいしの弾幕は、規則的な陣形で詩音へと迫っている。その均衡の上で初めて、詩音は回避が可能だった。

それ故、詩音が弾幕を放ちこの状況を崩してしまうと、八百万の幻想が入り乱れ、その場は凄惨な事態に陥るだろう。

勿論、こいしにも被害が及ぶのは間違いない。だが彼女は妖怪、詩

音は人間。どちらがより重症になるかは、火を見るより明らかだ。

「おっ、どうしたよ姉さん、ギブアップかい？」

すると先ほどの、泉熙と呼ばれた少女が話しかけてきた。

その目は幻想の空の中で、とても愉快そうに、妖しく光っている。

「——いや、まだです。まだまだ終わらんぜよ!!」

「……なんで急に訛るんだ？」

……この時詩音は、あることに気づいていた。

薔薇の弾幕は攻防一体を兼ねていて、こいしの姿を詩音から隠している。金の薔薇が通過し終える寸前に、藍の薔薇が詩音の視界を遮る。その逆もまた然り。そのため、狙いが定まらなかった。

しかし。一見、式神のように精巧な動きをしているが、

「この弾幕は、あくまで生き物、こいしさんから放たれています。だからきつと、そのうちズレが重なって……

——!!」

——その一瞬を、詩音は見逃さなかった。

藍の薔薇が通過した直後。金の薔薇が邪魔をする直前。

詩音の言うとおり、誤差が積み重なり二つの幻想がほんの、本当にほんの一瞬、呼吸を乱したのだ。

しかも、丁度その須臾に数多の輪の動きも同調し、詩音からこいしへ、一直線の直道が出来上がっていた。

反撃の機会は、僅か数刹那。

ただの人間ならば反応も出来ない。

……しかし、彼女は迫り来る弾幕を反射し、他者の術をも模倣する。それが普通の詩音にとって、その隙は十分だった。

まばたきをするよりも短い間に、幻想が詩音の手中に集う。

その左の瞳が、翡翠に輝く。

そして、

幻影『紫電一閃』

——こいしはその時、すぐ耳元を旋風が駆け抜けたのを感じた。

彼女が異変に気づいたのは、その数瞬後である。

そこでは、詩音がたった今いた筈の場所から、こいしの真横を通り彼女の視界の外まで。

紫を纏うまばゆい閃光が、一直線に伸びていた。

こいしが太陽ならば、その周りを回転する色鮮やかな弾幕はさしずめ恒星から誕生した惑星といったところか。

その惑星の公転軌道を断ち切るとは、もはや人間の所業ではないように感じる。

そして、こいしが更なる異変に気がついた時。

即ち、その電光が疼くように揺れ動くのを認識した時。

紫の光の溝から溢れ出た、海などでは事足りない瀑布のような幻想は、既にこいしを飲み込んでいた——

「よいしょ、っと。にしても全く、こいし様を倒しちゃうとは……姉さん、本当に人間？」

発煙しながら地に伏すこいしを、泉熙は軽々と持ち上げる。

その動きに合わせて、鉄の鎖が擦れ、音を立てる。

「……それより、あなたは一体何者ですか？」

そう尋ねる詩音の瞳に、もう発光は見られない。

だが、光はまだ失っていないかった。

——そんな詩音の顔を見て、少女を肩に担いだ少女は面白い、と言わんばかりに笑みを浮かべる。

「知らないのか？ 相手に名を尋ねる時は……」

「詩音。古卿、詩音です。一応、十四年ほどしっかり人間やっています」

その返答を聞いて、泉熙は不意に顔と顔の距離を縮めた。

澆刺はつらつとした少女は、傷だらけの少女の瞳の奥を除きこむ。視線が混じり、溶け合い、焦がし合い。

泉熙の瞳に映されていたのは——興味。相手の深淵を掘り起こすような、そんな無尽の好奇心。

対する詩音の瞳に映されたのは、一体何だったのか。

「——へえ、面白い」

「え？」

急に泉熙が身を翻し、飛翔する。

釣られ、どこまでも深い幻想は、どこまでも深く蠢うごめき始める。

「あたしは、泉熙。八瀬はせ 泉熙みつきだ。姉さんとは少し違うかもしれないが、しがない人間さ。」

——それよりも！

いつになく激しく胎動する妖霧は、ひよつとしたらその主人の能力チカラを反映していたのかもしれない。

「約束だ、詩音。次に異変で会った時には、あたしと弾幕ごっこで勝負だ！ いやー、今からその時が楽しみだなあ!!」

満面の笑みでそう告げると、泉熙は幻想の空へと消えていった。

Stage 3

心を忘れた放浪者 古明地こいし

Stage

Clear!

Stage 4 不撓不屈の門番

「これは……海？」

……いや、湖、ですね」

「困りましたねえ……。何だか、ここの真ん中に行ってみたいんですが。」

霧が濃すぎて、どうなっているかよくわかりませんし……。どうやって飛ぶのかは、未だによくわかりませんし」

「にしても、ここちよつと寒すぎ——

——ん、ん!？」

「あれは……。りゆ、流水？」

辺りには、妖霧が凝縮していた。

何処を見渡せど、目に入るのは霧、霧、霧。最早、隣り合って語る人物の表情すら目視出来ない。

それどころか、会話する言葉や、相手そのものすらも深淵なる幻想に取り込まれてしまいそうな、そんな赤みを付帯している。

比喩でもなんでもなく、霧の湖周辺は“一寸先は赤”の状態であった。

——そんな、赤い湖の、その中心に。
即ち、幻想の最奥部に。

赤よりも紅い館が建っていることに気づいた者は、まだほとんどいない。

「……ぐっ……。お、お嬢様、申し訳ございません……」

……。ほとんど、いない。……。筈だったのだが。

そんな紅い館の門の前に、淡い緑の華人服を身に纏った、紅い長髪が美しい少女——紅美鈴は突っ伏していた。

その服はぼろぼろに擦り切れ、肌にも無数の傷が目立つ。それは正しく満身創痍。彼女が妖怪だとわかっていても尚、その有り様は痛ましい。

果たして美鈴は、ほとんど誰も気づかない筈のこの場所で敵に襲われたのか。それとも、突如として天変地異に巻き込まれたのか。はたまた、壮大に転んだだけなのか。それは、彼女の悲痛な見た目だけでは判断しかねる。

しかし、肌の無数の傷、後ろの強引に開かれたような門、そしてどこよりも深いこの霧を加味するならば、何が起こったのかは容易に想像できるだろう。

……まあ、端的に言ってしまうのならば、

「何なんですか、あの紅白と白黒は……」

相手が悪かった、ということだ。

しかし美鈴は、門を守る、という重大な任務を負っている。ましてや今は、彼女の主人が異変を起こしているという常には非ざる事態。主犯の住処の門をぶち破ろう、という輩がああ二人以外にも現れるのは必至だろう。

美鈴は奮起し再び立ち上がる。己の主人との誓いを果たすために。

「いや……こんな所で、寝ている場合ではありません！ お嬢様に

も、『出来る限りでいいから頑張って頂戴ね』と言って頂いたんだから……！」

……若干、主の美鈴に対する信用度が透けて見える気がするが仕方ない。

遠い異国の昼寝文化を持ち込んだ、彼女の罪は重いのだ。最近では、どこぞの賢者も言い訳に用いるようになったとか何とか——

「へえ、ならそのお嬢様に会わせてもらえませんか？」

——夜の帝王の力に満ち溢れた霧の中に、出し抜けに響く声。それに美鈴は身構える。

姿は見えない。どこまでも深い幻想は、妖怪の能力をもってしても周囲の把握を困難にしていた。美鈴の視界には一面の赤と、守るべき

紅が映るのみである。

「誰だ!!」

だが、返事はない。

聞こえた声は、少なくとも美鈴に覚えのあるものではなかった。友好的な者などではなく異変を解決しに来た者である、と考える方が妥当だろう。

しかし、美鈴にとって不審な点が一つ。

「……どうして、そんな低空飛行をしているんですか？」

……その声は、地に足を着けている美鈴の真正面から聞こえてきたのだ。

既に言及した通り、美鈴の仕える館は湖の島に建っている。よつて、門を守る美鈴の少し前には、滾々と水が張っていた。

当然、水の上を歩く、などという芸当が出来る者はそう多くはない。というか、そんな事をするくらいならば飛んだ方が速い上に楽だ。

この湖に舟が通つてる訳でもなし。故に彼女が、声の主が低空飛行をしている、と考えたのはごくごく自然だろう。

……尤も、「飛翔することが可能である」という幻想郷での常識が前提ではあるが。

だが、そんな彼女の幻想郷的思考とは裏腹に、ある音がその方向から聞こえてきた。

それは、小舟を漕ぐかのような、かき上げられた大きな雫が再び湖へと集合するような、そんな音。

ただ飛ぶだけではそのような音は生じない。美鈴は、更に警戒心を高める。

そして、深い幻想の中から突然その姿は現れた。

「——虚空に潜むアンノウンドもよ。音にも聞け、頭を洗え! 異界より誘われし使者、古卿詩音! ここに、見・参!!」

——それは、湖に漂う氷の上に乗った、少女の姿であった。

「……………」

「よつこいしよ、つと。いやー、湖って水で渡れるものなんですわね」
言葉を失う美鈴をよそに、詩音は悠々と新たなる大地へ上陸する。
もつと怖い妖怪が出てくるかも、などといった考えは頭にないよう
だ。

姿は、儂いただの少女。しかしその心意気は、幻想郷の常識の枠に
留まることを知らない。

美鈴も、まさかここまで普通であり、どこかおかしき人間が訪れる
ことは予期していなかったのだろう。少しの間、詩音を観察してし
まつていた。が、与えられた使命を思い出したのか、慌てて我に返る。

……その前の二人も人間だったのではないか、だって？ いや、
あの二人には『普通の』という冠詞はつけるべきではないと思うの
だが。

「……っ、いけない、あなたも侵入者ですよ。ならば、ここから先に
は通すわけにはいきません！」

くそっ、こうなったら背水の陣だ!!」
「どちらかと言えば、背門の陣、ではないですか？ あ、もしくは面
水の陣とかでもいいかも」

華符『破山砲』

美鈴の拳から、虹色の光が溢れる。

それは暗夜を過ぎているかのような館を、電飾の如く照らしてい
た。溢れだす力に木々はざわめき、水面は踊り、近辺の妖精は血相を
変える。

そんな力を纏った美鈴は、少し足を引いたかと思うと……

——全力で、飛び出した。

風を追い越す。空を切り裂く。その余波は、今までになく重厚な妖
霧に今までにない程の鳴動を与える。

しかし、その揺らぎすらも美鈴に追い付くことは出来ない、それほ

どの一撃。どうして妖怪が人間に対してそんな全力で、と思うかもしれないが、美鈴は先ほどその人間に撃破されているのだ。目前の者も同じくただの人間ではない、と考えるのは至って自然である。

それに、実際その考えは当たっているのだから。

一方の詩音はと言うと、霧に映し出された彩光を、恍惚とした表情で眺めていた。何を思い出したのか「プロジェクトマッピングみたい……」などと呟いている。

そんな詩音に、美鈴は刹那も経ずして距離を詰める。このままでは直撃は確実だろう。というか、構えていても人間には反応すら難しいかもしれない。

——しかし幸運なことに、と言うべきか、はたまた残念なことにと言うべきか。どちらにせよ驚愕が伴うのは間違いないが。

この古卿詩音という人間は、回避不能の攻撃を回避する、発想も技も持っていた。

曰く、「避けられない弾幕は、跳ね返せばいいじゃない」とのこと。

——ならば、「躲せない一撃は、その場からいなくなればいいじゃない」「い、らしこ。

……なに、発想が根本からぶっ飛んでいることに異論はない。

幻想『プリンセス天狐』

……そして、いとも気軽に発動されるスペルである。

詩音の手中に、辺りを照らす虹とは別の、淡い輝きが集う。それらが一枚の札の形を成したのと、美鈴の拳が詩音に達したのはほぼ同時だった。

熾烈なその一撃は、たった今詩音がいた筈の場所を貫く。衝撃で、周囲に爆風が巻き起こる。紅い霧の上に、虹が塗り重ねられていく。成る程、彼女が接近戦ならば山の妖怪にも引けをとらないというのも納得である。

だが、今は弾幕ごっここの場。スペルカードルールに則っていれば近接技を出すことに問題はないが、相手がそれに付き合う道理もないのだ。

不意に背後を襲う青い弾幕を、美鈴は拳で弾いた。

「うおっ、いまのバチツ、と弾くやつ格好いいですね」

「手応えがなかったと思えば……それは、まさか瞬間移動？

……あなた、本当に人間ですか？」

「一日に二回も種族を疑われたのは初めてですね。これでもバリバリ人間やってるつもりなんですが」

美鈴の後方を漂うのは、輝く瞳の人間。妖狐より拝借したスペルは無事身体に馴染んだらしく、嬉々とした顔をしている。

一方の紅い妖怪は、複雑そうな表情だ。まあ、彼女に今日降りかった災難を思えば同情に値するだろう。

「まったく……全然攻撃が当たらない、私よりも火力バカ、そして今度は物理超越、ですか。咲夜さんもそうですが、妖怪と人間という違いの意義を見失ってしまえそう」

「そもそも、人間と妖怪の違いって何でしょうかね。今まで遭遇してきた方々も、見た目すごく似てましたし」

「……妖怪は人間に恐れられる、人間は妖怪を畏れる者、かな？ 幻想郷は、そのバランスの上に成り立ってますから」

「それだと、妖怪を信じていない世界の大半の者は、人間でなくなってしまうんですが……」

「ああ、外界での妖怪の排斥は、本当に嘆かわしい限りです」

「そもそも妖怪を見かけないですね。逆に、こんな楽園があると知っ

たら攻め込んできそうです。娯楽目的で」

「――あら、人間ごときが私たち妖怪に太刀打ちできると思ってた？」

少しの間漂う沈黙。美鈴から溢れる妖力が、詩音の先ほどまで輝いていた翡翠が、互いをその場に留めさせる。

こんなにも呑気で激しい応酬にも関わらず、霧は散開の気配を見せない。それどころか、この二人を愉しげに観察している風にすら感じられた。

「――だからこそ、」

そんな中で先に動いたのは、美鈴の方だった。

「だからこそ、私は貴方がたに負け続けるわけにはいかないんです。使命のため。誇りのため。」

……そして、何よりもお嬢様のために！

紅魔館が門番、紅美鈴！ 推して参る!!」

虹符『彩光の風鈴』

周囲に、再び“気”が巻き起こった。

しかしそれらは、先ほどのように美鈴にまとわりつくことはなく、四方八方へと放たれていく。速い弾に、遅い弾。曲がり、突き進む、色鮮やかな弾々。やたらめつたらと言ってしまうほどだが、その流動性、不規則性は相手を翻弄する。その動きは、色彩こそ違えど蔓延する妖霧に酷似していた。

対する詩音は、もう効果が切れかかっていたのだろう、スペルを解除すると、地面に降り立ち回避を始めた。不規則に動く虹の中を、翡翠の少女は駆け抜ける。まばゆい照明で飾られた紅い舞台を、詩音は駆け巡る。

……だが、いかんせん数が多い。それまで深い幻想で一色だった館

の周りが、いつの間にか虹色に染まっていた。それらは美鈴の身体から絶え間なく、緩やかに、波のように押し寄せる。

それでも詩音はめげずに避け続けていたが……今、いい一発を腕に貫った。結構痛そうな表情をしている。

このままでは詩音はいずれ、弾幕の波に飲まれてしまうだろう。

そして、この状況を打開する方法は、やはり一つしかないのだった。詩音はもう一度、手に力を込め始める。

「くそ、こうなったら全部跳ね返して——」

「——その隙、頂きました!!」

突如声が轟いた。驚き、詩音は今さつきまで美鈴のいた場所、即ち虹弾幕の発生源を捉える。

……しかし、そこには誰もいなかった。

それどころか、いまの今まで目一杯に広がっていた虹が、跡形もなく消滅している。

俄然有利だったにも関わらず、スペルを解除する。この意味が、詩音にはわからなかった。あのまま継続していれば、美鈴が押し切れた可能性は高い。また、詩音にそのような打算的な考えがあるかは知らないが、美鈴はまだ詩音の弾幕^{反則技}反射の存在を知らないのだ。尚更、相手に一呼吸を与える理由がないだろう。

「くっ、一体どこに……」

「——それは」

……実は、その理由は二つあった。

一つは、詩音の隙を突くこと。彼女は何故か、その場でスペルカードを生成する、という訳のわからない事をやっていた。それは十分に驚くべきことなのだが、同時に相手へ付け入る隙を与えていた。

その場で生成する以上、彼女がスペルを発動するのには生成のための時間が必要であった。それでも限りなく零に近い隙なのだが、手に光が集まる、というわかりやすい予兆が存在するため、万能を買われた門番がそこを突くことは可能であった。確かに、弾幕を撃ち続けて下手にスペルを発動されるよりは、勝つ確率が高いだろう。

戦闘力が十分に高いのにも関わらず、それに胡座をかかず常に勝利の可能性を模索する。この美鈴の、武人としての気質があつてこそ成せる技だろう。

「あなたの後ろ、ですよっ!!」

……そして、もう一つは。

華符『彩光蓮華掌』

やはり美鈴の決め技は拳なのだ、ということ。

美鈴は妖怪の脚力を駆使し、まばたきをするよりも短い時間で詩音の背後を取った。

そして三度視界を埋め尽くす虹。美鈴に纏うそれは今までにない気迫を誇り、霧に纏うそれは今までにない密度を誇っている。

「……つて両方いつぺんに使えるんですか!!」

そう。美鈴の放つ莫大な気は、空と彼女の拳、双方を支配していた。もし拳だけならば、先ほどのように回避することは可能であった。しかし周囲には、美鈴を中心にして蓮華の花のような弾幕が展開されており、詩音もその中に封じられている。

当然、ここまで一度に能力を使うとなると、相当の気力が必要だ。それほどまでに、美鈴はこの一撃に賭けてきた、ということだろう。

詩音は、かなりの窮地に追い込まれていた。

この全身全霊の攻撃を受ければ、彼女が墜ちてしまうことは想像に難くない。

かといって避けようとしても、周囲には弾幕の壁。逃げ場はない。先ほどのようにスペルで移動するのも手だが、事態はそれよりも差し迫っていた。このままでは、詩音はスペルを宣言し終わる前に攻撃を食らう。

空間も、選択肢も、全て八方塞がり。

そうしている間にも、美鈴は腕を振りかぶり、数瞬後に詩音を貫く

であろうその一撃への道を刻一刻と作り上げている。
可能性があるとしたら――

今この瞬間に、時が止まる場合くらいだろう。

「……………!!」

その刹那に、詩音の瞳は今までにない幻想を見せた。

そして――

幻技『チェンジ・ザ・ワールド』

「っ!? ……………って、ああ。止まってますね。一か八かの賭けでしたが、上手くいったようです」

「取り敢えず、この花みみたいな弾幕から抜けて、つと。」

……相変わらず綺麗な弾幕ですね。これは、蓮華の花ですかね？」

「…………って、そういえば十秒しかないんです。こっからどうするか…………」

「…………このまま美鈴さんのスペルを捌ききるのは、ちよつと無理そうですね。やっぱりやるなら世界解除と同時に、ですかね」

「よし、この作戦で決まり！ それじゃあ…………」

時は、動き出す――

――そして、美鈴は拳を打ち抜いた。

だが。

「…………、またいない!?!」

捉えた筈の少女の姿は、忽然と消えていた。今度こそ不可避の筈の攻撃が空振りに終わったことに美鈴は驚愕、愕然とする。

しかし、そこで止まらないのが彼女である。急いで辺りを見渡し、

またもや物理を超越した人間の痕跡を探す。

同時に、自分の一撃への反省も始めた。

何処が悪かったのか。自分のどこに落ち度があったのか。詩音は、どうやってこの包囲網を抜けたのか。美鈴は瞬時に、考えを巡らす。しかし、

「やっぱ時止めと言えばこの人ですよね……………!!」

突如囁かれた声に、そして続く猛りに、それは遮られた。

「いきますよ、美鈴さん！　二連続でパクリ技ですけど、まあ許してっ!!」

——ロードローラーだあっつっ!!」

幻技『天誅ロードローラー』

そうして、スペルが宣言された。されたのだが…………何も、起こらない。

美鈴は、ますます詩音への謎を深める。前の二人は馬鹿みたいに強い人間、で納得できたが、詩音の所業はそれを遥かに越えている。

しかしそれでも、武人が最後まで警戒心を解くことはなかった。ともかく、スペルの効果が続くうちに倒そうと、そう考えたのだろう。美鈴はもう一度構えて——

「——つて、あれは…………？」

…………!!　え、ちよ、まってえっ、う、うわあああ!!」

——上から襲いかかった圧倒的質量に、押し潰されていた。

*

「…………つと。いい感じに決まりましたね、ロードローラー型弾幕！」
そして、全てが終わり。

勝ち誇っていたのは、翡翠の目を持つ少女だった。なんだか長年の

夢が叶ったかのような、清々しい表情をしている。

……そんな麗らかな少女の目前には、たった今隕石が落ちたかのような、煙を上げる窪みが。

その中に哀れな妖怪の姿が覗いているのは、最早言うまでもあるまい。

「これはこれは、美鈴さん……」。

あの、その、あれです。えーっと、

……ヤム○ヤしやがって」

……この惨状を作ったのは自分であるのに、呑気なことだ。まあやり過ぎの自覚はあるようだが。

しかし、その時。

煙を上げるその影が、もう動けない筈のその影が、立ち上がった。

「っ!!」

「——っ、はあっ、はあっ、ま、まだ終わってません……」。

お、おじようさまの、ため、にも、ここは、私が、守らなきゃ……

!!」

だが美鈴は、息も絶え絶え、足元もふらついていて、焦点も合っていない。既に限界を迎えていることは明白であった。恐らく、立つだけで精一杯だろう。

それでも尚、彼女は突き動く。その忠勇の源は、一体何なのであるうか。

凄まじい程の気迫に、詩音は言葉を失っていた。

「……………っ」

「っ、いいですか、行きますよ……!」

今度こそ、私のスペル……! 紅美鈴、改めて推して——

『『そこまでよ、美鈴』』

どこまでも深く、この場を支配している妖霧。それが、ここに来て初めて、怯えるようにざわついた。

同時に響くのは、永遠に紅い、幼き声。だがその声にも、夜の帝王

に相応しい威厳が含まれている。

「その声は、お、お嬢様!」

突然の主の来訪に、美鈴は仰天した。

それもそのはず。この声の主は、異変を起こして幻想郷を混乱に陥れている真つ最中なのだから。

そんな美鈴と、詩音の側に、一匹の哺乳動物が降り立つ。

「これは……蝙蝠?」

「この子は私の使い魔よ。今は少々手が離せなくてね。こんな間接的な形で失礼するわ、客人」

「へえー不思議、面白いですね」

……人語を話す蝙蝠という、外界基準で言えば摩訶不思議な出来事を詩音は今更ながら楽しんでる。

まあ、彼女についてはもう特に触れない。今まで散々不思議なことがあっただろと言いたい所だが、もう触れない。

しかしその横に、先ほどとは違った驚愕に染められている妖怪が一人。

「……きや、客人? え、お嬢様、もしかして詩音さんって……」

「ん? ああ、そうね。まだ言っていなかったわ」

若干青ざめたような表情で、美鈴は恐る恐る尋ねる。その顔と紅い髪が対照的で、なんともまあ……哀れだ。

そんな部下の様子を知ってか知らずか。彼女の操る使い魔が、二人の頭上まで浮上すると、

「——古卿、詩音。貴女を、このレミリア・スカーレットの名の元に、紅霧異変の『来賓』として今からお招きします。」

……先ほどは、うちの門番が失礼したわね」

幼き吸血鬼は、そう仰々しく告げた。

「これは、ご丁寧にどうも。いやいや、なかなか楽しかったですよ。長年の夢も実現しましたし」

「——や、やっちゃったー!!!」

……その反応は、二者それぞれであったが。

詩音は着物の裾を掴まむと、恭順の意を述べる。中二びよ……コホ

ン、好奇心旺盛な彼女にとっては、願ったり叶ったりであろう。

対して美鈴は……頭を抱え、慌てふためいていた。

『……ねえ、美鈴』

「うわあああ、どうしよう、ヤバイヤバイ！ 侵入者を二人も許すだけじゃ飽きたらず、お客様に手を上げるなんて、これは咲夜さんのナイフどころか下手したら一週間ご飯抜きに……」

主の声も聞こえていないようだ。

……というか、今回彼女に落ち度はないと思うのだが。美鈴は客人の旨を聞いておらず、ただ使命をまっとうしただけなのだ。どうやら焦って、その辺りの判断力が鈍っているようである。

『——おい、紅美鈴!!』

「ひゃあつ！ な、何でしょう!？」

『彼女を、私の所まで案内して頂戴。咲夜も今取り込み中だし、それにどうせ貴女、もう殆ど傷は治っているのでしょうか?』

「は、はい、それはバッチシです」

「! マジですか!? はえー、流石妖怪ですねー」

自分のこの先にはばかり囚われている美鈴に、レミリアは訓戒する。その一言一言には、大妖怪に相応しい威厳が感じられた。

『じゃ、あとはよろしく頼んだわ。門の番も、今日はもう結構よ』

「……成る程、見たのですね。畏まりました」

美鈴も、幾分か落ち着いたようだ。どうやらお仕置きが無さげだと感じ、安心したのかも知れない。

そして、用件を伝え終えた使い魔の蝙蝠は飛び立った。そのまま、館の方へと向かっていく。

それに対して美鈴は、ずっと恭しく敬礼を保っていた。

『あ、そうそう美鈴』

「は、はいっ」

『……私のために、ボロボロになっても守ろうとしてくれてありがとう』

「……! も、勿体無いお言葉で……」

……そうして蝙蝠は、赤より紅い館へと消えていった。

「——さて、じゃあ私たちも向かいましょうか」

「了解です！ いやあ、こないかにもな洋館に入れると思うと、今からワクテカが止まりません……！」

「……何でもいいですが、はぐれないでくださいね？ この館は、見た目以上に広いんで」

浮かれ気味の詩音に、美鈴は釘を差す。

……普通、人間が妖怪の住処へと乗り込む、なんてことは、例え向こうから招かれたのであってもお断りなのではないのだろうか。ましてや吸血鬼という、人間を糧にすることが明白な妖怪ならば尚更であらう。少なくとも浮かれることは絶対がない。

まあ、今更感が甚だしいにも程があるが。

「わかってますよ、それくらい。」

——時に、美鈴さん

「？ 何ですか？」

そんな人間は、妖精のような笑みを浮かべる。

その嬉々とした表情は、見ているだけで微笑ましくなってしまうような物で。しかし、油断した者には手痛い仕打ちが待っている物である。

「ふふっ、さつきからとつても、ニヤニヤしてますね」

「なっ……！」

美鈴は慌てて顔をおさえ、伏せる。その表情は先ほどまでと打って変わって、赤みを帯びていた。

……まあ、良い関係が主人と結べているのならば、それは恥じることではないだろう。

そんな美鈴を尻目に、詩音は駆け出した。

「ほら、美鈴さーん！ 速く速く！」

「……ってちよ、待って下さいよー！」

——こうして詩音は、幻想の最奥部の、そのまた更に深層へと誘われていったのだった。

S t a g e 4
C l e a r !
不撓不屈の門番
く紅美鈴く

Stages 尊大なる吸血鬼のささやかな望み

「——にしても、ほんとに紅あかばっかしですね」

豪華絢爛な装飾が美しい広間に、どこまでも続くのではないかと思われるほどの回廊。それらを過ぎ詩音は、改めて誰もが感じるであろう事実を言葉に著す。

「そりやあそうですよ。なんてったってうちのお嬢様は紅い悪魔、スカーレットデビルと呼ばれている方ですから」

今、彼女らが歩いている廊下も、床には血に染められたような絨毯が敷かれ、天井にも壁にも一面に紅が咲き誇っている。その鮮血を思わせるような色彩は、苦手な者が見れば卒倒してしまうかもしれない。

また吸血鬼の特性上、陽の光を歓迎してしまう窓は一つも設置されていないかった。辺りを照らすのは、妖しく揺らぐ蠟燭の炎のみ。妖怪の居城には相応しい空間と言えよう。

時刻は、既に大いなる太陽に別れを告げている。代わって月が、妖怪が幻想郷を支配することを許していた。

「ところで、そのお嬢様——レミリアさんは、どんな方なんですか？」
そんな薄暗い廊下に響くのは、四本の足から奏でられる靴音と、二人の、緊張感が欠けた声のみ。

その一つ、詩音は、もう一つの音を発生させている美鈴に尋ねる。
「どんな方、ですか……。そうですね、一言で言うのなら、とてもカリスマのある方です。五百歳という幼い年齢ながら、この紅魔館の当主を務めていますから」

「五百歳で幼いって、やっぱスケールが違いますね……」

ここに入ってから、一体どれほどの燭台を見てきたのだろうか。紅い館を赤く照らすその光は、彼女らが近くを通過する度に儂い幻想のように型を崩し、そして再生させる。

そんな明暗入り雑じった光に照らされた、美鈴の顔。己の主を語るその顔は、どこか嬉しそうであった。

「まあ、それだけで終わらないのがお嬢様の良いところなんです——

——つと、見えてきましたね。ご足労感謝致します、来賓さま」

「おお、あそこが……」

美鈴の言葉と共に、詩音は突き当たりにある、両開きの扉を視界に捉えた。

その扉は、やはり紅一色に染められている。しかし今までの何よりも立派な風貌をしているそれは、先に広がる空間がこの館で最も高貴であることを物語っていた。

「この先が、我等が主、紅魔館当主レミリア・スカーレット様の私室です。」

……お嬢様が、どうして詩音さんを招かれたのかわかりませんが

「が？」

取っ手に手を掛けたまま、美鈴はふと詩音の方に振り返った。その瞳には、目の前の友人を心配するかのような憂いが籠っている。

「——もしお嬢様が気分を悪くなされれば、詩音さんはお嬢様の、今夜のジューズとなるでしょう。なのでくれぐれも、粗相のないようにして下さい。」

……貴方とは、またお手合わせをお願いしたいですからね」

——そう。詩音がこれから相對するのは、数多く存在する妖怪の中でも群を抜いて気高く、自尊心が強いことで名の通った吸血鬼である。いくら招かれた身分とはいえ、悪戯に怒りを買えば塵芥も残らないだろう。

その気になれば、腕の一振りですぐ簡単に命など奪える。それが、強大な妖怪にとつての人間なのだから。

「成る程……大丈夫です、問題ありません」

「と言つてもまあ、今お嬢様は機嫌がいいようですし、それにご自分から招待された客人を滅したことはほとんどないので、心配ないとは思いますが」

重々しい雰囲気になってしまったことを案じたのか、美鈴が今度は笑顔でそう述べた。彼女としては、敬愛する主人に対してあまり戦々

恐々として欲しくない、という気持ちもあるのかもかもしれない。

……人間にとつては、〃ほとんど〃という部分が死活問題のような気はするが。

だがまあ、妖怪である美鈴にはそんな細かい所は気にならないのだろう。

美鈴は一呼吸置くと、そのまま目前の扉を叩いた。

周囲に、年月を経た木材の音が響く。

「では、入りますよ——

失礼します、お嬢様。今宵のご客人、古卿詩音様をお連れしました」
そして、運命の扉は開かれた。

紅い扉の先に広がっていたのは、やはり紅くて紅い部屋だった。

上下左右、全てが一色単に塗られているその部屋は、見ているだけで目眩が起こされそうである。そして、昼間には封じられているのだろう、角に追いやられた小さな窓からは、紅い月の光が射し込んでいる。

そんな紅の中央には、一つの円卓と二つの椅子。そして片方に座す、『永遠に紅い幼き月』がいた。

その少女は青みがかった銀髪をしていて、その上に特徴的な、ひらひらとした帽子を被っている。また服も、帽子と似たように裾がひらひらしており、彼女の幼い外見にとてもお似合いであった。

そんな、齢五百にして紅魔館当主、そして詩音を招いた張本人であるレミリア・スカーレットは、突然の招待に快く応じた翡翠の客に挨拶をしようと腰掛けから離れ、前に進み出た。

「よくぞ来てくれたわね、人間。今夜は——

「——天が呼ぶ、地が呼ぶ」

……しかし、図ったような折にして、彼女の幼い声とは違うものがその空間に轟く。

その元凶のすぐ隣にいた門番、美鈴には、阿呆のような顔をしてその光景を眺めていることしか出来なかった。開いた口が塞がらない、とはまさにこのことである。

いくら運命を操るといつても、流石にこの展開は予想外だったのか。レミリアも、目をぱちくりさせている。

「——忘れ去られし、幻想が呼ぶ！」

我は、悠久に命運を託せし靈長と孤高の栄華を誇る虚空、その二者の囑望を一身に擁す叡智なる人間！じんかん　そしてたった今ご紹介に預かった古卿詩音！

尊大なる、スカーレットデビル紅い悪魔殿よ。変革を催すこの出逢いを喜念し、我が翡翠をその双眼にしかと印刻するがよい……!!!」

「——なにやらかしてるんですかこの人おおオオオ!!!」

開け放たれた扉から、烈火のごとく言霊が氾濫した。それは、ごく一部のわかる者からすれば、電撃を浴びたような高揚を味わうのかもしれない。無論、殆どの知的生命体には理解できない。

……それにおまけのように伴うのは、哀れな門番の、本日何度目かわからない驚愕の叫び。いい加減間に立つ彼女のことも考慮に入れてあげて欲しい。

そして、その言霊を全身に受容したレミリアはというと——

「……………」

「あ、あのですねお嬢様、これはその、あれ、あれですあれ、きっと有名なジャパニーズジョークですよ、だから、どうかお怒りをお鎮めにおなりになって欲しいことを願わんこともなきもなしに候いまして……」

——顔を俯かせ、黙して語らない。表情は見えないが、良い気分ではないだろう。

外界では、「押すな押すな」は押せの隠喩である、ということを目にしたことがあるが、詩音はこれもそう受け取ったのだろうか。もっと時と場合という物を考えるべきではないのか。

大妖怪を前にしても芯がぶれない姿は、最早清々しさも遙かに通り越している。それは、一種の畏敬の念すら抱かれ得るかもしれない。

絶対に手本にしたくはないが。

だがしかし、詩音の運命は、目の前の少女に握られている。彼女が詩音の態度を是と成さなければ、そんな悠長なことは言っていられない。

……レミリアの腕は、怒りのためだろうか、小刻みに震えていて――

「……………くくっ」

「……あれ？　お、お嬢様？」

「およっ」

――それは紛れもなく、快悦から漏れた声で。

「くくっ、くくくっ、アハハははっ！」

――五百年生きてきたけど、貴女みたいな人間は初めてよ！　流

石は、八雲の式を破っただけのことはあるわね」

「いえいえそんな。お褒めに預かり誠に恐縮です」

「……………あ、あれー？」

レミリアは至極愉快、と目が、口が、表情が、言葉を經ずとも語るほど、破顔一笑をしていた。

……レミリアの立場上、これまで彼女を訪れた人間は皆、彼女を一目見ただけでひれ伏し、恭順を誓ったのだろう。それはそれで大変結構なことである。が、この吸血鬼がそんな状況を退屈に感じていたのも、これまた容易に想像がつく。

だからであろう。レミリアは、新たなる幻想の風を一身に受けても、その佇まいを揺るがすことはなかった。むしろ、危機感の微塵もないこの翡翠の人間を気に入ったようである。

「――いいわ。客人がそれを望むのならば、当主である私も相応しい応対を見せなきやね」

……突如、レミリアが浮遊を始めた。

威風堂々としたその姿は、ある種の超越したものを醸し出しており。

「ちよっお嬢様、一体何を――」

「――蛮勇なる人間よ、その高邁イデアアルハートなる雅語、しかと聞き届けた！

我は、運命を絡繰る永劫の月、レミリア・スカーレット!!

今、汝のその功績に呼応し、我が魔性は華胥の国より舞い戻らん……さあ、その下等なる種族に囚われし節穴で、この高貴なる妖魔にせいぜい刮目するが良い!!

今夜は、こんなに月も紅いから——

Never 楽 Starving 夜 Scarlet に to You ね
……!!!

……一種の既視感も感じられた。

「……………」

「うおー！　レミリアさん、めっちゃかくついーです!!」

沸き立つ賞賛の声に、レミリアもかなりご満悦の様子である。早速、美鈴などそっちのけで新たな友人とのお茶と会話を楽しみ始めた。

円卓を挟んで対面する、人間と吸血鬼。その間には、種族の壁による意見の齟齬などは確認されない。

思わず美鈴が呟いた、その言葉。この状況を言い表すのに、これほど適当な言葉は他にないだろう。

「…………類は友を呼ぶ、ですか…………」

「ふふん、ようやくこの良さを理解する者が現れたわ。パチエも咲夜も、首を傾げるだけなんだもの」

「なんと、レミリアさんのセンスの素晴らしさをわからないとは、勿体無いですね…………」

「そうよねそうよね!!」

あと、皆私のスペカの名前がダサいって言うてくるのよ？　別にそんなことでいちいち怒ったりはしないけど、ほんとーに可哀想だと思っわ」

「へえ…………それはどんなのですか?」

「あら、聞きたい?　聞きたい?」

——ならば教えてしんぜよう!」

「ワーワーパチパチ」

「その名も——紅符『不夜城レッド』！　そして、魔符『全世界ナイトメア』!!」

「……!!　　す、凄い……!!!」

「くくつ、そんなに衝撃を受けたかしら？　　言つとくけど、あげないわよ」

「いえいえそんな頂くなんて……!」

「……でも、今度新しくスペルを作った時に、参考にさせて貰う、つていうのは……」

「ふふん、そうねえ……。」

——この私が許可しよう!!!」

「ほ、本当ですか?!　　ありがとうございます、感謝感激雨霞です!!」

「か、会話に入れない……。」

つてかお嬢様、カリスマが……」

……いくら当主とは言えども、レミリアは吸血鬼としてはまだまだ子供。それ故彼女は他の大妖怪にはない好奇心の旺盛さ、無邪気さを備えており、それもまたレミリアの部下が彼女に惹かれる要因の一つであつた。尤も彼女自身は、自分の強大なカリスマに惚れたのだ、とばかり思い込んでいるようだが。

とは言え、流石に今回は脱線し過ぎではないだろうか。そう思った美鈴は、二人に声をかけようとして……

「——で。今日、私がここに導かれた理由は何ですか？　　まさか、楽しくお喋りするためではないでしょうし」

——その場の雰囲気が一瞬にして変わったのを肌で感じ取つた。鋭く、目の前のレミリアを見据える詩音。その瞳は、発してこそはいないが、一人の人間には有り余る程の光を貯えている。

「——ふう。招いたではなく、導いた、ねえ。まさかそこまでお見通しとは……。」

……いいわ、教えましょう。今日は詩音、貴女にお願いしたいこと

があるの」

詩音の問い掛けに、レミリアは静かに、だが確実に応じる。その口調からは、先ほどのような無邪気さは影も見えず、代わりに吸血鬼としての彼女の気高さが垣間見える。

しかしその紅い瞳には、彼女らしからぬ、慈しみのような祈念が覗いていて。

……どうやら、美鈴も主の狙いに気がついたようだ。

「お嬢様、もしかして——」

「ええ。詩音、貴女には——」

この愚鈍で駄目な姉に代わって、私の妹——フランを、救って欲しいの」

*

レミリアの話は、こうだった。

彼女には、五つ下の妹がいる。その名をフランドール・スカーレット。宝石のような羽と純粋な心を持つ自慢の妹だ、とレミリアは話す。

しかし、純粋さというのは時に危うさにも繋がる。それは、神に創られた最初の、純粋な人間が、いとも簡単に誓いを破り禁断の実を口にしてしまったように。

フランドールの場合、純粋さは無垢なる狂気へと結び付いた。しかも、彼女の持つ『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』がそれに拍車をかけてしまった。

想像してみたい。自分の家族が、友人が、大切な者が、そして世界の全てが、その気はなくとも、少し手を靡かせれば跡形もなく消え去ってしまう、そんな世界を。

そのような状態に陥れば、誰だって気の一つや二つはおかしくなる。フランドールの状態が悪化してしまったのはその為避けられないことであり、責められるべきではない。

しかし間近の者がそう易々と受け入れられるか、と問われれば、そ

れは否であろう。自分の隣に、いつ爆発するかもわからない爆弾がずっと存在する。そんな状況に喜んで身を投じる者などいない。

かつて、フランドールの狂気が今までにない程に暴走したことがあった。

「……あの時のことは、今でも夢に見る。崩壊した館に焼き払われた森、おびただしい数の骸^{むくろ}。そして、その頂点で笑い続けるフラン。

……あそこは正に、地獄だった」

それ故。

レミリアは、自分の妹に、かけがえのない筈の家族に、恐怖してしまった。

そしてフランドールを、地下へと幽閉した。

この紅魔館のため、皆の安全を保証するためと、己に言い訳を続けて。

「……でも、それは間違いだった。外へと出ることがなくなったフランは、ますます狂気を深めていったわ。それは、一度表出してしまえば私でも抑えられない程に」

紅魔館を守り、フランドールの居場所を守る。そう言っただけを彼女を抑圧した時間が、より狂気を深めていた。……なんとも皮肉なことだ。

「別に、私がフランの狂気に飲み込まれ、滅されてしまっても構わない。それほどのことを、私はフランにしてしまったのだから。

……でも」

……レミリアもまた、深すぎる罪を背負っているから。

そして、誰よりも深くフランドールを愛しているから。

「——私が、フランを閉じ込めてしまった私が、その犠牲の上でのうとうと生きてきた私が、どうして、どうして平気な顔を向けることができるって言うの……？」

……その目には、いつの間にか痛ましい水が湛えられていた。

「だから詩音、お願い。貴女なら、フランの運命を変えられる。私の、運命を操る程度しかできない能力がそう告げている。このどうしようもない姉に代わって、フランを助けて欲しい。

——この、通りよ」

「ちよつ、お嬢様……！」

席を立ち、頭を下げる小さな姿。

それは人間や吸血鬼など関係なしに、ただ大切な妹を思う、姉の必死な姿だった。

「——頭を、上げてください」

しばしの沈黙。そして、ぽつりと呟かれた、その言葉。

レミリアは、恐る恐る顔を上げ、詩音の表情を覗く。

そこには、

「そこまで必死にお願いされて、断ることなんて私には出来ないですよ」

優しい笑みを浮かべる、少女の姿があった。

「ほつ……ほ、本当？　お願いしといてなんだけど、今のフランはと

ても危険よ、命の保証はできないわ」

「ええ、それでも大丈夫です」

人間が生死を懸け吸血鬼に臨むなど、はつきり言つて前代未聞である。しかし、それを受け入れてこそその、この翡翠の少女であった。

レミリアも、まさかこんなに気軽に許諾を貰えるとは思っていなかったのだろう。目を丸くさせている。

だが。

「それに——家族を救いたい、なんて言葉、私が拒否できるはずがないじゃないですか」

——その言葉は、誰にも届くことなく紅へと溶けていった。

*

「……で、さしあたって大きな問題が一つあるのですが」

「何かしら？　私に出来ることなら何でも言つて頂戴」

夜は尚一層深まり、小さな窓からは月光が顔を覗かせる。

しかしこの建物の外、幻想郷は、紅い妖霧に覆われており、本来の幻想的な月が少女たちの目に届くことはない。代わつて変貌を遂げ

た、紅い幻想が艶やかに輝く。

自らの名にも含まれるその、 “紅い” 月の光を浴びて、レミリア・
“スカーレット” は自分の妖力が昂っているのをひしひしと感じて
いた。

そんな彼女の正面に先ほどから座しているのは、翡翠の左眼を有す
る人間。

ついさつきレミリアの悲願を託された詩音は、しかしながら若干の
不安要素を抱えていた。

「えーとですね、実は――

「――お嬢様。申し訳ございません、最終線を突破されてしまいました
た」

だが、突如として現れたその声は詩音の言葉を遮った。

聞き覚えのないそれに、詩音は驚く。すると、美鈴とは主人を挟ん
で反対、レミリアの右側に、ぼろぼろになったメイド服を着た少女が、
瞬間的に出現した。

「うおっ！ どちらさんですか？ それはもしかして、瞬間移動
!？」

「……お嬢様、この方は……」

「客人よ、咲夜。今朝言った、私達のこれからの運命を握ってる」

だが、自分が大事な場面を妨害したと悟ったのだろう。銀髪に力
チューシヤを付け、丈の短い従者服を着こなす瀟洒なメイド――十六
夜咲夜は、慌てて二人へと頭を垂れる。

「これは、会話を中断してしまい申し訳ございません。お嬢様も」

「いえいえ、私ならお構いなく」

「そうよ、私も別に気にしてないわ。

……にしても、貴女がこんなに早く墜ちてしまうとは。やはり、今
代の巫女の実力は確かなようね」

……そういえばすっかり意識の外へ飛ばされていたが、今は異変の
真っ最中である。それなのに、異変解決人である博麗の巫女による襲
来が未だ訪れていないのは不思議であったが、どうやら咲夜が足止め
をしていたようだ。

しかしレミリアの眩きを聞き、尚一層咲夜は申し訳なきような顔を
してしまった。

「そんなことはありません、まだまだ私の精進が足りないだけですわ。
本当に申し訳——」

「さつきから謝ってばかりねえ。それだと、客人に悪い印象を与え
てしまうわ。もつと前向きに捉えなさい、そうでないと人生全てが面
白くなくなってしまおうよ。」

咲夜、貴女は充分時間を稼いでくれた。褒めて使わすわ」

「——勿体無いお言葉、至極の喜びに存じます」

……こうして何気なく気遣いできる辺りに、レミリアの器の大き
さが伺える。先ほどは子供っぽい姿を露呈していたが、やはり彼女は吸
血鬼、幻想郷の均衡を担う一翼なのだ。

事実、この咲夜という人間も、自分の主人にかなり惚れ込んでい
るようである。

「……え、今朝言ったって……?」

も、もしかして咲夜さん、この話知ってたんですか? あれ、知
らなかったの私だけ!？」

「美鈴は黙りなさい。」

——それで詩音、問題って何かしら」

この場の全員の視線が、一挙に詩音へと集結した。それもそうだ、
彼女はつい先ほど健気な姉妹の繋がりを、この館の命運を、そして、
紅霧異変”の帰結をその手に握ってしまったのだから。

それはきつと、一人の人間には背負いきれない重荷。だがこの少女
のことだ、遊戯をする際の縛りくらいにしか考えていないかも知れな
い。

そんな詩音はしかし、困惑したような表情をこの時ばかりは浮かべ
ていた。

「実は、ですね……」

……私、空飛べないんですよ」

「……は?」

「えっ」

「……ふえ？ いやいや詩音さん、さつき飛んでたじゃないですか

!？」

——その場の空気が凍りついた。

全員の顔に、驚愕の表情が貼り付く。

耐えかね、詩音は補足を始めた。

「いや、あの、何て言えばいいか……」

……正確に言うのなら、スペルカードを使用しなければ飛べない、
んですよね」

……成る程、そう言われてみれば。

思い出せば詩音は、今まで飛んだ方が明らかに容易な所でも飛翔を
使ってこなかった場面があった。湖を渡った時などがその最たる例
であろう。

しかしまあ、それはなんとも……

「……めんどくさいシステムね」

「これはまた、珍しい……」

「……と言うか、私は初めて聞きましたよ」

……そしてまた、致命的である。

飛翔が出来ないというのは即ち、移動可能な領域が地上に限られ
る、ということである。いざ、という時に空中へと逃れられないのは、
かなりの痛手ではないだろうか。

加えて、これから詩音が対峙するのは、今までのどの妖怪よりも遙
かに強大な吸血鬼だ。一撃一撃が、脆い人間には命取りである。

故に、致命的。飛行能力がなければ任務の遂行はおろか、生還する
確率もぐつと下がるのは目に見えている。

……そして恐らく、レミリアは詩音の運命を操ることでのこの問題を
解決することが出来る。そこまで加味した上での発言ならば、詩音も
なかなか頭が切れるのかも知れない。

「……成る程。それくらいなら、私がどうにかできるわ。お茶の子さ
いさいよ、任せなさい」

「わあ、ありがとうございます!!」

そう言うレミリアは、詩音の両の瞳を見つめ、彼女の運命への干

渉を始めた。

——能力の行使に伴い、静寂が部屋における勢力を拡大していく。辺りに響くのは蝋燭の揺れる音と、懐中時計の針による奏でのみ。そこは呼吸をするのさえ憚られるような、そんな空間。

しかし、紅い悪魔の掌の上では、着実に行程が前進の様相を見せていた。その証に、レミリアの紅い瞳は一瞬一瞬にしてその紅い光を強くしている。比例して、吸血鬼の妖艶な笑みも増す。

そして、輝きが極大点を迎えようとした、その時。

——その須臾、その瞬間だけ、煌めき出した翡翠が紅色を飲み込んで。

直後、辺りに静電気が走ったかのような、ばちっ、という痺れる音が響いた。

その衝撃でレミリアは椅子に叩きつけられる。

「——ッ!!!」

「お嬢様っ!!」

「れ、レミリアさん!? 大丈夫ですか!?!」

皆が動揺に包まれた。咲夜も、美鈴も、そして張本人の詩音も、誰もがこのような事態を予測できていなかったに違いない。

そんな中、レミリアだけは冷静だった。

「……っ、大丈夫よ。少々手違いが起こったけど、大したことはないわ」

「おっお嬢様、今のは一体何が——」

「そんなことは、今は重要じゃない。」

……兎に角詩音、貴女はもう飛ぶことが出来る筈よ。ちよつとやってみなさい」

レミリアは何故か、焦ったような口調で美鈴を制す。そして確認のためであろう、詩音に実践を促した。

言われて詩音は、意識を飛翔へと移行する。思えば先ほどまで、スperlカードを発動している時は無意識に飛翔していたのだ。こつなどは疾うに理解しているだろう。

程無くして、翡翠の少女は浮遊をし始めた。

やはり空を自由に飛ぶというのは、人間の永久なる願いなのだろうか。赤い灯火と紅い光に照らされた、血のように美しい部屋の中を詩音は嬉々としながら飛び回っている。

……しかし、少女の翡翠を眺める紅い瞳は、どこか泣き出しそうな色合いであった。

「うわ、凄い！　本当に飛べてますー！」

「それは良かったわね。」

——でも詩音、一つだけ問題があるの」

突如、レミリアが不穏な口調を兆した。伴って、紅い瞳もまた陰影とした雰囲気醸し出す。

……その目は、何かに怯えているようにも見えた。

「実は、私が能力をもって付与したその力——あと一刻しか持たないの。」

……まあでも、それだけあればフランと弾幕ごっこしてもお釣りが返ってくるでしょうから、大丈夫よね？」

それは彼女の言うように、さほど深刻な問題ではない。詩音にとって随時の飛翔能力を得られないことは残念であろうが、弾幕ごっこに一刻以上要することはまずないからだ。

……だがそうなると、レミリアの話ぶりに何か不信感を抱かざるを得ないのだが。

「え、でもお嬢様——」

「美鈴。貴女は詩音を引き続き、今度はフランの所へ案内して頂戴。咲夜はもう少しだけ巫女の時間稼ぎをお願いするわ。」

……ここからが、我らの“紅霧異変”の正念場よ。二人とも、そして詩音。精々この私のために頑張らなさい!!」

しかしそんな臆気な違和を拭い去るかの如く、レミリアは大声を発した。やはりその威厳は際立っており、その声が耳に入るだけで引き締まった気分させられる。

「オッケーです!!」

「仰せのままに」

「……御意」

それに応える三者の言葉、その中に吐露される感情は三様であった。

片や、溢れる興味、義務感。此方、絶対的服従、親愛。そして、絶大な信頼と、しかしながらの疑問。

とは言っても、この四者の目的はただ一つ、フランドールの解放異変の成功。その目的の限り、彼女らが食い違うことは決してない。

何故なら、

『妹を救いたい』

『親愛なる主の願いを叶えたい』

『あの悲劇を、二度と繰り返してはならない』

『家族を大切にする気持ち、無下にしてはならない』

……理由はどうであれ、この目的は各々にとって絶対に譲れないものであるから。

そしてレミリアを独り残し、詩音、美鈴、咲夜の三人は部屋を退出した。

——己の命を果たすために。

「……………行った、かしら？」

足音が聞こえなくなったのを確認し、レミリアはだらんと円卓に突っ伏した。何故だかひどく憔悴仕切った様子をしている。

「……………何よ、あいつ」

この時レミリアは、先ほどの一瞬、翡翠が紅を飲み込んだ一瞬を思

い出していた。

それは瞳の、奥の奥のそのまた深淵にある、運命の因果。その根源を覗いた時のことである。

幼き月は、ぶるつと身震いした。

「何でよ……」

……レミリアは今まで、数こそ少ないものの、運命を覗くことが出来ない者との接触を経験している。

彼女は別に、その事を気にしたことはない。そんな全知全能を自称する程思い上がってもいないし、能力の相性もある。例えば、運命操作などという形而上的な力では、『境界を操る程度の能力』には太刀打ちできないだろう。

しかしながら、

「何で、見れるし触れられるのに、操れないのよ……!」

そのような存在に会ったのは、全くもって初めてのことであった。

自由に覗くことができ、一見容易く意のままになりそうな、普通の人間。それが詩音の運命に対する第一印象だった。しかし、絶対に介入を許さない。それほどの因果律を翡翠の少女は持っている。

結局レミリアには、うわべだけを弄って誤魔化すことしか出来なかった。それでも、レミリアの実体に影響が及ぶ程の拒絶反応が起こったのである。

レミリアにとって、詩音は明らかに「異端」であった。

「うう……」

レミリアは再び身震いし、手で顔を覆う。その心中に氾濫するのは、異端者に対する恐怖。誰であっても異端者に自らの領域を犯されれば、恐れ戦おののくだろう。

ましてや、いくら尊大であるとはいえ彼女は吸血鬼の範疇ではまだ子供。だから――

「……こ、怖かったよお……ぐすっ」

——こういう反応をしてしまうのは、まあ致し方がないのかも知れない。

赤よりも紅い、幻想の中で。

ひっそりと晒されたのは、部下には決して見せられない『永遠に幼き月』の本音だった。

Stage 5

尊大なる吸血鬼のささやかな望み

— Completed —

**

『うう……怖かったよお……』

「ああああお嬢様、今すぐ駆け寄って抱き締めてあげたいしかし、私達がいなくなるまでずっと我慢してらっしゃったのだから、その懸命な気持ちを汲み取って耐えるのよ咲夜……！」

——ああでもでもでも、抱き締めて『もう大丈夫ですよ』と優しく声をかけてあげたい……!!」

「……美鈴さん、ドアの隙間を覗いたりして、メイドさんは一体何を」
「……一種のお決まりみたいなものですから、放置して構いませんよ。それにしても、これだからお嬢様は会話を早く終わらせようとしてたんですね……」

「そしてそして、きつとお嬢様は目を潤ませぎゅつと抱き返し、こう仰るのよ——『うー……咲夜、もう少しこのまま抱き締めていい?』

……キヤーもちろんですよお嬢様ああ!!!」

「……毎回こうなんですか?」

「ええ、まあ。私も、お嬢様の必死に弱みを隠そうとする態度は、健気

だなーとかは思いますけど。ここまでは……」

「——ふう。お待たせしてすみません」

「あれ咲夜さん、今日は早めですね——って、鼻……」

「……あのー、メイドさん。よかつたらこのハンカチ」

「ん？ ……ああ、ありがとうございます。ちよつと忠誠心が溢れてしまいました。お客様の前でのこのような振る舞い、お詫び致します」

「ちゆ、忠誠心ですか」

「あと、私は十六夜咲夜です。メイドは役職名であって、呼称ではありませんよ」

「そうですね？ だってほら、相撲をする人はお相撲さんって呼びますし。それにツール・アシステッド・スピードランをする人は——」

「はいはい、もうその話は終わりです！ 詩音さん、さつさと地下へ向かいますよう」

「それもそうですね。ではメイド——もとい咲夜さん、また」

「はい。ご健闘をお祈りしています。

「……………」

『…………ぐすつ、ふええ…………』

「!! ……ああお嬢様、何とも美しい…………」

「…………って、いけないいけない。せめて1ボムでも減らさない…………！」

Stage 6 純粹無垢の狂気①

「じゃあちよつと待つてて下さい、今ドアを開けますから……つと」
「うわあ、物凄い量の本——が散らかってますね……。」

……その妹様は、この部屋にいるんですか？」

「いえ、違います。ここは紅魔館の誇る知の宝庫、大図書館になります。お嬢様の親友でいらつしやる、魔法使いのパチュリー様が管理なさってるんですが……この有り様だと、あの二人のどつちかが突貫したっばいですね……。」

「にしても凄い量ですね……ってあれは、某跳躍系マンガ雑誌。あんなものまであるんですか……。」

……ん？ あれは——」

「……う、うん……。」

「——ねえ美鈴さん、あそこになんか伸びてる人がいますよ」

「あ、ほんとだ。あの方が今言ったパチュリー様です。にしてもパチュリー様までやられてしまうとは……さすがは異変解決人、といったところでしようか。」

……と、見えてきましたね。あれが妹様のおられる地下へと続く階段です。じゃあ、たったか向かいましようか」

「え？ あ、ちよつと美鈴さん？」

「ん、何かありましたか？」

「いや、あのむきゆむきゆ言ってる人はガン無視するのかなー、って」

「むきゆー」

「そりゃあ、助けたい気持ちは山々なんですけど、やっぱりお嬢様の命令が最優先なんで。」

それに……」

「それに？」

「……あそこまでパチュリー様がへばってるのは日頃の運動不足が原因なんで、まあ自業自得かなーと。まったくパチュリー様も、本ばかり読んでないでもう少し体を動かせばいいのに……」

「あー……」

「それじゃ気を取り直して、行きましようか」

「了解です」

「……………」

……流石に酷くないかしら？」

何でもない田舎の、何でもないような一夏。しかしそれは、全てを覆い尽くす紅い幻想によつて特別なものへと昇華させられた。

そして、〃命名決闘方式〃採用後初の異変であり、幻想の行く末に大きく寄与したとも噂される〃紅霧異変〃は、いよいよ佳境を迎える。

それは、地上が闇に支配され、魑魅魍魎の跋扈を許す時間。そして、間もなく『異変解決人』との決闘を控えるレミリア・スカーレット、彼女の種族としての力が最も高まる時間。

宵の明星もとつくに眠りにつき、大いなる月が煌々と輝く時間である。

そんな月は、紅い幻想によりいつもより肥大化して見えている。常にはない程紅く、明るく、大きく照り映える様はまるで、その存在スカーレットを幻想の地にあまねく主張しているようで。

……それは、普段封じられている地下にも届いていた。

異変の元凶が住まう館の、その地下。

当然窓など設置されてない、囚われの妹君の部屋は、今日ばかりは天井に開かれた大穴によって夜空の展望が可能であった。

部屋に流れ込むのは紅い幻想と、大いなる光。

一方部屋から溢れ出していたのは、幾ばくかの弾幕の光。そして、悦楽と勇猛の声。

「アハハハッ！　弾幕ゴッコ、楽しいね！」

「へっ、そんなことを言っていられるのも今のうちだぜ!!」

部屋の中から外が眺められるということは、同様に外から部屋内の観戦が可能である、ということ。残念ながら観客はいないが、その中では見事な弾幕ゴッコが行われていた。

弾幕を放つは、部屋の住人である金の紅花^{ヴァンパイア}。まだぎりぎり抑えているようだが、噂の狂気は顔を覗かせている。

それに対するは、同じく金の、普通の萌芽^{ヒューマン}——異変の調査に乗り出し、半刻ほど前に自慢の火力で美鈴を吹き飛ばしていた『東洋の西洋魔術師』霧雨魔理沙。

そんな彼女は、またもその魔砲を存分に活かして道^{天井をぶち壊す}を切り開くという斬新な潜入を行っていた。……咲夜の絶句する姿が目^目に浮かぶ。

しかしながら、魔理沙はなかなかの窮地に陥っていた。

「くっ……ちよつと弾幕の量が、桁違い過ぎるな。一度にこんなに操れるなんて頭ぶつ飛んでるんじゃないか？」

その呟きは、ある意味では的を得ていると言えるかもしれない。

魔理沙が相對するのは、『悪魔の妹』フランドール・スカーレット。狂気に染められた身である彼女が気まぐれに放つだけで、弾幕は命を奪わんとする程の量と勢いで迫って来る。

そんな彼女に正面から向かう魔理沙は、箒に跨がりそれらを辛うじて避けていた。自身も弾幕を放ちながら紅い部屋を旋回するその様は、まるで弾幕の空に舞う蝶のよう。繰り広げられるのは、紅霧異変“最終楽章の裏曲には相応しいと思われるような、それ程の激戦であ

る。
が。

確かに魔理沙は、人間としては破格の——それは時に多くの妖怪を凌駕する程の——実力を所有している。

それでも尚、吸血鬼の力は圧倒的であった。

……一枚目のスペルカードが発動される前にして既に、魔理沙が墜ちる寸前まで追い込まれる程には。

するところこで、フランドールが動く。

「へへーん、じゃあ魔理沙、いっくよー！」

——壊しちゃえ!!!」

瞬間、魔理沙の全身が危険の予知を受容した。

その視線の先にあったのは、狂おしい位の笑顔を向けてくるフランドールと、その手に突如出現した、彼女の身長何倍もある炎の大剣。吸血鬼の驚異的なスペルにより具現化されたその魔剣は、主の狂気が増幅するにつれて轟々と燃え盛っている。

突然、全身から冷や汗が流れ始める。

「あつ、あれがフランドールのスペルか!?　　じよ、冗談キツイぜ。私を丸焼きにでもする気かよ」

軽口は叩いているが、魔理沙が内心焦っているのは見て取れる。

これを食らえば、彼女が灰塵に帰すのは確実だ。かといってそこは空間の限られた室内、逃げっぱなしでは次第に行き場を失うだろう。

……何よりも、今まで生きていて感じたことがない程に深い“狂気”が、魔理沙を化石のごとく硬直させていた。

「アハハ、魔理サも壊れる?　　またミンなコワれちゃうの?」

寂しいな、サミシイなあー!!　　アハハハハハー——ツ!!!」

「ツ——!!!」

そうしている間にも、フランドールは剣を振り下ろさんと迫っている。く。

その残酷な笑みを目にした時、魔理沙は自分が狂気の炎に消えることを幻視した——

「おっと、そこまでですよ」

しかし、その幻想は突如現れた少女によって妄想に終わる。

「——っ!?　だ、誰だお前っ!!」

その声の宛先は、魔理沙とランドールの丁度中間地点にいた。

彼女は両者を制するように堂々と、翡翠を輝かせながら、紅い部屋に浮かんでいる。

魔理沙の目には、その少女がどこにでも居る、それこそ人里を探せば数分で遭遇できそうな程に普通で、儂いたただの人間に映ったのだろう。自らもまた人間である彼女は、驚きはしたもののこの場から退去するようにと勧告する。

「おい!　　どういうつもりか知らんが、ここは異変の中心地だぞ!

　　こんな所からはさつきと逃げて——

「まあそう言わず。ここは私とチェンジをお願いします、魔法使いさん」

「っ!?　　お前が戦うのか!?!」

そのためであろうか、翡翠の少女の発言に魔理沙は驚愕を覚えずにいられなかった。

「そうですね、魔理沙さん。一旦降りてきて下さい。見た限り、貴方かなり追い込まれてるんじゃないですか?」

「追い込まれてなんてないぜ……っってお前は、さつきの門番だな。

　　……何が狙いだ?　　どうして、こんなただの人間を戦わせようとしてるんだ?」

漂う少女と、これまた急に部屋へと入ってきた美鈴を交互に見ながら、魔理沙は警戒心を強める。

その心は真っ当なものと言えよう。実力の伴う人間でなければ、吸血鬼に挑みかかるなんて正気の沙汰ではない。そしてそれほどまでに実力がある人間を、魔理沙は先ほど別れた自分の親友くらいしか知らないのだ。何かある、と勘繰るのが普通である。

しかし、主の命を忠実に守る門番にしてみれば、そんな普通の魔法使いの思案など関係なかった。

「これは我等の主、レミリア・スカーレット様のご決定です。貴方に選択の余地はありません。」

……それに、魔理沙さんがただのと侮っている彼女、詩音さんですが——少なくとも、魔理沙さんと同じくらいには強いですよ」

「……へえ」

だが美鈴の言葉を受けて、魔理沙の瞳の色は目に見えて変わった。警戒のくすみから、好奇の輝きへ。彼女もまた、自らの力に対してそれなりの自信を持つ者だ。見ず知らずの少女が自分と同等の能力を備えている、と聞いて、興味を持つなど指図することの方が難儀であろう。

魔理沙は一度、にやりと笑みを浮かべた。

「そこまで言うのか。……ま、私はどっちでもいいけどな。じゃあ緑目、せいぜい頑張ってくれ。」

……言つとくけど、寛大な私が譲ってあげるだけであって、決して逃げた訳じゃないからな？」

「私は何も言っていないですよ……」

詩音にそう捨て台詞を残し、魔理沙は美鈴の立つ隣、地下室の正規の入り口付近へと向かう。

……戦闘を託した理由の三割程に“怖いから”が入ってくるのは、まあ言葉尻から予測できる通りだ。

そうして、普通の魔法使いを見送り。

詩音はここで、初めて自らの“目的”と向かい合う。

詩音たちが部屋に入った辺りから、雲は大いなる夜の支配者を、光に含まれる狂気を必死に覆い隠していた。

それでも尚、夜空に開かれた部屋には紅い月光が充満する。演目が始まるのを待望するかのごとく、紅い部屋を更に紅く照り輝かせる。

そんな、一晩限りの紅い舞台に漂うは、異変の中核を握る二者。

「——さて。はじめまして、お待ちせしてすみませんね」

「……あなた、だあれ？」

それは、救う者と救われる者。

または、壊される者と壊す者。

どちらへ転ぶかは、きつと運命を操るレミリアにもわからない。

だがどちらにしる前者である、翡翠の双眼を宿す少女は、優しく語りかける。

その相手、後者である紅い瞳の少女は、これまでのやり取りの間は呆気にとられていたのだろう。突如現れた翡翠な人間に目を丸くして尋ねる。

「私は古卿詩音、普通のいたいけな人間ですよ。」

——それにしても、真つ白い肌に、真紅の瞳。そして、宝石みたいな羽根。

まるで月のように綺麗ですね。妹様——フランドール・スカレットトさん？」

そう答える瞳には、いつになく幻想の灯火が揺れていた。

「私が勝てば、何か貰えますか？」

「そうだなあ、コインいっこ……って、それはもう魔理沙にあげちゃった」

「それじゃあ、ゲームを始めることも出来ないですねえ」

「わあ、全ては既にゲームオーバーだったなんて！」

「いやいや、最近では強くてニューゲームってのも人気なんですよ？」

「えく？　あなたにコンティニューはさせないよ？」

……雲海たちのささやかな抵抗も虚しく、狂気の衛星に掛けられた封印は次第に取り払われていた。しがらみから逃れた一回りの円弧を描く月は、再び地上を照らす。

それにより、開かれた地下室にも再度紅い光が降り注ぎ始める。

伴い、紅い瞳の色が、変わる。

「——コンティニューというよりは、どちらかと言えば Rest a
rt、って感じじゃないですかね？」

「ふん、終わりの果てに始まりが待っているなんて滑稽よっ！ 全
てが壊れたら、それはもう取り返せないんだからッ！」

「……破壊の上に成り立つ創造も、あるんじゃないですか？ ほうら、
焼畑農業とか」

「私が目を破壊したものは、もうなにも残らない。それでも詩音は、私
に何を残せるの？」

「全ての終わりには最後の審判が起こり、然るべき者は救済される。
私はキリスト教徒ではないので詳しくは知りませんが……まあ、月が
変わっておしおきをしてくれるんじゃないですかね」

「……不味いですね、これは」

「ん？ どうかしたのか？」

二人の様子を、固唾を飲んで見守っていた美鈴だったが、開かれた
天井を見てふと呟いた。

それは誰に向けた訳でもない声だったが、隣で弾幕ごっこが始まる
のを今か今かと待っている魔理沙には届いていた。

「……吸血鬼は、月と共に生きる種族です。月を愛し、月に愛され、月
の光によって力を滾らせる。その分、太陽の光が弱点になってしまう
んですが」

「……それがどうしたんだ？」

美鈴が伝えるは、《夜の帝王》が帝王たる所以^{ゆえん}。吸血鬼にとって最
大の弱点であり、最大の美点でもある特徴。当然、魔理沙にとっては
既知の事実だ。

……しかし、美点であるが故に事態は差し迫っていた。

「もちろんそれは、妹様も同様です。」

……そして、今夜は満月。しかも特別な、紅い光が照らしています

から、このままじゃあ妹様の狂気が誰にも止められない程昂つてしま
う恐れが……。

くそつ、天井が壊れてなかったらまだどうにかなったものを。まあ
妹様がなさってしまったのでしようから、仕方がないんですけど」

「……そ、そうだな、仕方ないぜ」

……魔理沙の冷や汗はこの日一番を記録した。

「……アハハツ、紅イ、月が紅いなア。知ってる？　　紅い、狂った月
は全てを狂わせるの」

「同時にそれは、救済でもある。少女に護られた者はもちろん、おしお
きされた者とっても、そしてその少女自身にとっても、です」

「アハハハツ！　　だからね、ダカラネ！　　こんなニも紅イ月ハ―
」

「ええ、ですから――」

「スベテ壊シテシマウワ、絶対ニ！」

「全てが救われますよ、きっと」

禁忌『レーヴァテイン』

刹那、空間が爆ぜた。

光とも霧とも違う赤が、全てを焼き尽くさんとばかりに広がってい
く。ちっぽけな部屋には収まらないほどに巡り巡り、熱気が少女たち
を包んでいく。

そこでは、いつの間にか収められていた炎の大剣が、スペルの宣言
と共に再度降臨していた。

「っ、またあれか……！」

「いきなり来ましたね……」

一度、目前で経験した者でも、普段から見慣れている者でも、その紅蓮の前では思わず怯んでしまう、それほどの脅威。それを、吸血鬼の少女は自在に操っていた。

それに相対する詩音はと言うと、その凄まじい勢力に目を見開きはしたものの、迫り来る轟炎に、冷静に対処していた。

突如軌道を反らされないためであろうか、詩音は大剣を引きつけ、引きつけ、寸前の所でくると躲す。ほぼ同時に、詩音の影が残る空をフランドールは焼き切る。妖怪の能力に任せたその一撃は流石としか言えず、切り裂かれた空間には遅れたように炎が踊る。

だが一度避けただけでは弾幕ごっこは終わらない。回避した先には、大剣の余波による多量の、紅い弾幕が発生していて、危機を乗り越えたばかりの詩音を狙っている。

弾幕に容赦を求めるなんて芸当ができる筈もなく、続けざまの危機が詩音を襲った。

しかしこの少女、よくよく考えてみて欲しい。

彼女は今まで、"スペルを発動しないと飛べなかった"という。にもかかわらず、こうして無事にここまで辿り着いているのだ。いくつかの弾幕ごっこを乗り越えて。

勿論、四六時中スペルを発動していたというのならまた別の問題になってくるが——そして詩音は成し遂げてしまいそうな気がするが

——少なくとも、今まではそんな素振りはなかった。

つまり、何が言いたいのかと言うと……

「もう！ さっさとコワレナさい!!」

「——熱っ！ 弾幕まで炎なんですかこれ……」

そんな彼女が弾幕を躲せない道理はない、ということ。

詩音は地上並みに……いや、地上よりも、華麗に弾幕を躲していた。その様は、圧巻としか言いようがない。

まるで跳ね回るかの如く、紅と翡翠は部屋に踊る。

博麗の巫女が弾幕にも囚われないのだとするならば、古卿詩音とい

う人間は弾幕という幻想に舞っていた。

……非常に個人的な所感で申し訳ないのだが、本当に人間か？

「霊夢の弾幕ごっこを見ている時にも似たようなこと思うんだが……あいつ本当に人間か？」

「……どうでしょうか。少なくとも私の目には、人間にしか見えませんが」

「じゃあ節穴だな」

「決めつけ酷いですよ!?!」

しかしながら、それでも状況は向かい風であった。

フランドールの振るう大剣は、部屋の内部を灼熱で取り囲んでいる。それに加えて、先ほどからの激しい動き。詩音の顔から汗が滴り、床へと辿り着く前に渴ききる。

熱気、というものは想像以上に人間の体力と気力を奪う。今しがた疑ったばかりではあるが、それでもやはり詩音は人間なのだ。その精神は着々と磨り減っている。

一方の吸血鬼、フランドールは、確実に勢いを伸長させていた。

自らの部屋が壊されることを物ともしない。彼女は手の凶器を振るい、薙ぎ、打ち振る。釣られ、顔の狂気が笑い、嗤い、ワラう。

「っ、暑い！ 砂漠ですかー!?!」

思わず声を上げた所で状況は変わらず。

むしろ、熱気が肺へと急激に流れ込み、詩音は息を詰まらせる。

「――!! ハアツ、けほっけほっ」

「! よーしシオン、ツギハソコダナー!!」

何より、攻撃を避け死角に入ったばかりだというのに、直ぐにフランドールに気づかれてしまった。

もう何度目かもわからない、炎柱の接近。それでも諦めることなく詩音は回避しようとして――

目の前に瓦礫の雨が降った。

「ぎゃっ!?!」

詩音は慌てて天井を見上げる。視界に捉えたのは相変わらず開けた空に、先ほどよりも少し広がった穴。そして、はらはらと落ちる破

片。

……どうやらこれまでの弾幕ごつこの影響で、天井が脆くなっていたようだ。幸いにも、もう瓦礫は止んでいる。

しかし生まれた隙は致命的なもので。

「アハハハー……ッ!!」

——バイバイ、詩音」

「!!!」

そして剣は振るわれる。

汗だくになって観戦していた二者も思わず、あつ、と声を上げた。

……今まで光り続けていた翡翠が、一段と輝きを強くしたのはその時だった。

幻刀『村雨之剣』

再び、室内に爆風が巻き起こる。しかしながらそれは、先ほどのものよりも遥かに激しい衝撃を響かせている。

同時に、これまでの紅とは正反対——白い霧が、急速に広がっていた。

「ぎゃっ!? 私たちまで、飛ばされるうっ!?」

「くそ、今度はなんなんだ!?!」

急激な変化に驚愕したのもつかの間、少し離れていた魔理沙と美鈴まで煽りを受け、壁際まで追いやられる。

地下にある部屋を襲った、その突然の現象。しかしそれは、弾幕ごっこ特有のものでもなければ、幻想郷のみで発生するものでもなかった。

「——水蒸気爆発」

しばらくすると、もくもくと広がっていた白い霧が晴れていく。

その中心に見えたのは、剣を交差させる二つの影。

「——っ！　み、水っ!?!」

一つはやはり、炎の大剣を持つ狂気の少女、フランドール。

……しかしその顔は、今だけは魔理沙たち以上の驚愕に染められている。

そして、もう一つは、

「ふふっ、ほのおタイプにはみずタイプが効果バツグンですからね」
流水を纏う刀で炎を受け止める、詩音だった。

「——っ!?!　何だあの刀は!?!」

「うおー詩音さん、無事でしたか!」

傍観していた二人も、もう一度思わず声を上げる。

そんな二人の——というよりは美鈴の歓声を聞いたからであろうか。詩音はちらりとそちらの方を見ると、ぐっ、と親指を立てた。

そしてそのまま、鏢迫り合いは新たな火花へと移行する。

互いが互いを弾き、一度は距離が離される。しかしそれはたかが数十尺、天狗に勝るとも劣らない速度を誇る吸血鬼にとつてはないに等しい。フランドールはまばたきをする間にして、詩音の目前へと迫る。ありったけの魔力を込めて、詩音を叩き切ろうとする。

だが詩音は、新たに具現化した刀でそれを受け止める。『村雨之剣』と宣言したそれは、切った箇所、二人の獲物が激しくぶつかり合う所から、水を走らせていた。炎と水が反応し、蒸気が発生してゆく——
「……お前はあいつがいきなり武器を出しても驚かないのな」

「まあ妹様も似たようなことなさっていますからね。おそらく詩音さんのものも、スペルの延長なんじゃないですか？　さつき宣言してましたし」

「いやまあそうなんだけどさ……」

——これまで散々攻めを許していたから攻守交代、といったところだろうか。今度は詩音が離脱し、フランドールへと襲いかかった。

剣が混じり合い、炎が吹き出す。再び混じり、水が滴る。三度重なって、白い煙が蔓延する——

「……あんな剣は見たことないぜ?」

蒸気を纏った衝撃は大地を揺さぶり、さながら一種の地震が発生したかのごとく幻想の地を震撼させる。

……それ程までの攻撃であったのに、中心地にいた二人はやはり健在だった。白い霧が煩わしい、と言わんばかりに飛び出してきた人間と吸血鬼には、最早末恐ろしきしか感じない。観戦している二人にも戦慄が貫いていることだろう。

だが、流石に無傷とは行かなかったよう。

未だに笑みを浮かべるフランドールはしかし、その白い肌に無数の火傷跡が目立つ。吸血鬼にとってそのような怪我は気に留める程のものではないが、それでも彼女が消費しているのは明らかだろう。実際、その笑顔には余裕が見られない。

一方の詩音。彼女はフランドールとは異なり、あまり外傷はないようだ。もしかすると、刀から発せられた水が詩音を守ったのかもしれない。

それでもその顔は、フランドールよりも精彩を欠いている。苦しげな表情をし、肩で息するその様は、まさに満身創痍と言えよう。

互いにスペルカード一枚目にして、既に疲労困憊。自然と相手を伺う膠着が続く。

そんな中で、先に動いたのは笑みを浮かべた少女だった。

「……ふっ、詩音ったら本当にスゴいねえ！ 私もここまで楽しく遊んだのは久しぶりかも」

「褒め、ても、何も出ません、よ……」

変わらず笑顔で話しかける少女に、対する少女も笑って応える。

先ほどまでの激しい応酬とはうって代わり、地下にある部屋には嫌という程の静寂が響いていた。

「いやいや、詩音はほんつとにスゴいよ！ 初めは魔理沙との弾幕ごっこを邪魔されて、何よー！とか思ってたけど……」

……ありがとー、詩音！ 本当に楽しかった！ 詩音、大好き

!!

そしてフランドールは、見た目相応の無邪気な笑顔を改めて詩音に

向ける。

その表情は幼子が相手を心から信頼して言うそれであり、面と向かって言われれば、誰もが思わず顔を綻ばせるに違いない。詩音も例に漏れず、穏やかな表情だ。

そんなフランドールの顔に、思い出したかの如く紅い月光が照らされた。

「――デモネ」

ぽつりと、眩く。

「私はずっと、ずっと詩音と遊んでたいの！　でもお姉様も咲夜も、遊び終わったオモチャはオカタツケしなきゃいけないって言うから……。」

だから、ダカラネ——!!」

その瞳には再び、歪んだ狂気が宿っていた。

「——っ!!　　詩音さん！　　早く逃げて下さい!!　　それ以上そこ

にいてはダメです早く!!!」

「つど、どうしたんだ!?!　　急に大声出して!?!」

何かを感じ取ったのだろう、美鈴は喉がはち切れんばかりに二人へと叫ぶ。

しかし虚しくもその声は、詩音にもフランドールにも届いていないようで。

……何よりフランドールの手中には、既に「目」が捉えられていた。

「キュツとしてえええエエエ——」

「ダメです妹様すぐに手を下ろしなさい!!　　そのままやったら詩音さんがっ——!!!」

—ドカンッ♪
「

Stage 6 純粹無垢の狂気②

フランドールの掌が閉じられたのと、周囲に爆発音が響いたのは、ほぼ同時であった。

突如として詩音の周りにだけ煙が生じたことに、魔理沙は自らの目を疑っている。

「なっ、何なんだよこれは!? あいつが、フランが何かしたのか!」
そんな捲し立てる彼女とは対照的に、美鈴は俯き、歯を食いしばっている。その瞳はいつも明るい彼女に似合わず、陰鬱とした色合いだ。

「……………妹様は、『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』を持っていきます。妹様が暴走してしまうと、能力を発動させてしまうこともちよくちよくあつて。

……………だからたぶん、詩音さんは……………」

「…………マジ、かよ…………」
そう、ぽつりぽつりと語る美鈴の言葉を聞いても、魔理沙には絶句することしか出来なかった。

赤よりも紅い部屋に残されたのは、人間一人と妖怪二匹。

その、限られた空間を共に過ごす三人であったが、胸の内を渦巻く感情はそれぞれだった。

恐怖、悦楽、憤慨、戦慄、快感、悔恨、失意、諦観、無力感、追悼、悲嘆、絶望、放心、後悔、虚無感…………

そんな中でも、室内に聞こえるのはいつまでも笑い続けるフランドールの声のみ。

いつまでもいつまでも、可笑しそうに愉しそうに笑い続ける…………

…………その頬を流れた、一筋の雫には誰も気づかない——

「——成る程、ね」

——かに思われた。

笑い声の独占支配を突然破った、異質の声。この場にいる筈のな
い、いや生きている筈のない者のそれが紛れたことに、魔理沙や美鈴
だけでなくフランドールも驚きを隠せないでいる。

それはどうやら収まりつつある、そして彼女の姿が最後に確認され
た煙の中から聞こえてくるようだ。自然と、皆の視線が集中する。

そして煙が完全に収まった時。そこに現れるは果たして——

「申し訳ありません、宣言が遅れてしまいました。そうですね……敢
えて名を付けるのなら、」

防想『絶対領域』

——水色の空間に包まれる、『招かれざる来賓』古卿詩音その人
であった。

その謎の、浮遊する空間に閉じ込められたような彼女はしかし、ど
こか不敵でもあり、優しくも見えるような笑みを浮かべている。

「どうですか、フランドールさん。能力が発動できないでしょう?」

「エツ?……ええっ!? ど、どうして!? 『目』が見えない
!!」

そんな彼女の言葉を、フランドールは最初理解出来ていないよう
だった。少しの間ぼかんとしていたが、直ぐに驚愕の表情へと移り変
わる。

「……本当だ。私も、詩音さんの気を感じ取れませんね」

「いよいよあいつ何者なんだぜ……?」

どうやら彼女の発動したスペルの効果で、あの水色の空間では能力
が作用しないようである。

これまでの勢いは正反対にひっくり返され、場の流れは完全に詩音
が掌握していた。

「そつ、それはつまり、どういうことだ……?」

その様子を一瞥すると、詩音は再びゆつくりと、冷静に、語りだす。「なに、簡単な話ですよ。レミリアさんは、フランさんを『純粹』と言っていた。だったら、『純粹に破滅が好き』という場合でなければ、自分の所業に心を痛めてるだろうな、と思ったのですよ。まあ、その場合が問題なのですが……」

と、そこまで言うと、詩音はぐいつ、と顔をフランドールへと近づけた。

「……炎の剣で私を切りつけようとした時そして、能力を使用した時。フランさん。あなた——泣いてましたよ?」

「——!!」

フランドールは慌てて自分の頬を擦る。確かによくよく見れば、清らかな水の流れた跡が見受けられる。

「マジですか……魔理沙さんは気づきましたか?」

「……………全然」

「ともかくそれで、フランさんが本心から破壊を望んでいないのは一目瞭然です。よって、フランさんは狂気にのまれながらも本当は誰も壊したくなくて、悲しんでいる、と結論付けたのです。わかったかな、ワトソン君?」

「あ、ああ……」

最早、少しおどけた言い方でも誰も気に留めないほどに、ここ地下室の空気は詩音によって掌握されていた。

……いや、それだと語弊があるな。もう少し、的確に表現するならば——フランドールも、魔理沙も、美鈴も。この場の誰も彼もが、どうしようもないくらい詩音に『惹き付けられて』いたのだ。

「まあ、かなり想像の混じった推察ですが……その顔を見るに、大体当たっていましたよね?」

「……………うん」

フランドールは少々涙目になりながらも、確実に、狂気にとらわれない自分の意志で、詩音の問いかけに頷いた。

その、紅い瞳と重なったときに、翡翠の色がひどく満足げに揺らい

だのは気のせいだったのか。

ともかく、詩音は満足げにフランドールの周囲を一周した後、今度は別の問いを彼女へとぶつける。

「じゃあ次は、フランさんが考える番です。あなたは、これからどうしたいですか？」

「……これから？」

「そう、これから。大それたことでも、ささやかなことでも構いませんから、あなたの『願い』を教えてください」

「ね、願い……」

思いがけないであろうその問いに、フランドールは暫し考え込む素振りを見せる。

だが、彼女の答えは、元よりたった一つしか存在しないのである。

それは、いつかのあの日、自らが多くの命とともに、壊してしまつた願い――

「お姉様と……ううん、紅魔館のみんなと、遊びたい……」

それを聞き、詩音は再び優しい笑みを浮かべていた。

「ふふっ、素敵な願いですね」

「――で、でもっ!! そんなの、出来るわけないよ……」

「あら、どうしてそう思うんですか？」

だが、肝心のフランドールは、今にも消え入りそうな表情をしている。

「だって、だって私、お姉様たちに酷いことをしちやったし……。それに、お外に出ても、いつ壊しちゃうかわからないもん……」

胸の前で手を握りしめ、フランドールは俯く。その瞳には、悔しさが、哀しさが、今にも溢れ出してしまいそうな程潤んでいて。

普段であれば見守っている部屋の紅も、この時だけは、彼女には責め立てているように感じられた。

しかし詩音は、少々呆れたような溜息をつくと、肩をすくめてみせる。

「なんだ、そんなことですか」

「――！　　そ、そんなことって――」

「フランさん、忘れたんですか？　あなたが壊そうとしても壊せなかった、ちつぽけな人間がここにいるじゃないですか」

そう言つて、詩音はどん、と胸を叩いた。

……フランドールは、自分を幽閉していた何かが、音を立てて壊されていくのを感じていた。

「それに、あなたは姉譲りで優しい方なんですから、絶対に大丈夫です。だって——

——全ては、救われるんですから」

「あ……」

それは、長い呪縛を解き放つ言葉で。

幻想郷を覆っていた妖霧が完全に晴れたのは、ちょうどその時だった。伴い、絢爛とした満月の光が、封印を解かれ紅い部屋全体を包み込んでゆく。まるで、終わらない罪に苦しんでいたフランドールを、何よりも優しく抱擁するかのよう——

——知らず知らずの内に彼女の頬を流れていた涙は、きっと後悔や悲嘆から生じたものではないだろう。

*

「……もう落ち着きましたか？」

「うん……」

月は次第に本来の輝きを取り戻したが、尚も辺りは紅に覆われている。

まあそれも当然のことであろう。何せそこは、気味が悪いと評される程に、お天道様の下でも暗闇の中でも堂々とその存在スカーレット感を主張する館である。その当主の妹君の部屋となれば、そこにも一面紅が蔓延っているのが道理だろう。

そんな目に毒な光景の中ではあるが、今この時だけは、フランドールは憑き物が落ちたかの如く清々しい表情をしていた。

「……すげえな、あいつ」

「？　急に悟つたような目をしてどうしたんですか？」

「あいつ、ええと詩音だっけか？　詩音は、狂った吸血鬼と戦いながらも、フランが苦しんでいるのを見抜いたんだぜ？」

……それに比べて私は。こんな安全なところから観戦してただけなのに、そんなの全く気づかなかった……」

「いやあんなのがそうホイホイいても困りますけどね。それにぶつちやけた話、詩音さんののは主人公補正が入ってますよ、ええ」

「何だそれ」

「ちよつとそこの外野！　その発言は限りなくアウトに近いアウトですよ!!」

そうやって、密かな会話をしていた二人に突っ込みを入れつつ。詩音は一度、大きく息をついてから、改めてフランドールへと向き直った。

「——さて。それじゃあフランさん、そろそろ幻想遊戯の再開と洒落こみませんか？」

「——そうだね」

途端、両者の目つきが変わった。紅の瞳は妖艶に蠢き、翡翠の瞳は燦然と燃え始める。双方が双方の、どんな動きも見逃すまいと、互いを捉えて離さない。

……もう既に決着は付いたのではないか、と問う者がいるかもしれない。

確かに、家族思いの姉が妹の運命を変えようと起こした『紅霧異変』の決着は、先ほど付けられた。外来人の少女が、狂った少女の優しさに魅せられて。吸血鬼の少女が、常識外れな少女の光に魅せられて。

翡翠の少女は救い、紅い少女は救われる。運命は既に、その道標に従い動き出した。

だが。弾幕ごっことは、優しさでも光でもなく、美しさで相手を魅せたものが勝利の遊び。決着は付いていようとも、まだ勝負は終わってないのである。

全ては、煌びやかな弾幕を、心ゆくまで堪能するため。

「ねえ、詩音」

「何ですか？」

「……さつきは、ごめんなさい。能力を使おうとしちゃって——
「フランさん。人って、謝罪よりも感謝の方が、言われて嬉しいものな
んですよ？」

「——！ あ、ありがと詩音！」

「ふふ、どういたしまして」

少女たちは、宣言し続ける。

「でも、たとえ詩音でも——いや、詩音だからこそ。絶対に、負けられ
ないんだから!!

それじゃ、行つくよー!!!」

禁弾『スターボウブレイク』

スペルが宣言されるが早いか、弾幕^{あそ}ぶ二者の周りに色とりどりの、
弾幕の“波”が現れた。

取り囲むように発生したそれは、一度は詩音に目もくれず、大いな
る月を指すかの如く浮上してゆく。しかしその軌道を怪訝に思っ
たのも束の間、一定の高さまで上昇すると、ゆらゆらと、空間を埋め
尽くすように詩音へと迫ってきた。そして回避の構えをとった瞬間、
不意打ちにまた上昇する弾幕が発生していくのだ。

「——っ、囲まれた……！」

ある程度の速度で昇っていく波に、雪のようにゆったりと落ちてい
く波。彩り豊かなそれらは、観る者の視界を次々と染めてゆく。

紅いその舞台は、同時多発的に生じるきらびやかな弾幕によって詩
音の移動する余地を急速に奪っていた。これでは彼女自慢の機動力
を活かすことも出来ないだろう。

大剣による力一辺倒だった先ほどのものに比べると、相手の弱点を
突く合理的なスペルだと言える。だがそれが、高貴で自尊心が強い一
方、冷血で理性的な西洋妖怪、吸血鬼ランドール・スカーレットの

本来の実力なのだ。

「おお、さつきのととは違って、また弾幕ごっこらしい弾幕だな」

「ええ。さて詩音さんは、ここからどうするんでしょうか……！」

そんな弾幕の標的となった詩音は、上からのものに気をとられ、下から襲いかかる波への対応が遅れていた。それでも詩音は、どうにか反応して身を翻し続ける。

が、次第に体勢を崩していき、遂に押し寄せる波の直撃を食らってしまった。

「ふっ——!!」

詩音の身体に、強い衝撃が響く。いくら殺傷性が低いとはいえ、弾幕は妖力の塊なのだ。被弾してしまえば、耐久力は人並みである彼女にはかなりの苦痛であろう。

だが、たとえどれほどの痛みが走ろうと弾幕が止むことはない。攻撃を食らい動きが止まった詩音へと、光の弾は容赦なく降り注ぐ。

四方八方を包囲され、傍目から見れば万事休す。

——しかし既に、反撃の狼煙はその右手に握られていたのだった。

幻影『紫電一閃』

一閃。

虹色の弾幕で溢れかえるその空間にもたらされたのは、たった一筋の、紫を帯びた電光のみ。下手をすればそれは、周囲の圧倒的な光に埋もれてしまいそうな程脆弱に見えた。

しかし、その幻想は道を切り開く新たな光で。

次の瞬間には、数えきれない量の弾幕全てが真つ二つになり、塵の如く溶けていった。

「……っ、弾幕って、直撃すると思ってた以上に痛いんですね……。一瞬だけ呼吸が止まりましたよ」

「——ふっ、はははっ、そこなくっちゃ！ さっすが、詩音だね

!!

粉雪のように、きらびやかに光が散りゆく絶景を背にして、翡翠の少女は優雅に漂う。

その顔は、確かに辛そうな表情をしている。だが瞳の、翡翠の中の幻想は、ここに来て更にその燃烧を強めたような、そんな力強さを持っていた。

そんな詩音の姿を見て、フランドールは興奮したように声を上げていた。

「いや私、普通に攻撃食らったんですが。ゲームだったら残機が減ってますけど」

「ふふっ、いやいやそこじゃなくってね、あんなにいっぱいあつた弾幕を、一瞬で全部消しちゃうんだもん！」

そっか、やつぱりこんな攻撃じゃ、一人分の攻撃なんかじゃあ詩音には勝てないよね……!」

紅い少女はそう、笑い声を上げる。それは先ほどまでの、狂気に染められたものとは違って、心から遊戯を楽しんでいる笑み。

「一人分……? まさか、分身の術でも使うつもりですか?」

「ううん、それもできるけど、それだけじゃあ足りない。」

詩音にはもつとステキな——ステキな、十人の最期を届けない!」

そう言つて、ひらりとフランドールは一枚のスペルカードを取り出した。

すると、どうしたことが。先ほど晴れたと思っていた赤い霧が、再び部屋に充満し始めたではないか。

不思議に思い、詩音は崩落した天井から空を見上げる。するとやはり夜空が紅に染められていることはなく、ぴかぴかと照るごく普通の満月が浮かんでいる。

……そう。その霧は、フランドールのスペルカードから発生していたのだ。

そして、徐々にはあるが、スペルカードを掲げるフランドールの姿が、霧へと紛れるように——誰もいなくなるかのように消えてい

く。

それでも楽しげなその声は、しつかりと霧の虚にも木霊うつくろしていた。

「One, Two, Three, Four, Five, Six, Seven, Eight, Nine——」

——Ten Little Indian—girls!!」

「……? い、いんでいあ……?」

「……成る程、『十人のインディアン』か」

「そう! 詩音は一体、どの少女と同じ運命を辿るのかな……?」

熊にハグされる? それともニシンに飲み込まれちゃう?

……でも、ひとりぼっちで寂しいからって、自ら首を吊っちゃうのだけはダメだよっ!」

秘弾『そして誰もいなくなるか?』

「あ、出ました。妹様のスペルが一番よく分からないやつ」

「なんだ、お前も『十人のインディアン』を知らないのか? そこそ

こ有名な童謡だぜ」

フランドールが完全に消滅したのを皮切りにして、青い、鳥のような弾幕が出現した。

そしてそれはゆっくりとだが、実体が消えるという現象に今日一番の驚きを見せている詩音の追尾を始める。

詩音が西へ動けば伴って西へ、東へ動けば東へ。更にはその軌跡を残すかのように、後方に青い弾幕を放ち、詩音の逃げ場を徐々に奪っていく。

「その童謡では最初、十人のインディアンがいるんだ。でもそこから一人ずつ、今フランが言ったみたいに熊にハグされたりニシンに飲み込まれたりして、どんどんいなくなっていく。

最終的に、インディアンの子はひとりぼっちになってしまふ。彼女はその孤独に耐えかね、遂には自分の首をくくってしまひ——

— Then there were none.
——そして誰もいなくなつた」

「……そういうことですか」

突如上から声が聞こえたことに驚き、魔理沙は顔を上げる。するとそこには、目では確かに迫り来る弾幕を捉えながら、しかし楽しそうな笑みを浮かべる翡翠の少女がいた。

「あれ詩音さん、そんなに笑つて、まさか余裕ですか？」

「いえっ、割りとギリギリ……」

そうしている間にも、フランドールのスペルは新たな段階へと移行していく。

粘り強く追尾を続けていた青い弾幕だったが、ある瞬間を境にしてそれは突然消え去る。それに代わるようにして赤い弾幕が、詩音を責め立てるかの如くその輪を不規則に縮めてきていたのだ。

「……じゃあなんで、そんなに笑顔なんだ？」

「いやだって、詩になぞらえて放つ弾幕ですよ？　めっちゃ格好い

いじゃないですか」

「……あー、成る程。詩音さんはそういう人でしたね」

少々間の抜けた発言を受け、門前でのことやレミアアと初めて顔を合わせた時を思い出したのであろう。美鈴が思わず苦笑する。

まあ確かにそれは、緊迫したこの場には似合わない呑気さかもしれない。しかしこれが外界より誘われし「運命人」、古卿詩音の、根幹を成す思考なのだ。

「とっ、ろで。魔法使いさん」

「魔理沙だぜ。よく覚えておきな。」

で、何だ？」

そんな少女は、やはり視線を向けてはいないが、大きめの声で魔理沙へと語りかけていた。

「フランさんが突然っ、消えたのも、その詩の何かなんで、すかつ!?!」
「ああ、これは耐久スペルですよ。ほら、スペルカードって、その気になれば自分のスペルですぐに相殺できちゃうじゃないですか。そうなるのを防ぐために、『私のスペルを見よ!』って感じで、自分に攻撃が当たらない術的なのをかけてるらしいです。訳わかんないですよ

ね」

「弾避けながら会話してる詩音も、大概訳わかんないけどな」

「貴方の馬火力も十分同じカテゴリーですよ」

魔理沙と美鈴が夫婦漫才のようなものを繰り広げているが、それには特に触れず。というかそんな余裕はない。

だが、話はちゃんと聞いていたようで、今度は確信を持って尋ねる。「と、言うことは、フランさんは、完全に消えたわけじゃあ、ないんですよね?」

「まあそうだろうが……どうする気だ?　ちよつとした弾幕じゃ、靈力の無駄だぜ?」

「いや、なに、それほど難しくない技で、この状況にピッタリなのがあるんですよ——」

言うが早いのか、詩音は額の前で両掌を広げていた。

「——天さん、技借りますっ!」

幻技『太陽拳』

その宣言が、部屋に響き渡るのと——小さな世界が光に包まれるのは、ほぼ同着であった。

「うおっ、まぶしっ!」

「うぎやあつ、目があつ!」

「ぎやあああつ!!!」

詩音の宣言したスペルには、通常に言うところの弾幕が一切含まれていなかった。これでは、彼女たち以外との弾幕ごっこでは時間稼ぎにしかないであろう。

だがそれは、彼女たち——吸血鬼たちに対抗するためには、なによりも鋭い「銀の弾丸」に成りうる。

……何せ彼女のスペルは、生物の眼球にはもて余すほかない程の光を発していたのだから。

事実、光がすべて収まったとき、詩音の前には全身に火傷を負って

その一部は灰になってしまっている、フランドールの姿があった。尤も、既に再生は始まっているが。

「うう……いったあ……」

まさか、このスペルがこんなにアツサリと破られるなんて……」

「まったく……耐久スペルを強引に突破する奴なんて、初めて見たぜ」

「いやあだつて、痛い嫌ですし」

ちえー、とフランドールは口をとがらせる。

「She died by the bullet and then there we none……小説通りに行くと思つたのになー」

「ぶ、物騒ですね……」

「全くだ。小説は小説にして、大人しく本当の歌通りにしとけよ」

「……本当の歌って？」

「おいおい、知らんのか？　　どうやらこの中で知識人は、私だけみないだな」

やれやれ嘆かわしい、とでも言いたげな仕草で、魔理沙は肩をすくめた。

だが徐に、静かな口調で語りだす。

「She got married and then there were none——」

月光に満ち満ちた部屋に、一人の人間の声が反響する。幻想の地に鳴りゆく、大昔に紡がれた言葉による幻想。

『彼女は結婚し、そして誰もいなくなった』

それは、首吊り以外の終わりを知らない彼女の心に、印象深く刻まれたことだろう。

「……でも結婚つて、誰が？」

「さあ？　　それこそ——フランと詩音でいいんじゃないか？」

「いや適当ですね……。同性ですし、種族違いますし、私まだ結婚できる年齢を迎えてませんし」

雑過ぎる魔理沙の言葉。もう少し、自らの発言に責任を持つべきだ

ろう。それに対し、詩音は呆れたような笑みを浮かべる。

だが、フランドールは何か考え込むような仕草を見せていて。

「……でも、それがいいかも」

「へっ?」

「ぶっ!?!」

「い、妹様、もしかしてそういうご趣味が……?」

その言葉には、誰もがざわめきを覚えずにはいられなかった。

詩音は啞然とし、魔理沙は吹き出していて、美鈴は驚きながらも生温かい目をしている。

その反応を見て、フランドールは少々慌てて訂正した。

「あついや、そういう意味じゃなくて……」

「……どうせまた一人になるんだから、だったら詩音がいた方が楽しいかなーって」

「一人って……紅魔館のみなさんと、遊ぶんじゃないんですか?」

不思議そうに詩音が尋ねる。フランドールが先ほど言っていた、何よりもささやかで、大切な願いを添えて。

だが……自らの願いだというのに、フランドールは俯き、泣き出しそうな顔をしていた。

「もちろん、そうしたい……けど。けど、地下室から出て、私が私でいられるのか……あのワタシ狂気になっちゃうんじゃないかと、そう思うの」

「……………」

「現に、昔一回だけ、私の悪い部分を封印してもらったのに、すぐに解けちゃったし……」

「……それに、どうせ私なんか、お姉様には嫌われてるんだから——
「それは違いますっ!!」

突如、爆音が轟いた。

フランドールも、魔理沙も、美鈴も。あまりにも急なその変化に、目を丸くせずにはいられなかった。

怒り、憤り、哀れみ、その他諸々の感情を爆音でぶちまけた、詩音の変化に。

もしこの場に詩音との付き合いが長い者がいれば、腰を抜かすほどに驚いていただろう。何せ、彼女が感情をここまで激する場面など、誰も見たことがないのだから。

「ええっとー！　何から何まで違いますが、取り敢えず。どうして、フランさんがレミリアさんに嫌われるんですか？」

「……っ、だって、私、お姉様を……その、こ、こ、こ、壊し、かけて——」
「ったく、つくづく情けないですね『お前』は!!」
「!?」

更なる語気が反響する。音波のみで壁をも突き崩せそうな、それほどの語気。その威圧にフランドールが、妖怪の中でも強い力を持つ吸血鬼が、動くことすら叶わなくなっていた。

声を出そうにも舌は動かさず、頭は真っ白。それは、蛇に睨まれた蛙、と、そういつても過言ではない光景。

その咆哮で、幻想郷全土が揺れた気がしたのは……流石に気のせい
か。

「それ全部、過去の出来事じゃないですか！　そんな、私が生まれる
遙か前のことを言い訳に『使うな』!!」

「お、おい詩音、ちよ、いったん落ち着け——」

「そ・れ・に！　　実際あなたの『姉貴、レミリアは』、過去の行いを
悔いて人間の私なんかには頭を下げたんですよ!?　大切な家族のそ
の気持ち、『此奴のためにも少しは』汲み取ってあげて下さい!!!」

「っ!?　お、お姉様が!？」

これまでにない程強い詩音の口調に、フランドールの混乱はいよいよ
極大まで達したようだ。焦点を合わせることもできていないが、最
後の望みと、すぎるように詩音の瞳を見つめようとしている。

一方の詩音は魔理沙に諭され、ここまで激しく感情を顕にしたこと
を省みていた。

詩音は一度、深く息を吸う。

「……それでもまだ、一人ぼっちになると言うのだったら——」

そして、ゆっくりと吐きながら——

「私達が、フランさんの友達になりますよ」

「——えっ? と、ともだ……ち……う?」

フレンドールは思わずきよとん、とってしまった。

何故なら、先ほどまでの強過ぎる感情は鳴りを潜め、詩音は優しく微笑んでいたからだ。

……尤も、少しだけづが悪そうではあるが。流石に言い過ぎた自覚はあったのか。

その様子を見て、ほっとした顔を覗かせながら魔理沙が食いついてきた。

「おい詩音、 “私達” ってことは、勝手に私も含んでるだろ」

「あれ、魔理沙さんなら『私はもう友達だぜ!』とか言うと思ったんですが」

「はは、違いねえ。フラン、私達はもう友達だろ? それとも……私達じゃ、ダメなのか?」

寂しげな表情をしつつ、魔理沙はフレンドールに尋ねる。

……相手を余程嫌悪していない限り、そんな顔をされて否定できる者など皆無だろう。

「っ! いや、そんなことは……!」

「ふふ。ならば、妹様はもう大丈夫ですよ。なんたって、 “一人ぼっちじゃない” んですから」

「そうそう。一人でないのなら、そこから二人になろうと三人になろうと百人になろうと、大して変わらないんですよ」

「She made good friends
and then there were none —— っつてところか?」

ここぞとばかりに、三名が矢継ぎ早に言霊を放つ。それらは、端から見れば訳の分からない、少女達の戯言。何せ、理論は跳躍するわ、いきなり百人に増えるわ、突然詩を改変するわ……。

だが、友人の言葉を一身に受けた少女は——

「——つくく。ふふふつ、あははははは!!」

あははつ、もう、何が何だか、わかんないよそれ……!」
笑っていた。

心の底から、可笑しそうに。見た目相応の、無邪気な笑顔。それこそ、涙が出る程——そう、笑い過ぎで涙が出る程、笑っていた。

笑い過ぎで——と、いうことにはしておこう。

「まあ、つまり……フランさんは一人なんかじゃありませんから、そんなこと言わないでください。そして——レミアアさんを、一人にさせないでください。」

大切な、家族なんでしょう?」

「……………うん」

少し落ち着いてから、詩音が語りかけた。自らに向けられたその言葉、フランドールはゆつくりと、噛みしめるように聞き入っている。

フランドールの目には、もう涙は見られない。表面上は平静だ。

しかし、心の中もそうであったかと言われれば、それは違うであろう。この半刻もしないうちに波瀾万丈、様々なことが起こり過ぎていた。

故に、仕方ないのだ。

——星を見上げ、苦々しげな表情で眩く姿を見逃したのは。

「……………家族、ねえ」

「?」 どうかしたの?」

「いえ。さ、フランさん、そろそろ決着をつけましょうか。次は私から行かせて貰いますよ!」

まるで何かを誤魔化すかのように詩音は叫び、懐から一枚のスペルを取り出す。

その言葉にフランドールは慌てて、迎撃の構えを整えた。

「……………つて、あれ?」 そういえば詩音がスペルを宣言するときつて、いつもモヤモヤの中から出てきてたような……………」

「ああ、それですか。なんか、こんなスペルを発動したい!つて想像すると、勝手にそのスペルのカードが出来上がるんですよね」

「なにそれこわい」

「あ、でも三枚だけ、既に形になっているスペルカードも持ってますよ」

「……そのシステムなに？」

「さあ？」

フランドールは苦笑する。人智を越えた存在である妖怪の想像を越えてくる人間とか、苦笑いのほかにしようがないだろう。

願わくはそんな詩音が、人間との接触経験がほとんどない彼女にとっての基準にならないことを祈るのみである。

「ともかくフランさん、これは私から貴方への餞別です」

「せんべつ？」

「はい。地下に囚われ、破壊しか知らなかった『悪魔の妹』を離れ、今まさに世界を知ろうとしている『フランドール・スカーレット』に対する、ね！」

そして詩音は、高くスペルカードを掲げた。

『幻想のアニマ―旭日昇天―』

詩音のスペルが宣言された瞬間――辺りは、光の海に包まれた。

彼女を中心にして広がるのは白い、球状や光線状の弾幕。これまでのスペルに比べれば飾り気は少ないが、その量が桁違いである。目も眩む程に部屋を埋め尽くすそれは単純ながら、それ故に見出だされる美しさを感じさせた。

「……っ!! まずい――」

まさかここまで弾幕の勢いが凄まじいとは思っていなかったのだろう。反応が遅れたフランドールは、反射的に自らもスペルを宣言していた。

QED 『495年の波紋』

フランドールから放たれるこちらにも大量の、青白い米粒状の弾幕が、詩音のものと激しくぶつかり合う。あるものは打ち消し合い、あるものは押し負けて相手の方へと襲いかかってゆく。

紅い部屋の中は、この時だけは正反対の、白い光で溢れていた。両者の弾幕が入り乱れ、昼が顔を覗かせたかの如く辺りは照らされる。しかし、スペルを宣言して対抗しているにもかかわらず、フランドールの方が若干劣勢だった。微笑で弾幕を放つ詩音に対し、フランドールのその笑みは少々ひきつっている。

——更には、詩音のスペルが発動していたのは、これだけではなかった。

「——っ！　おい中国、あれはなんだ!?　　詩音に集まっついてって、あのオレンジのやつ!!」

何かに気づいた魔理沙が声を上げる。

その指の示す先では、彼女の言うように橙色の、靄もやに似た何かが詩音に向かって集結していた。

「いや中国って……。」

えーと、あれですか？　　あれは……感じられる気からするに、エネルギーっぽいですね」

「え、エネルギー?」

「ええ。しかも、たぶんあれは——

——さつき詩音さんが使った、自分を光らせるスペルの残骸ですね」

「はあ!?　　なんだそれ!?!」

傍観者がそう話している間にも、その橙色の儂い光はどんどんと詩音へと集っていく。

そしてそれが、全て翡翠の少女に収束し切ったとき——白い弾々が、翡翠の光に照らされた。

「フランドールさん」

「……っ、なに……」

「これまであなたが、どんな思いをしてきたのか、私にはわかりません。きつと想像を絶する、なんて安い言葉じゃ足りないでしょう。でも、あなたは——フランドール・スカーレットは、姉譲りで優しい方なんですから。絶対に、大丈夫です」

「なによ、いきなり——つて、何、この緑の光……!」

「ですから、私がフランさんたちに言えることは一つだけです——」

詩音は、静かに目を瞑り——大きく、見開いた。

——幻想的な翡翠の光が、抱擁するように全てを照らし尽くす——

「——紅魔の夜明けに、輝く旭日あさひのあらんことを!!」

そして周囲は、見覚えのある太陽の光を帯びた、星より多くの弾幕に包まれた——

Stage 6

純粹無垢の狂気　くフランドール・スカー

レットく

Stage Clear!

—— ALL CLEAR!!

東方紅魔郷 True End

「じゃあね、詩音、魔理沙！ 絶対にまた遊びに来てね！」

「おう、もちろんだ！ な？」

「ええ。楽しみですね」

ついさつきまで虐げられていたことなどすっかり忘れてかのように、漆黒は幻想の空を押し並べて覆っていた。羽振りよく広がる夜の空一面には、既に年一度の逢瀬を終えた織姫と彦星が輝く。そして地平の線まで続く天の川が、二人の悲劇を彩るように煌めいている。

そんな自然の装飾に溢れた夜空で一際存在感を放つ衛星、月は、美彈幕に始まり美弾幕に終わった初めての異変を慈しむような、そんな明かりをもたらしていた。

「……………」

「——お嬢様」

このように絶景と言える空模様だったが、時間が時間なためにのんびりと眺めている者はほとんどいない。

日付と日付の境界はもう目前。人間は酩酊でもしていなければ床に着き、妖怪が野山を駆け回るそんな時刻に、しかし紅い吸血鬼の館は騒然とした様相を見せていた。

開け放たれた地下室の天井付近で離別の挨拶を交わすのは、二人の人間と一体の吸血鬼。

この異変の中核を担った一人と一体、それを見届けた一人は、新たな縁で結ばれた。フランドールにとって初めて『友人』と呼べる存在が誕生したのだ。

とは言え、友人であってもずっとと行動を共にする訳にはいかない。詩音と魔理沙にも帰る家がある。彼女らは別れを惜しみつつ、再会の指切りをする。

……そして、そんな少女たちを隠密に眺める、ぼろぼろの少女が一体。

「……………首尾は？」

「上々。どころか、最高ですね」

妹が、飛び立つ友人に笑顔で手を振っている。そんな他人からすれば当たり前とも言える光景も、悩める姉レミリア・スカーレットの瞳には驚愕と感動の映像として映っていた。

心なしか、その瞳はいつもより多めの水分を含んでいるように見える。

「みたいね。あのフランが、あんなに笑っているんだもの……」

「……もしかして、泣いてますか？」

「そ、そんなことないわよ！」

鼻を赤くしている彼女は、魔理沙と同じく見届けた一員である美鈴の言葉を慌てて否定する。

それでも生暖かい笑みを向けてくる門番。そんな視線は吸血鬼の誇りが許さなかつたのだろう、レミリアは断罪の言葉を投げかけた。

「美鈴、明日から一週間ご飯抜きね」

「ええっ!？」

「そりやそうでしょう。詩音はともかく、霊夢やあの魔法使いにまで侵入を許したのでしょうか？　相応の罰は必要じゃないかしら」

「そ、そんな殺生な……!」

打って代わって狼狽し出した美鈴を見て、レミリアはふふつ、と笑顔を溢した。幾分か機嫌も和らいだようだ。

「……ま、今後私にそのキモチワルイ笑顔を向けないのなら考えてやらないこともないけど?」

「ありがとうございませ強く気高く美しいレミリアお嬢様あああ!!」

「ここまでわかりやすいといっそ清々しいわね……」

実に扱いやすい部下である。良し悪しはさておいて。

レミリアは再び笑みを見せた。

「それで？　詩音は、どうやってフランを救ってくれたのかしら」

「あれ、運命で見えるんじゃないんですか？」

「……私の能力は、ここまで万能じゃないわ。ただ、運命を辿った先の結末が臆気に見えるだけ。過程まで見えていたら、ここまで苦労しないわよ」

「成る程、そりゃごもつとも」

珍しく弱気な言葉を、レミリアは吐露する。あるいは、博麗の巫女との激闘で精根疲れ果てていたのかもしれない。

——そんな百年に一度もないくらいに、自分が主よりも有利な状況に、愚かな門番は調子に乗ってしまったようだ。大変勿体ぶつた言い方で、レミリアに向かい詩を紡ぎ出す。

「—She made good friends and then there were none.」

「は？」

「孤独な少女に友達ができ、独りぼっちはいなくなった——つてどこですかね」

「……は？」

「ふふっ、まあそういうことですね」

微笑みかける美鈴。はつきり言ってしまうえば藪蛇だろう。

「そ。じゃあ今月のご飯はずつと抜きつてことで——」

「わかりました話します話しますからそれだけはああ!!」

「数秒前に見たばかりなんだけどこの光景」

どれ程美鈴にとって食事の比重が大きいのか、改めて思い知らされたレミリアである。最早滑稽を越して呆れが混じった表情をしている。

「ならこれから、私の部屋で何があったのかを洗いざらい教えて頂戴」

「承知致しました。……あ、紅茶は要りますか？」

「うーん……。いえ、今日はワインでも開けましょうか。だって、こんなにめでたい日なんですもの」

「了解です。じゃあ、咲夜さんをお願いしてきますね」

どうにか主人のご機嫌をとって飢えを回避した美鈴は、そう言い残し夜の館へと消えていく。

それを最後まで見守ってから、ふとレミリアは空を見上げた。

日付と日付の境界を越えた月は、天の頂にそびえて世界を明るく、白く照らす。太古より受け継がれし輝きは、レミリアのいる幻想の地までもを等しく包み込む。

紅く妖しく光る月もいだけれど、やっぱり本物にはえもいわれぬ感慨深さがあるわね。細く開かれたその目は、ようやく晴れた彼女の心中を如実に語っているようだった。

「まったく、楽しい紅はもう終わってしまったというのに——
——こんなにも素晴らしい夜は、初めてよ」

それは、旋律の響く夜。

異変を見事に解決した巫女が、妖怪や人里から改めて一目置かれるようになった夜。

見事に吸血鬼の少女を救った彼女に、魔法使いが仄かな羨望を抱くようになった夜。

疲れ果てて、夜行性の筈の吸血鬼が快眠へと誘われた夜。

もう一欠片の吸血鬼が、門番とメイドを交え、酒も入って上機嫌に語り明かした夜。

外界の少女の、普通でない日々が始まった夜。

これは、全ての境界になった夜の。

全てが普通の夏に起こった、ちよつとだけ普通でない物語の顛末である——

Ending No. 1 『幻想曲《紅楽日和》』

「——なあ、詩音」

「何ですか？」

「あの時、どうしてあそこまで怒鳴ったんだ？ フランがレミリアとかいうやつを踏み躪ったのは事実なんだろうが、何もあんな剣幕じゃなくても……。途中、口調も変わってたし」

「……………」

「…………… どうした？」

「魔理沙さんは、知っていますか？」

「知ってるか、って……………何を？」

「『隣の芝は青い』」

「……………それが？」

「何でもないですよ、ふふ。」

「それよりも、口調が変わってたってホントですか？」

「あれ、無自覚だったのか。なんかこう、『オマエー』とか『アネキー』とか言ってたぜ？」

「……………」

「自覚なしに口調が変わるとか、どんだけ頭に血が上ってたんだよ——って、ん？」

「あれ、おい、詩音？」

「おーい、詩音！ しおーん!!!」

「……………おかしいな。詩音の奴——」

「——一体、どこに消えたんだ？」

魔法の森の茶会

魔法の森。

そこは、一年を通して瘴気の繁る土地。化け物茸があちこちに育成し、正に「禍々しい」を可視化したような場所である。

紅い霧が収まりはや数日。その時間は、そんな魔法の森にも立て直しの余地を与えていた。茸の胞子が降り注ぎ、じつとりとした空気が木の葉を包む。そこには生命の気配は少ないながらも、平穏で非現実的な日常が取り戻されている。

『七色の人形使い』アリス・マーガトロイドの住む家は、そんな森に位置している。

アリスの目標は、自分で思考をする完全な自立型人形を製作すること。そのために彼女は、日夜魔法の研究に励んでいた。ちなみに同じく魔法の森に住む某魔法使いとは違って、空を覆い尽くす紅霧には特に興味を抱いていなかった者の一人である。

そんなアリスは今、人形に作らせた紅茶と洋菓子を嗜んでいた。料理までも人形に任せ生活の全てを人形の研究に捧げている、と捉えるならば聞こえは良くなるが、まあおそらくはただ休憩をしているだけであろう。時間的にも八つ時前、甘味が恋しくなる頃合いである。

「……あら、この茶葉は初めて買ったけど香りがいいわね。今度のもこれにしようかしら」

「シャンハイ」

「ええ、そうね。上海の作ったクッキーも美味しいわ」

「ホーラーイ！」

そんな風に、アリスは人形との会話を楽しみながら、穏やかな昼下がりを過ごしていた。

すると突然、戸を叩く音が響く。

「ノック？　こんな所に客人かしら……」

あ、ここは私が出るから貴方たちは下がってなさい」

「オタズネモノ」

人形たちを手で制し、彼女は玄関へと向かう。

「誰だろう……魔理沙ならノックなんて律儀なことをする筈がないし。でも他にここまで来る人なんて……」

——はーい、ちよつと待っててー」

木でできた西洋風の扉を、ゆっくりと押し開けて——

そこに立っていたのは、見覚えのない普通の少女だった。

魔法の森という場所には不釣り合いなほど普通の彼女に、思わずアリスはしばし黙りを決め込みじろじろと観察を始めてしまう。

種族は見るからに人間で、特に魔法などの力は感じられない。所持品もごく一般的で……特筆すべき点としては、左右の瞳の色が異なっているくらいだ。

「あの……私の顔に何か付いてますか？」

「——え？ ああ、いや、ごめんなさい。こんな辺鄙な所に来る人なんて珍しいから、つい」

「そ、そうなんですか」

「で？ 私の家に、何か用かしら」

そして、敵意などもなさそうである。

とにかくアリスは、本人に事情を聞いてみることにしたようだ。

すると彼女は、何故かもしもじとしてなかなか言葉を発せずにいる。

「あ、あの……」

「……？」

「違つてたら、凄く変なことを聞くことになるんですけど……」

——ここって、幻想郷で合ってますか？」

「……は？」

*

「成る程ねえ。貴女、詩音はこの間の、紅い霧の異変と同時に幻想郷に迷い込んだ。それでなんやかんやあつた後、その時知り合った人と喋

りながら飛んでいた。そしたら突然外界の、自分の家の前に戻った、と」

「はい、そうです」

「そして数日が経ち、あの異世界は何だったんだろう、と思って、また行きたいと強く念じた訳ね」

「はい。そして気づいたら、キノコだらけのこの森にいました」

「いや訳がわからないわよ」

「え？ 割りとシンプルじゃないですか？」

「ワケガワカラナイヨ」

アリスの家へと訪問者があってから少しして。彼女は、その件の訪問者——翡翠の左目を持つ少女、古卿詩音を家の中に招き入れ事情を聞いていた。

それによれば……詩音はなんともまあ、異常なことを仕出かしているようだ。

「はあ……。あのね、貴女は知らないだろうけど、幻想郷は結界によって外の世界と隔てられているのよ」

「あーそういうえば、なんか藍さんがそんなようなことを言ってたようだな」

「まあ私も詳しい仕組みは知らないんだけどね。」

そして、それを越えるのは普通の妖怪には到底不可能なのよ。人間なんてもつてのほか。それこそ、スキマ妖怪みたいな境界を操る力を持ってなかったらね」

「へえー、勉強になります」

アリスの瞳を見つめて、真摯に話を聞く詩音。

……ひよつとしたら、彼女は物凄く馬鹿なんじゃないだろうか。自覚が足りなさ過ぎるにも程がある。

「……貴女、本当に外界から来たのよね？」

「ええ、ここから見ればそうですね」

「じゃあどうやって、普通は越えられない筈の境界を越えたの？」

「……さあ？」

「いや『さあ？』じゃないわよ！ その話が本当なら、貴女はとんで

もないことを仕出かしてるのよ!？」

アリスは思わず声を荒らげる。その気持ちには激しく同意だ。

実は、幻想郷に迷い込む者自体は年に何人もいる。ちなみに外の世界では、この現象を神隠しと呼んでいるらしい。

そのような者たちは、アリスの説明からわかるように自力で故郷へと帰ることなど叶わない。そのまま幻想郷に住み着くか、神社へ向かい巫女に外界へと帰してもらおうか——悲惨な結末を迎えるか。これ以外の選択肢は存在しない、筈だった。

だというのにこの小娘は、自力で外界へと帰り、更にはまた来たという。というか、ここにそんな友達の家感覚で来られても困る。

故に、アリスの反応も無理のないことと言える。

「はあ……。にわかには信じがたいけど、見た感じ嘘を言ってるようじゃなさそうだし。つてか、そんな嘘ついて何になんの？つて話だし」

「ですね。外界ブランドとかあるなら別ですが」

「まあ確かに、人里とかでは珍しがられてるフシはあるけどね。あと天狗辺りは新聞のネタに使いそう」

「アヤヤヤ、コレハダイスクープデスヨ! ツテカ」

「へー、天狗なんかもここにはいるんですね」

するとここで、アリスの人形の一つが新たな容器を運んできた。

「そういえば外界には天狗なんていないのね——つと、お茶を入れてくれたみたいね。蓬菜、ありがとう」

「ホーライ! ホーライ!」

「わかったわかった。ほら、よしよし」

「ホーライ!」

「ふふふ。そんなに嬉しかったかしら。

あ、詩音はミルクやシュガーは必要？」

「……………」

「詩音?」

アリスは声をかけるが、詩音は反応を示さない。

何事かと思えば彼女の方へと視線をやると、詩音はじーっとアリスの

人形、蓬莱人形を見つめていた。

「ホ、ホーライ?」

「……かわいい」

「えっ?」

「あ、いえ。この人形どうやって動いてるのかなー、って思いました」
ああ成る程、とアリスは納得する。確かに外来人の詩音にしてみれば、一人で動く人形なんて見たことないのだろう。

「その子は蓬莱。で、こっちが上海。魔法を使って私が操ってるわ」

「シャンハイ」

「ホーライ」

「へー、魔法ってそんなことも出来るんですね。まほうのちからってすげー」

「まあね。他にも弾幕ごっここの時とかはもつとたくさんの人形を使ったり——」

そう得意気に語っていたアリスだったが……ふと言葉を断ち、窓の外を睨み出す。

何事かと思いい詩音もそちらを向いたが、その瞳には禍々しい森と、その木々の途切れ目から所々顔を覗かせる真夏の青空が映るのみ。特に怪しい様子は認識できない。

沈黙の意図が読めないからだろう、詩音は困惑している。

そんな中、アリスがぼつりと呟いた。

「この音は……ったく、今日は来客の多い日だこと」

「え?」

刹那、入り口の戸が勢いよく開かれる。

「——邪魔するぜっ、アリス!」

「うわっ!」

「よくわかってるじゃない。邪魔よ、帰りなさい」

「はは、手厳しいな」

苦笑しながらも、彼女ははずかすかとアリスの家へと入り込んでくる。
そう彼女こそ、アリスと同じ魔法の森に住む某魔法使い——もとい

魔理沙であった。

「あ……ま、魔理沙さん!!」

「ん? お前は……」

「あら詩音、魔理沙を知っているの?」

「詩音……つてあの詩音か!? え、なんでアリスの家にいるんだ!」

「はい、さつき言った、一緒に帰った知り合いってのが魔理沙さんのことです」

思いがけない人物との遭遇に、双方が驚愕の声を上げる。

「魔理沙さんこそ、どうしてアリスさんの家に突貫みたいなことをしてるんですか?」

「なんでつて……まあ、コイツとは家が近所だしな。それにアリスが、どうしても私にお茶と茶菓子をぐ馳走したいって言うから」

「おいコラ」

「へえー、成る程。魔理沙さんの家もこの近くなんですね」

「え、貴女それで納得するの? 明らかに理不尽な物言いなの!?」

「んで、詩音はなんでここにいるんだ? つてか、どうして異変の日、突然消えたりしたんだ?」

魔理沙はそのまま、先ほどまでアリスが座っていた席へと腰を下ろす。目の前の菓子にまで手を伸ばし始めた。

「ん、このクッキー美味しいな」

「同感です」

「アラヤダ、ホメテモナニモデマセンワヨオクサマ」

「はあ……あんたらねえ……」

アリスはわかりやすく溜め息をつき、自分用に新たな椅子を出してきた。

いつの時代も、常識人とは割りを食うものである。早く誰かなんとかして欲しい。

「んで、私がここにいる理由でしたっけ。実はかくかくしかじかでして」

「はあ!? 外の世界とこつちを歩き来してるのかお前!? つてかそもそも外来人だったのかよ!」

「シヨウセツツテベンリダネ」

再び、魔理沙の叫ぶ声が響く。

しかし何か思い当たることがあったようで、乗り出した身を静かに元の位置へと戻した。

「……あー、でも詩音なら確かにやりかねない気がするな」

「あら魔理沙、心当たりがあるのかしら」

「ああ。こいつ、滅茶苦茶弾幕ごっこが、なんていうかこう——ヤバいんだ」

「……どういうこと？」

神妙な面持ちで語る魔理沙。ごくり、と唾を飲み込む音が聞こえてきそうな程である。

……しかし、残念なことに語彙力が足りない。アリスも、そして張本人の詩音すら、真意を測りかねているようだった。

「なんか、面と向かってそんなこと言われると複雑ですね」

「あ、いや良い意味でだぜ!？」

もちろん、弾幕ごっこが上手いってこともある。でもそれよりも、変な剣出したり弾幕ぶった切ったり光ったり、挙げ句の果てにあの「ラストワード」だろ？ あれはもうヤバいというか表現のしようがないと思う」

「……貴女そんなこと出来るの？」

「ええ、まあ。何か想像したスペルカードが勝手に手の中に出来るんですよね」

「はあ!? スペルカードが出来上がるって——」

「そこで、だ」

突如息を荒くしたかと思うと、魔理沙は自分の顔を詩音の、文字通り目と鼻の先までもってくる。

反射的に、詩音は身体を仰け反らそうとする。しかし、自分の目の中まで一直線に見つめてくる金色の瞳に、捕らわれるようにしてその動きを止めた。

「……………」

「なっ…………な、何ですか？」

「詩音。お前の、能力は何だ」

「の、能力？……この雰囲気から察するに、『封印されし我が邪気眼が
あぁっ！』とか言ったら——

「ぶっ飛ばすぞ」

「ですよー」

「何よ邪気眼って」

あまりの剣幕に押され、詩音は腕を組んで考え出す。

が、すぐに構えを解きあつけらかんと言い放った。

「わからないですね」

「いやおまつ、わからないって——

「それって例えば、フランさんが『ありとあらゆるものを破壊する程度
の能力』を持つてる、みたいな感じですよね？」

「……ああ。私は『魔法を使う程度の能力』を持つてるし、アリスは
……ってアリスも同じか」

「ええ。まあ、あくまで自己申告だから、自分がどんな力を使ってる
かっていうアピールみたいなものね」

「だったら尚更、わからないです。なんか不思議な力を使ってる
なーってという自覚はあるんですが、それが何なのかは私にもさっぱり」

そう言い切る詩音の言葉を聞いて、魔理沙は大きく息をつき再び腰
を下ろす。そして、目の前の紅茶を一気に呷った。

「——ぶはっ、マジかそれ。あ、アリスおかわり」

「私はおかわりじゃないわよ。つたくもう、もつと嗜好品としての正
しい味わい方を実践して欲しいわ……」

「じゃあ私もおかわり、お願いします」

「はいはい。蓬菜、よろしく」

「ホーライー！」

健気な人形は主人の言葉に従い、台所へと紅茶を淹れに行く。

「にしてもまさか、わからないとはなあ。絶対に強い能力を持つてる
のは間違いないと思うんだが……」

「すみません、わからなくて」

「別に詩音が謝る必要はないわ。外の世界の人間なんて、そうそう能力を使うことはないでしょう?」

「そうですね。こんな特殊能力なんて、人前で見せればたちまち有名な人ですよ。私も幻想郷に来るまで、こんな力を持つてるなんて知らなかったです」

そういうもんなのか、と魔理沙は呟く。まあ、普段から能力ありきの生活を送っていると、あまり実感はし辛いのもかもしれない。

そうしている間に、新たな芳しい香りが三人前運ばれてきた。

「おっ、来たな。ミルクと砂糖をたっぷり入れてくれ!」

「あ、私も今度はミルク入れて下さい」

「わかったわ。……相変わらず、魔理沙は甘いものが好きなのね。だからスペルの味も甘くなるのよ」

「へへっ、よせやい。照れるぜ」

「ホメテネーヨ」

「……スペルが甘いつてどういうことですか……?」

——まだ見ぬ境地を知った者の好奇心は、そんな風に尽きることを知らなかった。

詩音の質問に魔理沙とアリスが答え、その二人の疑問に今度は詩音が回答する。互いを深く知るに比例して、茶と菓子消費は増加していく。

そうして、爽やかな夏の午後には、爽やかとは言い難い森で開かれた茶会は、優雅でありながら彼女らにとって実りのあるものへと閉じられていった。

「——そういえば詩音、お前両目が緑色じゃなかったっけか?」

「え? いや私は物心ついた時から、左目だけが翡翠色ですよ?」

「んーそうか……気のせい、じゃあないと思うんだがなあ……」

「なにそれこわい」

「そういえば他のことにすっかり埋もれてたけど、オッドアイってだけでも十分珍しいわよね」

「そうですねー。やっぱ外の世界で街中歩いていると、ジロジロ見られたりしますし」

「……今度フランにも確認してみるかあ」

「……さっきも名前が出てたけど、そのフランとかいう、物騒な能力を持っているのは誰なの?」

「あ、それはですね——」

突撃！湖畔の紅魔館

「ほんとにお前飛べないんだな……」

「はい。あの時はフランさんのところに行く前、姉のレミリアさんになんかいじつてもらったので。」

そういえば、フランさんと弾幕ごっこをしたのもレミリアさんのお願いでしたよ」

「へえ、あのレミリアが詩音にお願いねえ」

「あれ、魔理沙さんもレミリアさんと面識あるんですか？」

「ああ、異変後の宴会で仲良くなったぜ」

「宴会って……まさか、お酒も？」

「……どうしてそんなこと聞くんだ？　当たり前だろ」

「いや、未成年……」

そんな、箒を乗りこなす少女らの真横を、風が大きく吹き抜けた。

残暑というのは、どこへ行っても実に鬱陶しく、また終盤に入った夏の名残を^{ひしひし}と感じさせるものだ。未だ昼間は茹だるような暑さが続く幻想郷でも、それは勿論変わりない真理である。

しかしそれは同時に、時折吹きさす涼風を引き立てる効果も持つ。その秋風がもたらす心地よさは、それまでの不快指数を帳消しにする程である。春先に吹く強い風を「春一番」と名付けるのなら、秋へと人妖を招き入れるこの風は「秋一番」と呼んでも差し支えないように思う。

『秋来ぬと目にはさやかに見えねども　風の音にぞおどろかれぬる』と歌にもあるように、秋の始まりを風が伝達するというのは古代からの理であろう。

さて、そんな夏と秋の境界な快晴の空を、魔理沙は詩音というおまけ付きで飛び回っていた。

行き先は、数週間前彼女らに新しくできた友人が住む館である。

「にしてもお前、最近突然こっちに来なくなったよな」

「あーそれですか。実は外の世界にはですね、子供が勉学に励む施設がありますよ。十五歳まではそこへ通わなきゃいけないんですよ」

「勉強……寺子屋みたいなもんか？」

「あ、寺子屋はあるんですね。まあそんな感じですよ。んで、それまで長い休みだったんですが、一週間前くらいからまた始業しまして」

「それで来れなくなつたと。……面倒臭いな」

詩音の話を聞き、寺子屋に通う自分を想像したのだろう。魔理沙は辟易したような声を出す。

「それほど悪いものでもないですよ？　友達百人とかできますし、今日みたいな休日なら幻想郷に来れますし——つと、見えてきましたね」

——そして、詩音が言葉を打ち切つたのと、それまで木々の緑ばかりだった視界が開けたのとはほぼ同時だった。

目前に広がる湖は相変わらず氷点下の霧で覆われており、そこだけ秋が通過した後のようである。そんな湖に浮かぶ島にて威風堂々とした存在感を放つ、紅い洋館。

そこが彼女らの目的地、紅魔館である。

魔理沙の視界にも入つたのだろう、彼女は操る箒の速度、高度を下げ始めた。

「……なんか懐かしいですね。まだ一月も経ってないのに」

「？……あつ、そうか。詩音は異変が終わつてから、まだここに来てないんだつたな」

「そう……ですね。アリスさんの家に数回お邪魔したり、幻想郷に来たら妖怪の山つて所に飛ばされてて烏天狗の人に質問攻めにされたりはしましたけど」

ほーんそうか、と魔理沙は含みのある相槌を打つ。

……その目に、魔法^{マジック}使いでない彼女の鋭い眼光が輝いていることに詩音は気づかない。

「つてその口振りからするに、魔理沙さんはもう何回か来たんですか？」

「まあな。——時に詩音。あそこを見てくれ」

「あそこって……あ」

次第に距離が縮まり、霧の中であっても鮮明な象形を現してきた門

へと魔理沙は指先をやる。

そこは異変の際、意識はあるのに顔を土につけるといふ屈辱を武人の門番が味わった場所。そして今現在——立ってはいるが守るべきである筈の門へ寄りかかり、意識は遥か夢の国へと遊行している怠惰な美鈴の生息地だ。

本日も彼女は絶好調なようで、幸せそうに涎を垂らしながら船を漕いでいる。

「……鼻提灯膨らませながら寝る人なんてリアルでは初めて見たんですが」

「同感だぜ……まあ、それは置いといて。ここに入るには、ちよつとしたルールがあるんだ」

「ルール？ 毎回美鈴さんと戦わなきゃいけないとかですか？」

「まあ大体合ってるな。詩音、こいつを箒の後ろに取り付けてくれ」

そう言つて魔理沙は、帽子の中から何かを取り出した。

ぶしつけに詩音へ渡されたそれは——彼女が最も愛用する魔法道具、ミニ八卦炉である。

「——つと。魔理沙さん、とりあえず装着しましたけど、これって一体

——え!? それって……」

言われるがまま、箒の後部にミニ八卦炉を取り付けた詩音。しかし、前を振り返つて目にした、魔理沙がいつの間にか懐より出していたそれに目を見張ることとなる。

「そうだ！ 舌噛み切らないよう歯ア食いしばつて、しつかり捕まつてな!!」

そして魔理沙は、無慈悲にも宣言した。

彗星『ブレイジングスター』

「……………はっ!? この魔力は、もしや魔理沙さん！ 今日とい

う今日こそ、この門を突破されるわけにはあぎやあああああああ
——!!」

「——へっ! 今日も私は絶好調だぜ!!」

「……南無」

哀れな美鈴の断末魔が響き渡る。いやまあ、自業自得だから哀れむ
余地はないが。

そしてこちらこそ本当に哀れなことに、大きな館に相応しい立派な
門は魔理沙の勢いによつて、見るも無惨にひしゃげてしまっていた。

「……うわあ。凄いスピードですね」

「へへっ、まあな! 天狗の奴らさえいなけりや、幻想郷一の自信は
あるぜ!」

詩音の言葉に胸を張る魔理沙。しかし彼女のそれはいささか物足
りない……と言うのは仮にも失礼に当たるため自粛する。

「ここにも仲間がいて安心しました」

「仲間? 何のだ?」

まあその辺の乙女事情はひとまず隅へと追いやつて。

文字通り「突撃」を成功させた魔理沙たちは現在、美しい花々が咲
き乱れる庭の上を飛翔している。

なんでも、この管理者は門番である美鈴が兼任しているらしい。
彼女の弾幕は色鮮やかで見えて飽きないが、この庭もそれに負けず
劣らずの絶景となっている。

そんな自然の美を、詩音は恍惚とした表情で眺めていた。異変時に
も一度通つた筈だが、今日はあの時と違い雲一つない青空。花見にお
いて、月夜だからこそ感じられる趣があるように、快活な天気の下で
彼女が受け取った感動もまたひとしおだったのだろう。

そんな、立派と呼んで差し支えない洋館の庭。

——しかしその瞬間、そこに、まばたきもしない内に大量の銀の短
剣が出現していた。隙間なく並べられ彼女たちを取り囲むそれから
は、最早逃走など不可能である、という最終通告の意味合いも感じと
れる。

「うおわ!」

それを見て、詩音は思わず間の抜けた声を出し、体を仰け反らせる。まあその反応は自然なものだろう。

だが、同乗者の対応は対照的だった。

「おう、咲夜か。邪魔してるぜ」

「——魔理沙、貴方もう少し驚いてもいいんじゃないかしら」

冷静……と言うよりはふてぶてしい態度で、魔理沙は虚空に向かい声を上げる。

すると果たして、次にまばたきをした時にはそれらの凶器は消え去り、代わりに蕭洒な従者が現れていた。

「……え？ あ、咲夜さん？」

「はい、詩音様。出会い頭にこのような御無礼、申し訳ございません」
詩音の姿を見るなり、咲夜はそちらに対して恭しく頭を下げる。

恐らくそんな、最大級に気を遣われる状況に慣れていないからであろうか。詩音はそんな咲夜の態度に少し慌てていた。

「いえいえそんな、別に頭を下げなくても」

「……あれ？ 同じ客なのに、私と詩音とで滅茶苦茶対応が違わねえか？」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ。詩音様は、妹様を救って下さった大恩人。貴方、無理やり門を突き破る強盗。対応が違うのは当然じゃないかしら？」

流星に看過出来なかったのだろう、魔理沙の物言いに咲夜は顔を上げ、反論する。

「……強盗？」

「本当はさつきだって詩音様にナイフを向けたくなかったのだけど、そろそろ貴方による図書館の被害がバカにならなくなってきたからね」

そう言うと咲夜はこめかみを押さえ、大きく溜息をついた。

……それで一纏めにナイフで囲む辺り、どこか抜けている気がする。もう少し、例えば二人を分断させるとかの策はなかったのだろうか。

「魔理沙さん、紅魔館で一体何を仕出かしてるんですか……？」

「仕出かす、とは人間きが悪いな。私はちよつと、パチユリーの有り余っている本を有効活用してやろうと借りてつてるだけだぜ」

『『一生借りる』』と言って風のように現れ、そして風のように去るのは既に盗みの領域よ」

「言葉の綾だな」

「うわあ」

あくまで堂々とする魔理沙。うわあ。

「——じゃ、咲夜に会えたから詩音も大丈夫だろうし、私はお先に失礼するぜ！」

「え？ あ、ちよつと待ちなさつ——」

「あばよー!!!」

そのまま金髪の強盗は、自慢の速度を最大限に活用して館へと消えていった。

「……………はああ」

「な、なんかすみません、私の連れが……」

「いやいや、詩音様が謝ることではありません。こちらの不手際が問題なので。……………はあ」

「え、えーつと……………」

……………沈黙が広がる。

と、思ったら。

「——ふへへ」

「え？ さ、咲夜さん？」

「——はっ！ も、申し訳ございません。疲れのあまり、妄想の中でお嬢様を愛でてしまっておりました」

「え、も、妄想!?!」

「お待たせしてすみません。それでは、ご案内致します。どうぞこちらへ」

そのまま何事もなかったかの如く、咲夜は屋内へと歩みを始めた。心なしか、先ほどまでよりも機嫌が良いように見える。

「え、えええ……………」

詩音は釈然としない様子であるが、そのままでは咲夜に置いていか

れてしまうだろう。

慌てて、距離を詰めていった。

*

「そういうえばこれ、どこへ向かっているんですか？」

館の外が光ならば、館の中は陰、と言っても過言でないだろう。

吸血鬼の住まうその洋館は、異変の時も今日も変わらない暗さを保っていた。窓から射す光もなく、というかそもそも窓などなく、蠟燭の赤い光が紅い廊下に陰翳を与えている。

まあ吸血鬼という種の特性上、光が不足しているのは必然の事態ではあるが。気味の悪い紅色は、主人の嗜好であろうか。

「お嬢様の部屋にございませす。詩音様が再び御出になられたら私の元に通せ、と命じられてます故」

そんな紅の中に、咲夜の恭順を滲ませた言葉が響く。

加えて彼女は一度足を止めて詩音の方へと振り返ると、ご足労感謝致します、と再びお辞儀をした。

一方の詩音は、どこかむず痒そうな表情をしている。

「あの、咲夜さん……。もつと魔理沙さんにしてみたいに、フランクな口調を使ってくれませんか？　なんかこう、そんなに敬意を向けられるとくすぐったくて……」

「そんな、滅相もございませせん！　詩音様は妹様、フランドール様を

お救いになられた大恩人。従者の身である私があのような馴れ馴れしい口調など、とてもとても」

いささか大袈裟な言葉で、咲夜は詩音の申し出を固辞する。まあ気持ちはわからなくもない。

詩音は彼女の敬愛する主人を見事救って見せた、いわば英雄なのだ。畏まるのも無理はないだろう。

「そう言う詩音様こそ、私などに丁寧な言葉をお使いなさらなくても」「あーいやー、これはもう癖っていうか、性根に染み付いちちゃってるんですよね。私としては、この言葉遣いじゃない方がむしろ不自然なん

で」

「はあ、そう仰るのなら無理にとは言いませんが……」

——そうした会話を続けていた二人だったが、不意に視界が捉えたそれに言葉を区切る。

「あ、これは見覚えありますね」

彼女たちの目前に現れたのはやはり紅い、大きな木の扉。

ここが行き止まりということは無論、この先が目的地ということだ。

「はい、この先がお嬢様の御部屋にございます。

……それでは、お二方の邪魔になるといけませんし私はこの辺で――

『あ、いいわ咲夜。貴女は私の隣で待機していて頂戴』

咲夜が気を利かせて退去を申し出ようとしていると、部屋の中から聞こえてきた幼い声に遮られた。

「お、お嬢様!? いやしかし……」

「私も別に構いませんよ」

『ほら、詩音もそう言ってるし。さあ入った入った!』

「はあ……じゃあそこまで仰るのなら、私も失礼します」

主の意図が読めない咲夜であったが、特段拒絶する理由もない。そのまま彼女は両開きの戸に手をかけ、ゆっくりと押し開いた。

重厚な、木の音が響き渡る。

「——いらつしやい、詩音。もつと早く来てくれてもよかったのに」
彼女は異変の時と変わらず、中央にある円卓に座していた。

部屋の様子も同様で、血に塗られたかの如く怪しく映える色が視界を占拠している。

……唯一違う所といえば、円卓に座す少女の表情が随分と柔らかいことであろうか。

「こんにちはレミリアさん。いや何回かは来ようと思ったんですが、そういえばこの場所よく知らなくて」

「……ああ、貴女には飛んで探すつてことも出来なかったわね。」

まあいいわ、来てくれたことに変わりはないもの。我々紅魔館は古
卿詩音、貴女を心から歓迎する。さき、座って座って」

「じゃあ失礼して」

そう言って、レミリアは自らの恩人であり友人と認める彼女に席を
勧めた。

詩音もそれに応え席に着く。

「……まずは、お礼を言わなくちゃね。詩音、貴女は私が想像していた
通りに——いや想像以上に、フランの救いになってくれたみたいね。
改めて、ありがとう詩音。この恩は生涯、忘れないわ」

「いや生涯ってそんな大袈裟な……」

詩音が席に着くなり、レミリアは柔らかい表情のまま彼女へ自らの
謝意を伝える。

それは吸血鬼など関係ない、ただ家族が大好きな少女の、自尊心な
ど抜きにした本当の気持ちであろう。

しかし先ほどの、咲夜とのやり取りから推察できるように、どうや
ら詩音はそういう堅苦しい関係は望んでいないようだ。

「私はただ、フランさんと弾幕ごっこしただけですし。そこまで律儀
にならなくても」

「あら、律儀さを失ったら妖怪は妖怪でなくなるわ。肉体よりも精神
に依存する妖怪が、認めるべきものを認められないこと、それはすな
わちその妖怪にとっての死に等しいもの。

それに、貴女が「ただ」と言うそれは、今まで誰も成し遂げられな
かったことなのよ？ 感謝の言葉くらい受け取って頂戴」

それでもどこか、承服しかねているような表情の詩音。
するとレミリアは、何かいい台詞を思い浮かんだようだ。

「——ほら、『親しき仲にも礼儀あり』って言うじゃない。友人の偉業
を賞賛できなければ、それは最早友人ではないわ」

「……まあ、それもそうですね。じゃあその言葉、レミリアさんの友人
として受け取っておきます」

ようやく折れたようで、一息ついて詩音は机の上にある紅茶を口に
含んだ。

独特の、甘い香りが彼女の鼻を突き抜ける。

……ふと、同じように紅茶を味わうレミリアと目が合った。

「……………ふふっ」

「くくっ……………」

双方に、自然と笑みが溢れた。

「そういうえば詩音、何か願いはあるかしら？」

「……………？ どうしたんですか藪から棒に」

そうして存分に紅茶を楽しんでいると、レミリアが詩音を自らの部屋へと招いた本来の目的を尋ね始める。

「貴女にお礼がしたいのよ。詩音は命を賭して、私の悲願を叶えてくれた。その借りを返すのは当然じゃなくて？」

「いや私はそんなもののためにやったんじゃ——」

「何がいいかしら？ 貴女が望むのなら金銀財宝でも、永遠の命だって与えるわよ！」

再び詩音は遠慮しようとするが、レミリアは有無を言わさざる勢いで迫ってくる。恩を感じてるならちゃんと言わさざる勢い。こは身勝手な吸血鬼であり子供だからであろうか。

……そんな天真爛漫な主に、隣から従者は愛でるような、うっとりとした瞳を向けている。このメイドもう駄目じゃないか？

「……………あ、そうだ」

「ん？ 何か思いついたかしら？」

それを見かねてなのかはわからないが、詩音は少しして声を上げた。

「はい。私の願いは——咲夜さんに、タメ口を使って欲しいです」

「え？？」

「はっ？ わ、私？」

彼女らにとっては、寝耳に水であろうその声を。

「ほら、これでも面白いじゃないですか。さっきレミリアさん、私を友人と言ってくれましたよね？ 友人ならば、その間に貸し借りなんて無粋なものは要りませんよ。

ささ、お茶を楽しみましょう！」

そう言う時詩音は、いつの間にか円卓の上に出されていた焼菓子を頼張る。そしてその美味しさに、目を見張っていた。

「……くくくつ」

「あ、あの、お嬢様……」

「——あはははっ！　これは一本とられたわね、貴女の言うとおりのよ！」

咲夜、他でもない詩音の頼みよ。もつと彼女に対して、自然に振る舞うことを許可するわ」

「ええ!?　いやしかし……」

突然の展開に着いていけず、たじろぐ咲夜。だが期待を籠めて自分を見つめる二つの視線に、ようやく観念したようだ。

「……はあ、まったくしょうがないわね、詩音さんは」

「あれ、呼び捨てにはしないのね」

「はい、お嬢様。私が詩音さんを尊敬してるのも、また事実ですから。

……それじゃ、改めてよろしく頼むわね。詩音さん」

「もちろんです、咲夜さん！　やっぱその口調の方がデキる女って感じで格好いいですよ！」

「あら、そうかしら？　ふふっ」

これまで畏まって待機していた彼女の元にも、詩音によって笑顔がもたらされていた。

「……成る程。咲夜を部屋に入れろ、っていうのはこういうことだったのね」

どこか遠く——もしかしたら彼女が操るといふ運命かもしれない——を見つめ、レミリアは微笑む。

「？　お嬢様、何か仰いましたか？」

「なんでもないわ。それより詩音、次は貴女の方から何か面白いこと話して頂戴ね」

「無茶振り甚だしいですね!？」

詩音の大きな反応に、思わず二人は吹き出す。それに釣られ、詩音も声を出して笑いだした。

部屋の中に、少女たちの笑顔が広がる。

……そんな穏やかな光景に帰着する運命を生み出したのは、運命を操る吸血鬼でもその従者でもなく、紛れもない詩音なのだ。こう言え
ば、レミリアの感謝が筆舌に尽くしがたいのは想像できるだろう。
そうして紅い館での、少女たちの笑顔が花開く会合は、絶品の焼き
菓子と紅茶をお供に粛々と進んでいった——って、こつち来てからお
茶ばっかしてゐるな詩音は。

「さて、着いたわよ」

「相変わらずデカイ扉ですね。ここは確か、図書館でしたっけ」

「そうね。この時間だったら妹様もここにいらっしやるだろうし、あ
とぎつとあの強盗も——」

「——へっ、今日はこのくらいにしといてやるっ！ フラン、また
なっ！」

「えへへー、これで七勝八敗だよ！ 次で追いつくからねっ、バイ
バイー！」

「……噂をすればなんとやら、ですね」

「ちよつと、フランに負けたなら本も置いてきなさいよ」

「借りるだけだぜ！——つと、詩音か。悪い、先帰ってるぜ！
「どうぞ」

「いや緑目の貴方そこは止めなさい——

「……つてああ、もういないし」

「あ、詩音だー！」

「こんにちは、フランさん、お久しぶりですね」

「うん！……本当だ、魔理沙の言ってた通り」

「え、何がですか？」

「さつき魔理沙がね、今日は詩音の目の色が、右と左で違うって言って

「だから」

「……フランさんもそれ言うんですね。私は一応、物心ついたときから今みたいな感じなんですけど」

「えーほんとー？……まあいいや。詩音、一緒に弾幕ごっこしよっ！」

「お、いいですね。じゃあ今回は、私から行かせてもらいますよ！」

「今度は負けないからねー！」

「……ふふ。微笑ましいですね、パチユリー様」

「いや私本盗られたんですけど」

深まる秋、香霖堂にて

『魔法の森、というのは、とても静かでいい場所だ。ここはその入り口とはいえ、その瘴気からか野良妖怪が襲ってくることもほとんどない。人間もそう無作為に訪れる所ではないため、辺りは読書に最適な静寂に包まれている。』

更にここは、春には桜が咲き誇り、今みたいな秋の終わりになると、赤く染め上がった木々が優雅にその葉を落とす様を、存分に堪能することができる。我ながら、なかなかいい場所に店を構えたものだ。

勿論、人里の喧騒を否定するつもりはない。あれはあれで、魅力に溢れるものなのだろう。僕もたまに、気が向くと人里のお祭りに顔を出すことがあるが、その時の活気には目を見張るものがある。

……さて。確かに静かである、とは言ったが、それは僕の店に閑古鳥が鳴いているという意味ではない。ちょうど客足が途切れているだけであり、もう少しすれば、新たな者が道具との出会いを求め、ここを訪れるだろう。なぜなら、僕ほど商売つ気に満ちた道具売りなどいないからだ。

ほら、今日もまた、素敵な道具を求める旅人が、店の扉を開く――

「よお香霖、邪魔するぜ!!」

「意外だね、君にも自分が邪魔だと感じ取る思慮深さがあったとは。自覚があるのなら、お帰りは回れ右して直進だよ」

……客ではなかったが。

全く、これから本でも読もうと思っていたのに。

「……アリスといい、その対応なんかならんのか？　もつとこう、

客を歓迎する態度とか必要だろ」

「何を言ってるんだい、僕ほど客を大切にする商人もなかないないと思うよ」

「なら私は……」

「魔理沙、客って言葉の意味を知ってるかい？　僕が記憶する限り、ロクに買い物もせず、更にはご飯までたかる人物は客に該当しないな」

僕がそう言っている間にも、魔理沙は店にずかずかと入り込んでくる。本当に、どうしてこうも凶々しい子に育ってしまったのだろうか――

「はは……魔理沙さんって、どこでも同じような扱いなんですわね」

「……魔理沙、入り口にいる、あの子は誰だい？　状況的に君が連れてきたんだらう？」

その子は、魔理沙とは対照的な印象を受けた。言葉遣いも柔らかく、何より魔理沙のように無許可で侵入せずに戸口で待っている。是非見習って欲しいものだ。

更に、外見も対照的と言える。魔理沙がいかに魔法使いらしい、西洋風の派手な装束なのに対し、彼女はそれこそ人里から出てきたような、地味な小袖を纏っている。何よりも瞳の色が、魔理沙は金色、彼女は翡翠のような緑と黒とで随分異なっている。

「ああ君、遠慮なく入っていいよ。ここは店なんだ、誰かのように物を勝手に持ち出す、なんてことをしなければ、僕は歓迎するよ」

「あ、そうですか。それじゃ」

そう言って彼女は店に入ると、棚に置かれている商品を物珍しそうに眺めていた。確かにここは、幻想郷の道具だけでなく外の世界の道具まで取り扱っている。初めて訪れた者がそういう反応をするのは、至って自然である。

「……これ、ポケベルですか？　何でこんなものがここに……」

「ん？　君、今何て――」

「おーい、お茶が沸いたぞー。二人も飲むよなー？」

すると魔理沙が、湯気の立ち上る急須を持って奥から出てきた。さつき話しかけたのに返事がないと思っていたら、勝手に台所へ行ってたのか……。

「じゃあいただきます」

「僕ももらうけど。それより魔理沙、この子は誰だい？」

「あーそういえば、どっちにも説明してなかったな。」

香霖、こいつが少し前に話した、こつちとあつちを行き来する外来人の詩音だ。んで詩音、こいつは霖之助って言って、売る気がない物

を見せびらかしてる変な奴だ。お前の話をしたら会いたいわって言うてたから、今日はここに連れてきたぜ」

魔理沙のセリフに一部心外な部分があったが、そんなもの今は些細なことだ。

それにしても、彼女が噂の外来人か。なるほど、魔理沙の説明通り——いや、説明以上に「普通」にしか見えないな。

「そういうことは最初に言うべきだと思っただけだね。まあいい、詩音、初めまして。僕は森近霖之助、変な者などではなく、ここ香霖堂で道具屋を営んでいるよ」

「初めまして、森近さん。私は古卿詩音、天帝より果てなき勅命を承つてるといいな—とか思ってる者です。それよりも、私に会いたいわってどういうことですか？」

……ん？ サラツと流されたが、今何か変なことを言っていたよ
うな気がしたが。

「魔理沙、彼女は……」

「気にしない方が吉だぜ」

顔を向けると、魔理沙は苦笑いしながらそう言った。まあ彼女がそう言うのならば、問題はないだろう。

「……まあいい。それより詩音、僕が君に会いたい理由だったね」

「はい」

「実は、君に教えて欲しいことがあるんだ。ちよつと着いてきてもらってもいいかな」

「大丈夫ですよ」

詩音が了承してくれたので、店の奥に向かって歩き出す。魔理沙も興味があるのだろう、一緒に着いてきた。

「——時に詩音は、幻想郷を覆っている結界について知っているかい？」

「結界、ですか？　確か、普通じゃ行き来できないくらいに強力なものがあるって」

「それはきつと『博麗大結界』のことだね。この結界は、内と外との常識、言ってみれば「普通」を隔てている。君も幻想郷に来て、驚くこ

とが沢山あったんじゃないか？」

「そうですね。瞬間移動する九尾さんとか、瞬間移動するメイドさんとか」

「……彼女は瞬間移動に特別な思い入れでもあるのだろうか。確かに珍しい技術ではあるけれど。」

「実はもう一つ、幻想郷を覆う結界——というよりは境界かな、それが存在してるんだ」

「あれ、そうなのか？ そいつは初耳だな」

「まあ妖怪でない魔理沙には関係が薄いからね、知らなくても無理はない」

と、ここまで話していると、目的地である倉庫へとたどり着いた。懐から鍵を探しながら話を続ける。

「それは、『幻と実体の境界』。簡単に言えば、外の世界で幻になったものが幻想郷では現実になるんだ。」

例えば今日、外の世界では、妖怪は幻のようなものになっているんだろう？ だからその分、幻想郷では妖怪の勢力が強いんだ」

「へー……想像以上に詳しいな、香霖」

「まあ、伊達に長生きしてないからね……つと、ようやく見つけた」
錆び付いた鍵を取り出し、目の前の鍵穴に挿し込む。

ガチャリ、と音が響いた。

「……もしかして、それってきつきのポケベルも、ですか？」

「——それが、今日君に来てもらった理由さ。とりあえず、この中を見てください」

同時に、倉庫の扉を開いた。

「——うわあ、スゴい量の道具ですね」

「お前まだこんなに隠し持ってたのかよ……」

「実は、僕には『道具の名前と用途がわかる程度の能力』というものがあってね。文字通り、どんな物であってもそれが道具であるならば、その『あるべき姿』がわかるんだ。」

……ただ、中にはそう簡単にはいかないものもあってね」

興味津々な様子で倉庫の中へと入っていった二人に続き、道具で溢

れる空間へと足を踏み入れる。

僕は、基本的には道具が好きだ。だから今みたいな、道具に囲まれた生活というのはなかなか悪くないと思っている。

しかし、この空間だけは別だ。僕がこの空間から感じるのは、喜びよりも「異質さ」の方が大きい。

……何せ、ここにあるのは、僕の理解を遥かに越えた物たちであるからだ。

「ご察しの通り、幻想郷には外の世界の、忘れられた道具なども流れ着く。あのポケベルも、今外の世界がどうなのかは知らないけれど、まあそんな感じなんだろう?」

「そうですね。最近じゃあ、あれの上の上の上、くらいの商品が広く使われてますから」

「そういった道具を拾って、僕は商売をしているんだ。使用方法はわからないんだけど、それを推察するのも楽しかったりする。ただ——
……一部、『用途』の意味がわからない物があつてね。ここには、そういう類いのものが集めてある」

そう言つて、壁に立てかけてあつた、魔理沙の身長よりも大きいそれを詩音の前に持ってきた。

「用途がわからないつてどういうことだ?」

「そうだね、例えばこれ。詩音はこの人形に、見覚えはあるかい?」

「……なんか、見たことはある物の成れの果てに近い気がします」

おや、意外だ。こんな用途の意味がわからないものならば、きっと知らないと思つていたのだが。

「この名前は『チキン屋の人形』。そしてその用途は、『熱狂に乗じて川に沈められる』となつているんだが、これは一体——
「ブフォツ!!」

いきなり詩音が吹き出した。どうしたというのだろうか。

「お、おい!!　いきなりどうしたんだ!?　大丈夫か!」

「い、いえ、大丈夫です。」

……そういえば、そんな事件ありましたねえ……」

事件?

「どういふことだい?」

「あー、えーつとまあ、生まれる前の話なんで私も詳しくは知らないんですけど。でも確か、ある地域の人たちが盛り上がりつつ人形を川に投げ入れた、っていう事件があったって聞いたことがありますね」

彼女が生まれる前、ということだから、二十年近くは昔のことなのだろう。それならば、その人形の存在が忘れられ、こちらへと迷い込んでいても可笑しくはない。

「成る程、そうだったのか……ありがとう、詩音。君のおかげで、また違和感が一つとれた」

「いえいえ、私も面白いものが見れたので。……もしかして、ここにあるのって全部こんな感じのなんですか?」

「ああ。ここにはそういつた、用途に異質さを感じる物を集めているよ」

用途、というのは、僕が未知の道具と遭遇した時に判別できる、数少ない要素の一つなのだ。それが、自分で言語化可能なのに理解できない、といった特殊な道具を、流石に店に置いたりはできない。

「へえ……なんか面白そうだな、ここ。コレクター心が揺さぶられるなあ」

「君はコレクターなんかじゃなくて、やたらめつたらに物を集めているだけだろう?」

「言葉の綾だな。また今度鉄クス持ってくるからさ——うわあっ!」
すると、魔理沙の言い訳が途切れると共に雪崩の音が響いた。

見れば、僕なりの秩序で並べてあった道具たちは全て崩れ落ち、ちよつとした山ができています。その一角に魔理沙の帽子が見えることから、あのいたずらっ子の仕業だろう。

「全く魔理沙は。年齢的には成人も遠くないのに、いつまで経ってもお転婆なのがああ……」

「……森近さんは、魔理沙さんと付き合ひ長いんですか?」

半ば呆れていると、詩音がそう尋ねてきた。

「そうだね。彼女の親には魔理沙が生まれるずっと前からお世話になってるし、魔理沙のことも赤ん坊の頃から知ってる」

「そういえば、薄々感づいてはいたんですが——森近さんって、人間じゃないですよ？　見た目二十代くらいなのに、さつき長生きとか言ってたので」

ああ、そういえば詩音は知らないのか。僕の元を訪ねてくるのなんて、ここ最近では魔理沙か霊夢くらいだから忘れていた。

いや、決して店が繁盛していない訳ではないが。

「半分そうだね。僕は半人半妖、人間と妖怪の間に生まれた、寿命が長いだけの存在さ」

「半人半妖……ハーフですか。そんな方までいるんですね」

興味深そうに詩音がうなづく。さすがに妖怪がいなくなると、外の世界で半人半妖の人物と出会うことは極めて難しいのだろう。そもそも、存在しないのかもしれない。

しかし、妖怪のいない世界とは一体どんなものなのだろうか。幻想郷においては、妖怪が存在することが常識であるからか、僕には想像もつかない。改めて、一度外の世界へ行ってみたいと思った。

「……と、今はこの惨状をどうにかしないと。魔理沙、気絶してるなら教えてくれないか」

「いや気絶してたらどうやって返事するんですか……?」

「まあ私は元気だけどな！　とうっ！」

僕が声をかけたのとほぼ同時に、雪崩で出来上がっていた山が内側から爆ぜた。……少しは後片付けをする者の身にもなってほしい。

そしてその山から姿を現した、彼女の腕が抱えていたものは——

「やれやれ、整理整頓がなっちゃいないぜ。ところで香霖、これは——

「魔理沙っ、ダメだっ!!」

「うおっ!？」

慌てて彼女の腕からそれをひったくる。

異変は……今のところ見受けられない。とりあえず、一安心だ。

「ちよ、いきなりどうしたんだ!？」

「も、森近さん?」

「……………」

どうするべきか。このことを話すのか、何もなかったように隠すのか。

リスクを考えると、後者にすべきなのはわかってる。……が、同時にこの真実を知りたい自分もいる。くそ、怖いもの見たさというのも侮れないものだな。

……幸い、これまで何かと実験してきても特に異変は見られなかった。恐らくは、最悪の事態にはならないだろう。多分。きつと。

「……実はこれは、ここにある道具の中で段違いに危険なものなんだ。下手をすれば何が起るのか、僕にもわからない」

「危険な、道具……？」

「……お前がそこまで焦ってるなら本当なんだろうな。で、何がそこまで危険なんだ？」

……改めて、それを眺める。

よし、決意は決まった。

「これの用途が、『みんなに夢を与えるが、一歩間違うと世界が消される』となっていてね」

「せつ、世界が!？」

「あ、待つてものすごく

嫌な予感が」

「しかもこいつは、名前までもが僕にはよく意味がわからない代物だ。着ぐるみ、というのが何かはなんとなくわかるんだが……」

そして、胴体部分も含めれば人間大もあるそれを、二人が見えるように前へと掲げた。

しかしやはり、この人形らしき道具にはいつまでも慣れない。一種の狂気すら感じられる。

「せつ、それ、は——」

詩音がそれを見て、驚愕の声をあげる。隣の魔理沙も、顔をしかめていた。

「うわあ、何だそいつ……。気味が悪いぜ」

「同感だ。鼻高天狗のように突き出た、鼻とおぼしき黒い物体。異形のように大きな、これまた黒い耳。顔の端から端まで裂け目の入っ

た、鬼のような口——世界を滅ぼす悪魔というのがいるなら、まさしくこんな感じなんだろうね」

「しかも口では笑ってるんだろうが、目に光がない。いつか見た、狂気に染まった瞳にそっくりだ」

「ちよつ、二人ともつ、それ以上は止めといた方が……！　ま、まだ、まだ描写が少ないから、なんとか誤魔化しが効くかも——」

ふと詩音の方を見ると、かなりの汗をかいていた。

まあ、無理もないだろう。世界を滅ぼす物を見て、動揺しない訳がない。

「ところで詩音は、こいつに心当たりはあるのかな。僕的能力によれば、この名前は『ミツ——」

「アウトオオオオ!!　はいアウトオオオオ!!　あああーっ！

あああああああつ!!　ダメだツ、それ以上はダメだああああ!!!」

急に詩音が動転し出した。一体どうしたというのだろう。

「ちよ、おい詩音?!　落ち着けて、確かにこいつは今にも、異様な声で『ハハツ♪』とか言いそうだが——

「あああああああ!!　あああああああああーっ!!!」

これはあくまで個人的意見っ!!　これはあくまで個人的意見っつ!!　わ、私は映画も夢の国も（物価高いけど）好きですから好きですからー!!!」

天に向かい、彼女は雄叫びを上げていく。本当に一体どうしたというのだろうか。

「はあ、はあ、はあ……」

「……詩音、一旦落ち着いてくれ。そして、詳しいことを教えてくれなにかい?」

とりあえずそれを床に置き、詩音に優しく語りかけると、詩音は冷静を取り戻したようで、一度大きく呼吸をした。

「はあ……。今、この世界が消えかけましたよ……」

「なっ……!?!」

「それは本当かい?」

僕には、これが機能する素振りも見えなかつ

たんだが……」

「それが著作権の恐ろしい所です。森近さん、出来ればそれ、もう人前に出さず、話題にも挙げない方がいいと思いますよ」

そこまで言われれば是非に及ばない。

もう少し詳しい情報が得られるかと期待もしたが、どうやらこれについては喋っただけでかなりの危険を孕んでいるようだ。流石に世界に滅んで欲しくはないため、そこは自重しておく。

「……他にもこんなのがあったら怖いので、私ももつと、ここにある道具を見させて貰ってもいいですか？」

「ああ、もちろんだよ。何か気づいたことがあったら教えてくれ」

そう言くと、詩音は倉庫内の物色を始めた。魔理沙も若干腰が引けているが、それに続いていく。

……とりあえず、店の方に置いてきた湯飲みを取ってくるとしよう。

「なあ香霖、この青と銀色の、湯飲みっぽい形のやつは何だ？」

「ああそれかい。それは『空きカン』と言ってね。似た形で同じ名前のものは前にも拾ったことがあるんだけど、それだけ用途が『翼を授ける』というよくわからないものになっているんだ」

「翼？」

「し、CMですか……」

古卿詩音という人間について、気になる点がいくつか存在する。

まずは、なんとと言ってもその能力だろう。粗方のことは魔理沙から聞いたが、弾幕を放つだけでなく、何も無い所から剣を出す、相手の能力を無効化する、挙げ句の果てには博麗大結界を越えるなど、とにかく強力なのは間違いない。それなのに、本人ですらよくわかっていないという、その不可思議さ。それらは、注目するに値するだろう。

……だがそれらは、幻想郷においてさして珍しい話ではない。魔理

沙の話によれば、詩音が弾幕ごっこをしていた相手の吸血鬼も剣を出していたそうだし、結界を越えるのだからスキマ妖怪はいとも簡単にやってみせる。妖怪と比べるのもどうかとは思いますが、どちらにせよ彼女が、幻想郷の常識に収まっていることに違いはない。

そもそも、能力を持つ人間というのも、人里には一定数存在している。その中でも強力なものとなると数は絞られるが、それでもゼロではない。また人里の者ではないが、霊夢の『空を飛ぶ程度の能力』や、この間来たメイドの『時間を操る程度の能力』など、人間としては破格の能力を持つ者もいる。

故に、詩音もそのような者の一員である、と考えれば、何ら不思議な点はない。

……問題は、そこなのだ。どうして彼女は――

「ばっ、バーロー……!?!」

「……ん? どうしたんだい、詩音?」

と、僕が考え事にふけていると、詩音が小さく叫びを上げた。その手には、見覚えのある一枚の板が握られている。

「ああ、それかい? それは『見た目は子供な名探偵の愛車』だよ。用途が『大事なところで故障する』となっていて、それじゃあ道具として成り立っていないからここに置いてあるんだ」

「や、やっぱり……。架空のものまで幻想郷には流れてくるんですね……」

詩音の持っていたそれは、少し前に拾ったものだ。昔に一度だけ見かけた、スノーボードというものに似ていたため持ち帰ったが、今言ったような本末転倒な用途であると判明したために、ちょうど持て余しているものである。

「大事なところで故障する……?」

……あ、劇場版ですか。確かに、結構な割合で故障してますねこれ」

「……もしかして詩音は、それを知っているのかい?」

「ん、何だ何だ、面白いもん見つかったのか?」
僕らの話を聞きつけて、好奇心旺盛な魔理沙もこっちに近づいてくる。

もう一度、魔理沙にも詩音の持つ板について説明していると、再び詩音が突然声をあげた。

「——そうだ。森近さん、これ貰ってもいいですか?」

「どうしたんだい、急に?」

「いいもんなのか、それ? 聞いた感じだと、あんまし役に立たなさ

そうだと思うんだが」

「ちよつと、いいこと思いつきまして。……ダメ、ですか?」

「いやいや、君には色々教えてもらったんだ。実は僕も、その処理に困っていてね。君が良ければ、それはお礼として差し上げるよ」

そう伝えると、詩音は嬉しそうな顔をした。

そしてそれを、目の前の床に置く。

「……何するつもりだ?」

「ほら、私飛べないじゃないですか。紅魔館に行くのに、毎回魔理沙さんの箒に乗せてもらう訳にもいきませんし。

だからたぶん、あれと同じ要領であれをあれすれば……」

「あればつかで意味がわからないぜ」

魔理沙の苦言も気に留めず、詩音はまぶたを閉じて何やら集中を始めた。

流石にその邪魔は出来まい。魔理沙も僕も、それに合わせて口をつぐむ。

しばし、倉庫の中に静寂が響く。

——次に、彼女が目を開いた時、その美しい緑色の瞳は更に艶やかに、光輝いていた。

そして、その手には——

幻技『飛翔の奇跡・永続版』

そう宣言した瞬間、詩音はそのスペルカードを——思いつきり、床に置いたその板へと叩きつけた。

衝撃で、先ほど魔理沙が創り上げた道具の山が、再び崩落を開始する。

「えっ、ちょよ!? 詩音、何やってんだホントに!」

……本当に、どういうつもりなのだろう。いきなり右手に、スペルカードが現れていたのにも驚いたが、弾幕を放たず叩きつけるとは、一体どういう……?」

「……どうやら、上手くいったみたいです」

すると彼女はそのまま、本当に一発も弾幕を放たないままスペルをブレイクした。

魔理沙の話から、剣でも出したのかとも思ったが、詩音自身にはどこも変わった様子がない。いつの間にか、左目の輝きも収まっている。

あと見ていないのは、今まさに詩音がその上に乗ろうとしている『見た目は子供な名探偵の愛車』くらいだが――

「――な……っ……!」

目を疑った。

いや、この場合だと『能力を』疑った、と言った方が正しいか。

そしてこれほど、得体の知れなさに心がすくんだのは、久しぶりだった。

「よし、じゃあバーローのスケボー――はちよつと著作権的に危ういので、『スケボー君』とでも呼びましょうか」

そんな僕と、未だ怪訝な面持ちの魔理沙をよそに、詩音はその板――彼女が名付けた『スケボー君』に乗り、何かをしようとしている。

……僕の能力が間違っていないければ、たぶん――

「スケボー君、飛べ!!」

彼女の掛け声と同時に――それまで何の変哲もなかった板は、空中を浮遊し始めた。

「うおおお!!」 え、詩音、本当は飛べたのか?」

「いえ、そうじゃなくて。今のスペルでこのスケボー君に、试试看れば『飛行属性』を追加してみました」

「飛行属性……?」 つまり、飛べるようにした、ってことか?」

「平たく言えばそうですね」

そう言うとな彼女は、試運転とでも言わんばかりに倉庫の中を飛び回り始める。というか、本来ここは飛び回ることができる程広くはないのだが、ギリギリで柵を避け、決して道具の山を崩すことなく、詩音は縦横無尽に飛翔している。おそらく平衡感覚とかその辺が、元々かなりのものなのだろう。

そんな詩音を見て魔理沙は、うおおさすが詩音ー、などといった呑気な歓声を上げている。

……本当に、呑気なものだ。彼女が何を仕出かしたのか、わかっていないのか。

いや、魔理沙だけではない。張本人の詩音も、どうやら自分がどれほどのことをしたのか、理解していないようだ。何故なら、先ほど詩音は『属性を追加した』と言っていたから。

……彼女が今、行ったことは、そんなヤワなことじゃない。だって

——道具の用途が、塗り替えられているのだから。

「やっぱ自分で飛べると気持ちいいですねえ。ね、森近さん——森近さん？」

言うまでもないことだが、道具というのは神々から名前をつけられて、初めて「道具」として認められる。僕が道具の名前を読みとることができるのも、その神々の意志(という程に大層なものでもないが)に近いものが道具から感じ取れるからである。

実は、道具の用途というのも、太古に神々が名付けを行った時に生まれるものなのだ。『言霊』という単語が示すように、言葉には音声であること以上の力が籠っている。それまで何の名前もなかった「物体」に、神が言の霊をあてがうことで初めて、それが「道具」となり用途を得るのだ。

……つまり詩音はその、神々が与えた用途を、自分の望み通りに塗り替えたのだ。これがどれほど畏れ多く、また得体の知れないことなのかは、言葉に著さずともわかるだろう。

……だが。

推測ではあるが、スキマ妖怪ならば用途の境界を操ることで似たようなことは可能なのだろう。

かのメイドの主人である、運命を操る吸血鬼ならば、きつと道具の運命を意のままに導くことができるのだろう。

何よりここ、幻想郷には、数多くの神々が暮らしている。彼女たちの中に、道具の名付け親がいるかはわからないが、それでも神の存在は幻想郷において常識なのだ。

……そう、詩音はやはり、幻想郷の常識の範囲内で事を起こしている。

そこが、何よりの問題なのだ。どうして、どうして彼女は――

――外界の民なのに、幻想郷の常識が通用するのだろうか？

「おい、香霖。おい」

先ほど二人に説明したが、ここと外の世界は『常識』と『非常識』によって隔てられている。よってもしも、外の世界の常識と幻想郷の常識が一致するような事態が発生した場合、それは即ち幻想郷の崩壊を意味する。

――つまり、外の世界の出身である詩音が、幻想郷の常識に則って行動することは本来あり得ないのだ。

それに、仮に彼女が幻想郷の常識に収まっていたとしても、そうすると今度は外界での生活に支障をきたすだろう。自分にとって非常識なものに囲まれて生活するのは、生半可なことではない。

要するに彼女、詩音は、どちらの常識も持ち合わせる――言ってみれば、どちらにいても『普通』なのだ。

これは、とても恐ろしいことである。彼女の存在自体が、未曾有の事態であると言っても過言ではない。

そもそも、一体どうしてこんな――

「おいっ、香霖!!」

「――ん？　　ってうわっ。ど、どうしたんだい魔理沙」

「それはごっちのセリフだぜ……急に黙りこくって、怖い顔して。何があったんだ？」

気づくと、視界一面が魔理沙の顔だった。そんなに近づかなくてもいいものを。

その後ろでは、詩音が少し不安そうな面持ちでこちらを見つめている。……そんなに怖い顔をしていたのかな。

ふむ……というか、今この場に本人がいるんだから、彼女に聞けばいいじゃないか。普段は一人で考察しているばかりに、他人に尋ねることをしないのは、僕の悪い癖なのかもしれない。

「——じゃあ詩音。いくつか尋ねたいことが増えたんだけど、ちよつといいかな」

「え？ ええ、もちろん大丈夫——」

「ならまずはその能力だ、魔理沙に聞いた所によると自分の能力が何であるかわかっていないようだが使っていればなにか気づくことがあるんじゃないかな、例えば僕であれば道具から発せられる記憶が読みとれるし魔理沙だったら魔法道具の使い方が自然とわかるといったみたい。ちなみにこれは僕の予想だけど詩音の能力は事象を司る何かに関連があるんだと思うんだ、剣を出すのも結界を越えるのも道具の用途を塗り替えるのもそれに繋がるしね。それが本当だったら君が有する可能性はとんでもないことになる、何故なら事象を操るとはかのスキマ妖怪の能力にも通じるものがあり——」

「……え、えーと、えーと、ま、魔理沙さん、私はどうすれば——」

「諦めろ」

「ええ!?!」

「こうなつた香霖は誰にも止められないぜ。それこそ隕石でも降つてこなけりやな」

「——つまり彼女の境界を操る能力は論理的想像と破壊を意味する恐ろしい力なんだ。しかし君の行っていることもそれに十分匹敵するのだよ、何故かと言うと君は二つの異質な世界の常識を股にかけているからだ。これが詩音に聞きたいことの二つ目で君はどうして幻想郷の常識に収まるかが可能なのかということだ。常識というのは僕らを囲む日常の重要な要素でありこれを隔てることによつて幻想郷は外と隔絶されている、というのはもう言ったか。しかし常識とい

うのは幻想郷を成り立たせるだけでなく多くの事象を司るものなんだよ、これは常識により我々の認識が少なからず制限されることから容易に窺い知るのにはできるね、簡単な例で言えば錯覚とかさ。僕の推測だと君が常識を越えられるのもその能力に関連しているんだろう、どうしてかという常識を隔てる博麗大結界を越えていることが一番の根拠ではあるんだけどそれだけではなく——」

「……魔理沙さんって森近さんに似たんですかね」

「どこがだ？」

「……圧迫面接？」

「これと一緒にされるのは甚だ心外なんだが」

「私も言ってますでした」

「——しかしここで一つ疑問なのは詩音が飛べないということだ、でもこの問題も君が外界の常識を持ち合わせていることの根拠となり得るものであり——」

閑話：一人の姉

ある昼下がりに。

「そういえばレミリアさん、フランさんと仲直りはしたんですか？」

「ぶっ!!」

「おっ、お嬢様紅茶が！ なんととも幼く健気でお美しい！」

おいメイド。

——その夜。

「……………」

「——ぱ、パチエ」

「……………あらレミイ。おはよう」

「今日は昼から起きてたわ。……………それよりも、あの、ええと……………」

「何よ」

「……………一つ、相談に乗ってくれるかしら？」

「高く付くわよ」

「今度詩音に、外来本を持ってくるように頼むわ」

「乗った。……………それで？」

「……………」

「レミイ？」

「……………ねえ。フランは、フランは——」

——どうやったら、私を許してくれるかしら……………」

「……………は？」

「普通に謝りに行く？ いやでも、私を部屋に入れてくれるかもわ

かないし……………じゃあ、好きなものをどんどんあげれば心を開いてく

れるかしら……………」

「ちよ、ちよつとレミイ、思考が一人で先走ってるわよ」

「——そう、ね。悪かったわ」

「んで？ フランがレミイを許すって、一体どういう——

「ねえパチエ、教えてよ！ どうすれば、四百年以上も地下に閉じ込めていた姉は許して貰えるのっ!？」

「……ああ。そういう……」

「普通に謝って許されるようなことじゃないし、かといって他に道が見当たらない。折角詩音がフランに光を照らしてくれたのに、私は、私は……!!」

「なんか随分とこじらせてるわね」

「ねえパチエ、悟ったような目をしてないで教えてよ！ 私はどうすればいいの!？」

「……お得意の、運命を見ればわかるんじゃないの？」

「……………」

「こ？ コンドラチエフ？」

「怖い……」

「その心は？」

「私が下手に接触して、フランを傷付けて、今度はフランが自分から地下に籠る、なんてことになっちゃう未来しか想像出来なくて……それを見るのが、こ、怖いよ……」

「(美鈴から聞いた限り、そんなことは絶対に起こらなそうなんだけど……あの子、異変終わって私が目を覚ましたらベロンベロンに酔っぱらってたし。レミイにちゃんと伝えたのかしら?)」

「ねえパチエ、聞いているの!？」

「んあ。聞いている聞いている」

「はあ……一度、詩音に異変の時のことをしつかり聞くべきなのかしら。なんだかんだ聞きそびれてるし、唯一見届けてた美鈴に聞こうと思っただら、めちやくちや酔っぱらっちゃって結局聞けずじまいだったし……」

「やっぱりか。あの戦犯め」

「何か言った？」

「なんでも。……なら、そんな遠回りなことせず本人に聞けばいいじゃない」

「本人って?」

「フランに」

「そうねえ、フランにねえ——いやいやいや話聞いてた!? それが出来ないからこうして困ってるのよ!」

「チツ」

「舌打ち!?! 今舌打ちしたでしょ!? ねえパチエ、私は本気で悩んでるのよ!?! ねえ、もつとちゃんと考えてよ!」

「いやだって、要するにレミイがビビってるだけじゃない」
「うぐツ」

「そもそも今回の問題だって、レミイが四百年以上も放置し続けたから起こったものでしょ?」

「ぐはツ!」

「そんなレミイを見ていて、多感な妹はこう思いました。——『はあ。そんな情けないお姉様なんて、キ・ラ・イ』」

「ひでぶツ!!」

「……ごめん、最後のはふざけすぎたわ。謝るから、そんな今にも灰になりそうな顔をしないで」

「いや……きつとパチエの言うとおりだわ。ずっと閉じ込めていた姉なんて怖いだろうし。それに、そんな自分のことしか考えてない奴なんて……」

「……きつ、キライっ、よねえっ!」

「泣きながら言わなくても……」

「ひつぐ……いいのよ、自らの行為が招いた、ひつぐ、じ、事態なんだからっ」

「はいハンカチ」

「あつ、ありがとう……ズビーツ」

「おい鼻をかむな鼻を」

「ズズツ——はあ、私は、一体どうすれば……」

「……まあ、私に言えることは、地道に頑張れっただけね」

「……そうよね。ありがとう。」

——あ、あともう一つ、パチエに頼みたいことがあるんだけど」

「何？　泣き虫レミイとフランの仲立ちとかお断りだけど。面倒そうだし」

「なっ、泣き虫って何よ！　それに今ちやつかり面倒って言ったわよね!?　ねえねえねえねえ、面倒って言ったわよね!!!」

「はいはい、で、頼みって何よ」

「まったく、私を何だと思ってるのかしら……。んで、頼みってのは、パチエの魔法を貸して欲しいのよ」

「魔法？　何でまた」

「実は、今度の満月の日にね——

驚き桃の木疎密の気

黄昏時。

それは、人間たちは里に籠り、家族の団欒を楽しむなり酒の席で弾けるなりして、就寝までの余暇を楽しむひととき。

それは、妖怪たちが活動を本格化し、あちらこちらで宴会が開かれ始める時間。

そして外の世界においては、子供たちが学業を終え、帰宅の路につく時――

翡翠の目を持っていようが幻想郷へと頻繁に入り浸っていようが、それは勿論変わらない事実だ。

そんな訳で、外界の暦で言えば平日にも関わらず、珍しくも詩音は幻想郷を訪問していた。いつものような和装でなく制服らしきものを着ていることから、恐らく学校からそのまま来たのかと思われる。

「いやーやっぱ自分で飛べるって、超気持ちいい！ですね」

以前手に入れた飛翔板に乗り、異変時には歩いて通過した木々の間を悠々と飛ぶ詩音。その高度が低めなのは、まだ高所にあまり慣れていないからであろうか。

夕焼けは空を、木々を、空飛ぶ少女を、満遍なく染め上げている。その橙は同じ系統の色ながら、かつて蔓延していた紅とは違った印象を与えている。とりあえず、明日の天気が快晴であることは間違いないだろう。

さて、そんな森の隙間から洩れる柔らかな光を存分に享受していた詩音であったが――

――突如響き渡った、茂みの揺れる音に警戒感を露にした。

「!! だ、誰ですか!?!」

返事はない。

あまり周囲に集中していなかったため、どこからその音が聞こえたのか詩音にはわかっていなかった。ただ、その場に彼女以外の何者かが存在するのは確実だ。

そして、このような時間に人間が外を出歩いていることはまずない

ため——十中八九、妖怪だろう。

詩音の緊張が、急激に高まる。

彼女はこれまで、何度も魔理沙に言い聞かされていた。

『知能の低い野良妖怪には、スペルカードルールなどは通用しない。容赦なく襲われれば命が危ないぞ』と。

何より彼女は、食べることを禁じられている人里の人間ではないのだ。生命の保証などどこにもない。

そうしている間にも、その気配はどんどん近づいてくる。寒さの厳しい中であるにも関わらず、詩音の額には汗が滲む。呼吸が響き、辺りの木の葉を揺らしそうなほどに鼓動が高まる。

そしてそれは目前まで迫り——

「——おどろけー!!!」

……拍子抜け、というのが最も適切な表現だろうか。

木と木の隙間から突如現れた彼女は、夕焼けとは対照的であった。水色の服に髪、趣とは無縁そうなその態度。唯一共通していたのは、手に持つ傘の色合いが、黄昏と夜の境界をなすような紫色である点くらいか。

そんな彼女は、緊張の糸がぶった切られて唾然としている詩音の周囲をうろちよろしている。実に鬱陶しい。

「どう?　　驚いた?　　驚いた!」

「え、えーと……別の意味で驚きました」

無論、悪い意味で、であろう。

しかしそれに気づかないのか、赤と水色の瞳を有する彼女は目を輝かせてはしゃぎ始める。見方によれば可愛いと言う者もいるかもしれないが、今はただ鬱陶しいのみだ。

だがそうしていれば、流石に異変を察知したようぞ。

「……あれ!?　　驚かせたのに、おなかいっぱいになってない!!」

「……お腹?」

「うー、ひもじいよー、おなかすいたよー。もうここ一月くらい、おなかいっぱいになってない……」

「え!?　　そ、それは大変です、よかつたらこのチョコでも——」

突如涙目になり、人間だつたら生死に関わりそうなことを彼女が口にしたために、詩音は慌てて服の中から菓子を取り出した。

しかし、目の前に突き出された指はそれを遮る。

「ち、ち、ち。私たち妖怪は、そんなもんじゃあ心から満たされな
いよ！」

「……?　　じゃあ、どうやったら」

「それは、あなたが心から驚いた時だよ!　　という訳でおどろけ
!!」

そう言うと突然、再び彼女は舌を出し、詩音の前で目一杯身体を
広げる。これで不意を討ったつもりらしい。……何だか、彼女の所作全
てが鬱陶しく感じるようになってきた。

……一応補足しておく、妖怪にはこの青髪のように人間の感情を
糧とする者も多い。彼女の場合はそれが、驚きの感情なのだろう。

と言つても、ついだとばかりに詩音の手から菓子を奪うその姿に
は、あまり説得力もないだろうが。

「んー、あまーい」

「……」

喜怒哀楽の激しい彼女に、詩音はかける言葉がなかなか見つからな
いようだ。

すると彼女が、ようやく普通とは違う点に気がついた。

「——あれ?　　そういえばあなた、人里では見ない格好してるね。
なんで?」

「……」。そうですね、私は外の世界から来ているから——

「えー、本当!?　　あなた名前はー?」

今度は興味津々といった面持ちで詩音に迫る彼女。はっきり言っ
て鬱陶しい。何回目だこれ言うの。

「えーと、古卿詩音です」

「なるほど、よろしく詩音!　　私は多々良小傘、『人間を驚かす程度

の能力』を持つ化け傘だよー!」

詩音は、耳を疑った。

「え……人間を、驚かす?」

「うん!」

「え、あれで?」

「むっ、今私をバカにしたでしょ!」

そういうことには目敏い彼女——もとい、忘れ傘の付喪神、小傘であつた。

だがまあ、詩音の反応は当然であろう。何せあの襲撃である。あれで驚く方が難しい。

しかし、どうやらその発言は小傘の琴線に触れるものであつたようだ。

「あまり舐めないでえもりたいもんだねえ……わちきには、付喪神なりのぽりすういというのがあるんでえござんすよ!」

「何ですかその口調」

「わちきのぽりすうい、それは、食糧確保には能力を使わないこと!

これだけは譲れないね—」

……それで餓死したら本末転倒な気がするのだが。

どうだ、と胸を張る彼女に対して詩音が思ったことも、恐らく同じであろう。

「……小傘さん、私からあなたに、こんな素敵な言葉を送りましょう」

「ん、なにになに?」

「そんなプライド犬に食わせておけ」

「ひっ、ひどい!」

存外に毒の強い発言に、小傘は再び涙目になっている。

「……ありや、ちよつと言い過ぎましたかね」

「ふ、ふん、いいよ、目にも物を見せてあげるからね!

驚き過ぎて

チビつちやつても知らないんだから!」

しかし、それでも小傘はめげなかつた。発言は思い切り小物だが、目を閉じて何かに集中し始める。その顔は真面目そのものだ。

展開が急過ぎていささか追い付いていないようだが、とりあえず静かになった彼女に合わせ、詩音も口をつぐんだ。

そして、小傘が目を開いた時——

「……え!? 小傘さん、左目が赤く光って……!?」

それは、色は違えども見覚えのある光景で。

そのまま小傘は、

「——うらめしやー!!!」

詩音の後方、何も無い虚空へとそう叫んだ。

……開いた口が塞がらない、とはこのことだろう。

元々どこか抜けていそうな少女だったが、まさか幻覚まで見てしまうとは。呆れを越えて、可哀想になつてくる。

たぶん同じようなことを思ったであろう詩音は、かける言葉も見つからず。とりあえず小傘の肩にそつと手を置こうとして——

そこには、詩音のものよりも小さな手が既に置かれていた。

「——!?!」

「——こりゃあ、驚いたな。まだ異変も起こしてないのに、まさか付喪神に気づかれるとは。お前さん、見所あるねえ」

「へへー、驚いたでしょー」

同時に、詩音のでも小傘のものでもない声が響く。その突然の現象に、詩音は訳がわからず目を白黒させる。

そうして詩音が混乱している間にも、小傘の目の前に何かが少しずつ集まっていた。最初はただの霧のようだったそれも、次第に一つの形を成していき——そこには、大きな角の生えた、小傘よりも小柄な少女が出現していた。

「よー。こんな年の瀬にご苦労なこつた。紅霧異変の真の解決人、古卿詩音さんや」

「あなたは……?」

「私? ふっふっふ……聞いて驚け!」

「見て笑えー!」

「かつて山を支配した鬼の四天王が一角、伊吹萃香たあ私のことさ!」
「イエーイー!」

そう言うと、『小さな百鬼夜行』伊吹萃香は瓢箪の中身を飲み干し、手を高く挙げ小傘と打ち合わせた。周囲に漂う芳香とその赤く染まった顔から、瓢箪の中身はもしかしくなくても酒だろう。

「鬼ですか……。いやまあ、いそうだとは思ってましたけど。それよりも、あの、酔ってますよね?」

「はっ、あたりめーよ! シラフだったのなんて何十年前かね!」

ほら、詩音も飲め飲め!」

「えっいや私まだ未成年——」

「なー!? 私の酒が飲めないってのか?」

その勢いにたじろぐ詩音だが、萃香はそんな彼女などお構い無し。必死に抵抗する詩音の口に、その瓢箪をぐいぐい近づけていく。

「いやだから私まだ未成年なんですって!」

「そんなのは外の世界の法だろ? 幻想郷にや関係ないね」

「でも私が飲んじやったら萃香さんの分が——」

「心配には及ばないよ。なんとたつてこれは無限に酒の湧く秘宝、伊吹瓢だからね! さあ飲め飲め!」

「何ですかそのRPGのボーナスアイテムにありそうなやつ! いやーっ! アルハラ反対ーっ! 急性アルコール中毒で死んじやうーっ!!」

しかし、鬼の髓力に人間が敵う筈もない。

必死の抵抗も虚しく、詩音のまだ穢れのない口に鬼の秘宝が突き刺さり、穢れも神聖さをも巻き込み酩酊の彼方へと持ち去る大量の、白濁の液体が、詩音の身体を一步大人へと近づけてゆく——

「——おっと、それは困るね」

——ことはなかった。

突如解放される詩音。状況がよく飲み込めていないようだ。

「……え、急にどうしたんですか? まさか不殺の誓いこころいそでもしてるんですか?」

「いいや、てか何それ。そうじゃなくって、詩音に何かあると私が泉熙みつきに怒られちゃうからさー」

まあわざわざ中毒死させる気もないけど、と萃香再び酒を呷る。

……その、瓢箪を持つ手首には、詩音にとって見覚えのある鎖がつけられていた。

「泉熙さん、ですか?」

「ああ。詩音、異変ん時に泉熙と約束してたでしょ？　次会った時に弾幕ごっこしよう、って。鬼の約束を鬼である私が破らせる訳にもいかないしね」

それは、四ヶ月程前に一度見た、ある少女の手首にもつけられていたもの。

その時も詩音は、それが何であるか気になっていた。それを萃香もつけていて、尚且つ今の萃香の発言。そこから導かれることは――

……しかし、ここで一っだけ疑問が残る。

「……あの、萃香さん。泉熙さんって、人間なんですよ？　あの時そう言っていましたし」

「人間……？」

……っはははは！　そうか、そうだったなあ!!」

詩音の尤もな質問を聞いて、何故か萃香は笑い出した。その反応に、益々詩音は混乱していくばかりである。

「はははっ！　またあいつは、ギリギリ嘘でないことを言……！」

「え……ギリギリ嘘でない、ですか？」

すると萃香は、沈みつつある太陽と詩音との間にその身体を持っていく。

詩音は思わず、眩しさから目を細めた。

最も煌めきが強くなる夕焼けを背に。

短いながらも大きく、その両腕を広げ。

妖しさを感じさせる笑みを浮かべながら。

「そうさ!!　あいつは、八瀬泉熙は、私と同じ鬼の四天王に数えられる妖怪にして、人間の血を引く稀有な存在！

――鬼と人間の間に生まれた『半人半鬼』さ！」

萃香は声高々に、そう告げた。

「半人、半鬼……」

「にしし、まあそういうこと。鬼ってのはね、嘘をつかれるのが何よりも嫌いなんだ。だからまた、あいつに会った時にや是非戦ってやっとな」

そう言うと、萃香は再び酒を飲み始める。その姿は何故か、ひどく嬉しそうだった。

黄昏時の頂を通り越し、周囲の木々には陰が目立つようになってきた。昼と夜の均衡は完全に後者の優勢に傾き、このままでは間もなく世界は暗闇に覆われるだろう。しかし、その闇は決して生物と相容れないものではない。むしろ、そこにあるからこそ日の出を、夜明けの光を感じさせるような、かけがえのないものではないだろうか。

そんな感傷を見る者の心に浸透させるように、昼と夜の境界である黄昏時と、更に夜との境界を成す紫の空が、二人の視界一面に広がっていた。

「……まあ確かに、普通の人間じゃあないとは思ってましたけどねー」
「ははっ、不可思議幻想人間の詩音に言われたかねーだろうな。あいつもまだ百歳ちよいだし」

「なんですかその二つ名。ってか百歳って十分長生きですけど」
「そうかい？ 私らの中じゃ一番年下だけどね。なのに四天王って呼ばれてんだから、あいつは本当に面白いやつだよ！」

広がってはいたが……そんなもんお構い無しに、萃香は上機嫌でぐびぐび瓢箪を呷っていく。その姿は正直、感傷もへったくれもない。
「やっぱ私の育て方が良かったんだろうね、うん違うない！」

「そういうこと言う人に限って反面教師だったりするんですよ」
「私は人じゃないから問題ないな！」

そう言っている間にも、大量の酒が驚愕の速さで萃香の体内に消えてゆく。いくら鬼とはいえ、さすがに飲み過ぎだろう。こういう所が、会ってばかりの詩音に反面教師呼ばわりされる理由なのだが。

そんな彼女を見ていて……ふと、詩音はある点が気になった。

「——そういえば、萃香さんが泉熙さんを育てたんですか？」
「ん？ ああ、まあ私っていうか、鬼のみんなで育てたね」
「ってことは、泉熙さんの親って——」

「そういえば詩音、どこかに向かっているんじゃないか？」
「え、え——あっ」

萃香に言われ、辺りを見渡す詩音。既日は沈み、二人のいる森はそのほとんどを暗闇が支配していた。

「ヤバっ、紅魔館に招待されていたのを忘れてました！ 折角部活終わってから直で来たのに……」

「なら、早いところ行った方がいいんじゃない？ ほら、あの吸血鬼待つの嫌いだし」

「そうですね、それじゃあ全速力で向かわせてもらいます。では萃香さん、またー！」

「おう、またなー」

そのまま詩音は暗闇の中、飛翔板に乗り彼方へと消えていく。彼女が巻き起こした突風により、木々がざわめくように、音をたてて揺らいでいた。

残った萃香は、再び酒を飲み始める。よくもまあ飽きないものだ。だが、夜の帳に一人漂う彼女は先ほどまでのように、酩酊者の底がない明るさは纏っておらず――

『意識拡散』……悪いね、詩音」

遙か頭上に煌めく星々に、そして登り始めた満月に、懐かしむかのような視線を送っていた。

「泉熙の親、ね……」

あいつもきつと、詩音を、今の幻想郷を見れば――」

――それは、年の瀬も近い、何でもない冬的一幕。

「……あれ、そういえば小傘さん、気づいたらいなくなっていましたね。一体どこに――」

「うらめしやー!!!」

「ぎゃああああああ!!!」

あ、あ、あ――『アイシクルフォール』

!!

「へあ——!?!」

「……んむ？ さっきのは——」

「さ、寒い……動けない……」

「!! ふ、ふん、あたいにたてついたので運のつきよ！ なんとたつ

て、あたいはサイキョーなんだから!!」

「チルノちゃん、なんかすごい声が聞こえてきたけど……」

「あ、大ちゃん！ やっぱりあたいはサイキョーだね！」

「ど、どうしたの——」

「……聞かなかったことにしましょうか」

Extra Story —永遠に幼い二つの月—

①

不可思議幻想人間の詩音が、不可思議霧状妖怪の萃香と出会ってから暫くして。

彼女は目的地であった紅魔館の、その地下にいた。

「——あなた方は、息を飲みながら目前の紅い扉を開ける。どうか、この色はただの装飾であってくれと、先ほど感じられた、鉄に似た香りは気のせいであってくれと、そう願いなながら」

「ゴクリ」

「ワクワク」

「……………」

「三人が足を踏み入れたその部屋は、窓のない、暗闇が支配する空間でした。しかしその手に持つ蠟燭の仄かな光から、その部屋も廊下と同様、壁も床も紅一色に染まっていることがわかります」

「ふむ……キーパー、情報はそれだけかしら？」

「……辺りを漂う冒流的な芳香が、より強くなっています」

「うえー!? ぱぱぱパチュリー様、それってつまり——」

「落ち着きなさい小悪魔。もうこの部屋しか残っていないんだから、ここを調べるほかに私たちが救われる道はないわ。……たとえばどんな光景が広がっているかと、ね。」

フランも、それでいいわよね」

「うん！ さーて、何が起るのかなー!?!」

「フランさんは無駄に元気ですね……。じゃあ、三人は部屋の奥へと進む、という事でおつけーですか?」

「ええ」

「それじゃ、部屋を進むと——蠟燭の光の範疇に、何かが映り込んだ」

「それは、あなた方には酷く見覚えのあるもの……。しかし、その姿で見ることは、決してあつてはならないもの。」

真つ紅な床とは対照的に——それこそ“病的な”までに白くて。本来つながつている筈のものと離された——人間の、片腕でした」

「きゃああっ!!」

「うおーっ!」

「……うわあ」

「しかし、現実はそのようなものではあなた方を許すことはありません。その悲劇的な痕跡の奥には、更に悲劇的な光景が広がっていました」

「こ、今度はなんですかあ!?!」

「部屋の最奥部、最も闇の巢食う一角に打ち捨てられていたのは、腕、脚、胴体、頭、顔、顔顔顔——

——最早、それらが元々何人のものであったのかもわからない程に切り離された、数多の骸でした。

あなた方の中で大切な何かが、音をたてて崩れてゆく——SAN チェック、入ります。成功で1、失敗で1D6のSAN値消失です」

「32成功。これは、想像しただけでもグロいわね……」

「07成功! ふふっ、私はまだまだ平気だよー!」

「85失敗! ダイスロールにより6のSAN値減少!!

ギャアーツ!!」

「お、小悪魔さん最大値引きしましたねー。それじゃあ一時的狂気に陥ったか、アイデアロールです」

……何やら物騒な遊びをしているようだが。

現在、彼女たちはここ図書館にて、四人で円卓を囲んでいた。詩音、フランドール、パチュリー、そしてパチュリーの使い魔である小悪魔。既に詩音が紅魔館を訪れた回数は一十を越えており、ここの住人ともかなり打ち解けられているようだ。

「ううー、お願いしますよダイスの女神様ー!」

「悪魔が女神に祈るだなんて滑稽ね」

「そういうことはなしですよっ、とりやあつ!」

……ぜ、03……」

「うわークリティカル。まあ狂気判定なんであんまり関係ないですけどね。

つてことで、小悪魔さん一名を一時的狂気の世界へご案内。十面ダイスを振って、内容を決めて下さい」

そんな四人が行っているのは、どうやら外界で有名な遊戯の一つのようだ。まあ間違いなく、中心となって仕切っている詩音が提案したものだろう。

……こんな描写のあるものを選ぶあたり、もう流石としか言いようがない。

「ねえ詩音、これ何てゲームだっけ？」

『クトウルフ神話TRPG』ですね。一回やってみたかったです
が、なにぶん趣味の合う友達がいらないんですよねー」

「ふーん、すごく楽しいのよねー」

「……あのシーンの後にそんな満面の笑みで言われると複雑ですね
……」

あ、良かった。ちゃんとそこら辺の感性はまだ持ち合わせていたよ
うだ。

そんな彼女らがいる図書館も、遊戯の中での場面と同様に蝋燭が仄かな光量を供給するのみで、全体的に暗澹とした雰囲気である。その様な部屋に巨大な本棚と大量の本が凝集しているため、慣れていない者からすれば中々に不気味な光景だろう。よくもまあそんな空間で、あのような描写ができるものである。

この場所は地下であるために確認は出来ないが、外も既に日はとつぷりと暮れ、暗夜が世界を支配している。即ち今は、夜の帝王たる吸血鬼の気分が最も高揚する時間帯である、ということだ。

さてそんな風に、ぎゃーぎゃー悲鳴を上げている小悪魔の横でフランドールも四人での遊戯を楽しんでいた。

彼女のそんな様子を見て……詩音は何かを思い出したようで、フランドールへと詰め寄る。

「そういえばフランさん、ゲームとは全く関係ない話になりますけど。

あの件は、どうなりました？」

「あの件って――」

「詩音さん詩音さん！ 感情の噴出って何ですかっ!？」

「簡単に言えばヒステリーですね。急に泣いたり笑ったり。まあその辺は小悪魔さんの裁量に任せます。」

「……んで、フランさん。レミリアさんには、ちゃんと謝ることができましたか？」

「え……」

すると、フレンドールは息を飲み——俯いて、黙りこくってしまった。

「……………」

「……気が引けるのもわかりますけど。でも、ちゃんとレミリアさんには、自分がやってしまったことを謝っておかないと」

「で、でも——」

「キヤハハハハハ死体よシタイ!! キヤハ、きやああああ!!」

「……こんな感じでしようか」

「まだまだだね、泣きが足りないわ」

「びえー……ん!! どうせ、どうせ私たちはもうオワリですよ
キヤハハハハハ!!」

「……五月蠅いですね……」

いや、それならこんな混沌とした遊びを選んだ詩音自身が悪いだろう。見事な藪蛇である。

「……………」

「……まあ、無理にとは言いません。異変の時はなんだか私が焦っちゃってましたけど、よくよく考えたらこういうことは自分たちのペースでやるべきですよ。出者張ってごめんなさい」

「!……いやいや、詩音が謝らないですよ……!」

少し泣きそうな顔になりながらも、フレンドールは詩音の言葉を慌てて否定する。

「あの時、詩音がああしてくれただから、今こうして遊べてるんだし。詩音には本当に感謝してるんだから、そんな謝らないで……」

「……そう、ですか。なら良かったです」

「うん。……でも」

「でもっ？」

「……怖い」

視線を下に反らし語る彼女の瞳は、長年を経た妖怪らしい憂いを帯びていて。

しかしながら、それは見た目相応に——いや、ひよつとするとそれよりも、幼い光に見えた。

「私がやってしまったことなのに。私が、まず謝らなきゃいけないことは自分で一番わかっているのに。」

……怖い。お姉様に、お前なんかキライだつて言われるのが——何よりも、私を怖がるような目で見られるのが、物凄く怖い……」

そう言つてフランドールは、手で顔を覆い再び俯いてしまった。

大きな図書館を照らす薄明かりも、彼女の消え入りそうな心を表象するかの如く、ゆらり揺れる。

——その様子を見ていたパチュリーが、詩音の耳元でそつと呟く。

「……レミイがそんなことする筈がないのにね」

「まあ、そうなんでしょうけど。それをフランさんに納得させるのは、そう単純なことじゃあないんでしょうね。」

……ちなみに、この件についてレミリアさんは何て言っているんですか？」

「全く同じよ。四百年以上閉じ込めた自分なんて怖いだろうとか、キライって言われるんじゃないかとか。カリスマが聞いて呆れるわ」

「ははは……」

中々に厳しいパチュリーの物言いに、思わず苦笑する詩音。まあ、親友であるからこそ言えることもあるのだろう。

さりとて、同じことをフランドールにそのまま伝える訳にもいかない。暫し、どうするべきか悩む詩音だったが——徐おもむろに、口を開いた。

「——フランさんフランさん」

「……なにっ？」

「レミリアさんがどう思っているのかなんて、私にはわかりません。それこそ、フランさんの言っているような感じでない、と絶対に断言することは出来ませんし」

「……っ」

でも、と詩音は続ける。

「進まなきや、道は開けませんから。どれだけ怖くても、暗くても。フランさんが努力してその道を乗り越えることができたなら——きつと、そこからしか見ることの出来ない、ステキな景色が広がってる筈ですよ」

「……うんっ」

「さ、とりあえず今はゲームを楽しみましょう！　確か、バラバラ死体を見つけた所まででしたよね？」

「うんっ！」

「キヤハハハハハああああああああ!!　ギャーアッ!!」

「小悪魔、さつきから五月蠅いわ」

因みにわざわざ言及しなかったが、このやり取りの間もずっと狂ったような声が響いていた。真面目なのか、気分が昂っているだけなのかは計りかねる。とりあえず五月蠅い。

それはまあ、一先ず置いといて。少し暗い雰囲気になってしまったが、気を取り直して彼女たちは、途中であった遊戯を再開しようとする。四人が四人とも、賽が置かれている円卓の中央に向き直り——

「お取り込み中、失礼致します」
——瀟洒なメイドが、全員の視界内に突如として現れたのはその時だった。

「ギャーアッ！　死体——!!」

「ちよつと、勝手に殺さないでくれるかしら」

もう何度目かもわからないような叫びを小悪魔は上げる。

それに対し、死体と呼ばれた張本人である咲夜は不服そうに返すが……どう考えても、悪いのは咲夜ではないだろうか。

「いや、なんで貴方、テーブルの上に乗ってるのよ……？」

「何故って……皆様が、中央を向いてましたから。この方が一辺に気づいてもらえるので、効率が良くはありませんか？」

パチユリーは半ば呆れたように言うが、肝心の本人は首を傾げてい

る。

……足下をよくよく見れば、彼女は靴を脱ぎ更には布を敷いて、その上に立っていた。一応、彼女なりには机を汚さないよう気を使ったようだ。いやまあそれ以前の問題なのだが。

「……それで、咲夜はどうして来たの？」

「はい。実は、詩音さんに用があつて参りました」

「えっ、私ですか？」

突然自分の名前が出るとは思つてなかつたのか、詩音は素つ頓狂な声を上げた。

「ええ、お嬢様がお呼びなさつてるわ。ちよつと来て貰えるかしら？」

「……そういえば、レミリアさんに招待されて来てたんでしたね。勿論構いませんよ。」

「じゃあ、ゲームの続きはまた今度ですね」

「うん！　詩音、いつてらっしゃーい」

「いつてらっしゃいませー」

咲夜に伴つて図書館を出てゆく詩音に、フランドールと小悪魔はそう声をかける。

それを聞き、詩音は振り返つて笑顔で手を振った。

「——さて。それじゃ、私たちも向かきましょうか」

「え？　　どういうことですか？」

「あの二人に続いて、私たちも上に向かうのよ」

「……何で？」

「まあ、詳しくは向かいながら教えるけど……きつと、面白いものが見れるわよ」

「面白いもの……？」

紅い館の紅い壁に、赤い灯火が映し出されている。それは、主が太

陽を苦手としているために窓がないこの洋館を照らす、唯一の光。そしてそれは、太古における人類の偉大な発見、火を、後の人間が照明道具としていつ何時でも使用可能にした叡知の賜物、それが発する朧気な光――

その前を、二つ影が横切った。

レミリアに呼ばれていると言われたために、詩音は咲夜に付随して館を歩いていた。

しかし、何やら違和感を感じているようだ。

「あの……これって、向かってるのレミリアさんの部屋じゃないですよね？」

そう。彼女らの進行方向には、明らかに主の部屋は存在していないのだ。

無論レミリアとて、箱入り娘の如く四六時中部屋に籠ってる訳ではない。食堂で料理に舌鼓を打っていたり、二階にある露台にて茶会を催していたり。最近では神社などにも足を運ぶようになったと聞いているから、その行動範囲は思っている以上に広いのだろう。

しかし。詩音がレミリアに呼ばれた時は、必ず彼女の部屋で面会をしていた。それが何故かは知らないが、まあ恐らくは主人としてのなんやかんやがあるのだろう。故に、詩音は今回もレミリアの部屋に行くとはかり思っていたようだが……。

「そうね。庭まで連れてくるよう申し付けられているわ」

「庭、ですか……？　なんでまた――

って、あれは……」

咲夜の言う行き先に詩音は益々怪訝な表情をしたが、視界が捉えたその人影に一旦話を中断する。

現在、二人がいるのは玄関の広間。そしてその視線の先には、玄関の役割を果たす大きな紅い扉と、同じくらい――それこそ、名前まで“紅”い少女がいた。

「ども、二時間くらい振りです詩音さん」

「お疲れさまです、美鈴さん。お仕事はもう終わつたんですか？」

「はい、今日はもういいって言われまして。それに……」

と言つて、門番である美鈴は背後の扉を見た。

「……あんな中で入ってくるのは、余程の馬鹿か巫女か強盗くらいでしょうし。ぶっちゃけ、私のする仕事がないんですよねえ」

「……あんな中？」

詩音の質問にも答えず、美鈴はこれみよがしに溜め息をつく。それは果たしてお役御免されたことへの意気消沈なのか、それとも馬鹿と同列でも違和感のない白黒強盗に対する疲れなのか——はつきり言ってしまうのなら、己が主人の趣味への呆れ、であろう。

「さ、詩音さん、お嬢様が待つてるから早く行っちゃいなさい」

「えちよつ、押さないでくだつ——」

言うが早いのか、咲夜は詩音の背中を押して外へと弾き出してしまった。その後派手な音が聞こえたことから、結構な勢いで転んだようである。

……やはりこのメイド、どこかが決定的におかしい気がする。

「はあ……。お嬢様は、一体何をなさるつもりなんですか……？」

「さあ？　でも、きつと何かの狙いがあるんじゃないかしら」

「準備するこつちの身にもなってほしいですね……」

「まあまあ、今回は私も手伝ったじゃない。それに、お嬢様のあの無邪気で楽しそうな顔といつたら——!!」

「あダメだこの上司」

*

「つてて……。ちよつと咲夜さん、乱暴過ぎやしませんかね……？」

咲夜に突き飛ばされた詩音は、服を払いながら立ち上がる。幸いにも、怪我はしていないようだ。

そして顔を上げた彼女は——美鈴の言葉の意味を、知ることとなった。

詩音の視界に広がっているのは、紅魔館の大きな庭。今は冬のため花はあまり見られないが、木々が見事に整えられているのがわかる。

そしてその庭一面には。

おびただしい数の、蠟燭が置かれていた。

「うおおっ……!?!」

至る所に蠟燭、蠟燭、蠟燭。正門から玄関へと繋がる道に沿って、花壇の周囲にある煉瓦の上に、更には館を囲む塀に付けられた燭台にも
その一本一本の光は儂い、それこそ微風で消え失せてしまいそうな
灯火だ。しかし八百万の集団となったそれらは、月の独壇場であると思われていたその夜に赤い光を満ちさせていた。

そして、その『火の湖』の中央に。

彼女は、いた。

「——ご機嫌麗しゆう詩音。どうかしら、この光景?」

「なんと言うか……幻想的ですな。海外のお祭りに、こんな感じのがあつたような。」

あと、レミリアさんがめちやくちヤラスボスっぽく見えます」

「ふふん、でしよでしよ? やっぱり吸血鬼の私にセンスで敵う者

なんていないのよー!」

「いよっ、レミリアさんのセンスは世界一イイ!!」

……二人が共に、同じ方向で感覚がずれているのには口を嚙むとして。

庭の中心で漂うレミリアの元へ、詩音も飛翔板を用いて近づいていった。

月を背に、数多の灯火を眼下に備えた彼女は普段以上に、その種族としての重厚感を醸し出している。紅く妖しく光る瞳、夜空を震わす蝙蝠の羽、小さい身体ながらも放たれる莫大な威圧感——それは正しく、彼女が人間にとつての恐怖の対象、『夜の帝王』吸血鬼であることの証。並の人間ならば、その姿を拝んだだけで四肢が竦み、身動きがとれなくなること請け負いである。

……だと言うのに、この非常識な翡翠の少女は、平然と近寄ってくる。まあ、今更に過ぎるが。

そうして、詩音がレミリアの目前に迫った時。彼女はそれまでの無邪気な口調を改め、こう言った。

「さて、詩音。本日の招待に応じてくれたこと、心より感謝するわ」「いえいえ。どうせ今日は学校が早く終わりましたし」

レミリアの仰々しい口振りにも動じず、詩音は普段通りの態度を示す。

これだけ舞台を整えておきながら、それでも変わらないとは……と、レミリアがくすりと笑ったのはここだけの話である。

「……それで、今日来て貰った目的なんだけど」

「はいはい?」

一息置いて、レミリアは口を開く。

その様は静かでありながら、抑えられない興奮が目に見えて伝わってくる。

——夜の魔力をもって、

月の狂気をもって、

「私——レミリア・スカーレットは、貴女——古卿詩音に。一対一での決闘を申し込むわ」

紅魔の吸血鬼は、そう告げた。

……その瞬間、風もないのに眩しい程の灯火が揺らいだのは、気のせいではないだろう。

「……決闘?」
デュエル

「と言ってもまあ、普通の弾幕ごっこなのだけれど。でもたまには、ただのお遊戯じゃなく、〃命名決闘〃というルールに相応の勝負があつてもいいんじゃないか、と思つてね」

やたらとレミリアは、〃決闘〃という部分を強調してくる。その姿は、子どもらしいともとれるだろう。実際、彼女の瞳は興奮した子どものようにきらきらと輝いている。

「……成る程。なんか、いかにもレミリアさんが言いそうなことですね」

「褒め言葉として受け取っておくわ。……それで?」

「はい、勿論おっけーですよ」

詩音の返答を聞き、レミリアの輝きは益々その強さを増した。

「そう来なくっちゃ!! 流石詩音、よくわかってるわねー」

「いえいえそれほどもー」

そんな風に、暫しの間は穏やかな空気が流れていたのだが――

「……………」

「……………」

次の瞬間、辺りには静寂が響き渡っていた。

詩音とレミリア、互いが互いに視線を交錯させ、周囲に緊張の糸を張り巡らしていく。しかし、編み出された空間は決して息苦しいものではなく……冬の空気の清浄さも相まって、ある種の聖域が生まれているようにも感じられた。

そこに浮かぶは、翡翠と紅魔の少女。二人は、示し合わせたかのよう――

にたり、と微笑を浮かべた。

「…………準備は、いいかしら?」

「ええ。いつでも」

彼女らの間には、それ以上の言葉は必要なかった。

スベルカードルール

命名決闘方式とは、自らの弾幕に名を付け、それを相手に宣言する手法。そして、どこぞの道具屋みたく気取るつもりは毛頭ないが……名付けられた物には、名付け親の想いが相応に影響するのだ。

つまり、少女たちが遊戯として打ち込むそれは、弾幕に込められた想いの丈を相手にぶつける、美しくも儂い決闘なのである。

……幻『想』郷には、まさに相応しい手法ではないだろうか。

それ故この二人にも、これ以上の言葉は無粋ですらある。

あとはただただ、自らの想いを宣言すればよく。

「――翡翠を宿す異界の人間よ! 汝が力を認め、今ここに光輝燦

然たらん決闘を申し込もうぞ!!」

赤よりも紅い少女は、誰よりも気高く妖しく、しかし嬉々として。

「その心意気、しかと受け取りたり! 我が全霊を以て、夢幻の紅魔

を撃ち破らんことを誓いましょう!!」

翡翠を帯びた少女は幻想的ながら、その粋から外れそうな程澄明と

して。

「空では、こんなにも円い月が、饗宴を心待ちにしているのだから――」

「庭では、こんなにも儂い焰が、私たちを見守っているのですから――」

両者の想いは巡り巡り巡り、巡り。

「今夜は、楽しい夜になりそうね!!」

「今夜は、楽しい夜になりそうですね!!」

――火蓋は、切って落とされた。

②

先に動いたのは、レミアアの方だった。

彼女は自らの有する妖力を余すことなく用いて、空一杯に弾幕を展開させる。撒き散らされたかのように広がるのは、紅い小さめの弾と青い大弾。

それらは、機動力の高い詩音の逃げ場をなくすように、視界一面に広がってゆく——

——と、思っていたのだが。

それまで問題なく拡散していたそれらの幻想は次の瞬間、ある一点——即ち、詩音の方向へと、一直線で向かい出したのだ。まるで、彼女に引き付けられていくかのように。

「っ!?……っつてああ、そういうえば貴女、そんな能力もあつたわね」
「自分でもよくわかってないですけどね、つと！」

……まあそれで楽なのかと言われると微妙なんですけどっ！
そう。彼女の言うように、弾幕が全て自分の方に寄ってくるというのは良いことばかりではないのだ。

確かに、普通は大空に広がる筈の弾幕が一点に集まれば、回避する余地は大幅に増えるだろう。

が、本来そのように、広い空間を埋め尽くすためのものが集中するとどうなるか、よく考えて欲しい。具体的な例を挙げると、蛇口を半分程指で塞いだ時だろうか。

まあ何が言いたいのかというと——

「はひゃあっ！　　ちよ、ヤバくないですか勢い！　　電車は軽く越えてますよ！」

——その速度が、とんでもないものになっていたのだ。

異変時には博麗の巫女との見事な舞踊を見せたレミアアの弾幕も、今や凶銃による弾丸の如く成り果てている。そんな弾幕が、滝のように詩音へと襲いかかっているのだ。彼女が変な声を上げるのも無理

はない。

しかし。そんな宣言もしていないような弾幕で墜ちてしまう程、彼女も鈍くはなかった。

詩音は紅と青の光が寸前まで迫ると、即座にその場を離脱。降下による重力加速も交え、その機動速度を限界まで高めてゆく。

透き通った黒の空を下り、下り、下り。そして、あわや地面と衝突するか——という所で、軌道を急激に変更し超低空飛行を始めた。その動きについていけなかった弾幕は、役目を果たすことなく地面へと次々に撃沈していく。

そのまま詩音は、板に乗りながら庭と平行に飛翔を続ける。いくら彼女に引き付けられているとはいえ、弾々はその動きを完璧に捉えられている訳ではないようだ。詩音が通過し、風圧で灯火が消えた蠟燭目掛けて、レミリアの弾幕は吸い込まれていった。

……見事、としか言いようがない。速度にかまけたその回避力は、どこか魔理沙にも似たものを思わせる。レミリアもその想像以上の機動力に、内心舌を巻いていた。

まあ、弊害が皆無、という訳ではないが。彼女らには関係のないことであるから、気にはならない。

「ああつ、庭がつ、私の庭がつ!!」

「諦めなさい」

気にはならない。

「……想像以上ね、詩音。そのスピード、魔理沙に勝るとも劣らないんじゃない?」

「そうですね、ねっ!? トップスピードは向こうの方が断然だともいますよっ」

そう謙遜しつつも、詩音は夜空を飛び続ける。ひよんなことから手に入れた飛翔板は、当初の予想を遥かに越えて彼女に可能性を与えたようだ。

——すると、突然弾幕が止んだ。

「…………つと、一旦休憩ですか?」

私はまだまだ大丈夫ですが」

前触れなく訪れた静寂に、詩音が不思議そうな顔をしてレミリアに尋ねる。

「いや。ちよつといいことを思い付いたのよ」

だがレミリアは、悪戯たのしげな笑みを浮かべてそう言うのみ。

……ふと、その手元を見ると、一つの紅い気弾が浮遊していた。

「何ですか、その手に持つてる……持つてる？……浮かんでるやつ」

「いいこと、よ。さあ詩音、宴はまだまだこれからよ！」

そして彼女は気弾ごと、腕を大きく振りかぶって――

神槍『スピア・ザ・グングニル』

レミリアがそう宣言したのと、詩音の頬に赤い筋が走った瞬間。そして、彼女の後ろで何かが爆発するかのような音が轟いたのは、ほぼ同時だった。

詩音は何事かと驚き、振り返る。果たしてその視線の先に広がっていたのは――無惨にも崩れ落ちる塀と、その向こうで豪快に打ち上がる水柱だった。

「……………はっ？」

「ちっ、外したか」

「……………僭越ながらお嬢様、あまり建物を壊されますと、修復が少々手間なのですが……」

「そうね、善処するわ」

詩音は再び、ゆっくりとレミリアへ視線を移す。口をぽかんと開けたまま。

レミリアは、変わらず腕を振りかぶった状態であった。見たところ何処もおかしな点はない。……唯一、先ほどまであった筈の気弾が消えていることを除けば。

「え、えーとレミリアさん、今のは何が……？」

「何って、弾幕を投げただけよ。まあ速すぎて、弾幕ってよりは槍みた

いなものだけれどね」

「ワ、ワタシヲコロスキデスカ？」

「なに、当たらなければ何とやら、よ」

にやりと笑ってレミリアはそう言うが、当たる当たらないの問題ではないだろう。なんてったって――

「まつ、全く見えませんでしたよ!?　えっ!?　はっ!?　わ、わちきにこれを避けろと申すか!？」

「誰よそれ」

遅れて驚愕が到来したようで、詩音は頬から血が垂れるのも気づかず叫ぶ。

……まあ、彼女の反応も致し方ないと思う。何せ、レミリアはその右腕一本で“神槍”を再現してみせたのだから。いくら詩音の機動力が高いとは言え、そんな代物を回避できる程人間は性能が良くはない。

たたり、と冷や汗が流れた。

「それじゃあ詩音、準備はいいかしら」

「準備って何の――いや、わかってます、わかってますけど!　もう

一発撃つんですか!？」

するとレミリアは優しく、微笑みを浮かべた。

……この場面でのそれは、正直言つて悪い予感しかしない。

「ねえ詩音。弾幕ごっこって、美しさが重要なのは知ってる?　何

でも、誰もが異変を起こしやすく、解決しやすい形態を作るためにそういうルールにしたらしいわ。それで美しさを重視するって、センス良いとは思わない?」

「確かに、そこから今のスペルカードルールを作り上げたのは凄いですね。

……それが?」

「ほら、一発の弾幕だと、力強さはあっても美しさが足りないじゃないかい」

「あ待つてその先を言わないで下さい」

「ふふつ、察しがいいわね」

刹那。レミリアの背後には、数十——いや、それでは足りない程の、
紅い光が現れていた。

「……うわぁー、『ゲイトオブバビロン王の財宝』みたいだなあー」

「何それカッコいいわね。後で教えて頂戴ね」

詩音は虚ろな目で呟く。哀れな。

しかし、弾幕ごっこに容赦はない。レミリアは指揮を執るように手を上げたかと思うと、深く息を吸い込み——

「——さあ、愚かな人間よ！　我が神槍を前に、精々恐れ逃げ惑うが
良い!!」

そう、言い放った。

そして、とりあえずの小手調べといった所であろうか、その中の数本が射出される。

「——っ!!」

自分目掛けて一直線で飛んできたそれを、詩音は身を翻し辛うじて回避した。流石のレミリアと言えども、複数を同時に操った状態で先ほどと同等の速度を出すことは出来ないようだ。

しかしそれでも、破壊力は十分に過ぎた。現に今、槍が刺さった花壇は大きく抉れてしまっている。

「ふふふ……春に咲く筈だった哀れな球根ちゃんたち、安らかに眠って下さいね……ふふ」

「……まあ、その、きつといいことあるわよ」

どうにか一難を乗り越えた詩音だったが、彼女に安息が訪れることはなかった。

レミリアが残った全て、百は下らない弾幕を次々と発射してきていたのだ。

「っ！　　ちよ、これは流石に不味い……!!」

詩音は目を見開き、どうにかして回避する道程を探しだそうとする。が、目の前の槍を躲しても時間差で右から、左から、上空から弾幕が迫っていた。どこぞの巫女の如く神憑り的な回避を連発すれば別かもしれないが、生憎詩音はそこら辺は常人と変わらない。

袋の鼠、八方塞がり、絶体絶命。言葉で飾るのは容易いが、詩音が

追い詰められた状況はそんな、常人ならば希望をかなぐり捨てるようなものだった。

……とは言ってみたものの。残念ながら、彼女もまた常人という言葉で括るのは些か躊躇われる存在であることは周知だろう。

何故って、ほら、丁度今のように、彼女の瞳が翡翠に輝くとき――

幻操『リフレクトバレット反射弾幕』

――詩音は幻想をも絡繰るのだから。

それは、詩音がレミリアの弾幕に飲み込まれた、と思われた瞬間。そして突如輝き出した翡翠に、レミリアが思わず怯んでしまった瞬間。

暴速で突貫を果たそうとしていた幾多の槍が、踵を返しレミリアの方へと向かい出したのだ。その紅かった色味をも、翡翠に塗り替えて。

「っ!? ガツ――」

「なななっ、何ですかアレ!? お嬢様の神槍が跳ね返されてますよ!?」

「本当だわ……そんなスペルカードもあるのねえ。流石詩音さん」「いや呑気過ぎやしませんか!」

まさか自らの弾幕が牙を剥くとは思わなかったのだろう。レミリアは回避し損ね、脇腹に槍が直撃してしまった。呻き声が、夜空に響く。

更にはその一撃は食らったことで、彼女は体勢を崩してしまっていた。いくら吸血鬼と言えどもそこから立て直すのは難しい訳で、詩音に跳ね返された槍が次々にレミリアへと吸い込まれていく。

見ごたえのある決闘というのは、少しのことで一気に形勢が変わるものである。詩音の反撃を告げる鈍い音が、辺りに響いていた。

「……うわあ、痛そう」

痛そう、どころの話ではない。あの弾幕は、煉瓦塀をも軽々と突き破る程の威力を誇るのだ。身体に大きな風穴が空いてもなんら不思議はない。

……事実、煙の中から姿を見せたレミリアは、右腕や脇腹、顔の左半分などが吹き飛んでいた。尤も、徐々に再生されていつてはいるが。

「……ふう、今夜が満月じゃなければ、ちよつと危うかったわね」

「でも満月の日を選んでますよね？　そうじゃなければ、普段は休日しか来ない私を今日招待する筈がありませんし」

「あら、だって全力をもって挑むのが相手への礼儀じゃないかしら？」
完全に再生を終えたレミリアはそう言うのと、ひどく楽しげに笑った。釣られ、詩音の下にも笑顔が広がる。

「——さて。スペルカード一枚目は、どう見ても私の負けよね。貴女のさっきの技、弾幕ごっこじゃ反則に近くないかしら……？」

「そうですね？　私からすれば、レミリアさんの音速槍の方がよっぽどヤバいと思います」

すっかり壊滅的な状態になった庭と、一部跳ね返った物のせいで崩れ落ちている館を見て詩音はそう言う。いや、館の方は明らかに詩音が悪いと思うのだが。

そんな、天然なんだか責任転嫁なんだかわからない発言をしている詩音に、再びレミリアは破顔した。やはり彼女は、この遊戯を心から楽しんでいるようだ。

そして、懐から次のスペルカードを取り出す。

「——それじゃあ、二枚目も私から行かせて貰うわよ。貴女はこのナイトメア紅い悪魔を、攻略することが出来るかしら……？」

「はい進んだ進んだ」

「ちよつ、パチュリーやめてよ……」

「妹様、もう素直に行かれたらどうですか？」

「でつ、でも——」

時を同じくして紅魔館の中。半時程前まで図書館で遊戯に耽っていたフランドール、パチュリー、小悪魔の三名は、館の内部を移動していた。

目的地は二階の露台。その目的は、詩音とレミリアの弾幕ごっこの観戦である。

尤も若干一名は、あまり気が進まないようだが。

「——そういえばさつき凄いい音がしてたし、もう終わっちゃってるかもね」

「ええっ!? ほ、本当に……?」

「……結局行きたいのか行きたくないのか、どっちなんですか？」

……訂正。未だに踏ん切りが付けられていないだけだった。

フランドールは小悪魔の、割りと痛いところを突いた質問に思わず顔を俯けてしまう。

「……………だつて」

言葉を繋ごうとするが、声が震えて上手く喋れていない。

彼女が今どんな思いなのか、四百年も狂気に吞まれていたフランドール・スカーレットは何を望むのか——安易に想像することしか出来ないが、少なくとも一步踏み出すことが、フランドールにとってとつともない冒険だというのは違いないだろう。

故の、迷い。本心はきつと、誰よりも姉と友人による遊戯の観戦を楽しみたいのだ。

……当然、そんなこと周りの者にはお見通しな訳で。

だからこそ、パチュリーは大きく溜息をついた後、こう唱えた。

「……はあ、あんたらねえ——」

水符『プリンセスウンディネ』

フランドールの後ろから、突如として幾数もの水柱が襲いかかる。「——はっ?　ぱ、パチュリー!」

流水、というのは、吸血鬼にとって日光にも並ぶ程の弱点。そのためフランドールは成す術なしに、まだ水の及んでいない方へと逃げた。

「ぱ、パチュリー様!?　いきなりスペル宣言して、一体どうなさったんですか!」

いきなり暴れだした主人に、小悪魔が慌てて制止に入る。

しかし、パチュリーがそれだけで止まることはなかった。彼女は大きく息を吸い込み——

「揃いも揃って七面倒くさいのよ!!　フランはフランですつとウジウジしてるし、レミイはレミイでねえねえねえねえねえねえねえねえって、壊れた人形か!　もつとシャキツとしなさいよ!!　何?

似た者姉妹なの?　微笑ましーとでも言っただけなの!」

「ぱっ、ぱぱ、パチュリー!」

……なんか叫び出した。普段は冷静なパチュリーにあるまじきその姿に、フランドールは思わず石化する。

「ほら止まってないでさっさと動く!!」

と思つたらパチュリーが思い切り流水をかけてきた。鬼か。まあ吸血鬼の親友だけれども。

「きゃん!　ちょ、ちよつとパチュリー、一旦落ち着いて——

「あゝあゝん?」

「何でもありませんごめんなさいわーん!!」

そのままフランドールは、唯一残された退路である二階の方へと泣きながら爆走していった。

……そんな一連の光景を、小悪魔は啞然として眺めていることしか出来なかった。しかしフランドールが去ったところで、ようやく我に

返ったようだ。今までに見たこともない程に取り乱した主の姿に驚愕を隠せないまま、彼女はパチュリーに詰め寄る。

「——ぱつ、パチュリー様！ 一体どういうつもりなんですか！！
確かに妹様はちよつと優柔不断ではありませんでしたけど、だからといってあれはあんまりじゃ——」

「やつと行つたわね。全く、二人して面倒くさい姉妹なんだから……」

「……あれ？」

息巻いて詰め寄つたのだが……そこには、普段通りに気怠げなパチュリーしかいなかった。

今度こそ訳がわからず、小悪魔は口を開けたままぽかんとしてしまふ。

「……あら、小悪魔、まさか私が本気で怒つたと思つたの？」

「え？ いや、あの、その」

「ああでもしなけりゃあの子は動かないじゃない。まあ、確かにちよつと強引だったかもしれないけどね」

そう言うと、パチュリーは微笑みを浮かべる。……その姿は、どことなく彼女の親友によく似たものだった。

そしてそのまま、動けない小悪魔を尻目に自分も向かい出す。

「……」

「……アホみたいに口開けてないで早く来なさい」

「えっ？ あつ、ちよ、ちよつと待って下さい!!」

——魔法の水で濡れた廊下は、喧騒を乗り越え再び静寂に包まれていった。

「……まあ、言ったことは全部思つてたことなんだけど」

「結局どつちなんですか……？」

*

突然怒り出したパチュリーから逃げに逃げ、フランドールは訳もわ

からないまま脇目を降らず飛び続ける。

そうなると当然、周囲への認識が疎かになるであろう。フランドールも例に漏れず、進行方向にあつた何かへと盛大にぶつかってしまった。

「はあ、はあ……きやつー！」

「うわっ!?……って、妹様？」

詰められたような顔して」

どうなさったのですか、そんなに追

尤も、それが建造物などではなく美鈴であつたために、双方に大した被害は出なかったが。

突撃した何かが美鈴だとわかつたために少し安心したのか、フランドールは一息つくと、逼迫した今の状態を喋り出す。

「め、美鈴！」

今、パチュリーが、パチュリーが

——」

「……？　妹様？」

しかしその言葉は、最後まで紡がれることはなかった。

何故なら、フランドールの目は美鈴の背後に広がる光景に——

——レミアと詩音の決闘に、捕らわれて離されなかつたから。

「……す、す……い……」

「ふふ、妹様はご自分で弾幕ごっこはなさつても、誰かと誰かがやつているのを見るのは初めてですものね。

どうですか？　貴方の姉君と、友人の決闘は」

隣にいた咲夜がそう、優しく語りかける。

だが、フランドールからの返答はない。それ程、それこそ彼女は耳や口の間を切断する程までに、夜空で行われる遊戯に見とれていた。

「……ふふっ、妹様つたら、何もかも忘れたかのように夢中ね」

「ですね。まあ確かに、あの弾幕ごっこはめちやくちやキレイですもんね。

……残念ながら、我々にはそれだけで終わりそうもありませんが」

「……館の修繕費、足りるかしら……？」

「庭、どうでしょうかね……」

現在、戦況としてはレミリアがスペルカードを発動している場面だ。

彼女は夜の魔力を纏い、淡い灯火に照らされた空を紅く染め上げている。同心円状に広がる紅い弾幕と、不規則に放たれる苦無のような弾幕は、周囲に多少の被害を与えながらも詩音へと迫ってゆく。

それを詩音は、最小限の動きで回避していた。にじり寄る紅弾の軌道を見極め、時に上体を背け、時に飛翔板から跳躍する。幸いにも弾速はそこまででもないため、彼女の目にも追いつくことが可能のようだ。

「相変わらず紅いですね！」

「紅が好きなんだもの」

「どうしてそんなに好きなんですか？」

「血のような色だからよ」

「……さすが吸血鬼」

「あら、血が好きなのは人間も同じじゃないかしら。何せ血液つてのは、強い生命の象徴だもの。血が通っていない者は人間として扱わないくせに、実際に血液を見ることを嫌悪する意味がわからないわ」

「あ、確かに。『血も涙もない！』とか非難する時よく言いますもんね」
そんな中においても、彼女らは会話を交わしていた。余裕の表れ……ではないだろう。少なくとも詩音は、そのようなぎりぎりの回避を重ねていることからあまり余裕はないように思える。

それでも口を開くというのは、きっとあれだ。技名を叫びながら攻撃したり、相手を説得しながら技を繰り出したりする、『あにめ脳』つてやつだろう。

喋りながらも弾幕を躲し続ける詩音を見て、同じ事を思ったのはか知らないが、レミリアは何度目かもわからない笑みを浮かべた。

「それにしても詩音、もしかして余裕綽々かしら？」

「この状況を見てどうしたらその結論が出せるんですか、ねっ！」

「それなら、私としてももっと全力を出す他にないわねえ」

詩音の悲鳴も聞かずレミリアは、スペルを宣言した時以上にその力を集中させ始める。

刹那——彼女から放たれる、苦無型弾幕の量が急激に増加した。

「っ!!」

「さあ——全世界を染め尽くす、スカレット・ナイトメア赤よりも紅い夜はこれからよ!」

そのまま、数え切れない程の弾幕が詩音へと襲来する。

地を穿ち、館を無惨にも崩す鋭い弾々は正しく悪魔の爪。それとの相乗により空を埋め尽くす紅い弾幕は悪魔の息吹。少女の眼前を染め尽くすそれらは、ちっぽけな彼女にとってその名に相応のものと映ったに違いない。

——それは、正に紅い悪夢。ナイトメア

そんな状況でも、詩音は諦めることはなかった。苦無のまだ訪れていない場所を見極め、身体に掠らせながらもそこへと滑り込む。そしてその限られた範囲内で、目前に迫り来る弾幕を縦横無尽に避け続ける。

……そんな風に、視野が狭まっていたためであろう。詩音は、ある二つのことに気づけなかった。

一つは、明らかにある領域だけ、弾幕の密度が薄かったことに。そして——

「——あら詩音。ご機嫌いかが?」

「ッ!?!?」

もう一つは、目の前までレミリアが迫っていた——否、レミリアの目前まで誘導されていたことに。

挨拶される程の近距離で、須臾の間に放たれた弾幕を躲し切ることが叶う筈もなく。

詩音はレミリアの苦無型弾幕を全身に受容、そのまま飛翔板から崩れ落ちてしまった。

「しっ、詩音!!」

フランドールの、悲鳴にも近い叫びが轟く。

しかし、強大な吸血鬼の弾幕を間近に浴び、詩音は衝撃で気を失っているようだった。飛翔板が迎えに行く訳でもなく、フランドールの声に反応する様子もなく、詩音は頭からひゅるりひゅるりと降下を続けている。

時に、彼女がレミリアと闘っていたのはそれなりの上空。このまま重力加速を続け地面と出会えば、その命は周りにある灯火より儂いものとなるのは想像に難くない。

「……咲夜さん。あれってちよつと不味くないですか」

「そうね。あのまま目を覚まさなきゃ詩音さんは、良くて全身不随、悪いとそのまま御陀仏でしょうね」

「そつ、そんな!!! 咲夜つ、どどど、どうすればいいの!?!」

「どうするの、ですか……。そうですね、妹様に出来ることといえば——」

刻一刻と迫る状況ながら、咲夜は一息置いてから口を開く。

「ご自身の気持ちを伝える、ことじゃないですかね？」

「気持ちを、伝える……」

微笑みながら伝えられたその言葉に、フレンドールは少し考える素振りを見せた。

が、今は一刻を争う事態。悩んでる暇などない。

——フレンドールは覚悟を決め、心の底から、弾けんばかりの声で叫んだ。

「しお——ん!! ガンバレつ、お姉様なんかには負けるなあああ!!!」

……その叫びが果たして、彼女に届いたのかどうか。それは、本人にしかわからない。

ただ、一つだけ確実なのは——

幻符『夢幻ファンタジア』

大地に墜ちる寸前で、詩音の瞳が何よりも眩しく輝き出したことだけだ。

「うおおおおつ!!! しお——ん!!!」

「うわー、流星ですわー」

「……どういふ状況かしら、これは」

「あら、パチユリー様」

スペルが宣言され翡翠の光が満ち始めたのと同時に、詩音の周囲に多くの弾幕が出現した。淡い翡翠色をしたそれらは詩音の衛星軌道上を巡りながら広がり、レミリアの弾幕を次々と相殺していく。

一つ一つの弾が衝突し、紅と翠の煌めきとなって消えゆく。その様はさながら、揺らめく極光のように美しい。弾幕ごっこにおける美の追求の、一つの終着点かに思える光景がそこでは繰り広げられていた。

「——んで、どうして貴女は無事に帰還することが出来るのかしら。本当に人間なの？」

「だいぶ今更ですねー。人間ですけど」

そんな輝く絹布よりも上空に佇むのは、笑うレミリア、ぼろぼろになりながらも飛翔する詩音。詩音の方はよくもまあ、あの状態から立て直したものだ。

「……と言つても、今回は私の負けですよ。一回気を失いましたし、折角の新しいスペルは全部相殺されて終わりですし」

「……姉としては大敗北——いや、当たり前か。そうよね、私なんかよ、恩人の友人の方が大事よね……」

「？ 何か言いました？」

「い、いえ何でもないわ」

俯き、なにかぼそぼそと呟いていたレミリアだったが、詩音の問い掛けに慌てて前を向いた。

……若干涙目で。

「……本当にどうしたんですか？」

「だから何でもないわよっ！ 兎に角これで一勝一敗、丁度いい感じじゃないかしらっ!？」

「え？ あ、まあそうですね。一番盛り上がるパターンの」

レミリアが涙目だった理由は……まあお察しだろう。そんな状態である彼女の露骨な話題転換に乗る辺り、詩音が優しいのか鈍いだけなのか測りかねる。個人的にはどう考えても後者な気しかしない、と

いか絶対後者だろ。

閑話休題。レミリアは、そんな詩音に向かって言い放った。

「そう！　だからこそ、私は宣言するわ。『次のスペルで勝負は決まる』と」

「それはもしかして、運命を——

「まさか。勝負中の相手の運命を見るとか、ましてや操るなんて、それ程興奮めなことはないわよ」

詩音の勘繰りに、思わずレミリアは憤慨する。まあ確かに、気高い彼女がそんなことをする筈もないだろう。

「じゃあ、どうして……っ？」

「それは——次の一撃に、今私が注げる全ての力を注ぐからよ」

刹那、レミリアの右の掌に、一つの小さな灯火が出現した。

「あ、遂にアレを使うのね」

「ぱっ、パチュリー!?!　いつの間にも」

……ハッ！　ごめん、ごめんなさいごめんなさいごめん——

「もう怒ってないわよ。」

……そんなに怖かったかしら」

脈絡もなく現れたその弱々しい炎に、詩音が怪訝な表情を浮かべる。

そんな様子を見て、レミリアは徐に口を開いた。

「——ねえ詩音。人間の運命と蠟燭の灯火って、似てるとは思わない？」

「どうしたんですか藪から棒に」

「だってどっちも、ちよつとしたことで燃え盛ったり、私が腕を振るうだけで消し飛んだり。ええと、ヘーケストリーだったかしら？」

似たようなことが書いてあるってパチエが言ってたわ」

「ヘーケ……ああ、平家物語ですか。確か、諸行無常の響きがどうかこうとか」

「そうそれ、シヨギョームジョー！」

詩音の指摘に、レミリアは嬉しそうな声を上げる。

因みに、諸行無常とは“物事に永久不滅の存在はない”という意味

である。成る程確かに、瞬き程短い寿命しか持ち得ない人間や、少しの風で消えてしまう灯火には非常に合致する観念であろう。

「……それが？」

「あら、前にも言ったでしょう？ 『妖怪は精神に依存する』って。

その影響は、何も私という存在のみに限られる話ではないわ」

「その心は？」

すると、レミリアは手に力を込め始める。

「——観念的に似た物だったら操ることも造作ない、ということよ」

次の瞬間、それまで小さな灯火が浮かぶのみだったレミリアの右手に、一つ、二つ、三つ四つ五つ……数え切れない程の火が、増殖するように出現し始めた。

ぎよつとした詩音だったが、何かに気づいたように庭を見下ろす。二人の弾幕ごっこによる被害で既に庭は半壊だったが——確かに、詩音の目線の先では、庭一面に広がっていた蠟燭の炎が一つ、また一つと消滅していた。

「まさか——」

「ふふっ。ただ演出するためだけに蠟燭を用意した訳じゃないわ。我が運命操作の能力は、灯火の統率も可能にするのよ！」

「なん……だと……!？」

レミリアの堂々とした言葉に、詩音は驚愕する。

……下から飛ばされる白い目には、まあ、気づく由もない。

「……私が魔法を貸してやったからなんだけどね」

「あら、そうなのですか？」

「流石にレミイでも、タネも仕掛けもなしに管轄外の炎を操れたりしないわよ。あの蠟燭には、私が生命魔法をかけたの。そうすることによって灯火が運命に同期する……らしいわ」

「それを自信満々に自らの力と豪語するお嬢様、流石としか言いようがありません……! この咲夜、改めて貴方様の決闘をしかと焼き付けたいと存じます!」

「……そのカメラどこで手に入れたのよ」

「あ、録画機能付きですよ？」

「知るか」

ともかくレミリアは、吸血鬼として振るうことの出来る全ての力を注ぎ込み始めた。

彼女の力が高まる度に、生命の炎は数奇な運命へと誘われる。その果てに弾幕として盛る結末が待っているとは、灯火自身も予想だにできなかったに違いない。

レミリアは、大きく息を吸い込み宣言した。

「今宵の運命の元に集いし幾多の焰ほむらは、生命を糧に燃え盛る！　そこに吸血鬼の力が加われれば……皆まで言う必要はないでしょう？

さあ、翡翠に輝く偉大で矮小な人間よ！　　正真正銘、我が全霊のスペル、とくと味わうがよい!!」

『グロリアスドーム盛る紅色の灯炎』

レミリアがスペルを宣言し終えた瞬間、詩音を閉じ込めるようにして球状に灯火の炎が出現した。その半径は、詩音が目一杯手を広げて三人分くらいであろうか。それなりに広い空間ではあるが、機動力を削ぐには十分であろう。

「とっ、閉じ込められた……!」

当然、詩音は脱出を試みる。しかしそれに先んじて、レミリアが弾幕を射出し詩音を追いつめ始めた。

炎を纏った数多の弾幕が、行動を制限された詩音へと襲いかかる。彼女はそれでも飛翔板に乗り、紙一重の回避を繰り返すが……疲れが出たのだろう、暫くすると詩音は腕に一撃を貰ってしまった。

思わず顔を歪め、体勢を乱す詩音。

「……………っ!!」

「今よっ!!」

そんな彼女に千載一遇の好機と、レミリアは一気に畳み掛ける。次々と弾幕が吸い込まれていき、辺りは煙に包まれた。

「はあ、はあ……ど、どうよ……!」

少しして、レミリアは弾幕を止める。慣れない炎の操作は相応に体力を消費するのだろう、彼女は肩で息をしている。それでも油断せず、詩音の出方を伺っていた。

一方の詩音は、見るからに満身創痍だった。先ほどまでよりもぼろぼろの姿で、掠り傷も無数にある。更には、レミリアよりも激しく息を切らしていて、いつ限界を迎えてもおかしくない状況だった。

それでも、彼女は飛翔板に立っている。

その瞳に宿す翡翠の炎は、まだ、消えていない。

「っ! ま、まだ立っていられるの!？」

確かな手応えを感じていたレミリアは、思わず大声を上げてしまう。

一方の詩音は、冷静だった。

「……レミリアさん、たぶん、満月の、日まで、待ったのは、失敗、でしたよ」

「い、いきなり何を言って——」

詩音の言葉に怪訝な面持ちをするレミリアだが——その瞬間、突如巻き起こった現象に目を見開いていた。

何故なら——

いつの間にか翡翠の、魔方陣が出現し、詩音を囲っていた灯火が全て消え去っていたからだ。

「何故なら、私は、あることを教わった、からです——」

「——っ、最大出力で行くわよッ!!」

本能的に危機を察知したレミリアは、言葉通り全ての灯火を集め一つの大きな炎として、今出せる最大威力の攻撃を放つ。

そんな業火の如く迫る炎を見ても、詩音は動じない。

……いや、それどころか、どこか見覚えのあるような笑みを浮かべ、スペルカードを構えていた。

翡翠の少女は胸を張り、高らかに宣言する。

「——弾幕はパワーだぜ、ってね!!」

幻操『翠光燦然』
エメラルドスパーク

——刹那、激しい光が周囲を襲った。

赤よりも紅い炎の輝き、燦然とした翡翠の煌めき。両者は激しく、激しくぶつかり合い、さながら太陽のように——いや、ひよつとするとそれよりも眩しく光を発する。

その、視界へ入れるには有り余る光に、レミリアは思わず目を閉じた——

間もなくして、レミリアは恐る恐る瞼を開く。

その先では、幸いにして光の抗争は終了していた。視界にはもう暗くなった庭と崩れかけの我が館、それに夜空が映るのみである。

……そう、それだけなのだ。肝心の、彼女の姿が見えない。

「……詩音？ あれ、詩音はどこに行ったの？」

疲れからか、気配を感じ取ることすらも出来ない。レミリアはただ、きよろきよろと見渡すのみだ。

すると、どこからか大きな声が轟く。

「お姉様っ、後ろ——!!!」

「後ろ……?」

叫びに釣られ、無意識に後ろを向くレミリア。

すると、その先に広がっていたのは——

「How are you, Ms. Scarlett?」
吸血鬼嬢ご機嫌はいかがですか?

想操『カリスマブレイク』

——次の瞬間、レミリアの左頬には火花が散っていた。

決闘に終止符が打たれてから、四半時程経ったくらいであろうか。幻想郷には、平穏な夜が訪れていた。少し前まで派手な弾幕が飛び交っていたことなど忘れてしまったかの如く、冬の澄んだ空にはきらきらと星が瞬いている。

宴会時の喧騒を考えると今日のような夜は些か物足りないように思えてしまうが、こういう平穏あってこそその祭だ、ということのを忘れてはならない。年の瀬の寒空は、そんなことを沁々と感じさせる空気に包まれていた。

まあ尤も――

「うーっ！　　どうしてなの!!　　ねえどうしてなのよおーっ?!?!」

「お、お姉様落ち着いて!」

……静寂とは程遠い平穏だったが。

現在、紅魔館二階の露台には七つの人影があった。おろおろしているフランドール、呆気にとられている美鈴、苦笑いの小悪魔、白い目を向けるだけのパチュリー、撮影機を連写し続けている咲夜、テヘペロ!と今にも言いそうな表情の詩音――そして、ぐずりながらフランドールの腰に抱きついているレミリア、である。

弾幕ごっこが終了してからというもの、この膠着状態は続きっぱなしだった。

敢えて率直に言うのなら――

何だこの光景。

「……ねえ」

「なんですか?」

「何をどうやったらこの惨状が生まれるのかしら」

見るに堪えなかったのだろう、パチュリーが詩音に声をかける。

「いや惨状で……えーっと、レミリアさんってカリスマ凄いですよね」

「超限定的な時と場合に、だけどね」

「それで、外の世界にはカリスマブレイクっていう、オモロいものがあるんですよ」

「何よそれ」

「パチュリーさんが今ご覧になっている状況ですっ☆」

「……ハア」

気持ちいいくらいの笑顔で親指を立てる詩音。パチュリーには、頭を押さえて溜め息をつくことしか出来なかった。

「思いついたからやった。後悔も反省もしていない！」

「胸張って言うんじゃないわよ。大してモノも詰まってない癖に」

「なっ！　　自慢ですか!?　　自慢なんですかそれはあっ!!」

……とまあ、外野もそれなりに騒々しかったのだが。

詩音曰くカリスマをブレイクされたレミリアは、それ以上に騒いで、というよりも喚いている。

「ねえどうして!?　　何が起こったら弾幕ごっこ中にビンタされるの!?　　ねえねえ！　　どうしてそんな理由で私は負けなきやならぬのよっ!?!」

「そ、それはお姉様の戦意喪失が原因だし——」

「痛いよおー！　　ほっぺがヒリヒリするよおお!!　　びええええええん!!!」

ん!!!」

そう言うと、レミリアは顔をフランドールに埋めて恥も外聞もなしに泣き出した。お蔭でフランドールの服は、涙と鼻水とでびしょ濡れになってしまっている。

一方のフランドールも、いきなり抱きついてきて更には泣き出した姉の対処法がわからず、困り果てている。

「えっ、ど、ど、ど、私はどうすれば……?　　えーと、えーと、こ、こ、こあっ!」

「えっ!」

「私ですか!?　　う、うーんと……」

思わず、最初に視界へと入った小悪魔の名前をフランドールは叫んでしまう。小悪魔も小悪魔で、突如名前を呼ばれて怯んでしまった。

……だが何を思ったのか、小悪魔は少し考えた後、何故かレミリアの帽子を優しく手に取る。

「……?」

「はい、妹様」

「え、はいって?」

「なでなでしてあげて下さい」

「は?」

「ほら、早く」

「えっでも——」

「早く」

有無を言わさない気迫の小悪魔。フランドールはまだ何か言いたげだったが——諦めたのか、レミリアの頭にそつと手を置いた。

「な、なーでなーで」

「びええええ………つ、ひくつ、ぐすつ、ズズツ、ひつく」

「あ、本当に泣き止んだ……」

妹に撫でられる姉、というこの構図。情けないことこの上ないが、今のレミリアにはそんなことを気にする余裕はないようだ。フランドールも、どこか複雑そうな表情である。

それでも姉は、強くフランドールに抱きついて離そうとしない。

「全く、どっちが妹かわかったもんじゃないわね」

「待って下さいパチュリーさんまだ話は終わってませんよそもそも私はまだ大絶賛成長中の身であつてさっきのような侮辱は許さ——」

……だが、少しすると、レミリアは何やら小声で喋り出した。

「ひぐつ、わ、私なんて、姉失格よ……」

「た、確かに、コレはあんまりお姉様らしくないよ?」

「ひぐう。……それに、私、フランに嫌われてるし……」

「ええっ!?! どうしてそうなるの!?!」

突然の大声にびくつ、と震えるレミリア。神経が過敏になり過ぎである。

まあこんな状況で声を荒らげたフランドールもフランドールだが、本人からすれば身に覚えがないのだから仕方がない。

レミリアは恐る恐る、といった表情でフランドールの顔を見た。

「だ、だ、だつて、さつきフラン、『お姉様なんか負けるな』つて言っ

てたし……ぐすつ」

「あ……い、いやあれはっ、詩音を応援してただけだよ!?　　そういう意味で言った訳じゃ……」

……そういえば、レミリアは弾幕ごつこの最中もその事を気にしていた。いくら詩音のスペルの影響を受けているからといって、号泣する程のことなのだろうか……。

まあともかくそんなレミリアだったが、焦りながらも訂正するフランドールを見て、再び戦々恐々とした面持ちで口を開く。

「……じゃあ、フランは私のこと——」

「だっ!!……だ、大好き、だよっ」

フランドールは頬を赤く染めながらもはつきりと、大好きな姉に告げた。

それを聞き、レミリアの瞳に益々涙が集ってゆく。

「ううっ、ふ、フラああああああああ!!」

「——ふふっ、お姉様ったら泣きすぎだよ」

もう涙が枯れてもおかしくないが程だが、それでもレミリアは感情は表出させ続ける。後悔、贖罪、安堵、様々な想いがごっちゃ混ぜになり、引っ込みがつかなくなっているのだろう。

そんな姉を、妹は優しい笑顔でいつまでも、いつまでも撫で続けていた。

その瞳が少しだけ潤んで見えたのは——きっと、気のせいではないだろう。

Extra story

——永遠に幼い二つの月——

「……どうですか、お望み通りの写真は撮れましたか?」

「ええ、最高よ。ありがとう小悪魔、協力してくれて」

「お二人に気づかれないうような位置にナイフを突き立てながら『良い撮れ高をヨロシクね』って言うのは、協力と言うよりも脅迫なのでは……?」

「まあ咲夜さんがナイフで刺すのはいつものことですから、仕方ありませんね」

「貴方は昼寝してるからじゃない」

「自業自得ですよね」

「ここにも味方はいなかった——!?!」

今野未来の日常

「じゃ、お母さん行ってきまーす！」

勢いよくドアを開けると、だいぶ暖かくなってきた風がぴゅるりと吹いた。

いやー、すっかり春だなあ。先週は、今年五回目くらいの大寒波が来てたらしいけど、今日は打って変わって気持ちいい快晴。まさしく絶好の修了式日和だね！

……と、そんなこと考えていたらいつの間にか隣の家の前に着いていた。まあ十メートルくらいしかないんだけどね。

そこには、箒で道を掃除してる、見た目四十代くらいのおばさんがいる。ま、実年齢はもうちよい上なんだけど。

私も大人になったら、おばさんみたいなステキな女性になりたいなあ……なんて。

「おはよう、歌音おばさん！」

「あらおはよう、未来ちゃん。今日も朝から元気がいいわねー」

そう、私の名前は今野未来！　元気が取り柄の、ピッカピカの中学二年生！　まあ今日は修了式だからあと半日くらいで終わりなただけどネ！

そんな私にあいさつを返してくれたこちらのステキマダムは、うちの隣で六重荘セクスレットって名前の施設を営んでいる歌音おばさん。今更だけど、ネーミングセンスが良いのか悪いのかわかんない名前だよね六重荘って。

……あれ？　　そういえば、いつもはこの時間にいるんだけど……。

とか思いながらキョロキョロしていると、たぶん私の意図に気づいたおばさんが声をかけてくれた。

「ああ、あの子ならもう少ししたら下りてくる筈だから、ちよっと待っててね」

「いつもなら私の方が遅いのに、何かあったんですか——」

その時、おばさんの奥にある扉からガチャリと音が聞こえた。同時

に、かなり賑やかな声も響いてくる。

「なーなー、もうちよいいいじやん！」

「ダメですよ、また遅刻したいんですか？」

「ちえ、いつつも自分ばかりゲーム占領してるんだから、朝くらいはいーじやん！ ケチー！ いけずー！」

「こら優弦ゆうとつ、お姉ちゃんにそんなこと言わないの！」

「まーまー、美琴みことも落ち着いて下さいよ」

「いつてらっしやーい！」

「しやーいっ!!」

「見送りありがとうございます、響ひびき、奏かなで」

そつちに目をやると、三人が仲良く並びながら向かってきた。左側で文句タラタラな男の子と、一人挟んで右側でそれを注意する女の子。二人ともランドセルを背負って、朝から元気なことだ。

その後ろで更に元気な声を出してるのは、まだランドセルも大きすぎるくらいな歳の男女。あの二人、あんまし似てないんだけど双子なんだって。ええと、ニランソーソーセージ、だっけ？

……なんかお腹空いてきた。朝ごはん食べたばかりなんだけだなあ。

——とか何とか考えてると、小学生二人に挟まれていた、彼女がこつちに気づいて駆け寄ってきた。

「おはようございます、遅くなって済みません——」

「ちよつと待った！ 私とは、敬語を使わないって約束はどうしたの？」

「……あ」

私の指摘を受けた彼女は、頭に手をやりバツの悪そうな顔をする。

全く……。まあ、みんなに対して丁寧だ、って考えれば良い面もあるんだろうけど。でも私は、もうちよいフランクに接して欲しいっていうか。だって十年以上の仲だし。

「えへへ、つい癖で……じゃあ、改めて。おはよう、未来」

「はい、よろしい」

「何よそれー、未来は私の採点者なの？」

「冗談、冗談」

にしし、と笑うと、彼女も合わせて目を細めてきた。

その小さな隙間から瞳が見え隠れしているんだけど……やっぱり、彼女の目は綺麗だよなあ。

「おはよう、朝から元気だね——」

——詩音！

特に、左の翡翠色なところとか、ね。

その後、小学校に向かう優弦くん、美琴ちゃんとは別れて、いつものようにお喋りしながら私たちは中学校に辿り着いていた。

クラスに入ると、みんなのテンションは最高潮だった。何せ明日から、待ちに待った春休みが始まるのだ。この春休み、夏みたいに暑すぎず、冬みたいに寒すぎず、更には課題もほとんどないとききた。これはエンジョイするほかないよねっ！

……ん？ 学年が変わったら受験生だろって？ アーアーキ
コエナーイ

とまあそんな訳で、今、私は絶賛修了式の真っ最中だ。テンプレ通りに長い校長先生の話をどうにか耐え抜き、ちょうど表彰が始まったところ。

と言つても、うちの学校はそこまで部活が強くないから、本当ならあまり表彰することもない筈なんだけど……。

「賞状、○○県大会器械体操女子の部、跳馬部門優勝、平均台部門準優勝、平行棒部門第四位、床部門優勝、総合優勝。更には、この結果により出場した全日本中学校総合体育大会器械体操部門において、総合成績第三位、以下略。貴方は、当初の成績を収めたことをここに賞します」

あまりの賞の多さに、全校生徒が集まる体育館がざわめく。話の長い校長先生でさえも、思わず『以下略』と言ってしまう始末。まあ気

持ちもわかるけど。

そんな事態を引き起こしたのは、一体誰なのかと言うと――

「おめでとうございます、古卿詩音さん。貴方の輝かしい活躍、学校長として誇らしく思いますよ」

「いえいえこちらこそ、いつも応援して下さいありがとうございます」

――体育館の舞台上で何やら談笑している我が親友、詩音だったりする。

古卿詩音。私の親友で、六重荘に住んでる一人。出会ったのもちっちゃかった頃だし、家が隣ってこともあって仲良くなるのに時間はかからなかった覚えがある。

そんな彼女、実は全国レベルの体操選手なのだ！ この二年で取った賞は数知れず、最早うちの学校ではこの長い表彰もお決まりになっている。

修了式が終わり、教室に戻ってから私たちはその話をしていた。

「いやーさすが詩音だね！」

「いやいや、それほどのことでもないんだけどねー」

「またまた謙遜しちゃって！」

体操のルールはよく知らないけど、全国三位がスゴいことくらいは私でもわかる。なのに詩音ったら、少しも驕ったりなんかしないで。

……むしろ詩音は昔から、自分が持ち上げられることを極端に嫌ってる気がするんだよねー。なんでだろ……。

「ねえ詩音ー」

「……………」

「……………あれ、詩音？」

……………？ どうしたんだろう、声をかけているのに反応がない。詩音は顎に手をあて、ジーンと机を見つめていた。

「おーい、しおーん」

「……………ハッ。あ、ごめん」

私の声に気づいた詩音は、ようやくこっちの方を向いた。なんか結

構深刻そうな顔をしてたんだけど、お腹でも痛いのかなあ。

近くで喋っていた友達も、ただならぬ気配がしたのか私たちを見つめている。

「話してる途中なのにどうしたの？」

「ごめんごめん、ヘルシエイク矢野のこと考えてた」

——はっ？　へ、へるしえいく……？

周囲の友達の間顔を見ても、誰も知らないのか首をふるばかりだ。

「……何それ？」

「なっ！　ま、まさかお主、あの伝説のヘルシエイク矢野を知らないと申すのか!？」

「え、いきなりどうしたのその口調」

……あー、はい、そういうことね。どうやら今日も、彼女のスイツチが入ってしまったらしい。

詩音はバツと椅子から立ち上がると、音に驚いて注目するクラスメイトの視線も気にせず語り始める。

「説明しよう——ッ！　それは、ギター界に舞い降りた新星にして、誰よりもアツい魂を宿す男——ッ！」

「えーと、詩音さーん？」

「ペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラペラ——」

ダメだ、後半は全然頭に入ってこなかった。

……えー、そういうええばまだ言っただけだったか。

私の親友は、中二病です。

「オラオラオラオラっ！　これでどうだ、それっ——」

「フツ、まだまだ甘いですね」

「ああっ！　　ブツ飛ばされた！　　ちよ詩音、今のどうやったんだよ!？」

「トップシークレットです」

「あつ美琴ちゃん、それ私が取ろうと思つてたやつ！」

「ええっ!? い、いやでもこういうのつて早い者勝ちじゃん！」

「くっ、こうなったら最後の切り札を美琴ちゃんに——つてああ!？」

「まとめて飛ばされた!？」

「わっ、私のキャラが!？」

「ふふ、漁夫の利」

修了式が終わつて、私は詩音の家にお邪魔していた。そこで今は、同じく小学校の修了式を終えて帰っていた優弦くん、美琴ちゃんとゲームをやっている。あれだ、みんなでやると盛り上がる、大乱闘なとかブラザーズだ。

——にしても詩音、強すぎだよ!？」

「イエーイ、また私が一位——!」

「くそっ……詩音、これで何連勝だ?」

「確か八じゃなかったっけ? 優弦くんも、結構いいセンいつてるのにね——」

「私たちじゃ、どうがんばつても詩音お姉ちゃんには勝てないもんね……」

意気消沈する私たちをよそに、詩音はむかつくくらいのドヤ顔を決めてくる。殴りたい、この笑顔。

……そういえば、さつき詩音が中二病だつて言つたけど、それだとぶん、少し語弊があるんだよね。

詩音はただ、ゲームとかマンガとかアニメとかが凄く好きなのだ。実際、ここにも据え置き型もポータブルなやつも、たくさんのゲームが置いてある。詩音がなんとかブラザーズが強いのも、それだけやり込んでるつてことだし。

加えて、彼女の部屋には百では下らない数のマンガがある。その影響で、学校とかで男子にも女子にも、よくマンガを貸してる姿を見かける。

そんな風に、いわゆる二次元系のものが物凄く好きだけなのだ。

……これだけだとただのオタクさんなんだけど、詩音がちよつと特

殊なのはここからで。

詩音は日常生活の中でよく、ゲーム内の話を熱く語り出したり、必殺技を唐突に叫んだりするんだよね。そういうのに憧れてるっていうか。

あ、一番ヒドかったのはあれかな、中一の時の自己紹介。あんまし細かいところは覚えてないけど、確か『闇より誘われし混沌の使役者』とか言ってた気がする。

……そういうのを中二病って言うんじゃないか、だって？　う、うーん、ええと——

「囚われの宿命を解放するために授けられた特異な花は、彼の禁じられた力を開眼させた！　さあ、天帝に選ばれし最後の希望、赤い配管工よ、汝が宿す烈火、今こそ最大出力で放つ時ぞ——

「お姉ちゃん、宣言したいのはわかるけど一々ポーズ画面にしないで」
「……っ！　さ、最後の切り札！」

炎符ツ、『螺旋焼却砲』!!」
「ちよそれ違うマンガの技——ってああ、俺のキャラが押し出されていく……」

——ごめんよ詩音、未来ちゃんちよっとフォローしきれないや……。

とか何とか考えてる内に、この試合も終わってたらしい。当然のように詩音が一位。ちなみに私はダントツで最下位だった。

「クソっ！　どうしてキノコ王国縛りまでしてもらってるのに、詩音に勝てないんだよ!!」

「フツ……それはですね、優弦、あなたが——」
「坊や」だからさ

「ああっ!?　おい詩音、ちよっと勝ってるからって調子乗んなよ!!」

「おや、負けてるからってその発散方法がソレって、男としてどうなんですかねえ？　優弦くんかっこわるうーい」

「っ……………!!」

あー……………また出た。変なスイッチが入って暴走する詩音と、元々気が短い優弦くんの喧嘩。ちよっとヒートアップするとすぐこれだも

んなあ。

反射的に立ち上がる優弦くんには、余裕綽々したり顔で笑う詩音。端から見れば一触即発だけど、こんなもん私たちの中じゃ日常茶飯事なんだよね。

んで、ここまでくれば――

「おやおや？　笑顔が見えないですねえ、余裕のない男はモテませんよ？」

「……おい詩音、ちよつと表――

バンツ!!!

大きすぎる音に、思わず言い争いをしてた二人はビクツとなった。

そして何かを察したのか、恐る恐るその発生源を見ると――

……そこには、笑顔の鬼がいた。

「……優弦」

「は、はいッ!!」

「今、隣の部屋では？」

「おぼさんがチビ二人と昼寝してます!」

「そんな中で大きな音を立てたらどうなるか、もうすぐ中三な詩音お姉ちゃんにならわかるよね？」

「そ、そうですね。うん、騒ぎ立てるのいくない」

いや、一番大きな音を出したのは美琴ちゃんじゃないかな……？

なんて言ったら、こっちにまで飛び火が来そうだから黙っておく。

今の、笑顔の下に般若面を張り付けた状態の美琴ちゃんの前では、余計なことは言わない方が良く。まさしく触らぬ神に祟りなし。この場合、神つてよりは鬼の方が近いけど。

「何か言うことは？」

「すみませんでした」

気迫に負けたのか、えらく素直に謝る二人。この光景も日常茶飯事、っていうかここまでは毎回セットだったりする。毎度毎度、懲りないなあ――

――……？　あれ、見間違いか……。

「そうじゃなくってさあ。私が謝られてもどうしようもないじゃん

？」

「む、むう。それはそうですけど――

「ねねね、詩音詩音」

「……ん？ どうしたの？」

「今一瞬、詩音の目がピカツと光らなかつた？」

「……？」

そう言うのと、優弦くんと美琴ちゃんの二人には何言つてんだこいつ、つて顔をされた。まあそりゃそうだよねー。自分でもよくわかつてないもん。

でも、確かに一瞬だけ、詩音の翡翠の目が光つた……気がするんだよねえ。

「……でもやっぱ、見間違いだよねえ。そんなことあり得ないし。ね、詩音？」

「……？」

「……詩音？」

あれ。同じく何言つてんの、とか言われると思つていたんだけど、詩音は顎に手をあて、ボーツとしている。焦点がどこにも合わさっていないから、何か考え事をしてるっぽい。

……もしかして、またへるなんちゃらさんのことを考えてる？

「――ねえ未来、それつて左目？」

「ふえっ!? あ、うん、そうだよ」

とか思つてたら、唐突に詩音が顔を上げて尋ねてきた。

ええと、翡翠なのは私から見て右側だから、左目……で合ってるか。ビックリして反射的に答えちゃった。

そしてまた、詩音は考え事を始める。うーん、確かに目が光るなんてファンタジックで奇々怪々な出来事だけど、そんな考え込むことなのかなあ。私の見間違いかもしれないし。

「ブツブツ……魔理沙さんと同じ……幻想郷でなくても……じゃあ、一体どういう条件で……ブツブツ」

……なんか、いつにも増して独り言が激しい。つてか、何か聞き覚えのない単語が聞こえてきたんですけど。おーい、詩音？

すると、今まで不可思議そうに詩音を見つめていた優弦くんが口を開いた。

「……なあ、詩音？　もうス〇ブラやらないの？」

「……っ。いやいや、まだ饗宴はこれからですよ」

あ、普通に反応した。つてか優弦くん、まだゲーム続けるつもりなんだ。

そのまま詩音も、優弦くんが続いて何事もなかったかのようにゲーム機を手にとって――

「つて待て待て待て待てイ！　ちよい詩音、今の独り言は何よ!？」

「残像だ」

「……？」

「さ、気にせずたつたか続きを始めよう！」

そう言つて詩音は、キャラクター選択に戻る。気づけば、優弦くんだけでなく美琴ちゃんも選び始めていた。

「あれ、未来ちゃんはもうやらないの？」

「おーい、早くしないと始めるぞー」

……あれー??　なんか、私だけトロい奴みたいな感じになつてるぞ。

優弦くんも美琴ちゃんも、今の詩音の行動に疑問を持つてないみたい。いやまあ確かに、詩音は他人より独り言は多めだけどさ。

――むう、そう考えるといつも通りかもしれない。それに詩音は、中につ………ゲーム大好きだし。まあそれを理由に挙げるのはどうかと思うけど。

「いや、やるやるー。美琴ちゃん、今度こそ私が勝つからねー！」

……まあいつか。難しい考え事は止め止め、ゲームを続けようつと。

そんな訳で、私はまたみんなの輪の中に戻っていくのでした。ちゃんちゃん。

……あれ？　何か忘れてるような……。

東方紅魔郷 B a d E n d

飛翔の出来る妖怪でも、敢えては向かおうとしないほどの上空。

そこでは、天を仰ぐと一面の星々が、頭を垂れると遙かに広がる雲海が目に入る。それは、こんな世界の果てとも呼べる所まで訪れた者だけが獲得できる、まさしく絶景。

風が強く吹き、眼下の雲は激しくうねりを上げる。満天の星空が、それに合わせて煌めく。生命の伊吹が感じられないながらも、そこには幻想の地における、一つの幻想の極地、とも言えるほどの光景が広がっていた。

そんな普段ならば、月のみが密かに楽しむその場所に。

不気味な目玉が覗く、一つのスキマが開いていた。

「——突然ですが、皆様は『パラレルワールド』と聞いて、何をお思いになりますか？」

その、異形とも言える空間の裂け目に、一人の少女は何気なく腰をかけている。

風は益々その強さを増し、少女の金の髪を激しく靡かせる。

しかし彼女はそれにも動じず、独特な形の帽子を手で押さええるだけだ。

「パラレルワールド……言い換えるのなら、平行世界。この現実とは別に、もう一つの現実が存在する、という愉快な発想のことですわ」
そう言うと彼女は目を細くし、紫色の扇子で口元を覆う。

「この単語を聞き、こう思う方もいるでしょう。」

『そんなものは、サイエンスフィクションの作り出した妄想に過ぎない』

また、こう思う方もいるでしょう。

『もしその存在を証明出来れば、タイムパラドックスを克服して時間旅行を可能にするかもしれない、素晴らしい理論だ』

……もしかしたら、こう思う方もいるかもしれません。

『ドラ○もんで聞いたことがある』——

偏西の風に乗り、辺りの変化は著しくなつてゆく。雲が崩れ、星の

光が不規則に途切れるようになる。

それでも少女は、身に纏った異国風な服の裾を揺らがせるばかり。その声も途切れることなく、風の音が轟く夜空に反響してゆく。

「——どちらにせよ、それは人類の叡知をもつてしても未だ解明できていない理論。人ならざる私がこれ以上言及致しますのは、少々野暮が過ぎますわね」

パチン、という音が聞こえた。

それは、彼女が扇子を閉じた、ただそれだけの音。話の一旦の区切れを明示する、それだけの合図。

しかし、それは同時に変化を意味する。

——鬱陶しい程に吹き荒れていた風が、全て消えていた。

「さて、話は変わりますが。美しき現実生きる皆様ならば、真実に辿り着くことのみが全てでない、ということには既にご存知でしょう」

突如、ごうごうという音がしなくなったことにも彼女は驚かない。真っ直ぐ前を向き、胡散臭い笑みを浮かべて語る彼女の髪を、仄かな光が照らす。

静寂に満ちたその場に残されたのは、少女の息づかいと、柔らかい月の光のみである。

「たとえ非現実を描いた作品であっても、ハッピーエンドに閉じるとは限らない。

それは、トゥルーエンドがあれば必ずと言って良いほど存在する、また異質の終わり方——

……そう、『バッドエンド』でございます」

紅霧と共に満月は過ぎ去り、狂気の衛星がその真の姿を現す周期は再びリセットされていた。そんな不完全な円ながら、月は妖しい少女を妖しく映し出すのには十分な光を蓄えている。

「今から皆様がご覧になるのはそんな、真実が真実でなくなった世界。『もしも、古卿詩音が八雲藍に敗れていたら』——もしも、外界の少女が吸血鬼の姉に、その実力を見出だされていなかったら。そんなお話でございます」

もしも、と口にした一瞬、少女はどこか遠い目をした。何かを憂う

ような——ひよつとしたら、悔いるような。

しかし、直ぐに元の調子に戻る。

「果たしてそれが、先ほど述べたようなパラレルワールドなのか、はたまたお茶目な私の築くイマジナリーワールドなのか。それは、皆様のご想像にお任せします。」

——ただ一つだけ。〃これは、確実に起こり得た未来の話である〃
……そのことだけは、境界を操る者の名に懸けて保証致しましょう」
その時、妖怪の手元に一つのスキマが開かれた。この世界とも、彼女が腰かけるそれが繋がっている世界とも異なる〃ナニカ〃に接続されたそれは、見る者全てを次第に受け入れ、引きずり込もうとする残酷な〃ナニカ〃を放っているように思える。

それは、ある意味では彼女のメッセージなのかもしれない。

『幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ』

「それでは皆様、私がご案内できるのはここまでとなっております。
あとは皆様自身の目で、イレギュラーなる顛末をお見届け下さい。

さあ——

……すべては、幻想の中に——」

そう言って、境界の賢者は微笑んだ。

「……あの、紫様。先ほどからこんな所にスキマを開かれて、何を虚空に独り寂しく呟かれていますか……?」

「……………」。藍。弾幕ごっこ二回目のド素人に負けた、情緒のわからない狐は引っ込んでなさい」

「ぐぼあぁっ!!」

「…………あら? 意外と負けたこと、気にしてたの?」

庭師の朝は、早い。

日の出の時刻。半日ぶりに姿を現した太陽は、神々しさすら感じさせるオレンジの光を放っている。

それは、未だスヤスヤと眠る少女の顔をも照らしていた。彼女が暮らすようになり、特別に設置された窓から漏れるそれは、少女を眠りの底から覚醒へと誘う。

そして日の出から数分もすれば、彼女の一日が始まるのだ。

「んーっ……もう朝か……」

目を覚ました彼女は、そのベッドの上でぐーっ、と伸びをして、部屋の角に置かれたレトロな振り子時計を確認する。

示されている時刻は、朝の五時過ぎ。昔の彼女からは考えられない程の早起きだが、ここでの生活を送る中でもう慣れていた。

そうして彼女は一日の活動を開始する。

手始めに、寝巻きからいつもの仕事着に着替え始めた。

庭師の朝は、清々しい。

館の大きなドアを開くと、夏の朝に独特な、爽快な風が彼女を迎える。

庭の中心に向かい歩みを進めるたび、穏やかな風が植え込みの花たちを、彼女の黒髪を、そしてメイド服を優しく撫でる。太陽の光を一身に享受する植物に釣られて空を仰げば、そこには雲一つない青空が広がっていた。

朝焼けもキレイだけど、やっぱり青空も好きだなあ、と思う彼女である。

「って、朝焼けってことは明後日くらいに雨の可能性が高いですね……。後で報告しとかないと」

そうしてちよつとした発見もしつつ、少女は自らの仕事を始めた。

少女の暮らす西洋風の館には、相応の庭が備え付けられている。そしてそこには、色とりどりの花々や整えられた木々が飾られていた。

それらの管理を全て担う——即ち、花の水やり、雑草の処理、植木の調節エトセトラが、庭師に任じられた少女の仕事だった。

……従ってメイド服である必要はないのだが、この館における従者のイメージがそれで固まっていたため、彼女もメイド服を着るようになっていた。彼女自身も、その格好を気に入っているようだ。

そんな訳で彼女は、今日も今日とて鼻歌混じりに花へ水を与える。

銀色のジョウロから注がれる水は、花の育つ肥沃な土を、そして花自体も湿らせる。鮮やかな花弁の上に乗った水滴は朝の日差しを乱反射し、ジュエリーのような輝きを見せていた。

そうして美しい自然をしばし堪能しつつ、作業を進めていた少女だったが……ふと、何かに気づいたようだ。ジョウロを置き門の方へと向かう。

立派な館にふさわしい、これまた立派な門。そちらへと彼女は、何故かそろりそろりと注意深く近づいてゆく。

門へと到達すると、これまた音をたてないようにゆつくりとそれを開け、ゆつくりと出て——

「——おはようございます、美鈴さん!!」

「……zzzz」

……その予想は的中していたようだ。

かなり元氣よく挨拶した筈の少女。しかしその前では、朝なのに昼寝をするという一周回って離れ業をこなす門番、美鈴が気持ち良さそうな寝顔をしている。

彼女自身はそこそこ優秀な門番のだが、いかんせんシエスタ癖があるのが玉に傷である。そうして昼寝しているところを上司に見つかり、額にナイフを叩き込まれる、までがいつものテンプレートとなっている。

少女はそんな、だらしのない顔をしている同僚を見てため息をつく。

確かに門番の仕事はもて余す時間が多いだろうが、それにしたって朝から寝るのは行き過ぎだろう。

このまま放置すれば、美鈴の頭にナイフが二、三本生えるのは時間の問題だ。別にお仕置きとしては間違っていないためそれでも良かったのだが、少女は親切心から起こしてやることにした。

庭師の少女は、眠る門番の耳元へと口をもつていく。そして、こう囁いた。

「……メイド秘技、『殺人ドール——」

「うわあああ咲夜さん、いきなりスペルカードはやり過ぎじゃないですかああ!？」

「……つて、あれ? いない——」

慌てて飛び起きた美鈴だが、刑を執行しようとしていた筈の上司は見当たらない。代わりに、同僚の少女がニヤニヤしながら自分を覗いている。

それを見て、全て理解したようだ。

「……はあ、またですか。その起こし方は心臓に悪いからやめて下さい、つて前にも言いましたよね……?」

「その『前にも』寝ていたのはどこの誰でしょーねえー?」

「ぐっ……」

「ふっつ、それにこの起こし方、美鈴さんの反応が面白いんで」

「……まあ起こしてくれるだけマシだと考えるべきですかねー……」

苦笑する美鈴。それを見て、少女はますます笑みを溢す。

そんな光景が、ここでの日常だった。

そのまま二人は、他愛もない雑談へと突入する。妖怪と人間とは言葉、そこはやはり女性のようで、会話は途切れることなく多岐に渡っていく。天気の話、二人の主の話、湖の妖精の話……。

そして共通の上司の話へと差し掛かった時、彼女は突然現れた。

「……あら? 美鈴が寝ていないなんて珍しいわね」

「さ、咲夜さん! まま、まさかあ、いくら私でも、こんな朝っぱらから昼寝なんか、ねえ!？」

「そーでーすねー」

「……まあいいわ。今日のところは見逃してあげる」

それを聞き、人目も憚らずガツツポーズを決める美鈴。そんな部下に、上司でありメイド長でもある咲夜は、わかりやすいため息をついた。

「まったくもう、どうしてこう、どいつもこいつも危機感が足りないというか、アホみたいに呑気っていうか……」

「ご苦労様です」

「……私は、貴方にも言ったつもりだったのだけど？」

「ワタシ、ニポンゴワーカリーマセーン」

「はあ……」

咲夜はこめかみを押さえる。これで役立たずだったら即座にクビを言い渡せるのだが、二人ともそれなりに仕事はこなしているため、咲夜の頭痛は増える一方だった。

「……とにかく、これ。朝食を作ったから、また庭のベンチで食べましょう」

と言っても、そんなこと咲夜も既に慣れっこだ。頭の中をさつさと切り替え、手に持ったバスケットを掲げた。

「いやっほう！　待ってましたー!!」

「それはサンドイッチですね！　いやー、咲夜さんのサンドイッチは絶品ですから楽しみですよ！」

「あら、日本語はわからないんじゃないの？」

「既に翻訳ソフトのインストールは完了しています！　さ、食べましょうー！」

言っただとたんにテンションを上げ、庭へと駆け出す二人。そんな部下たちに最早、呆れのこもった笑いを向けるほかない咲夜であった。

庭師の仕事は——ぶっちゃけてしまえば、結構ヒマである。

花や木の手入れ、雑草抜きなど例を挙げると仕事が多いように思えるが、毎日雑草が山のように生える訳でもないし、木の手入れも週に一度くらいで事足りる。朝夕の水やりくらいしかすることがない日

も多い。それ故彼女は、咲夜の仕事を手伝うなどして一日を過ごすことも度々あった。

テキパキと掃除をこなす様子に、ようやく妖精メイドとは違ってまともに仕事のできる者が来た、とメイド長が感涙にむせび泣いたのはまた別の話である。

そのため、朝食を終えて館へと戻る最中に咲夜が頼んだ仕事も、少女はすんなり了承した。

「本の整理、ですか？」

「ええ、パチュリー様が仰つてね。小悪魔だけじゃ手が足りなさそうだから、他の誰かの手も借りたいて」

「成る程、了解です。あそこの本は、私もちよくちよく読ませて貰ってますから」

「なら良かったわ。じゃあ、よろしく頼むわね」

そう言つて、咲夜は突如その姿を消す。おそらく、彼女の能力で時を操つたのだろう。

これもまた、ここでの日常である。

庭師の少女は、特に驚きもせず図書館へと向かった。

「失礼します、手伝いに来ました——」

——つて、あれ？」

両開きの大きな扉を押し開け、彼女は図書館へと入る。相変わらず目に入るのは、ものすごい量の本。

しかし彼女は同時に、この時間にしては珍しい光景を視界に捉えていた。

「ん。作業内容は小悪魔から聞いて頂戴」

「あらあら、朝から精が出るわねえ」

「……こんな時間まで起きてるなんて珍しいですね、レミリア様」

そう。図書館の魔女、パチュリーの親友にして彼女たちの主人である、レミリアがまだ起きていたのだ。

吸血鬼であるレミリアは、太陽を嫌うため本来夜行性である。それ故、少女がこんな朝早くに主人と出くわす機会は数える程しかなかった

た。

尤もいつかの異変以来、日中に行動することも増えたのだが。

「ええ。だって、今日は特別な日ですもの」

「特別な日……?」

「あら、もしかして忘れてるの?」

館の主の言葉に、首を傾げる庭師。

それを見て、レミリアは楽しそうに笑った。

「……はい、申し訳ございません。記憶にないです」

「いやいや、謝る必要なんてないわよ。だって今日は、貴女が主役なんだから」

「私が、主役?」

その言葉に、彼女はますます怪訝な面持ちをする。

「ええ。今日は、紅霧異変から丸一年が経った日。そして——

——貴女がここに來てからちょうど一年の、特別な日でしょ?」

「え? あ……」

悪戯つ子な笑みを浮かべて語るレミリア。

そんな主人の姿に、彼女の胸に何か熱いものがこみ上げたのは、きつと気のせいではないだろう。

「あ、ありがとうございます。こんな私なんかのために……」

「ふふ、私は従者をないがしろにしない素敵な主人だもの。もちろん貴女だけじゃなくて、咲夜や美鈴、パチエや小悪魔が來た日のことも覚えてるわ」

そういえば、と彼女はこれまで四回あった記念パーティーのことを思い出していた。その時は微笑ましく思ってたくらいだが、いざ自分の番になると、結構胸にくるものがある。

「って訳で、今夜はパーティーよ! ちゃんと予定を開けておきなさいね?」

「はい! もちろんです!!」

「……結局レミィは、何かにかこつけてドンチャン騒ぎしたいだけじゃない」

「こらパチエ、そういう台無しなことは言わない。否定はしないけど」

流れるようなやり取りに、思わず笑みを溢す。親友つていいな、と思った少女である。

その時だった。

図書館の入り口から、爆発音が聞こえた。何事かと思い、そちらを振り向く三人。

そしてそこからは――

「おいパチュリー、本を借りに来てやったぜー」

――よく聞き慣れた声が響いた。

「……また魔理沙ね。よくもまあ飽きないこと」

「つたく、あの火力バカは……」

「あははは……」

呆れるレミリアに、襲撃のイライラを隠せないパチュリー。そして、苦笑いの少女。反応も三者三様である。

しかし、魔理沙は一応、侵入者に分類される。彼女の図書館襲撃ももう日常の光景になっていたが、無視する訳にはいかないだろう。するとレミリアが、そうだと呟いて自らの庭師の方を向いた。

「貴女に幻想郷二年目、初の仕事を与えるわ。あのネズミをひっ捕まえて来なさい」

「――承知しました！」

不敵な笑みを浮かべるレミリアに呼応して、彼女もにひひ、と笑う。

そうして、侵入者の前に立ちはだかった。

「おっと、そこまでですよ」

「んあ？……ってそう言えば、お前に初めて会ってちょうど一年だったな、今日は」

「あれ、魔理沙さんも覚えててくれたんですか？」

「おう！　私は、友達との思い出は忘れない女だぜ！」

元気に笑う魔理沙。ここには意外と記念日を大事にする者が多いんだな、と新たな発見をした少女である。

「――てな訳で、見逃してもらおうことは……」

「ないですね」

「あちやー、やっぱりかー」

そう言つて、魔法使いの少女は大袈裟に顔を押しさえる。まあ最初からわかり切つていた、ということだろう。

——そして、二人がスペルカードを掲げたのは同時だった。

「……私としちやあ、大事な記念日の主役をボロボロのボロな姿にしたくはないんだけどなあ、ああ残念だ」

「魔理沙さん演技ヘタですね……」

それに、通算勝率は私の方が上ですよ。そんな簡単に負けたことにしてもらつちやあ困りますねえ」

「へっ、言つてなー」

二人は軽快なやり取りを交わす。

それぞれ、押し入る者に迎え撃つ者。立場は違うけれども、それだけの言葉では語り尽くせない腐れ縁が、二人の間にはできていた。

——そして、そんな彼女たちを結ぶものは、一つしかない。

少女の左目が、翡翠に輝き始める。

「ふふ、これがあの子の、二年目初の弾幕ごっこねえ。まさかここまでこっちに馴染むとは」

「私としては、もっと静かにしてて欲しいわ。あと本が盗られなければなおよし」

「あらあら、叶わぬ願いつてそういうことを言うんじゃない？　ふふっ」

「……私は、二人の出会いを祝して」

「なら私は、私らの記念に祝して」

「——全力で行きますよ！」

『普通の魔法使い』霧雨魔理沙!!」

「——ああ、かかつてこい！」

『紅魔館の庭師』古卿詩音!!」

そして、世界は光に包まれた——

翡翠の庭師、詩音の幻想の日々は、こうして続いていく。

その果てに何が待ち受けているのか、それをあずかり知ることはもはや叶わないだろう。

ただ、一つだけ。

彼女の周りが、笑顔と弾幕の光に満ちていることだけは、紛れもない事実なのである。

Ending No. 2 『紅魔館の庭師』

o m a k e . t x t

——深遠なる幻想の、さらに奥深く。紫色で、多くの目玉が覗く空間。

そこには、暗闇など存在しない。暗闇はなく、ただ——

「暗闇は無く、ただ無知が在るのみ——よ」

「……いきなり何の独り言ですか？」

「というわけで、素敵な素敵な三次元の皆様、ごきげんよう。私はみんなのアイドル八雲紫、十七歳の少女ですわ」

「何がという訳で、ですか。と言うか十七歳って、年齢詐称もいいところじゃ——」

「ほら貴女も早く自己紹介しなさいな」

「……ですから、これは一体何なんですか？」

「何って、ほら、あれよ。原作にもおまけテキストがあるじゃない」

「原作……?」

「それにインスパイアされて、誰かさんの足りない描写力を補おう、ってことになったのよ。どうーゆーあんだーすたんど?」

「……成る程、よくわかりませんがわかりました。つまり、いつものよくわからない胡散臭いこと、ってことですよね」

「まあ大体合ってるわ」

「それならばこの私、貴方様の式として付き従うまでです」

「相変わらずお堅いこと。じゃ、貴女も自己紹介済ませなさい」

「……私がこの、紫様と二人きりの空間で自己紹介をすることに、何の意味があるのでしょうか……?」

「大人しくやったら、今日のお夕飯は油揚げ、たくさん使っていいわ——

「妖怪の賢者でおられる紫様の式、八雲藍です。以後、お見知りおきを」

「……我が式ながら、大丈夫なのかしら……?」

「それで、私は何をすれば?」

「何って……何でもいいわよ? トランプでもする?」

「トランプで……。いんすばいあがどう、というのはいいんですか?」

「あら、不服かしら。じゃあ負けた方が罰ゲームで、脱衣するってことで」

ガタツ

「!? ゆ、紫様、今何か聞こえましたよ!」

「気にすることはないわ、きつと大きいお友達よ。それに、乙女がそう簡単に肌を見せるわけがないでしょう?」

「乙女……?」

「……あら。何か言いたいことがあるような目ね?」

「い、いいえまさかあ!」

「ふーん……。ちなみに、ホンネとタテマエの境界を弄れば――

「そつそれよりも! 結局、私は何をすれば!」

「まあ、端的に言えば他己紹介ね」

「たこ?……蛸?」

「凧。ええとこ、こ……紅茶!」

「ちゃ――ちゃ、着火!」

「か、か、か……カスタネット!」

「扉!」

「ランドセル!」

「留守!」

「スーツ!」

「――って、何でしりとりになってるんですか!」

「からかい甲斐があるわね、貴女。実は自分も楽しんでたんじゃない?」

「いいえ、まさかそんな。言いがかりにも程があるかと!」

「と、いう訳でまずはこの子からよ! ふふふ」

『招かれざる来賓』

ふるきみ
古卿 詩音

『???程度の能力』

「……だいぶ強引に進めましたね」

「貴女も同罪よ? さて、まずはこの物語の主人公にしていまだ謎多き存在、詩音についてね。残念ながら、能力はまだわかってないらしいわ」

「……まあいいですけど。で、詩音のことですか?」

「ええ。じゃあまずは、みんなが気になっているであろう能力について」

「皆、とは……?……まあいいです。それで、詩音の能力ですか。馬鹿げてますよね」

「ふふふ、負けたものね、貴女。ちなみに、彼女がこれまで行ってきたことを列挙すると、次のようになるわ」

- ・相手の弾幕を引き付ける
- ・無からスペルカードを生み出す
- ・その上弾幕を跳ね返す
- ・しかも相手のスペルカードをコピーする
- ・そしてスペルカードルールに普通に馴染んでいく
- ・明らかなパクリ技を堂々と行使する
- ・レミリアの運命干渉を拒絶する
- ・なのに飛べない
- ・何か強そうな剣を生み出す
- ・フランドールの能力を妨害する
- ・更に訳のわからないラストワード
- ・幻想郷と外の世界を行き来する
- ・道具にスペルカードをぶつけて飛べるようにする
- ・でも胸はない。

……うわあ

「……うわあ。ええと、チート、でしたっけ? 外界でこういうの」

「ええ、そうね。……まあ、厳密に言えば違うのだけれど」

「あれ、そうなのですか？」

「どんな力にも欠点はあるわ。それはたとえ詩音でも同じ。いつでもどこでも常勝、という訳にはいかないわよ」

「へえ……」

「それでも、限りなくチートに近いのは事実だけれどね。」

「さ、真面目な能力考察はここまで。次は彼女自身について」

「成る程、こういう風に進めていくのですね。でも詩音自身って……変人じゃあ？」

「変人ね」

「やっぱり変人ですか。それじゃあ普通の妖狐な私が負けるのも仕方ないですね」

「自分で普通って言う奴は大抵変な奴なんだけどねえ。それに、真の意味で“普通”の人なんて、存在しないわよ」

「それはつまり？」

「じゃあ逆に聞くけど、普通の人ってどんな人なのかしら？　普通に大学を卒業し普通に企業に入って、普通に出世して普通に定年する人？」

「でも、大学を卒業している時点で高卒の人からすれば普通でない“大卒”って称号を得ているし、他の職業から見ればサラリーマンなんて“普通でない”職業だと思うのだけけど？」

「……むう。あんまり外界の事情を出されるとちよつと」

「ああ、悪かったわね。でも、これは人柄についても同じよ？　人間も妖怪も、好きなことはそれぞれ全然違う。スポーツが好きなりア充もいればゲームや漫画が好きなお友達もいる。人を食べるのが好きな人食い妖怪もいれば、驚かして喜んでる付喪神もいるのよ。」

「性格なんて、さらに千差万別だわ。挙げ出すと切りがない。十人十色、なんてことわざがあるけれど、言い得て妙だと思うの。」

「すなわち、誰もが他人から見れば“変”な部分を持っている訳。だったらみんなが変人だとは思わない？　その中でも特に変な部分が出ている人が、一般的に変人と呼ばれるだけで」

「ふむ、成る程……」

「つまりは、貴女も変人ってことね！ やーい、変人のらーん!!」
「ここまで引つ張っておいて結論はそれですか！」

……って、先ほどの理論だと、紫様も変人になるんじゃないや

「私はゆかりんだから大丈夫よ」

「いや意味わかりませんけど!?!」

「はいはい閑話休題。もう、全然詩音の話をしてないじゃないの!」

「私のせいなんですか!?!」

「ええ」

「……もう疲れました」

「さて、まずは詩音のプロフィールから。彼女は、日本のとある町に住む人間の少女。学年は、紅霧異変の時点で中学二年生、身長は魔理沙以上霊夢以下ってところね」

「……それって、霊夢や魔理沙と同じ年じゃあ?」

「ええ、そうね。ちなみにまだ登場していないけれど、早苗とも同い年っていう設定だわ」

「いや設定で」

「そんな、一見するとただの人間な彼女なのだけけど……さっきの変人理論に当てはめるなら、まあ特に突出した変人よね」

「ですね。妖怪の跋扈する世界に迷い込んで歓喜する輩は初めて見ました」

「まあ中二病だからね、仕方ないね」

「その一言だけで済みますのもどうかと思うんですが」

「じゃあオツドアイだからね、仕方ないね」

「全世界のオツドアイの方に謝りましょう」

「ゆかりんテヘペロ(ゝω・・★)」

「……ところで、詩音の瞳が光ったり光らなかつたりするのはどういふことなんですか? それにあの、彼女の口調が突如変わったたりした件は?」

「あ、それ聞いちゃう?」

「……不味かったですか?」

「別に構わないわ。どうせ黙秘するし」

「ここに他己紹介の意義が音を立てて崩れましたね」

「何でもかんでも明かせば良いってもんでもないでしょう？　ほら、どこぞのお酒のお姉さんも言ってるじゃない。

『A secret makes a woman woman』つて」

「……それとこれとは話が別では？」

「ああもう、しつこいわね。どうせ話が進めばわかるからいいのよ。貴女はド素人に負けた情けない狐なんだから、もう黙っていなさいな」

「あべしっ!!!」

「かいしんの　いちげき!!　らん　にとてつもない

ダメージ!!」

「……………」

「おお　らん　よ　しんでしまうとは　なさけない…………」

「…………グスツ」

「……ちなみに、彼女が体操で日本有数なのは能力も何も関係ない、完全な実力だから、ズバ抜けた体捌きは素人じゃないわよ。むしろ、飛んでばっかの私たちより優れてるかも」

「同情するなら橙をくれっ!!」

「はい生写真」

「ちえええええええん!!!」

「…………これ以上グダる前に次、行きましようか」

『闇に蠢く光の蟲』『始まりのG!』

リグル・ナイトバグ

『蟲を操る程度の能力』

「ええええええええええ——ハッ!」

「さて、次はG——もとい蟲妖怪のリグルね。哀れにも、詩音による最初の犠牲者となった少女よ」

「コホン。……犠牲にはなりましたが、弾幕ごっこ初戦には持つてこ

「いの相手だったんじゃないですか？」

「あ何事もなかったかのように戻った。」

「触れてやりなさんな。」

「まあでも、貴女の言うことも正しいわね。いきなり門番あたりと戦っていても、恐らく勝ち目はなかったでしょうから」

「でもその結果とんでもないものを生み出していますけどね」

「『リフレクトバレット反射弾幕』、だったかしら？」

「いいわーアレ、動かずに弾幕を避けられるんでしょ？」

「……紫様はもう少し、シエスタとか仰ってないで働きになった方が良いかと」

「知ってるかしら？　働き蟻は、一定の割合がサボることで仕事の能率をより上げているのよ」

「私と紫様の一対一じゃ確実に成り立ちませんよねその法則」

「そういえば、蟻といえば蟲よね」

「そんな今更役目を思い出したかのような発言をされても、これまでの言動で既に紫様のご気質は広く知れ渡っているかと」

「あ、今貴女画面の向こうのお友達を意識した発言したわね！　メ

ターい」

「……唐突に、脳内に『おまい』という言葉が浮かんできたのですが」
「さて、リグルの話ね。彼女は良くも悪くも妖怪、って感じだわ。人間の畏れにより生き永らえ、人間を糧とし、やり過ぎれば人間に退治される」

「まあ野良の妖怪なんてそんなものでは？　彼女は其中でも、知

性はある方ですが」

「イコール今後のomakeではこの手の説明は省かれるってことよ。はいここ、テストに出まーす」

「もう突っ込みませんよ」

「そんな愉快なリグルだけど、Gって呼ばれることを酷く嫌っているようね。仲間内でも、その事に触れるのはタブーみたい」

「まあ、蛍の妖怪ですしね。私も狸とか言われたら怒りますよ」

「でも、どう見てもGにしか見えなくないかしら？」

「……それ以上言うとは叩かれますよ」

「うわっ、メターい」

「おまいう」

『すきま妖怪の式』『境界の番人』

八雲 藍

『式を使う程度の能力』

「さて……それじゃスペースも余ったことだし、この世界における命名決闘方式”について説明しましょうか」

「……ん？ あれ、紫様？」

「どうしたのかしら？」

「私が説明される番では？」

「え？」

「え？」

「え？」

「いや『え？』じゃありませんよ！」

「……そう、仕方ないわねえ。スペルカードルールが初めて適用された記念すべき異変にて外来人に敗北し、更には自らのスペルをコピーされてしまった可哀想な妖狐の話ならいくらでも——」

「……何でもありませんでした。命名決闘方式の説明をお願いします」

「あらそう？ 遠慮しなくてもいいのに」

「お願いします」

「——じゃあ、今月の仕事は全部貴女に任せるわ♪」

「なっ——」

「ありがとう藍！ これで気兼ねなく説明に移れるわね！」

「……もうどうにでもなれ」

涙拭けよ。

「とまあ、そんな下らない話は置いて。詩音が本編中にスペルカードを生み出し、どう見てもそのカードを依り代にして弾幕を発生

させていたでしょう？　その光景に疑問を持つお友達もいるかと思つて、ここで詳しく説明させてもらうことにしたのよ」

「うわー大きいお友達とかめたーい」

「まず、根本の部分は原作と何も変わらないわ。命名決闘方式とは、揉め事や紛争を解決させるための手段であり、妖怪が異変を起こし易く、人間がそれを解決し易くするもの。そして完全な実力主義を否定し、美しさと思念に勝るものはない、という原則に基づいて成り立っているわ。あとちなみになんだけれど、一回の弾幕ごっこで使えるスペルカードは五枚までよ」

「あれ、完全に無視ですか」

「んで、ここからなんだけど……初期の段階では、私たちのところもスペルカード自体はただスペル名が書かれただけの紙で、特別に力を持つものじゃなかったの。でも……」

「……ああ、あの一件ですか」

「ええ。ある日、スペルカードルールの最終調整のために霊夢と話をしていたら、突然あの子、私のカードを見てこう言ったのよ。『なんでカード自体を発動の媒体にしないの？』って」

「実はその案は、ずっと模索していたんですよね。カード自体へ弾幕発動に必要な術式を組み込むことができれば、面倒だから宣言せずぶつぱ、なんて事態は防げます。更にはそこに、凶悪過ぎる威力や不可能弾幕を禁じる事項を盛り込めば、万が一の事態にも対処できると思ひ、研究を進めていたのですが……」

「まあそんなにも都合のいい代物が、そう簡単にできるはずもなく。とりあえずスペルカードは契約書ということにして、あとはルールを明文化しどうかしよう、という方向で固まりかけていたのよね」

「はい、そうでした」

「そのことをあの子に伝えたら……『ちよつと貸しなさい』と言って私のスペルカードを借りてった後、一日でその要望を全て叶えたものを完成させちゃったのよ。しかも、スペル作成者以外の力には反応しないっていうおまけ付きで」

「あれを見せられた時には、言葉が出ませんでしたよ……」

「まあ要するに、『この世界ではスペルカードがないとスペル弾幕は発動できない』『スペルカードは、弾幕ごっこをしているその場で作り出せる代物ではない』『霊夢スゲー』ってことよ」

原作でのスペルカードがどのような扱いか知らないお友達は、ピ○シブや大百○で「スペルカード」と検索してみよう！

「というか散々霊夢霊夢言ってますけど、ここまで肝心の彼女がほとんど登場していないですよね」

「あら本当ね。一応、レミリアを倒し紅霧異変を解決したのは彼女、という事になってるのだけれど」

「なっているというか、事実ですけど」

「でもそんな彼女も、詩音のことは知ってるらしいわよ？　　なんか、

魔理沙やレミリアに自慢されたりで」

「……確かにその二人なら、友人のことを我が事のように自慢しそうですね」

「あと、たまたま見かけた新聞に載っていたり」

「……新聞？」

「あらあら覚えてないの？　　本人が言ってたじゃない、妖怪の山に飛ばされて烏天狗から質問攻めにあった、って」

「……それって、もしかしなくてももしかしますよね？」

「さあ、どうかしら？　　あやややや……」

「……描写されない内に外来人が知り合いを増やしていく……」

「といっても、それ以上に知り合いはいないみたいよ？」

「ほう？」

「そもそも妖怪の山に飛ばされたっていうのも、詩音が幻想郷に来たときどこに出現するのかがランダムなのが原因のようね」

「へー、ランダムなんですか」

「そう。だから普段は知ってる場所、魔法の森や霧の湖付近以外の所に現れた時は、一度外の世界に戻ってからまた入り直しているらしいわ。突撃取材されたのは、妖怪の山に出現した時たまたま近くにあやややがいたみたいね」

「でもそれだと、何回も入り直さなければならなくなるのでは？」

「何故かは知らないけど、魔法の森になる場合が圧倒的に多いよね。まあ、あそこは広いから」

「それもそうですが……」

「さ、そろそろ次の解説に移りましょうか。忘れていた、詩音の往来についても説明できたし」

「……本当に、私のこと欠片も解説しませんでしたね……」

『閉じた恋の瞳』『心を忘れた放浪者』

古明地 こいし

『無意識を操る程度の能力』

「という訳で、次は旧地獄跡にある地霊殿の主人の妹、こいしよ。覚り能力のせいで疎まれてること知り心を閉ざしたという、結構根の深い過去を持つ少女ね。英語で言えばメインヒロイン」

「ヒロインって……主人公は詩音じゃあ?」

「あの子がヒロインに見える?」

「いいえ全く」

「同感ね」

酷い言われようですね……。

「どちらかと言えば、彼女はヒーロー——」

「……とも言えないのが、詩音の面倒なところなのよねえ。ほら彼女、基本的に好奇心に従ってしか行動しないから」

「ですね。もつと主人公と言えばこう、正義を守り抜くために戦う、とかそんな感じなのに」

「まあ幻想郷で正義を語る奴なんてそもそもいないのだけれど。それでも詩音は、どちらかと言えば主人公を飾る脇役、って印象の方が強いわね」

「そうなのですか?……ああ確かに、今回の紅霧異変、フランドールを主人公と考えれば詩音は名脇役って感じですね」

「ぶっちゃけ、^{作者}創造主がそうデザインしたそうよ。特に春雪異変と永夜異変では、その傾向が顕著ね。」

まあ何が言いたいのかって言うと、だから楽しみにしててね！」
「……かなり話がずれましたね」

「やりたくてやった。後悔も反省もしていない！」

「それで、こいしの方ですが。どうして彼女は、地底から地上へと出てきていたのですか？　往來は禁止されている筈じゃあ？」

「無意識だから仕方ないね！」

「……いやまあ、それを言われてしまうと何も言い返せないのですが」
「まあぶっちゃけると、地底と地上との間には物理的な結界とかは特になかったのよ。地上は地上で地底の妖怪を疎んでいたし、地底は地底で楽しくやっているみたいだし」

「双方が双方ともに訪れる理由が存在しない、ということですか」

「こそ。だからこそ、彼女みたいに意思のない者とかは簡単に行き来できちゃうのだけれど」

「まあ問題は起こしてないし黙認、ってことですね」

「姉は酷く心配するでしょうけどね」

「……そういえばそうでしたね。いつの間にかいなくなつてて、いつ帰ってくるかもわからない妹とかどれ程悩みの種なのだろう……」

「ま、そのために泉熙も地上に出てきていたのだけれど」

「え、そうなんですか」

「……ああ、まだ詳しくは言つてなかったわね。じゃあまあ、これから説明するわ」

『沙羅双樹の鬼の色』

八瀬 泉熙

『??を操る程度の能力』

「——つてな訳でオリキャラ二体目、人間と鬼のハーフである半人半鬼の泉熙よ」

「本人は人間だ、とか言つてましたけど」

「でも嘘じゃないでしょう？　実際に半分は人間なのだから」

「まあそうなんです。嘘なんて言つたら萃香始め鬼たちに物凄く怒

「られそうですし」

「と言うか、泉熙自身も嘘は嫌いね。彼女、鬼たちに育てられたから、基本的な価値観は鬼のそれと合致しているのよ」

「豪快で快活、嘘が嫌い、鬪争が好き、等ですかね」

「その一方で、人間っぽい一面も持っていたりするわね。特に尊敬はしていないけど、自分の住む地底の管理者の妹、こいしを様付けで呼んでいたのもそういう理由みたい」

「あれですか、『なんやよーわからんけどお偉いさんみたいやしとりあえず様付けとこ！』的な」

「的な」

「ところで彼女、鬼の四天王だったのですね」

「え？……ああ、それねえ」

「？　　どうかしましたか？」

「……正確に言えば、泉熙は『四天王代理』なのよ。彼女の母親が四天王だったから、その代理って訳」

「じゃあ、萃香が『あいつは四天王』と言っていたのは？」

「周りからは実質的に四天王の一人と思われているようね。力も申し分ないし、特に反対意見がないみたい。でも本人が、まだ自分は四天王を名乗るほどではないって」

「……なんだか、そういう部分も人間っぽいですね。鬼だったら遠慮なく称号を貰いそうなのに」

「そもそも称号をそこまで重視していないフシがあるわね。だからこそ、必要以上に重視する泉熙は半人半鬼なのよ」

「成る程」

「で、彼女も地上に出ていた理由、だったかしら」

「そうですね。話題の逸れ具合が凄まじ過ぎましたが」

「私みたいに頭の回転がわんだほーな妖怪は、次から次に新たな知見が飛び出てくるものなのよ」

「その結果本来の目的を見失っていたら無意味では」

本末転倒の典型例をここに見た。

「コホン。それで、泉熙も地上に出てきていた理由なのだけれど、彼女

はこいしの『お目付け役』なのよ」

「お目付け役?」

「ええ。ほら彼女、『無意識を操る程度の能力』のせいで、一度見失ってしまえばもう見つけることができないじゃない?　それは、心を読む覚り妖怪であつても」

「そうですね」

「でも泉熙は、能力によってこいしの居場所を特定することができるのよ。だからさとりが、こいしを見守るように頼んでいるらしいわ」
「こいしが地底から出ていきそうになったら引き留める、という訳ではないのですね」

「そりやあだつて、こいしの無意識を看破できるわけじゃあないもの。彼女の能力はあくまでも、意識すればこいしがどこにいるかわかるだけ」

「……その肝心の能力が伏せられているのですが」

「だから言ったでしょう? 『女は秘密を着飾って美しくなる』って」

「何でもかんでも隠せばいいというものでもないと思います」

「……ここだけの話していい?」

「どうぞ」

「別に、泉熙の能力を隠す必要性は特にないのよねえ。詩音と違って、自分の能力がわかっていない、というわけでもないし」

「……じゃあ、何故」

「ほら、全部言い尽くすのも華がないし?　それに、次回泉熙が登場した時の o m a k e で言うことがなくなると困るじゃない」

「把握しました、完全に後者が理由ですね」

「ああん、手厳しい。じゃあ代わりと言っては何だけど、とっておきの情報を公開するわよ!」

「……して、その情報とは?」

「実は彼女——敬虔な、仏教徒なのよ!　　もう伝教大師様 L O V E

! って感じね」

「へえ……それが?」

「え?」

「えっ」

「それだけよ?」

「……次、向かいましようか」

『華人小娘』『不撓不屈の門番』

紅 美鈴

『気を使う程度の能力』

「次は紅魔館の門番、紅美鈴ですね」

「……ええ、そうね」

「紫様も、無理して彼女のように昼寝する必要はないのですよ?」

「ちよつとゆかりん何言ってるのかわからない」

「……はあ。まあ元から期待していませんし、別にいいのですが」

「ん? 今いって言ったわね? ぽこじやか昼寝していいって

言ったわね!? 言質はとったわよ!!」

「一言も言つてませんよそんなこと!!」

「さて、美鈴の解説ね。と言つても、特筆すべき事項とかはあんまりな

いのだけれど」

「流石にそれは、彼女が可哀想かと思うのですが……」

「——と、一ミリも紹介されなかつた九尾の狐さんが申していますが」

「飛ばしたのは紫様じゃないですか」

「いいえ、逃れられぬ業カルマだったのよ」

「へーそーなのかー」

「あ、そうそう思い出した。彼女、レミリアがフランを閉じ込めるきつ

かけになった例の事件の直前から、紅魔館で雇われているらしいわ」

「……彼女って?」

「美鈴のことよ。貴女そんなにも記憶力低かつたかしら?」

「(紫様が話を逸らしたせいだと物凄く突っ込みたい……)」

「ま、精進なさいな」

「……それで例の事件というのは、レミリアが詩音に語っていたあの件のことですか?」

「ええ。フランの狂気がバゴオオオンってなって、敵も味方もキュツとしてドカーン！ってなったやつ」

「適当な擬態語にしか聞こえないのに間違っていない所が恐ろしいですよね」

「その時彼女は雇われたてだったからフランにも覚えられていなかったし、物陰に隠れてなんとかやり過ごしたそうよ。吸血鬼姉妹以外では、一部始終を知る唯一の妖怪ってことね」

「……ならば、何故そんなにも恐ろしい思いをしたのにまだ紅魔館に勤めているのでしょうか？」

「今言ったでしょう、一部始終って。だから、狂気が一時的に治まったフランの精神がドカーンってなるとことか、レミリアが恐怖に染まりながらも必死に色々とやってるとことかも見ちゃってるのよ」

「あーそれは……確かに、そんな光景を見せられてしまえば『暇を下さ』なんて言いにくいですね」

「それにまあ、彼女お人好しだし」

「そのせいで色々酷い目に遭ってますが。魔理沙の『ブレイジングスター』で毎回吹き飛ばされていたり」

「あら、常識人というのは割を食う存在なんですよ？」

「周囲の対応故にそういった状況に陥り易いだけであって、〃常識人〃と〃割を食う〃を等号で結ぶことには承服致しかねます。と言うか断固拒否します」

「……まるで自分が常識人みたいな言い方ね」

「？ 何を今更なことを仰って」

「……言わぬが花、ってやつかしらね」

言うて紫さんより遥かに常識人ですけどね彼女。

「幻想郷では常識に囚われてはいけないのよ」

『永遠に紅い幼き月』

レミリア・スカーレット

『運命を操る程度の能力』

「そんなこんなで、常識に囚われないキャラ紹介はまだまだ続くわ」
「……いい加減長くないですか？」

「うん、これを読んでる全読者の声を代表してくれたことには感謝するわ藍。でもね、まだレミリアを含めて四人も残ってるのよ」

ちなみにこのあたりで大体一万字です。どうしてこんなに長くなった。

「……あれ？ あと四人って、それだと計算が合わないですか？
詩音が知り合った人妖は、もう少しいたように記憶していますか」

「ああ、そのことね。このコーナーは、あくまでも『東方紅魔郷』っていう一つの異変のオマケなの。だから、詩音が異変中に会ってない人物は対象外よ」

「つまり、アリスや萃香等ここでは紹介しない、と？」

「しようにゆこと。彼女たちが異変に関わってくれば、その時にまた改めて紹介するわ」

「把握致しました。……それで、次はレミリアでしたっけ」

「ええ。まったくもう、藍がまた話題を反らすから！」

「高度に知能が発達してれば、次々と新たな知見が飛び出してくるのでしょう？」

「あ、ごめんその法則言いつ私にしか適応されないから」

「ご都合主義にも程がありますね!？」

「はいはい、解説を始めるわよ。そんじゃ、永遠に幼い悩める姉、レミリアね。まあ、異変の時にほとんど詩音に打ち明けているから、改めて語ることはこちらもあまりないのだけれど」

「……はあ。疲れた……」

「でも、彼女の感情が紅霧異変の発端といっても過言ではないから、繰り返しになっちゃうかもだけれど説明させてもらおうわよ。」

レミリアは、フランに対して大き過ぎる罪悪感を抱いていたわ。自分が唯一の家族である妹フランに恐怖してしまったこと、妹を四百年近くにわたり幽閉してしまっていたこと、その結果フランの狂気がますます深まってしまったことに対する罪悪感を、ね」

「……なんか、フランドールも似たようなこと言ってますんじけ？」

「そうね。まあ、似た者姉妹ですもの」

「その結果、中々ややこしいことになっていきますが……」

「その辺はフランの項でまた言及するわ。で、そのせいでレミリアは、フランが自分なんて嫌いなんじゃないか、自分に姉の資格なんてないんじゃないか、と思うようになったワケよ」

「……ああ、だから詩音に頼んだのですね？」

「詩音が関わった結果丸く収まる運命が見えた、というのも本当のようだけれど、その感情が大きなウエイトを占めたのはまあ事実でしょうね」

「その割には、フランドールの発言を勘違いして酷く落ち込んでいましたが」

「そりゃあそうでしょう。貴女だって、橙が自分のこと嫌いだろうなーと考えるのと、実際に橙から嫌いって言われるのでは雲泥の差でしょう？」

「……物凄くわかりやすいですね、その喩え」

「そんなこんなで日々を過ごしていたレミリアは、とある外来人が妹の未来を変える、という運命を見た。だから彼女の運命を操り、異変を引き起こすと同時に彼女を幻想郷へ導いた。これが、紅霧異変の真相ね」

「……あれ？　でも異変中、レミリアの運命操作は詩音に拒絶されていませんか？」

「ああ、それね。実は彼女の『運命を操る程度の能力』、ある二つの力の総称なのよ」

「二つ？」

「まず一つは、対象の過去に介入する能力。といっても実際に介入するのではなくて、悪魔族特有の“魅了”やら威圧やらを使って、相手の神経・魔力回路などに変化を起こしているらしいわ」

「これが、詩音を二時間だけ飛べるようにしたけれど拒絶されてしまった方ですね？」

「ええ。んでもう一つは、未来の分岐点がわかる能力よ」

「それって、つまり未来予知——」

「——では、ないらしいのよねえ」

「あれ」

「どっかで本人が言っていたけれど、レミリアは “分岐点” と “臍げな結末” が見えるだけらしいわ。今回の例で言えば、 “異変を起こす” と “外来人がいい感じにしてくれる” ってことしかわからないみたい。未来予知だったらほら、もっと詳細までわかりそうなものじゃない？」

「……何だか、霊夢の勘みたいですね」

「あ、言い得て妙ねそれ。そんな二つの能力をまとめて、レミリアは『運命を操る程度の能力』を自称しているのよ」

「つまり、過去に干渉する方の能力は詩音に弾かれたけれど、未来を察知する方の能力は詩音自身に介入する訳ではないため問題なく発動した、ということでしょうか？」

「つまりはそういうことね」

「ふむ、成る程……。そんな能力をまとめて、『運命を操る程度の能力』と自称するレミリアって……。なんかこう、独特な美的感覚というかなんというか」

「中二病みたいよね」

「あつわざと避けてたのにその表現」

「でも、詩音と違ってレミリアは患者じゃあないわよ？ きつと。」

彼女のはほら、吸血鬼特有のセンスと子供の発想力とかが混ざったサムシングなんだから。たぶん」

「……でも、妹のフランドールにはそういった傾向は——」

「レミリアの名誉のためにもこれ以上は止めましょうか、うん」

『紅魔館のメイド』

十六夜 咲夜

『時間を操る程度の能力』

「はい、次は咲夜よ咲夜。紅魔館の誇るメイド長にして、今のところ駄メイド街道一直線な少女の」

「私には、その駄メイドな一面しか印象に残っていないのですが」

「あれでも彼女、優秀なのよ？　あの無駄に広い紅霧館をほぼ一人で切り盛りしているし、異変の時に霊夢と詩音がかち合わなかったのも彼女の功績によるところが大きいわ。流石は、レミリアに仕えて十年のベテランね」

「……確かに、あの広さの館を一人で掃除しているのは凄いですね。掃除自体は、私も一人で行ってますが」

「貴女吸血鬼の従者なんかに負けてて悔しくないの!？」

「暗に紫様も掃除手伝って下さいと言ったつもりだったんですがね！」

「え、嫌よ」

「じゃあせめてご自分の仕事くらいはご自分でなさってくださいても……」

「……………」

『何言ってるんだこいつ』じゃないですよ！

「あ、スゴい。何も言っていないのに考えていることが伝わったわ。貴女覚り妖怪の才能あるんじゃない？」

「何ですか覚り妖怪の才能って」

「嫌われる才能？」

「別に彼女たちも、好きで嫌われているわけじゃないと思うのですが」
「だから才能なのよ。やったね藍ちゃん！　才能が増えるよ！」

おいやめろ

「話を戻しましょう。咲夜について、ほかに補足することはあるでしょうか？」

「ええー……………逆に、藍は咲夜について、何か聞きたいこととかあるかしら？」

「えっ私ですか。そうですね……………そういえば彼女、最初詩音に対する口調が全然違いましたよね」

「それはまあ、彼女自身が語っていた通りね。主とその妹を救った存

在なんだから、敬意を払うのは当たり前、って考えみたいよ。デフォルトの口調は、魔理沙に使っていた感じのようね」

「とりあえず敬語を使っつけ、といった感じですか。なんか、泉熙のこいしに対するものと似ていますね」

「にんげんだもの ゆかり」

「泉熙は半分鬼ですが。っと、泉熙と言えば」

「あら、どうかした？」

「何故彼女は、仏教を信仰しているのですか？ 鬼でありながら人間の宗教を信仰するのは、なかなか稀有だなと思ひまして」

「幻想郷には妖怪神社とか妖怪寺とかより取り見取りだけれどね」

「寺はともかく、神社は信仰している妖怪なんてあまりいないじゃないですか」

「い、一刀両断ね。霊夢が聞いたら泣くわよ？」

まあそれはともかく、泉熙が仏教を信仰している理由は簡単よ。彼女の母親が、伝教大師の弟子だったから」

「へえ？」

「詳しいことはわからないけれど、『円鬼』という名前で仏門に励んでいたみたいね」

「成る程、その影響で——って、そういえば泉熙の親って——」

「はい、強制終了。これ以上は本編をお楽しみに。」

「というか、後半はほぼ咲夜の話していないじゃない」

「あー、本当ですね」

「ほら最後、何かないの!?!」

「いきなり言われましても」

「はい五、四、三、二——」

「え？ ちよ、焦らせないでくだっ——」

「—!」

「えー、詩音がレミリアと戦った時のカメラってどこで手に入れたのですかっ!?!」

「撮った写真を共有するって条件で文から借りてたわ」
「まあ知ってた」

『東洋の西洋魔術師』

霧雨 魔理沙

『魔法を使う程度の能力』

「どんどん行きましょう、次は魔理沙ね。紅霧異変を解決しよう」と紅魔館に乗り込み、無事地下室へと迷い込んだ普通の魔法使いよ」

「パチュリーを下したのも彼女、ですよね？」

「ええ。そこから地下で迷って、床をぶち抜いたらたまたまフランの部屋だったみたいね」

「手荒だなあ……」

咲夜さん涙目。

「んで、フランと弾幕ごっこを始めて少ししたら、詩音たちが現れたって感じよ」

「……実際、あのまま魔理沙がフランドルと弾幕ごっこを続けていたら、決着はどうなっていたのですか？」

「そうねえ……普通の弾幕ごっこであれば魔理沙にも十分勝機はあったでしょうけど、あの状態のフランは何を仕出かすかわからないから……」

「確かに、能力を使われてしまえば成す術がありませんね」

「スペルカードを使って直接的に命を奪うことは性質上不可能だけど、間接的にだったらどうとでもなるわ。あの場で魔理沙が勝つ割合は、多く見積もって五パーセントってところかしら」

「……多いのか少ないのか、判別しにくいですね……」

「十分多い方でしょう。詩音だって絶対に勝てた訳でもないし。貴女だったら二パーセントもないんじゃない？」

「……一応、妖怪としての誇りが私にもあるのですが」

「フランが能力を使えば、脆い人間だろうとタフな妖怪だろうと一発アウトじゃないの。それだったら、貴女よりも弾幕ごっこの経験回数が多く、成長の可能性も未知数な魔理沙の方が高いのは道理じゃあないかしら？」

「うう、そう明瞭に言われると凹むなあ……」

「それに貴女、詩音にも負けたし」

「その話はもういいのではっ!？」

「……というか、紫様だったらどうなんですか？　勝率」

「そんなもの、正気と狂気の境界を弄れば相手はただの幼い吸血鬼なのだから、貴女より遙か彼方の上よ」

「……ならば、何故その方法でフランドールを治してやらなかったのですか？」

「別に、私がそこまでしてやる理由がないもの」

「正気だろうと狂気だろうと、幻想郷は全てを受け入れる。それはそれは、残酷なことなのよ」

「……面倒だったただけでは？」

「……」

「無言で目を逸らさないで下さい」

「その方法でフランを治しても、根本的な解決にはならないわ。詩音や魔理沙みたいなのと触れ合って、彼女の心を変えていくことが重要な」

「いやまあ、そりやそうなんでしょうけども」

「だから決して、後処理とかレミリアへの対応とかが面倒でさぼったわけじゃないのよ。あーゆーおーけい？」

「つまり、面倒でさぼった——」

「おーけい!？」

「……お、おーけー」

「はい、そんな魔理沙の紹介よ」

「確実に『そんな』の使い方が間違っていると思います」

「幻想郷では常識に囚われてはいけないのよ」

「それ言つときや何とかなると思ってるのなら大間違いですよ」

「細かいわねえ。さて、魔理沙なのだけれど、色々と詩音に思うところはあるみたいね」

「まあ、目の前であんなことされて何も思わない訳がありませんよね。」

と言うか、いつの間にか彼女と詩音、結構仲良くなってませんか？」
「フランと詩音の弾幕ごっこが終わったあと、日付が変わる直前まで三人で遊んでたみたいよ？」 それに、今のところ詩音が幻想郷に来たとき、ほぼ毎回魔理沙に会っているようだし」

「毎回、ですか」

「ええ。ほら、詩音が霖之助さんのところで作った『スケボー君』ってあるじゃない？」

「あの飛翔板ですか」

「それ、魔理沙の家の前に置かせて貰ってるらしいわ。流石に外の世界まで持っていくわけにはいかないって」

「それは……まあ、そうですね。人前で飛ぶ訳にもいかないでしょうし」

「だから詩音が幻想郷に来たときは、そのまま魔理沙の家で駄弁るか、二人でアリスの家に突撃するか、紅魔館まで遊びに行くかの三択みたいね」

「そりゃあ仲も良くなりますね」

「……よく考えてみれば、人間なのに人里に行かないとかどんな神経しているのかしら」

「そもそも詩音は、人里の存在を知っているんでしょうか？」

「それは流石に……微妙ね。魔理沙辺りから聞いていてもおかしくはないけど……」

「……まあ魔理沙は人里出身ですし、流石に自分の出身地くらいは話しているのでは？」

「あーうん……あー、うん」

「……？ どうされたので？」

「いや、藍も存外にデリカシーがないなーと思っただけよ」

「今日の私貶されてばかりですね……」

「魔理沙は、まあ実家といういろいろあったのよ。その結果、今は勘当状態だし……さっき言った思うところっていうのも、彼女が家を飛び出した理由に関連していたりするわ」

「あれ、そうでしたっけ」

「そうなのよ。そういうことにしておくのよ」

「いやしておくて」

「まあ、その感情が溢れる日も遠くない、とだけは言っておこうかしらね」

「……なんだか今日、お茶を濁すだけの発言が多くないですか？

まあ普段から、紫様は胡散臭い言動が多いですが」

「どこぞの誰かさんが見切り発車したせいで、思ってたよりもネタバレに繋がることしか出てこなくて困ってるのよ」

「それは……うわあ」

「正直、幻想郷縁起に書いてあるようなことまで紹介するべきか、いまだに迷っていたり」

「もう残り一人なんですけど」

「そうよねー。だからまあ、詳細な他己紹介はよ所に任せておけばいいかなーって。というか、そこまでやっちゃうとこのコーナーの尺が目も当てられないことになってしまっし」

すでに十分……。

「というか、ここまで長くなった原因は紫様の悪ふざけが大きな割合を占めていると思うのですが……」

「それに、この世界には『感想』という、素晴らしい質問コーナーがあるじゃない！　もしこの話を見て『結局オリキャラのことちつとも理解できなかつたよ九尾の狐コンチクショー！』ってなった場合は、遠慮なく創造主^{作者}に文句をぶつけて頂戴な!!」

そしてこのロコツな感想稼ぎである。

「どうしてそこで、また私が罵られなきゃいけないんですか」

「藍だから」

「理不尽ですね」

「ククク、このくらい道理と理不尽の境界を操れば容易いことよ……！」

「これ程までに無駄な能力の使い方は初めて見ました」

「ようかいだもの　ゆかり」

「その言い回しを気に入らないでください」

『悪魔の妹』『純粹無垢の狂気』

フランドール・スカーレット

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』

「さあ……いよいよ最後ね。ラストに紹介するのは、紅霧異変、そのすべての始まりにして終わりの存在、フランドール・スカーレットよ」
「いよいよ終わりですか。無駄に長かったですね……」

「一見ムダに見えるようなことにも、必ず意味は存在しているわ」

「今回の場合、時間の浪費以外の意味を私は見出せません」

「たまにはゆつくりと、時間を浪費することも必要よ？」

「こういう遠浅の問答をしなければ済む問題だと思うのですが」

「ハイ、それじゃフランの解説に移るわね。美鈴の項で言ったから詳細は割愛するけど、昔フランが狂気でドカーン！ってなったことがあったの」

「割愛したのに殆ど変わっていませんね」

「んでまあしばらくすると、彼女の狂気も一旦落ち着くわけじゃない？ その時フランの視界に入ったのは、敵や、自分を慕っていた者

たちの死骸、そして傷つき、怯えた目で自分を見る姉だったのよ」

「……それは、何と言ったら良いのか……辛い、ですね」

「そんな生易しいものじゃあないとは思うけれど、言葉として最も適切なのはそれでしょうね。実際、ここでフランの精神は完全に壊れたみたいよ」

「そうして、破壊を望まない殺戮者が生まれた——ということですか」

「……何よ、そのカッコいい言い回し。藍のくせに」

「別に大したことは言っていないと思います……」

「あ、もしかして、無自覚に詩音と同じ病気に——」

「それはないです」

「否定が早いわね……まあいいわ。それでフランもレミリアと同様、どうしようもないくらい罪悪感を抱いてしまったのよ」

「……まあ、敵味方関係なしに数え切れない数を屠り、更には大切な姉

まで壊そうとした、となれば抱かない方が可笑しいですね」

「ええ。異変が終わってからレミリアに会うのを渋ってる理由は、そんな風に罪悪感を感じているからね」

「……レミリアの時にも言った気がしますが、この二人、物凄く似通った感情を抱いていたのですね」

「互いが互いに会わせる顔がなく、更には片方は狂気に陥っている。詩音がいなければ、この姉妹はどうなっていたことやら」

「……想像したくないですね」

「ま、でも全ては終わったことよ。無事フランは解放され、もう狂気のままに破壊を行うこともほとんどないでしょう」

「仮に発作的に起こったとしても、詩音だけでなく魔理沙や霊夢もいる訳ですから、きつとどうにか出来るでしょうね」

「その安心感が、フランを更に解き放つのよ。さつき私が、正気と狂気の境界を弄るだけじゃダメだって言った理由がわかるでしょう?」

「……でもそれは、紫様が面倒臭がったからじゃ——」

「知らない子ね。でも、フランとレミリアの関係はまだギクシヤクしたままのようね」

「あれ、そうなのですか?」

「だってほら、数百年ぶりに直接喋ったのが、レミリアのカリスマがブレイクされてうーっ☆つてなってた時なのよ?」

あっ……(察し)

「それに、お互いの罪悪感が綺麗サツパリ消えたわけでもないし」

「……なんか、よりややこしい状況になってませんか?」

「詩音に言いなさいよ」

正に上げて落とす、とかいうやつですかね。

「より正確に言えば、上げたあと錐揉みコークスクリューをさせながら二重螺旋の軌道でふんわり落下させてるわね」

「理解はできませんでしたが言いたいことは何となくわかりました」

「まあでも、これより先は本人たちがどうにかすべき領域でしょう。曲がりなりにも会話できたわけだし、レミリアを縛る最大の枷だった、フランが自分を嫌いつていう思い込みも解けたしね」

『大好き!』ですか……。一度でいいから言われてみたい……」

「——! ふふふ……。」

まあ、それは置いといて。ほかに、フランについて聞いておきたいことはあるかしら?」

「他に……あ、そういえば。フレンドール、どこかで『自分の狂気は一度封印されたけど解けてしまった』といった感じのことを言っていましたよね。あれって?」

「え?……ああ、そっか。あの時貴女には、違うことを任せていたわね」

「あの時……?」

「ふふ、まだわからなくていいわ。そうねえ、『壮大な伏線』とでも言っておきましょうか」

「伏線、ですか……」

ぞ。 壮大過ぎて回収できる見込みがない点について、紫さん一言どうぞ。

「お口チャック。それはともかく、藍、今日は貴女に伝えたいことがあるのよ」

「何ですか?」

「藍——貴女には、いつも感謝しているわ」

「ほへ?」

「寝てばかりな私の代わりに、いつも骨を砕いて、幻想郷のために働いてくれる。更には私の式としての役目を果たすため、鍛錬も欠かさない。加えて、橙の教育まで熱心に取り組んでいるのだから……」

「は、はあ」

「本当に、感謝してる。そして私は、そんな藍が——大好き、よ」

「——!」

キマシ?

「Notタワー。家族としてよ」

「かぞつ——! え、ええと、あの、その……」

「本当よ? 何度でも言っておあげるわ。」

藍、私は、貴女が大好き」

「——つつつ!!」

「ふふふ、こんなにも顔を赤くしちゃって。可愛いわねえ」

「え、えと、あの、その、ゆかりしやま……」

「そう、大好き。だから、こんなにも出来の悪い主人で良ければ……これからも、私のためになつてくれるかしら?」

「で、出来が悪いだなんてそんな……!」

もっ、勿論です! 微力ですが、粉骨碎身精一杯、貴方様のために力を尽くさせて頂きます!!」

あっ…… (察し)

「そう! ならよかったわ!! じゃあ早速だけど、これをどうにかして頂戴ね!!」

「はい——」

ドサドサドサツ。

「……はい?」

「あーよかった!! 藍が! 私のために! これをぜんつぶやってくれるなんて!!」

「……え、えと、紫様」

「何かしら!」

「この、上げ下げさせるだけで筋肉痛になりそうな量の紙は一体……?」

「大結界の修繕箇所、妖怪の山からの苦情、閻魔からの呼び出し状エトセトラよ。でも藍は、私のためにこれを全部『粉骨碎身精一杯』やっってくれるのでしょうか!」

「なっ——」

「やっってくれるのでしょうか!」

……悪魔や、悪魔がここにおるでえ……。

「……わかりました、わかりましたよ! 私がつ、これらをつ、全部っ、やればいいのでしょうか!」

「おお、わんだほー! ありがとう藍、愛してるわ!!」

「畜生ツ、もうどうにでもなれ!!!」

「——と、いうわけで、他己紹介もとい『o m a k e . t x t』第一回は終了よ。ここまで付き合ってくれた方には、心から感謝しているわ」

「ガリガリガリガリガリガリガリガリガリ」

「本当は、もつと紹介らしい紹介ができればよかったのだけれど……」

見切り発車の上、どっかの誰かさんはほぼノリでここまで書き上げましたからね。これ程までにグダグダになってしまったこと、今一度お詫びいたします。

「ガリガリガリガリガリガリガリガリ」

「……にしてもこのコーナー、ホントに成り立っているのかしら？」

一応、最低限のことは伝えられたかなと。まあ、本当に最低限だけです。

「そうね、本当に最低限だわ。どうしてこんなにもグダってしまったのか……後で藍にはキツく躰けておくから、みんな許してちょうだいね」

「ガリガリガリガリガリガリガリガリガリ」

こんな虚ろな目をしているのに、まだ災難が待っているのか……。とりあえず、藍さんに向かって合掌。

「次の藍はきつと上手くやってくれるでしょう」

いやなぜ殺したし。

「……あの、一つ宜しいでしょうか」

「何かしら？」

読めない漢字でもありましたか？

「いえ、そうではなくて。ずっと触れるべきか迷っていたのですが……」

「ふむふむっ」

ほうほう。

「……この、どこからともなく聞こえてきて、紹介する者の名前を読み上げたり、偶に突っ込みを入れたりする声は何なのですか？　紫様が、当然のように談笑なさってるものですから……」

「あー、この声のこと？」

どの声ですか？

「貴方です」

あ、私ですか？……そういえば、自己紹介がまだでしたね。

私は天の声、お二人のサポートをさせていただく所存です。以後、お見知りおきを。

「は、はあ、ご丁寧にどうも」

「——と、いう訳で天の声さんよ。おまけパートでは今後ともお世話になるから、そこんとこヨロシクね」

「はあ、よろしくお願い——つて、いやいやいや!? どう考えてもおかしくないですか!?!」

「はいはい、文句は仕事を終わらせてから言う!」

「ガリガリガリガリガリガリガリガリ」

最早、哀愁すら漂ってきますね彼女……。

「何言ってるの、藍は自分からやりたいって申し出たのよ?」

思考誘導して言わせた、の間違いでは?

「言葉の綾ね」

うわあ。

「それに私、嘘は吐いてないわよ? 藍に感謝してるっていうのも

藍が好きっていうのも、全部本当のことだもの」

「だとしたら余計にたちが悪いですね!!」

「文句は——」

「ガリガリガリガリガリガリガリガリ」

……哀れ。

「さて、そろそろおしまいにしましょうか。もう少しで二万字に到達しちゃうわよ?」

平均文字数詐欺がより捗りそうですね。ただでさえ、短い話と長い話の差がえげつないのに。

「気にしたら負けね。幻想郷では常識に囚われてはいけないのよ」

便利ですねその言葉。

「と、いうわけで。以上、幻想郷の賢者八雲紫とその式八雲藍、そして天の声でお送りしました。皆様、これにてごきげんよう」

お付き合ひ頂きありがとうございます。またどこかで、お会いしましょう。

「ほら、藍も何か言いなさい」

「……さよなら、もう二度とやらなくていいです」

「……あ、そういえば。その書類、期限は全部明日までよ？」

「ああああああああああ!!!」

——TO BE CONTINUED!!

東方妖々夢

Opening

幻想郷にある博麗神社の巫女さんは、寒いのは苦手だった。ただ、いつもと違うことは「今がもう五月である」という事だった。

雪はいつそう激しく、この吹雪ももう一週間は続こうとしていた。少女はそれが、どうせ口に出さなくても分かるような理由だと思っただの。

だから、しゃべると寒いので黙って原因を潰していくことにした。しかし結局、神社は昔ながらの建物で風通しもよく、いや、吹きっさらしだったので、家に居ても居なくても同じだったのである。少女はいつもどおり勘を頼りに出発したのだった。

普通の魔法使いさんは、寒いのも普通の人間同様、それなりに嫌い、それなりに楽しんでいた。

霧雨邸は、魔暖房があつたので暖かかった。そうでなくても魔法室は何かしら暖かいものなのだ。

そんな中、少女は自分の家の前の吹雪に、薄桃色の花びらが雪に混じっているのを見た。ここ東の国の春にしか咲かない花の花弁。

そう、桜だったのだ。

風上に行けば桜が咲いている筈である。ただ、吹雪は山の上から吹き降ろされていた。山の上ほど開花が遅い筈なのに……。

少女は、桜の花びらを辿って、まだ見ぬ春を目指して出発した。

紅魔館のメイドさんは、暖かい部屋で残り少ない苦い珈琲を飲んでいた。

黒い珈琲が切れても、紅い紅茶を飲めばいい話だ。しかしさすがに、暖房燃料が切れたら人間はこの冬を越せないだろう。

ここまで配達にくるような人間はいない、幻想郷の住人は、燃料食

料すべて一冬分まとめ用意するのである。それは、元から険しい道が大雪で完全になくなってしまったためであり、ずっと昔から変わることの無い習慣だったのだ。

少女は、冬を終わらせるために、春が訪れるまで暇を申し出る。

このときお嬢様は、あと一日もすれば春になることを確信した。だから、快く彼女を送り出したのだ。

気まぐれに幻想郷を訪れた少女は、その予想外の現象に目を丸くしていた。

「……雪？　しかもコレ、猛吹雪ですよね」

なんと、外の世界では既に、桜の木は青々とした若葉を茂らせているのに、境界を跨ぐとまだ蕾すら膨らんでいなかったのである。

忘れ去られた地とはいえ、これはどう考えても非常事態であろう。

「うーん、エルニーニョだか何だかの影響でしょうか……。あれ、ラニーニャかラニーニョみたいなのもありましたよね？　どっちだ？」

少なくとも、それは彼女の常識で理解できるものではなかった。

ならば、彼女は彼女なりの非常識で非常識な冬を楽しむだけである。

そしてそのための合言葉を、翡翠の少女は身をもって体験していた。

「『異変』、ですよねー」

手始めに彼女は、祭り異変を楽しむための囃子飛翔板を、置かせてもらっている友人の家まで取りに行くことにした。

少女は、惹かれる幻想のままに春の冬空を旋回していった。

「やっぱ来てる、か……」

冬の妖怪を難なく撃破し、そこで忘れ物に気づいた魔法使いの少女は、自らの家に一時帰還していた。

そしてそこで、一つの変化に気がつく。

そう、友人から預かっていた、不可思議飛行板が消えていたのだ。

確かに、彼女の姿は最近見かけなかったから、そろそろ来る頃だとは思っていたようだ。

「しっかしあいつもまた、タイミングが良いんだか悪いんだか。

……ほんつと、この異変時に、なあ」

用を済ませた少女は、再び吹雪の空へと箒を走らせる。

——しかし、帽子を深くかぶったその顔は、どこか精彩を欠いていた。

「当然、霊夢も動いてるよな。更には詩音も。じゃあ、私は、私は——

——私は一体、何なんだ？」

押し潰されたその心には、桜どころか蕾すら見当たらない。

幻想郷は本当に永い冬だった。

5月を過ぎてから、一層吹雪も強くなったようだ。

そんな幻想郷にも、花が満開な場所が人知れず存在していた。

文字通り、そのことを『人』は知らなかった。

ここ幻想郷は、もとより『人』の数は少なかつたのだ。

そして春は、まだ来ない。

東方妖々夢

Perfect Cherry Blossom

m.

プレイヤーを選んで下さい

『楽園の素敵な巫女』

博麗 霊夢

『普通の魔法使い』

霧雨 魔理沙

『紅魔館のメイド』

十六夜 咲夜

『現と幻の往来者』

↓古卿 詩音

Stagel 再来のじ……もとい蟲

リグル・ナイトバグは、凍えていた。

想像してみよう。もし自分が、蛍から生じた妖怪であった場合、活動しやすい期間はいつであろうか。当然、夏だ。するとその反対の季節、即ち冬には、一体どうしていればいいか。囲炉裏で暖をとる、といった文明的な方法もあるにはあるが、仮に自分が住処を持たない野良妖怪だったとすると、どうするのが最も自然だろう。

そう、冬眠である。

さて貴方は、冬を迎えた蛍の妖怪だ。いつものように眠りにつき、いつものように起床したとする。するとどうだ。普段であれば弥生の中頃には起きているのに、日付は卯月すら過ぎている。おまけに、辺りには猛烈な吹雪が轟いているのだ。

さて、貴方はこの後一体どうなる？

「……………フアツ!？」

……とまあ、リグルはそんな状況だった。何をする訳でもなく、混乱して棒立ちするのみ。その心情、推して測るべし。

ただ、これだけは幻想郷に住む妖怪の直感としてわかった筈だ。

これは異変である、と。

「ううゝ、寒いなあ。また異変かあ。去年の夏に起こったばつかなのに、随分と元気なことだなあ」

そうぼやきながらも、リグルは歩み……地面を歩いていないから歩みではないか。ともかく、吹雪く中を飛翔していた。

よくよく考えれば、まだまだ寒過ぎる気候のために冬眠を続ける、という選択の方が賢いことは自明の理だろう。しかし異変とは妖怪にとつての祭り。そのような消極的選択肢、リグルの頭には端から存在しないのである。

「こんだけ寒いと、きつとチルノとかは元気だよな。冬の間は会って

なかったし、ちよつと行ってみようかな」

「チルノさんって、確か氷の妖精さんのことですよ。確かにこの寒さなら元気そう」

そう、このように、精々異変をどうやって楽しむか考えているくらいだ。

……まあ、件の妖精が元気過ぎて、巫女やら魔法使いやらに喧嘩を吹っ掛けていることや、その末当然のように撃破されていることなど予想だにしていまいだろうが。

「つてもチルノだし、いきなり弾幕ごっこ仕掛けてきそう。まだ寝起きだし、なんならまだ眠いから止めて欲しいんだけどなあ」

「エターナルフォースブリザード！ 相手は死ぬッ！ 的な？」

「何それ怖い。でもこの状況だと、チルノの全力食らえばそうなっちゃいそう——

……………ん？」

ふと、何かに漸く気づいたリグルはくるり、と自身から見て左方向へ顔をやる。

そこには果たして、笑顔で飛んでいる、どこかで見た人間がいた。

「……………ダアレ？」

「むっ、誰とは失礼ですね。ならば今一度名乗らせて頂こう！ 私

は古卿詩音、またの名を——

「キヤアアアアアアアアアアあの時のブツ壊れ人間^{!!??}」

去年夏の悪夢が甦ったのか、リグルは声を木霊させながら虫の速度で後退る。そのまま、後ろをよく確認していなかったために木へと激突し、呻き声を上げていた。泣きっ面に蜂。

一方、『ブツ壊れ人間』と称された詩音は、流石に面白くなさそうである。

「なんですか、そのブツ壊れ人間って」

「いやだって全力弾幕を跳ね返すとかブツ壊れとしか言いようがないでしょ!？」

「そうですか？ 幻想郷だと意外とみんな出来そうだと思いますけど」

それはない。

「それはともかく、この吹雪っていつ頃から続いているんですか、Gの妖精さん？」

「だから違うって言ってるでしょ！ 私はレッキとした蛍の妖怪、

リグル・ナイトバグなんだから!!」

「あれ、そうなんですか？ 初耳ですね」

「聞かなくても見ればわかるでしょうが!」

「いや、見た目は某Gにしか――

「ハアアア!」

……流石は野良妖怪、といったところだろうか。それまで恐怖していた相手と、果敢にも漫才を繰り広げている。まあ詩音の失言が原因ではあるが、それにしたって早い変わり身である。

吹雪がごうごうと降り注ぐ中で行われるそれは、率直に言えば滑稽だ。

「まあそれは置いといて」

「置いとかないツ!!」

「どおどお。んで、立派な蛍妖怪のリグルさんは、この吹雪について何か知りませんか？」

少し漫才を続けて漸く目的を思い出したのか、詩音は本題を切り出した。

しかしリグルは、まだ腹の虫が収まらないようだ。詩音の、少々馬鹿にしたようにも聞こえる物言いも、それを加速させたようである。

何よりここは幻想郷、そして今は異変という祭りの最中。そんな状況で行われる遊びと言え、言葉戯あそびなどではないだろう。

リグルは、無言でスペルカードを取り出す。

「……………っ!!」

「……別に、力づくで聞き出そうとまでは思っていないんですが」

「うるさいうるさいっ！ 前回負けたままだし、何よりアンタには蟲妖怪の恐ろしさを味あわせてやんなきゃいけないみたいだからねっ!」

そう言うと、リグルはスペルカードを高く掲げて――

蛍符『地上の彗星』

怒りを乗せ大声で宣言したリグルを中心に、放射状に緑色の弾幕が伸びてゆく。吹き荒れる吹雪を掻き分け押し退け、その勢いのままに詩音へと迫っていく。

どこまでも一直線なそれらは、何でもない人間にとってみればとてもない脅威だろう。

だが――

「ひよいつ、と。……リグルさん、ちよーつと私をナメ過ぎじゃあないですか？」

飛べない状態ですら軽々と弾幕を躲す彼女にとっては、脅威でも何でもないのである。

詩音はひよい、と屈んで緑の弾々を避けると、そのまま加速しリグルへとどんどん近づいていった。

最早、空すらも競技者・古卿詩音の舞台と化している。飛翔板をしつかり握って落下を回避しつつ、相手の放つ直線的な弾幕の周囲を彼女は旋回する。そんな曲芸的な演舞を見せつける余裕までも今の詩音は有していた。

しかし、リグルは動じない。

いやむしろ――彼女は、笑っていた。

「かかった！ ほらっ、おかわりだよっ！」

「!!」

刹那、詩音の視界が青に染められる。

リグルが、追加の弾幕を放ったのだ。

文字通り目と鼻の先に突如現れたそれらに、詩音は脊髄反射的に退避し距離をとる。その反応速度は凄まじく、対処法を考えるには十分な時間が得られた――筈だった。

彼女の仕掛けた罠が、それだけであったならば。

詩音の背中に、痛みが走る。

「——ッ!？」

驚き、振り返る。

するとその視界の先では、つい今しがたまで一直線に猪突猛進していた緑の弾幕が、大きくうねりを上げていたのだ。

期せずして追い込まれた詩音。前方では扇形に広がる青い弾幕が、後方には荒ぶる緑の波が彼女を敗北へと追い立てている。動きが鈍る冬の気候でありながら、リグルは奇襲という策によって対等に遊戯を運んでいた。

それを見た詩音は覚悟したのか、大きく息を吸い込み目を閉じた。そして——

幻想『プリンセス天狐』

——行われたのは、更なる奇襲だった。

青と緑の光にすっかり包まれた空間から、瞳を翡翠に輝かせる少女の姿は須臾にして消え失せる。

前回に引き続き目前で巻き起こった奇天烈な現象に、リグルは思わず寸の間、はたと動きを止めた。

「——ッ!?! 消え——」

「わたし、詩音。今あなたの——」

……弾幕ごっこでは、刻一刻と移り行く相手の弾幕を瞬時に見極め、どう往なすのか、というのもその勝敗に大きく関わる要素である。そのため、恐ろしい程の直感力を持つ霊夢なんかはべらぼうに強かったりするのだが——裏を返せば、ほんの一瞬だろうと隙を生み出すことは命取りなのだ。

今回もその理は変わらず。思考が停止してしまったりリグルが、放たれる声のままに聞こえてくる方向を向くと——

「——真上にいるのってあああ!?!」

「ブッ!!!」

——自由落下していた緑の板が、ちょうど顔面へと直撃するところだった。

*

「いつつつつ……」

「え、えーっと……」

相も変わらず、周囲には吹雪が吹き荒れていた。その勢いや凄まじく、先ほどの弾幕によって穿たれた穴が瞬時に雪で覆いつくされる程である。作為のなしに作られたその落とし穴は春が訪れない限り、通りかかった者を驚異と痛恨、そして恥辱の底へと叩き落すこと請け負いである。どこぞの素兎が知ったら喜んで取り入れそうさ。

……さて、そのように気候も寒冷としていたのだが、その場の空気も冷ややかであった。主に、詩音へと向けられる視線が。

「絶つつつ対ワザとでしょう!?! どうして、私の顔につ、その板みたいなのがつ、降ってくるのさっ!?!」

「ご、ごめんなさい……いやまさか、移動した後にスケボー君との接続が切れるとは思ってなくてですね……カツコよく上から登場しようとしたら、あんな有様に……」

顔の面積のうち半分程を赤く腫らしながら、リグルは詩音へと詰め寄る。詩音の方も弾幕（物理）などといった攻撃を不意打ちで行うつもりはなかったようで、先ほどから申し訳なさそうに縮こまっている。

恐らく、スペルカードを宣言し自身でも飛翔が可能な状態にて瞬間移動を行ったために、彼女の言うところの『接続が切れた』状態になったのだろう。

「……それで?」

「いやそれでって何さ」

「いや、弾幕ごっこは続けるのかなーと」

「……この状況でそれ聞く?」

ですよねー、と詩音は苦笑い。

「つてか、あんなスペルを見せられたらやる気もなくなるさ。何あれ？ どうやって消えたの？」

「さあ？」

「いやさあつて」

「あれ、人のスペルを見よう見まねで使ってるだけなんで、原理とか仕組みとか、その辺はサツパリなんですよ」

……それこそ異常だと思うのだが。

そうこうしているうちにも、リグルには死活問題が迫っていた。

それまで不平を垂らしているだけだった彼女が、ぶるりと大きく震える。

「——つて寒ッ!! あれ？ こんなに寒かったっけ？」

「あー、汗が冷えたんじゃないですか？ 何気に弾幕ごっこつて運動量凄いですし」

リグルはその大きな外套で身体を包み込み、更にはその上から腕をさすつてどうにかやり過ぎそうとする。が、彼女は元より夏に活動する蟲。限度というものがあるろう。

「さ、寒い——……なんか、また眠くなってきた……」

「……そうやって包まってる、ますますg——」

「あ？」

「——ぐ、グルコサミンが必要になりそうですね……」

……詩音を睨みつける程度の気力は残ってるようだが。

それでも、その眼はどこか気だるげで、今にも活動を停止してしまいきそう。

まあ人間とは違い、吹雪の中で寝たからと言って命を落とすほどリグル始め妖怪は柔ではないが。

「つてか結局、リグルさんはこの異変について何も知らないんですか？」

「ん……さつき、目を覚ましたばかり、だから……」

「！ 寝るな、寝るなりグルよ!! この登山が終わったら結婚するつて、お前言っただろ!!」

「……？」

とまあ、二人が好きならだけ茶番を楽しんでいると。

どこからともなく、呑気な歌声が漂ってきた。

「あれ？　リグルさん、何か聞こえてきませんか？」

「ん？……ん、この声、どつかで聞いたことあるような」

そうこうしているうちに、その声はだんだんと近づいて来て――

「――こなあーゆきいーねえ、こころまあで――」

「おい著作権」

「つて、レティか。……どうしたの、そんなボロボロになって」

木々の狭間から現れたのは、青っぽい服装に白い襟巻きが特徴的な少女――冬の妖怪、レティ・ホワイトロックだった。尤もリグルの言うとおりに、その服や襟巻きには綻びが目立つ。

一方のレティも、リグルを見つけるとおや、といった表情をする。

「あらリグル。そっちこそどうしたのよ、まだこんなに寒いのに。

……あと、その顔どうしたの？」

「目が覚めたらこんな有様できあ。顔は――」

「サ、サーセン」

「――という訳」

「いや一つも伝わってこなかったわよ……？　　というか、貴方誰よ」

レティの更なる問いかけにも、リグルはむすつと口を噤んだまま語ろうとする気配がない。喋りたくない……というよりはこの場合、思いついたくない、の方が正しいのだろうか。

そんな被害者の様子に、過失ではあったとはいえ加害者が油を注ぐ筈もなく、詩音はもう一つの方の質問に答えた。

「初めまして、私は古卿詩音です。チャームリングでか弱い普通の人間ですよ」

「か弱い……？」

「……ご丁寧にどうも。私はレティ・ホワイトロック、『寒気を操る程度の能力』を持つか弱い妖怪よ」

「か弱い……？」

「それで、私がボロボロになつて理由だったかしら。実はさつき、黒白バカと悪魔メイドに、連続でやられちゃったのよ」

レティも空気を読んだのか、凄惨な顔面についてはそれ以上触れなかった。

まあそれは置いといて、彼女がぼろぼろになつていた理由である。頬に手を置きやれやれ、とでも言うように、レティは事の次第を報告する。それを聞いた詩音が何か察したような表情をしていたのは、『黒白バカ』と『悪魔メイド』に覚えがあり過ぎたためであろう。

「あー……」

「まったく、近頃の人間は元気ねえ。吹雪の中犬でもないのに、庭どころか空中をビュンビュン喜び駆け回つてるじゃない」

「なにそれこわい——って、考えてみればコイツも大概だよね」

冬の妖怪がぼやくと、蛍の妖怪がそれに答え忌々しげな口を利く。全く、妖怪のくせに情けない……と、言い切れないのが、巫女をはじめとしたこの頃の人間の強さである。特にあの、〃何でも透過する〃技は反則だろう。

……話が逸れた。さて、そんな人間筆頭の詩音が、妖怪たちのか弱い悲鳴を聞いていたのかいなかったのか、今一度口を開く。

「それでレティさん、この異変について何か知っていますか？　黒

幕とか、手掛かりとか」

「あつ完全に無視しやがった」

「くろまく……って、もしかして気づいていないの？」

レティの言葉に、詩音は首を傾げる。

「気づく、って……何に？」

「その分だと、本当に気づいてないようね……ほら、これよこれー」

そう言うレティは、吹雪が荒れ盛る空へと手を伸ばし、何かを掴んだ。

結んだ手を解いたとき、果たしてその上に乗っていたのは——

「——花びら、ですか？　桜の」

「〃春〃、よ」

「……………」

訳が分からない、といった表情で惚けている二人に、レテイが説明を始めた。

「この異変は、春が奪われることで起こっているのよ。だからいつまで経っても春が訪れず、吹雪はごうごう、春告精はメソメソ、私ウキウキな訳ね」

「き、季節が奪われるんですか……流石は幻想郷」

「そしてこの花びらが、くろまくさんが奪っていった……そうね、春の象徴みたいなものかしら。ほら、その辺にいっぱい漂っているでしょう?」

指摘されて詩音が辺りを見渡してみると、成る程確かに、雪に隠れて見づらいがいくつかの花びらが舞っているのが確認できる。

雪の降りしきる中桜の花びらが舞い踊る、という幻想的で非常識な光景は、何とも言えない美しさを帯びていた。これならば、花より団子派の者でも思わず見惚れてしまうに相違ない。

「あ、ほんとだ……」

「私も全然気づきませんでした……あれ?　　つてことは、これの発生源に向かえば——」

「お見事、くろまくさんとご対面……かも?」

レテイはそんな雪と桜の猛吹雪の中でくるりと一回転すると、ふわりと少女のような、妖怪のような笑みを浮かべる。

一方詩音は、それまで原因について皆目見当もついていたたためか、レテイの助言を聞くと目に見えて明るい色をした。

「成る程……そうと分かれば話は早いですね。早速、アドバイスの通り、桜の発生源へと向かわせてもらいましょうか!」

言うが早いのか、詩音は飛翔板に手をかけ——

「ちよ、ちよい待ち!　　え、詩音、異変解決に行くの?」

「え?　　どうしたんですか、急に」

リグルに出鼻を挫かれた。

彼女の行動に驚きを隠せない様子のリグルに、詩音は怪訝な表情をしている。

「あ……いや、異変はすぐに解決してほしいよ?」

馬鹿みたいに寒

いし。

でも、レテイの話聞いた感じ、もう解決に動いている人間はいるんでしょ？ わざわざ外来人のあなたが、向かう必要はないんじゃないかな？……って」

成る程、リグルの言うことも尤もである。まともな者ならば異変を解決しようなんざ思わないし、というかまともな人間ならば異変の最中に人里から出たりはしないだろう。

ただ、嬉しいかな悲しいかな——

「ちつちつちつ。甘いですね、リグルさん」

「？ 何が」

「私は、異変を解決に行くんじゃないやありませんよ」

詩音は、既にまともな感覚を持っているとは言い難い人間だし——

「え、じゃあ——

「この祭りを、精妖いっぱい楽しまなくてどうするんですかつ！」

——むしろ、こちら側怪に近い感性を持っている存在なのだ。

満面の笑みでそう言い切ると、迫力に押され仰け反ってるリグルを差し置き、詩音は全速力で春の冬空へと駆け出して行く。

その瞳は、翡翠に輝いていた——気がした。

Stage 1 再来のG！〜リグル・ナイトバグ〜

Stage Clear!

「……ああ、詩音って、あれかー。どこかで聞き覚えがある、とは思ってたけど、あの笑顔で思い出したわ〜」

「ん？ どうしたの、レティ」

「ええと確か……お、あった。」

ほら、この新聞記事見て？ そこに、満面の笑みで詩音が写ってるでしょう？」

「あ、本当だ。ええと——『博麗の巫女、普通の魔法使いに次ぐ第三の勢力か!?! 吸血鬼を倒した外来人の少女、次の獲物は何だ!』って

えええ!?! 吸血鬼を倒したあ!?!」

「……あら、知らなかったの?」

Stage 2 森を染める星と虹

普段ならば溢れ返る瘴気も、この日だけは凍りついていた。

魔法の森。少々の物好きな人間、妖怪、半人半妖が住む以外は、意味不明な植生が蔓延っている場所。最も幻想郷らしい場所の一つとも言えるかもしれない。

そんな際物的な空間にも、当然四季は存在する。冬には雪が積もるし、春には桜——は香霖堂付近始め数ヶ所にしか植わってないか。夏は——ほぼほぼ日陰だからそこまで暑くならない。秋は落葉——するような木はないな、一年中葉をつけているものばかりだ。

……あれ、思っていた程四季は存在しない……？

……ま、まあともかく、雪が降れば一面銀世界へと早変わりする訳だ。

特に今年は、春が奪われた影響で吹雪の期間が長く、雪かきをしなければ家屋が危ないくらいには白が占領を続けていた。

——そんな森のすぐ上を、箒に跨がる影が一つ。

「何度見てもすごい銀世界だよなあ。この分じゃ、キノコ達は全滅してるんじゃないか？」

普通の魔法使い、霧雨魔理沙は、荒れ狂う吹雪にも逆らい逆らい、自らが見つけた手掛かりを頼りに飛んでいた。

その目的は勿論、異変を解決すること。本来であれば、異変解決は博麗の巫女の仕事であり、彼女が手を出す必要はないのだが……いつからであろう、彼女は親友の巫女と並んで『異変解決人』と呼ばれていた。

人里においても、彼女たちの評判は上々である。

「異変解決人は、妖怪よりも強いらしい」「弾幕ごっこにおいて、彼女たちに敵う者はいない」「年端もいかない少女が、異変首謀者の元へと乗り込んだ」

頼もしい、心強いと、そう彼女たちは噂される。

そしてその噂は、いつもこう結ばれるのだ——

「——今回の異変も、無事博麗の巫女が解決したそうだ」

「——ッ!!」

何かを思い出したのか、魔理沙はぐっ、と手を握りしめる。中であつた「春」が、くしゃりと潰れた。

「——あら、魔理沙。こんな吹雪の中、何やってるのよ!?!」

不意に、後ろから声をかけられる。周りへの注意力が低下していたのだろう、魔理沙はその者の接近に気がついていなかったようだ。

驚いた彼女は、慌てて振り返る。するとそこにいたのは——

「——つて、何だアリスか」

「何だとは何よ、失礼な奴ね」

——最も親しい友人の一人、アリス・マーガトロイドだった。その脇には彼女のお気に入り、上海と蓬莱の両人形も控えている。

そういえばこの辺りはアリスの家の近くだった、と魔理沙は思い出していた。

「シャンハイイ」

「ホーラーイ」

「——そういうお前こそどうしたんだよ」

箒に跨つたまま、魔理沙はぶつきらぼうに尋ねる。

先の紅霧異変の通り、アリスは進んで異変を解決に行こうとするほど澆漑とした少女ではない。むしろ、全く興味を示さず家に籠っているような人物である。

それ故、なんでこんな異変の真っ只中に彼女が現れたのか、魔理沙は見当がつかなかったようだ。

と、そこまで言うと、アリスは手に持っていた手提げを魔理沙の方へと突き出した。

「買い物よ、買い物。丁度茶葉を切らしちゃってね、三、四日待ったけど止む気配がさらっさらないから、仕方なく繰り出したって訳」

「シヨゲナイデヨベイベー」

「……ふうん、そうか。じゃ」

自ら聞いた割には興味なさげな相槌を打ち、魔理沙は身を翻す。その姿はいつもの、我が道を行く彼女そのもの——の、ように見えた。

「待ちなさい」

だがその道は、アリスの声により阻まれる。

出鼻を挫かれ、怪訝そうな面持ちをしながらも魔理沙は振り返った。

「……………何だ」

「貴女、今から異変解決に向かうの？」

「当たり前だろ？　それが私の、異変解決人の義務だからな」

今更何を、と肩を竦めながら魔理沙はアリスの問いに答える。確かに、今まで魔理沙は何かが起こる度、競うようにして解決へと向かっている。そして、彼女がそれに見合う実力を兼ね備えているのは、恐らくアリスが一番よく知っているだろう。今更と言えば今更だ。

……………しかし、次にアリスの口から放たれた言葉に、大きく目を見開くこととなった。

「そう。なら——そんな悩みを抱えたまんまじゃ、解決出来るものも出来ないわよ」

何かが、凍りついた。

吹雪がびよびよびおと鳴る音が、嫌というほど鼓膜を響かせる。

「……………なっ、何の、話だ」

「あら、もしかして気づいてない？　焦燥か、嫌悪か、劣等感か。何かはわからないけど、それが貴女の心を悩ませ、駆り立てているのは紛れもない事実よ」

「……………どうして、そう思う」

「伊達にアンタとの付き合いは長くないわよ。それくらい、目を見ればわかるわ」

若干呆れたような口調とは裏腹に、魔理沙を見つめるアリスの目つきは鋭い。その眼光は逃避を許さず、心の最底辺まで見透かされているかの如く魔理沙には感じられた。目の前にいるのは自分のよく知る、ただの魔法使いだというのに、まるで覚妖怪と面しているかのよ

うな——

相変わらず、吹雪が喧しい。加えてどくん、どくん、という音にまで、魔理沙の思考は邪魔される。

「さ、わかったらキリキリ話しなさい。セラピストを自称する訳じゃないけど、話せば楽になるってこともあるでしょうし」

「……………」

アリスがそう詰め寄るも、魔理沙は何の反応も見せない。目を逸らし、口は堅く結んだままで、彼女はただ吹雪に吹かれていた。

もう五月であるというのに、アリスの吐いた息は白く変化して大気に逃散してゆく。しかしそんなことが全く気にならないほど、空一面には雲が押し並び、辺り一面には雪が降りしきっている。それは、まだ何にも染まっていない真っさらな状態——などではなく、画布の上に無理やり真白を塗りつくしたかのような色彩だった。

前回の、幻想郷を紅で染めつくす異変も大概ではあったが、このような白で覆われている光景も異様である、と言えよう。

アリスは再び、今度は大きく息を吐く。そして悴む手^{かじか}を擦りながら、懐からあるものを取り出した。

「…………ああ、もうこんなまどろっこしいことは止め止め。そうね、最近ずっと家に籠ってたから、気晴らしにはちょうど良いわね」

それは、人形。『七色の人形遣い』アリス・マーガトロイドの代名詞とも言えるもの。

彼女は、それを。大きく振りかぶって——

——投げた。

魔符『アーティフルサクリファイイス』

「!? ばっ、お前…………!!」

スペルが宣言された途端、魔理沙が突如顔色を変えた。それまで陰鬱とした表情だったのが、急に焦った様子になり。慌てて体を捻じら

せ、その場からの離脱を図る。

魔理沙がどうにか距離を取ったのと、アリスの投げた人形が今さっきまで魔理沙のいた場所へと到達したのは同時だった。

そしてそれは——大きな音と風を巻き起こし、爆発した。

「チツ。相変わらずスピードは速いんだから」

「ちよっ、いきなり何するんだよ!」

「何って、弹幕ごっこよ弹幕ごっこ。そんな辛気臭い顔してないで、アタもさっさとスペルカード使いなさい。『弹幕はパワー』とか言ってるのが、一番らしいんだから。ほら、わかった?」

そう言っている間にも、アリスは次々と弹幕を放っていた。彼女自身からは赤い弹幕を、二体の人形からは青い米粒状の弹幕を。不意打ちで始めたにもかかわらず、それらは油断なく空を覆い尽くしていた。

そんな状況に、魔理沙は……驚きよりも、別の感情が優先して表出したようだ。

「ああ、わかったぜ……お前が、私を怒らせたいうてことがなああ!!」
言うが早いか、魔理沙は全速力で飛び出した。城壁の如く連なる弾々なんぞものともせず、一瞬だけ形作られた隙間を潜り抜ける。

瞬く間にしてアリスの目前まで迫ると、お返しとばかりに懐からあるものを取り出した。

「はっ!　ご自慢のブレインも、ここまで来れば意味ないからな!」

「っ!　まずい……!」

慌てたように呟くアリス。その視界には、光が収縮してゆく魔理沙自慢の魔法道具、ミニ八卦炉が見えていて――

恋符『マスタースパーク』

咒詛『蓬莱人形』

刹那、響くは爆発音。そして、再び巻き上がる爆風。

アリスの放った弾幕はその衝撃で崩壊し、白でべた塗りされたような空に赤と青の塵がばら蒔かれていた。風に吹かれ、煌びやかに舞い踊るそれらは、幻想的な光景を生み出す。

だがそんな状況でも、煙の中には無事な影か二つ――

「けほっ、けほっ……ちよ、アンタバカじゃないの!? あんな至近距離からマスパ撃たれたら消し飛ぶわ!!」

「へへっ、弾幕はパワーだからな。」

……にしても、お前もお前だろ。消し飛ぶまではいかなくても、それなりにダメージは通るかなーと思ってたんだが……」

「辺りの弾幕全部と最大威力のスペルを犠牲にしたけどね。」

ま、弾幕はブレインってことよ」

「まだそんなこと言ってるのかよ」

「お互い様よ。」

……あーそれにしても、急激にブレインをフル回転させたから糖分が足りないわー」

「こんだけ寒い日が続いてるし、さぞ蜜柑も甘くなってるだろうぜ。さつさと家に帰って、炬燵で丸くなってたらどうだ?」

「ウチに炬燵なんてないわ。そんな前近代的なものじゃなくて、今の時代は暖炉よ暖炉」

「まあ私には、このミニ八卦炉があるから十分だけどな」

「……貴女の技術には興味ないけど、その八卦炉は便利そうよね。」

私も作ろうかしら、ミニ八卦人形」

「間違いなく大炎上だぜ。」

マツチ一本火事の元、人形一体大火事の元――つてか?」

「まあ、その辺は要検討ね。」

あと――」

ふと、アリスは真つ直ぐ前を向いた。

「さりげなく私を家に帰そうだったって、そうはいかないわよ。さあ——私の絡繰る弾幕で、魔力も悩みもすべて果たしてしまいなさい！」
——その言葉を合図にして、どこからともなく人形が集い出す。その数、計十二体。しかもその全てが、槍や杖などの攻撃手段を持っていた。

その光景に、魔理沙も目の色を変える。

「……本気か」

「もちろん。上海、蓬莱、陣形展開！ 強情魔理沙を叩きのめしてやりなさい！」

「ホーラーイ！」

「シャンハイイ！ ゼングントツゲキー！」

戦操『ドールズウォー』

号令と同時に、人形たちは魔理沙への侵攻を開始した。上海を始めとした、槍を持った人形たちは直線的な弾幕で狙い撃ちを凶る。そして蓬莱を始めとした、杖を持った人形たちは拡散する弾幕で移動障害を狙う。

一糸乱れぬその連携は、正に訓練された軍隊の如し。付け入る隙のなさに、魔理沙から意識せずとも舌打ちが飛び出す。

「チツ。一体一体の弾幕は大したことないが、十二体も集まるとなかなかどうして……。マスパを撃とうにも、アリス自身はフリーだから楽々躲されるだろうしな、つとー！」

ぼやきながらも、死角から登場した自機狙いの弾を掠めつつ避ける。その反射速度、判断力は人間にしては破格だ。

しかし、それ以上に恐ろしいのはアリスの演算力である。十二体もの人形を一度に操り、さらにはその全てに、狙ったところへと弾幕を放たせているのだ。その所業、最早人間業ではあるまい。いやまあア

リスは人間ではないのだが。

……ともかく、このままでは埒が明かない。魔理沙は空中に魔方陣を描くと、針状の弾幕と光線を射出し始めた。

その顔には——誰が見ても、焦りの表情が視認できただろう。

「っそー！ 私、私が異変を解決しなきゃならぬのに……!!」

半ば喚きつつも、魔理沙は弾幕を放つ。流石にスペルカードと比べれば威力は足りないが、それでも数発命中すれば人形一体を撃破するには事足りるだろう。そうやって、まずは一角を崩すことを彼女は狙ったのだが——

その目論見は、いとも容易く蹴散らされることとなる。

「陣形変更！ 迎撃の構え!!」

「ホーライ！」

「ウツトウゴクゼー」

アリスの声が戦場に響くと同時に、状況は動いた。

それまで広がって弾幕を放っていた人形たちだったが、その声を合図に一転、アリスの正面に集い始めたのだ。更に人形たちはそのまま、全力で正面に向かい弾幕を射出してゆく。槍からは針状の弾が、杖からは丸い魔力弾が。十二体の人形が放つ色とりどりの弾幕はやがて合流し、極太の虹となって魔理沙へと襲い掛かる——

「マジか——ッ!?!」

先ほど魔理沙自身が言及していたが、人形一体一体の威力は大したことなくともそれが集まれば侮れない脅威になる。ましてや、今まで拡散させていたものを正面に集中させるとなると……。

それは、スペルカードでもない弾幕を掻き消し、そのまま魔理沙を撃ち抜くには十分であった。

「——!!」

黄色い弾による一撃を頭に貰い、魔理沙の意識が遠のく。

それが地上であったならば、彼女はそのまま地に伏して終わりだったであろう。が——ここは、吹雪の降りしきる空の上。体勢を崩した魔理沙は、箒から墜ち自由落下を始めてしまった。

「！ まっ、魔理沙!!」

落ちる、落ちる、魔理沙は落ちる。皐月の寒気を掻き分けて、漂う“春”を巻き込んで。目下に広がるは一面の銀世界と、その下に隠れる瘴気の森。このまま地面と抱擁を交わせばどうなるかは、ニュートンの昔から知っている。

それでも魔理沙は、落ち、墜ち、墮ちて――

彗星『ブレイジングスター』

――突如地面へと向けて放出された青白い閃光は、物理法則という現実を打ち破った。過去の偉人が発見したそれは、外界では確かに強固な常識となっているが……非常識が覆いつくすここ幻想郷ではそんなもの、幻想のように脆く儂いのである。

星を纏い、直下の森を不毛の地へと変遷させつつ魔理沙は浮上を続ける。間もなく元いた地点への帰還を達成し、箒との迎合を果たしたのだった。

「――つぶねえ。今のは流石の私でもヒヤツとしたぜ」

「……つたく、相変わらずしぶといんだから……」

先ほど撃ち抜かれた傷を痛そうに撫でながら、魔理沙は体勢を立て直す。

その光景をじっと見つめるアリスの顔は――呆れたような言葉とは反対に、酷く安心したようなもので。

魔理沙は、怪訝な面持ちにならざるを得なかった。

……そもそも魔理沙は、こうしてアリスが妨害してくる理由もわかっていないのだ。売り言葉に買い言葉で弾幕ごっこを始めたまでは良かったが、冷静になってみればその意図が全く読めない。魔理沙が無事で安心して見える様子を見るに、本気で彼女を叩きのめしたい訳でもなからうし……。

何だ、私の悩みがどうかしたのかよ、というのが魔理沙の心情だった。

「……おいアリス」

「あら？　とうとう喋る気になったかしら」

「……………どうして、私を邪魔するんだ？　私は一刻も早く異変を解決せにやならんし、それはただ私のためってだけじゃなくて、幻想郷のためでもあるんだぜ。それくらい、お前もわかってるだろ」

諭すような口調で、魔理沙は詰め寄る。一見するとそこには、先ほどまでの焦りは見られない。

だが、それを聞いたアリスの表情は凍り付いていて——その目は、哀しげだった。

「……貴女が」

「……………」

「貴女が、そんなことを言うからよ……！」

ゆっくりと、しかし明確な意思を込めて、アリスは言葉を著す。

が、それもすぐに限界を迎えたようで——弾幕ごっこの最中にずっと塞き止められていた思いは、一度流れ出すと留まるところを知らなかった。

「どうしたのよ、いつもの貴女は!?　いつもの貴女だったら、幻想郷を言い訳になんて使わないでしょう!?　ただ己の矜持とパワーだけを信じてガムシヤラに突き進む、それが霧雨魔理沙じゃなかったの!?」

「っ、おいアリス——」

「どうして、そこまで焦っているのよ!?　どうして、そこまで追い詰められているのよ!!　どうして、そんなにも苦しそうな目をしているのよ……!!」

……………どうして、私には何も言ってくれないのよ……………!!」

それは、言葉の濁流。抑えきれない思いが言霊と混濁し、大きなうねりを上げて辺りを埋め尽くしてゆく。

迫りゆく大声からも、尻すぼみになったか弱い声からも……今にも泣きだしそうな、その顔からも。アリスがどれほど魔理沙を心配しているのかが、痛いくらいに伝わってきた。

それ程までに心配をかけていたなんて、魔理沙は予想だにしていな

かったのだろう。いつになく昂るアリスを、ただ茫然と見つめることしかできない。

「……お願い魔理沙、そんなにも苦しそうな貴女は見たくないのよ……！」
何に苦しんでるのかわからないけれど、そこまで焦ってるってことは異変に関係あるんでしょう？ だからもう、今日は異変解決を止めて、私にその悩みを、打ち明けてくれないかしら……？」

「——っ、あつ、アリス……」

縋るような瞳で見つめるアリス。それに、魔理沙の心は激しく揺さぶられていた。彼女の中の良心が、ここでアリスに打ち明けるべきなのではないか、これ以上アリスを心配させる訳にはいかないのではないかと、そう囁く。

しかし同時に、彼女の中の別のどこかが、それを激しく妨害していた。だって彼女は、*“普通の魔法使い”*は、親友と並び称される *“異変解決人”*の少女は——

「……それに、どうせ異変は霊夢が解決してくれるんだし——

魔符『スターダストレヴアリエ』

彩り豊かなそれは、突如現れた。

魔理沙を中心にして、いくつかの魔方陣が展開される。そしてそこから赤、青、黄、色とりどりの弾幕が放たれ始めたのだ。それらは容赦なくアリスの動きを封じ、目にも鮮やかな窮地を彼女へと叩き付ける。

「!? じ、陣形変更！ 堅守の陣!!」

「ホ、ホーライ！」

「イノチヲダイジニー」

突然すぎるスペル宣言に、アリスは目を白黒させる。がそれも束の間、アリスは冷静に対処をしていた。

迫りくる弾幕の波動を受け、一点に集中していた人形たちは散開を開始する。そして八方への配置を完了した後、全方向へと弾幕を放ち出した。

白い空の上で、八百万の星と虹が入り乱れる。互いに激しくぶつかり合い、打ち消しながらそれでも……融和する、ことだけはなく。

ただ、強すぎる思いが溢れたその弾幕は、間違いなく誰もが目を奪われるものであり。一面の銀世界を、極上の色彩で染め上げていた。

「っそ……貫け……当たれ……終われ……終われ……終われ……！」

「っ魔理沙！　いい加減白状しなさい！　今みたいな、貴女でな

い貴女は見たくないのよ!!」

「五月蠅い……黙れ……！」

焦る魔理沙、叫ぶアリス。

「何をそんなに意地を張ってるのよ!?　異変に向かっても、貴女が

苦しむだけじゃないの!?!」

「五月蠅い……！」

「それとも——」

しかし、全力で弾幕を放っているはずの魔理沙の顔は、必死に何かを堪えているようで。

「……そんなにも、私は——迷惑、なの……?」

「ッ！　五月蠅い、黙れ黙れ黙れ!!　私は、私は——」

小さく呟かれたアリスの言葉は、そんな魔理沙が極点に達するには十分だった。

魔理沙の放つ弾幕が、指数関数的にその勢力を増す。

「私は、私は私は私が！　今日、ここでっ！　異変を解決しなきや

あ！

——一生、あいつらには追いつけないんだよ!!!」

その時。

目下の木々が、大きく音を立てて蠢いた。

「!？」

「!？」

思わず二人も気を取られ、視線をそちらへと向ける。
果たして、そこに現れたのは――

「春ですよー！ー！」

――大いなる春が、二人の傍を掠め行く――

「――ッ！　　い、今だー！」

そう言うと、魔理沙はスペルを打ち消し大きく跳躍をした。

そして、本日三度目となるミ二八卦炉を取り出し――

「っ、あ……」

星符『ドラゴンメテオ』

雪降る幻想の郷さとにて、視界に映るは二つの影。

それが男女の逢瀬でもあれば、浪漫にあふれる光景なのだろうが……片方の顔には、心痛ましげな表情が。対照的に、もう一方の顔には安らかな表情が窺える。

魔理沙は、気絶して倒れるアリスに自らの外套を羽織らせた。

「……………」

本当は、アリスを家まで運んでやりたいのだろう。ゆっくりと外套から離されている手には、迷いが見える。

しかしそれは、彼女を撃破してまで得た時間を浪費する行為だから。彼女との決闘を、棒に振ることと等しいから。

だから、魔理沙は立ち止まらない。

仕上げとばかりに、魔理沙は帽子の雪を払い、傍に置いた。

「ちよつと、顔でも吹雪を感じてみてもいいかなって思ってた。預かついてくれ、それ。」

……今度魔導書借りに行くから、ちやんと紅茶を用意しとけよ？」
「そう言うと、魔理沙は春を求めて飛び立つ。
その瞳には——最後まで、「春」は見られなかった。」

Stage 2

森を染める星と虹　くアリス・マーガトロイ

ドゥ

Stage

Clear!